



都留市埋蔵文化財調査報告第8集

## 中 谷・宮 脇 遺 跡

中央自動車道富士吉田線四車線化工事に伴う発掘調査報告書

1981.3

都留市教育委員会  
日本道路公団東京第二建設局

## 序

本調査は、1980年3月、当都留市教育委員会で報告書を発行しております中央自動車道富士吉田線四車線化工事に伴う堀之内原遺跡に引き続き実施した中谷遺跡、宮脇遺跡の調査であります。

特に本調査は調査員、作業員ともに工事用土砂運搬大型車が通行頻繁の中、埃をかぶり懸命に手作業に取り組んだ貴重な調査であり、たまたま人骨の発掘場面もあって常に緊張した調査実施がありました。

本調査も前回同様、日本大学考古学研究会・都留文科大学考古学研究会の学生諸君と地域住民のおしみない労働協力と宿舎施設の提供は、農村地帯のふるさとづくり運動のさわやかな姿として見学者の感動を呼び高い評価をいただきました。

終りにご教授、ご協力を賜った諸先生に対し心から敬意と感謝の意を表し、本調査報告書のもたらす文化財関係諸件への貢献を信じ、今後の文化財調査、保護に対して精力的につとめ、今日までの関係者のご協力に応える決意であります。

今後のご協力を重ねてお願い申し上げご挨拶といたします。

昭和56年3月31日

都留市教育委員会

教育長 内藤盈成

## 例　　言

- 1 本書は、昭和54年度に、日本道路公団東京第二建設局と、都留市教育委員会との、委託契約により実施した、中央自動車道富士吉田線四車線化工事に伴う中谷遺跡、宮脇遺跡の緊急調査報告である。本書作成の委託契約は、昭和55年度に行われた。
- 2 本書の作成は、都留市教育委員会が行った。執筆は、各遺構についてのみ、調査者が作成した遺構カードをもとに奈良が加除筆して取りまとめた。なお、そのさい文末に各記録者名を記した。その他の執筆は、奥、奈良協議のもとに、中谷遺跡第Ⅲ章を奥、それ以外の執筆及び全体の編集は、奈良が行った。中谷遺跡出土の人骨については、聖マリアンナ医科大学の森本岩太郎教授、小片丘彦助教授（現鹿児島大教授）、吉田俊爾氏より原稿を頂いた。
- 3 図版の作成は、奈良・喜多圭介・片山雅文・工藤信一郎・宍戸美智子・平佐枝子・大崎裕美・日向容子・富元久美子・谷口栄が、主に行なった。その他、遺物整理及び報告書作成にあたり、日本大学考古学研究会の協力を得た。
- 4 土器の復元は、奥が担当。人骨の復元は、聖マリアンナ医科大学第二解剖学教室に、お願いした。
- 5 遺物及び実測図は、都留市教育委員会が保管している。
- 6 本調査の調査組織は、別に示すとおりである。
- 7 発掘調査・報告書作成にあたって、次の諸氏に御教授を賜った。（敬称略）  
江坂輝也（慶應大学教授）・西村正衛（早稲田大学教授）・小片丘彦（鹿児島大学教授）・沢田大多郎（日本大学講師）・橋口尚武（伊豆諸島考古学研究会）・能登健（群馬県教育委員会）・石坂誠・原雅信（群馬県埋蔵文化財事業団）・市川修（埼玉県教育委員会）・河野喜映（神奈川県教育委員会）・瀬川裕市郎（沼津市教育委員会）・末木健・小野正文・坂本美夫・田代孝・新津健（山梨県文化課）・中村日出男（郵政考古学会）・堀内真（富士吉田市教育委員会）・天野保子（西桂町教育委員会）・小林安典（都留考古学会）——順不同——

## 調査組織

### 中谷遺跡発掘調査

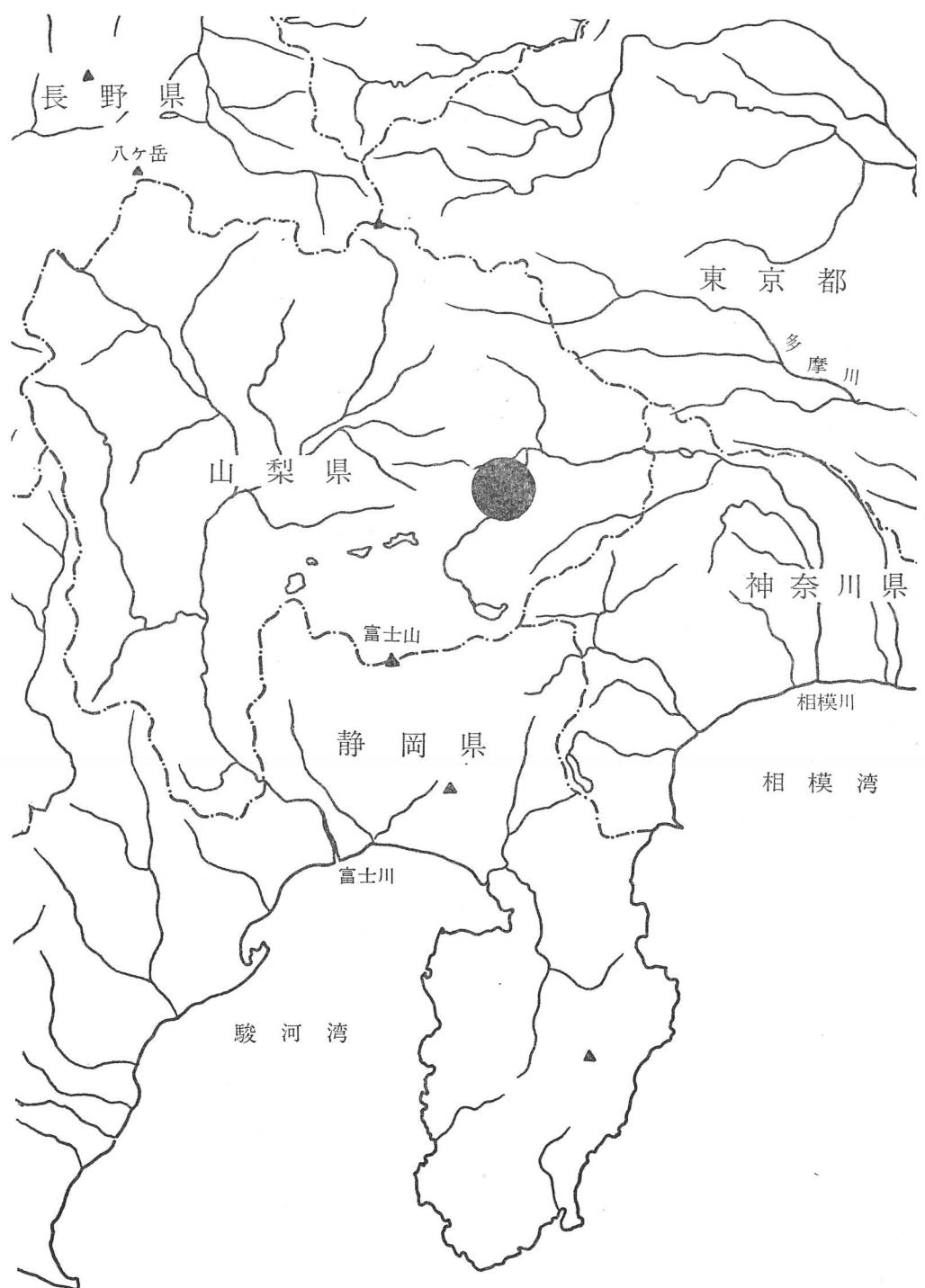
- 1 調査主体者 都留市教育委員会
- 2 調査担当者 奥 隆行（都留市文化財審議会委員）  
奈良泰史（都留市教育委員会）
- 3 調査員 喜多圭介・片山雅文・工藤信一郎
- 4 調査補助員 山根則子・新藤恭子・伊藤正人・日向容子・大崎裕美・平佐枝子・富元久美子・和泉昭二・林 宏一・海老名康江・大野陽子・島村英之・平林 彰（日本大学考古学研究会）  
平本信雄・落合佐敏・室井裕子・野名すが子・有泉由美子・谷村 聰・米沢伸二・小幡哲明・小野弘二・石原喜恵子（都留文科大学考古学研究会）  
谷口 栄（国士館大学考古学専攻生）  
垣内伸夫・北原 聰・鳥越 博・中谷文昭・藤原 元・吉田和生（都留文科大学）

### 宮脇遺跡発掘調査

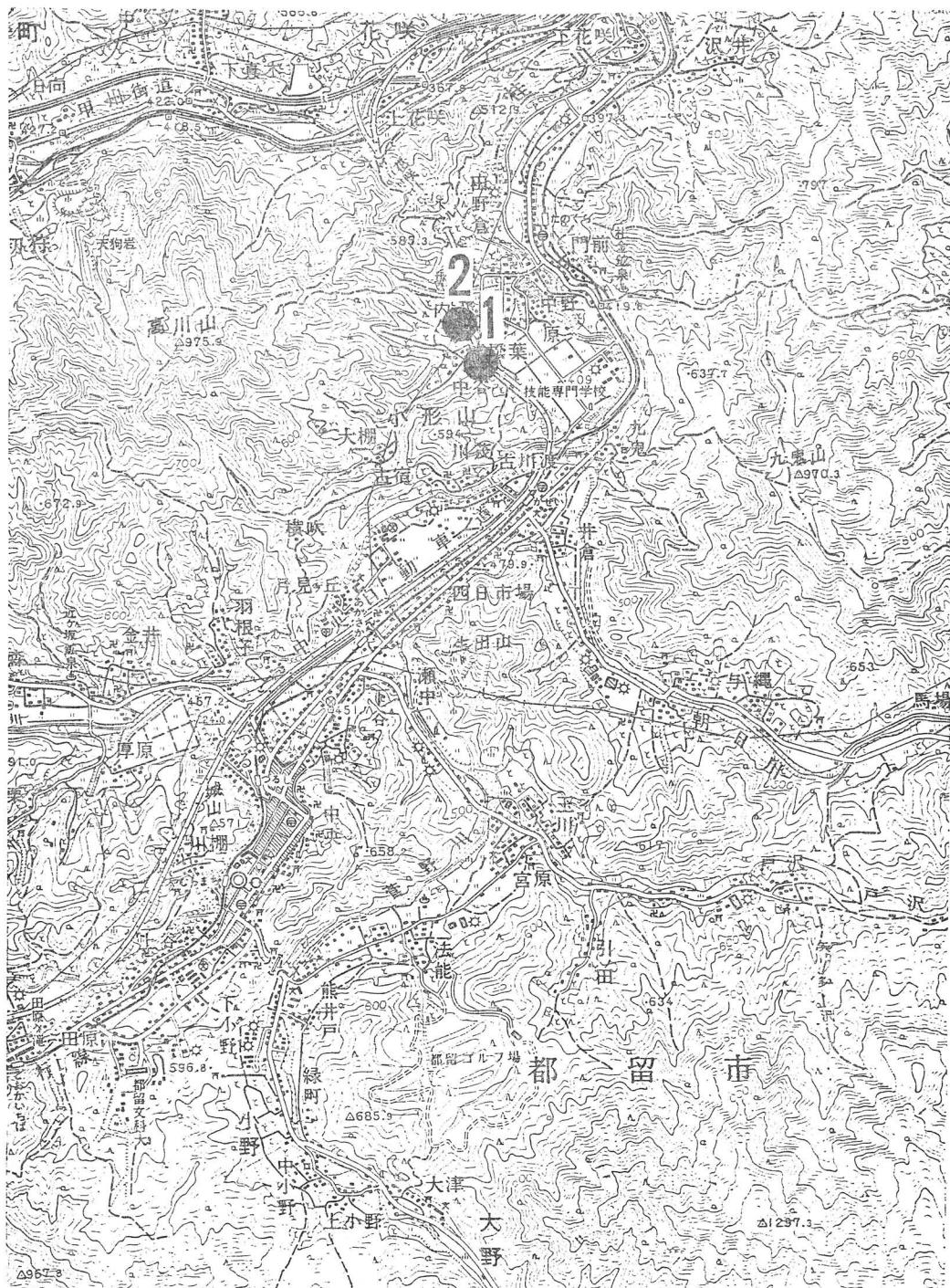
- 1 調査主体者 都留市教育委員会
- 2 調査担当者 奥 隆行（都留市文化財審議会委員）  
奈良泰史（都留市教育委員会）
- 3 調査員 喜多圭介・相良雅男・伊藤修二
- 4 調査補助員 平林 彰・平佐枝子・大野陽子・島村英之・林 宏一・海老名康江（日本大学考古学研究会）  
落合佐敏・小幡哲明・米沢伸二・中村 稔・坂本礼子（都留文科大学考古学研究会）

### 事務局

- |        |                 |
|--------|-----------------|
| 教育課長   | 堀口榜二（～昭和54年3月）  |
| 〃      | 棚本安男（昭和54年4月～）  |
| 教育課長補佐 | 渡辺一郎            |
| 社会教育係長 | 山本義典（～昭和54年3月）  |
| 〃      | 望月孝一（昭和54年4月～）  |
| 係      | 三枝美保子（～昭和54年3月） |
| 〃      | 奈良泰史            |
| 〃      | 重原達也（昭和54年4月～）  |



第1図 中谷・宮脇遺跡位置図(1)



1 中谷遺跡

2 宮脇遺跡

第2図 中谷・宮脇遺跡位置図(2)

# 中 谷 遺 跡



## 目 次

第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯 .....	13
第1節 発掘調査に至る経緯.....	13
第2節 発掘調査の経過.....	14
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境 .....	16
第1節 遺跡の位置と自然環境.....	16
第2節 遺跡の考古学的環境.....	17
第Ⅲ章 中谷遺跡研究小史 .....	19
第Ⅳ章 層 序.....	21
第1節 層 序.....	21
第2節 層序と遺物.....	21
第3節 層序と遺構.....	22
第4節 層序と火山堆積物.....	22
第Ⅴ章 遺 構.....	24
第1節 縄文時代の遺構.....	24
1 住居址.....	24
(1) 第8号址.....	24
(2) 第12号址.....	35
(3) 第2号址.....	42
(4) 第13号址.....	45
(5) 第10号址.....	47
(6) 第11号址.....	49
(7) 第14号址.....	50
2 土 坡.....	52
(1) 第5号址.....	52
(2) 第6号址.....	53
(3) 第3号址.....	53
(4) 第4号址.....	53
(5) 第7号址.....	56
3 配 石.....	56
(1) イ地区第VI層中の配石.....	56
(2) イ地区第VII層中の配石.....	61
(3) イ地区第VIII層中の配石.....	66
(4) イ地区第IX層中の配石.....	66

(5) ロ地区第VI層中の配石	68
(6) ロ地区第VII層中の配石	68
(7) ハ地区第VII層中の配石	73
(8) ニ地区第VII層中の配石	78
第2節 歴史時代の遺構	93
1 住居址	93
(1) 第1号址	93
(2) 第9号址	104
第VII章 遺物	107
第1節 繩文式土器	107
第2節 土製品	171
第3節 石器	177
第VII章 発掘調査のまとめと若干の考察	189
第1節 繩文時代の遺構	189
1 概要	189
2 住居址について	189
3 土塙について	191
4 配石について	191
第2節 繩文式土器	192
1 各群の様相について	192
2 第9群土器の編年的位置付けについて	196
3 第10群土器の編年的位置付けについて	197
第3節 歴史時代の遺構と遺物	202
1 住居址について	202
2 中谷遺跡第1号址出土の土師器・須恵器について	203
付 中谷遺跡出土の人骨について	207

## 挿図目次

第1図	中谷・宮脇遺跡位置図(1)	
第2図	中谷・宮脇遺跡位置図(2) (1/50,000)	
第3図	中谷遺跡調査地区全体図	14
第4図	中谷・宮脇遺跡地形図 (1/2,500)	15
第5図	中谷遺跡発掘調査位置図	16
第6図	都留市遺跡分布図	17
第7図	中谷遺跡発掘調査(第1次, 第2次, 第3次)位置図	20
第8図	中谷遺跡標準層序	21
第9図	層位別土器出土相関図	23
第10図	第8号址平面図	24
第11図	第8号址平面図(掘り方)	25
第12図	第8号址出土土器実測図(1)	26
第13図	第8号址出土土器実測図(2)	27
第14図	第8号址出土土器拓影図(1)	28
第15図	第8号址出土土器拓影図(2)	30
第16図	第8号址出土土器拓影図(3)	32
第17図	第8号址出土土器拓影図(4)	33
第18図	第8号址出土石器実測図	34
第19図	第12号址平面図(1)	35
第20図	第12号址平面図(2)	36
第21図	第12号址出土土器実測図	37
第22図	第12号址出土土器拓影図(1)	38
第23図	第12号址出土土器拓影図(2)	40
第24図	第12号址出土石器実測図	41
第25図	第2・13号址平面図	42
第26図	第2号址出土土器実測図	43
第27図	第2号址出土土器拓影図	44
第28図	第2号址出土石器実測図	46
第29図	第13号址出土土器拓影図	48
第30図	第10号址出土石器実測図	49
第31図	第10・11・14号址平面図	49
第32図	第10・11・14号址出土土器拓影図	51
第33図	第5号址遺構図	52

第34図	第5号址出土石器実測図	53
第35図	第6号址遺構図	53
第36図	第3号址遺構図(1)	54
第37図	第3号址遺構図(2)	54
第38図	第3号址遺構図(3)	54
第39図	第4・7号址遺構図	54
第40図	第3・4号址出土土器拓影図	55
第41図	イ地区 第VI層中配石出土状態図	57
第42図	イ地区 第VII層中配石出土状態図	57
第43図	イ地区 第VI層土器出土分布図	58
第44図	イ地区 第VI層石器出土分布図	59
第45図	イ地区 第VI層骨片出土分布図	60
第46図	イ地区 第VIII層中配石出土状態図	62
第47図	イ地区 第IX層中配石出土状態図	62
第48図	イ地区 第VII・VIII層土器出土分布図	63
第49図	イ地区 第VII・VIII層石器出土分布図	64
第50図	イ地区 第VII・VIII層骨片出土分布図	65
第51図	イ地区 層位別土器出土相関図	67
第52図	ロ地区 第VI層中配石出土状態図	69
第53図	ロ地区 第VII層中配石出土状態図	69
第54図	ロ地区 第VI層土器出土分布図	70
第55図	ロ地区 第VI層石器出土分布図	71
第56図	ロ地区 第VI層骨片出土分布図	72
第57図	ロ地区 第VI・VII層土製品出土分布図	73
第58図	ロ地区 第VII・VIII層土器出土分布図	74
第59図	ロ地区 第VII・VIII層石器出土分布図	75
第60図	ロ地区 第VII・VIII層骨片出土分布図	76
第61図	ロ地区 層位別土器出土相関図	77
第62図	ハ地区 第VII層中配石出土状態図	79
第63図	ニ地区 第VII層中配石出土状態図	79
第64図	ハ・ニ地区 第VI層土器出土分布図	81
第65図	ハ・ニ地区 第VII層土器出土分布図	83
第66図	ハ・ニ地区 第VI層石器出土分布図	85
第67図	ハ・ニ地区 第VII層石器出土分布図	87
第68図	ハ・ニ地区 第VI層骨片出土分布図	89
第69図	ハ・ニ地区 第VII層骨片出土分布図	91

第70図	ハ・ニ地区 層位別土器出土相関図	80
第71図	第1号址遺構図	94
第72図	第1号址カマド内出土支脚	94
第73図	第1号址出土土器実測図	96
第74図	第1号址出土遺物実測図	97
第75図	第1号址出土土器拓影図（1）	98
第76図	第1号址出土土器拓影図（2）	100
第77図	第1号址出土土器拓影図（3）	102
第78図	第1号址出土石器実測図（1）	104
第79図	第1号址出土石器実測図（2）	105
第80図	第9号址遺構図	106
第81図	配石及びグリッド出土土器実測図（1）	119
第82図	配石及びグリッド出土土器実測図（2）	121
第83図	配石及びグリッド出土土器実測図（3）	123
第84図	配石及びグリッド出土土器実測図（4）	125
第85図	配石及びグリッド出土土器拓影図（1）	127
第86図	配石及びグリッド出土土器拓影図（2）	129
第87図	配石及びグリッド出土土器拓影図（3）	131
第88図	配石及びグリッド出土土器拓影図（4）	133
第89図	配石及びグリッド出土土器拓影図（5）	135
第90図	配石及びグリッド出土土器拓影図（6）	137
第91図	配石及びグリッド出土土器拓影図（7）	139
第92図	配石及びグリッド出土土器拓影図（8）	141
第93図	配石及びグリッド出土土器拓影図（9）	143
第94図	配石及びグリッド出土土器拓影図（10）	144
第95図	配石及びグリッド出土土器拓影図（11）	146
第96図	配石及びグリッド出土土器拓影図（12）	148
第97図	配石及びグリッド出土土器拓影図（13）	150
第98図	配石及びグリッド出土土器拓影図（14）	152
第99図	配石及びグリッド出土土器拓影図（15）	154
第100図	配石及びグリッド出土土器拓影図（16）	156
第101図	配石及びグリッド出土土器拓影図（17）	157
第102図	配石及びグリッド出土土器拓影図（18）	159
第103図	配石及びグリッド出土土器拓影図（19）	161
第104図	配石及びグリッド出土土器拓影図（20）	163
第105図	配石及びグリッド出土土器拓影図（21）	165

第106図 中谷遺跡第2次調査土器実測図（1）	167
第107図 中谷遺跡第2次調査土器実測図（2）	168
第108図 中谷遺跡第2次調査土器実測図（3）	170
第109図 配石及びグリッド出土の把手	172
第110図 配石及びグリッド出土の注口	173
第111図 配石及びグリッド出土の土製品（1）	174
第112図 配石及びグリッド出土の土製品（2）	175
第113図 配石及びグリッド出土の土製品（3）	175
第114図 配石及びグリッド出土の石器（1）	178
第115図 配石及びグリッド出土の石器（2）	180
第116図 配石及びグリッド出土の石器（3）	182
第117図 配石及びグリッド出土の石器（4）	184
第118図 配石及びグリッド出土の石器（5）	186
第119図 配石及びグリッド出土の石器（6）	188
第120図 中谷遺跡遺構全体図	190
第121図 群別出土点数表及び群別施文具頻度相関図	195
第122図 中谷遺跡出土の清水天王山式土器（形式及び類型モデル）	198
第123図 I文様帶における文様一覧図	200
第124図 中谷遺跡出土の清水天王山式土器変遷図	202
第125図 都留市内出土土器編年図	205

## 表 目 次

第1表	遺跡時期別一覧表	18
第2表	層位別土器出土一覧表	23
第3表	第8号址出土土器一覧表	27
第4表	第12号址出土土器一覧表	37
第5表	第2号址出土土器一覧表	43
第6表	第13号址出土土器一覧表	46
第7表	第10・11・14号址出土土器一覧表	50
第8表	イ地区 第VI層配石出土遺物一覧表	61
第9表	イ地区 第VII層配石出土遺物一覧表	61
第10表	イ地区 第VIII層配石出土遺物一覧表	66
第11表	イ地区 第IX層配石出土遺物一覧表	66
第12表	イ地区 層位別土器出土点数表	67
第13表	ロ地区 第VI層配石出土遺物一覧表	68
第14表	ロ地区 第VII層配石出土遺物一覧表	73
第15表	ロ地区 層位別土器出土点数表	77
第16表	ハ地区 第VII層配石出土遺物一覧表	78
第17表	ニ地区 第VII層配石出土遺物一覧表	80
第18表	ハ・ニ地区 第VI層出土遺物一覧表	80
第19表	ハ・ニ地区 層位別土器出土点数表	80
第20表	第1号址出土土器一覧表	95
第21表	第1号址出土土器（縄文式土器）一覧表	97
第22表	配石及びグリッド出土の土器（実測図）一覧表	118
第23表	配石出土土器一覧表	126
第24表	中谷遺跡第2次調査出土土器一覧表	166
第25表	配石及びグリッド出土の把手一覧表	171
第26表	配石及びグリッド出土の土製品一覧表	173
第27表	配石及びグリッド出土の耳飾・土製円盤・土隅一覧表	176
第28表	石鎚一覧表	181
第29表	磨製石斧一覧表	185
第30表	石棒一覧表	185
第31表	石錘一覧表	185
第32表	スクレイパー一覧表	185
第33表	石皿一覧表	185

第34表 磨石一覧表	187
第35表 打製石斧一覧表	187
第36表 住居址一覧表	191
第37表 配石一覧表	192
第38表 中谷遺跡出土の清水天王山式土器	198
第39表 I 文様帶における文様一覧表	199
第40表 中谷遺跡出土の清水天王山式土器変遷一覧表	201
第41表 住居址一覧表	202

## 図 版 目 次

- 図版1 (1)中谷遺跡遠景(南方向より) (2)中谷遺跡近景(北方向より)
- 図版2 (1)発掘風景(ハ・ニ地区) (2)発掘風景(イ・ロ地区)
- 図版3 (1)配石調査風景 (2)配石調査風景
- 図版4 (1)第8号址 (2)第8号址
- 図版5 第8号址出土土器
- 図版6 (1)第12号址 (2)第12号址
- 図版7 第12号址出土土器(1)
- 図版8 第12号址出土土器(2)
- 図版9 (1)第3号址 (2)第3号址人骨出土状態
- 図版10 (1)イ地区第3・4・7号址 (2)イ地区第4号址出土人骨
- 図版11 (1)第7号址出土人骨 (2)第3号址出土人骨
- 図版12 (1)第4号址出土人骨 (2)第7号址出土人骨
- 図版13 (1)イ地区第VI層中配石出土状態 (2)イ地区第VII層中配石出土状態
- 図版14 (1)ロ地区第VII層中配石出土状態 (2)ロ地区第VII層中配石内出土土器
- 図版15 (1)ハ地区第VII層中配石出土状態 (2)ハ地区第VII層中配石内出土石棒
- 図版16 (1)ハ地区第VII層中配石出土状態 (2)=地区第VII層中配石出土状態
- 図版17 (1)第1号址 (2)第1号址カマド
- 図版18 (1)第1号址カマド(石組み) (2)第1号址(掘り方)
- 図版19 第1号址出土土器(1)
- 図版20 第1号址出土土器(2)及び支脚
- 図版21 第1号址出土土器(3)
- 図版22 第1号址出土土器(4)
- 図版23 第1号址出土土器(5)
- 図版24 第1号址出土石器
- 図版25 (1)第9号址 (2)第9号址カマド
- 図版26 配石及びグリッド出土土器(1)
- 図版27 配石及びグリッド出土土器(2)
- 図版28 配石及びグリッド出土土器(3)
- 図版29 配石及びグリッド出土土器(4)
- 図版30 配石及びグリッド出土土器(5)
- 図版31 配石及びグリッド出土土器(6)
- 図版32 配石及びグリッド出土土器(7)
- 図版33 配石及びグリッド出土土器(8)

- 図版34 配石及びグリッド出土土器(9)
- 図版35 配石及びグリッド出土土器(10)
- 図版36 配石及びグリッド出土土器(11)
- 図版37 配石及びグリッド出土土器(12)
- 図版38 配石及びグリッド出土土器(13)
- 図版39 配石及びグリッド出土土器(14)
- 図版40 配石及びグリッド出土土器(15)
- 図版41 配石及びグリッド出土土器(16)
- 図版42 配石及びグリッド出土土器(17)
- 図版43 配石及びグリッド出土土器(18)
- 図版44 配石及びグリッド出土土器(19)
- 図版45 配石及びグリッド出土土器(20)
- 図版46 配石及びグリッド出土土器(21)
- 図版47 配石及びグリッド出土土器(1)
- 図版48 配石及びグリッド出土土器(2)
- 図版49 配石及びグリッド出土土製品(1)
- 図版50 配石及びグリッド出土土製品(2)
- 図版51 配石及びグリッド出土の把手・注口
- 図版52 配石及びグリッド出土石器(1)
- 図版53 配石及びグリッド出土石器(2)
- 図版54 配石及びグリッド出土石器(3)
- 図版55 配石及びグリッド出土石器(4)
- 図版56 配石及びグリッド出土石器(5)
- 図版57 配石及びグリッド出土石器(6)
- 図版58 (1)ハ・ニ地区遺構全景 (2)調査終了後の中谷遺跡
- 図版59 (1)宮脇遺跡発掘調査参加者 (2)中谷遺跡発掘調査参加者

# 第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯

## 第1節 発掘調査に至る経緯

中央自動車富士吉田線は、高井戸インターから河口湖インターに至る全長約92.3kmの高速自動車道である。本路線は、首都圏と富士山及び富士五湖方面とを直結しているため、観光シーズンには大変に混雑する。さらに、現在、高井戸インターから大月ジャンクションまでの約69.9kmは4車線であるのに、これより河口湖インターまでの約22.4kmは2車線という変則的なものとなっているため、事故があとを絶たない。そのため、4車線化拡張工事事業が計画された。

昭和53年9月、山梨県教育庁文化課より中央自動車道富士吉田線大月ジャンクションから河口湖インターまでの4車線化工事計画の連絡と、それに伴う都留市内の埋蔵文化財包蔵地の照会があった。

照会に基づき、県文化課と共に、事業計画区内の埋蔵文化財包蔵地の踏査を実施したところ、堀之内原遺跡、宮脇遺跡、中谷遺跡、鷹ノ巣遺跡、山梨原遺跡の5遺跡が、同路線建設予定地内に該当することが判明した。

そのため、日本道路公団東京第二建設局、県文化課、当教育委員会の三者で協議した結果、堀之内原遺跡は昭和53年度に、中谷遺跡・宮脇遺跡・山梨原遺跡は昭和54年度に、鷹ノ巣遺跡は昭和55年度に、それぞれ記録保存を目的として、当教育委員会と日本道路公団東京第二建設局との委託契約により、発掘調査を実施することになった。

これらの内、堀之内原遺跡は、昭和53年10月5日～同年11月16日まで発掘調査を実施し、昭和55年3月、「堀之内原遺跡発掘調査報告書」として刊行されている。

中谷遺跡・宮脇遺跡の調査は、遺跡が近接しているため、学生が勤員できる夏休みを利用して同時平行で進めることとし、調査には日本大学考古学研究会、都留文科大学考古学研究会の両研究会の組織的な参加を要請し、また、その指導を、喜多圭介氏にお願いして実施に踏み切った。両遺跡とも、昭和54年8月1日調査を開始した。

### (事務経過)

昭和54年7月1日 発掘届を文化庁へ提出

〃 5月16日 委託契約締結

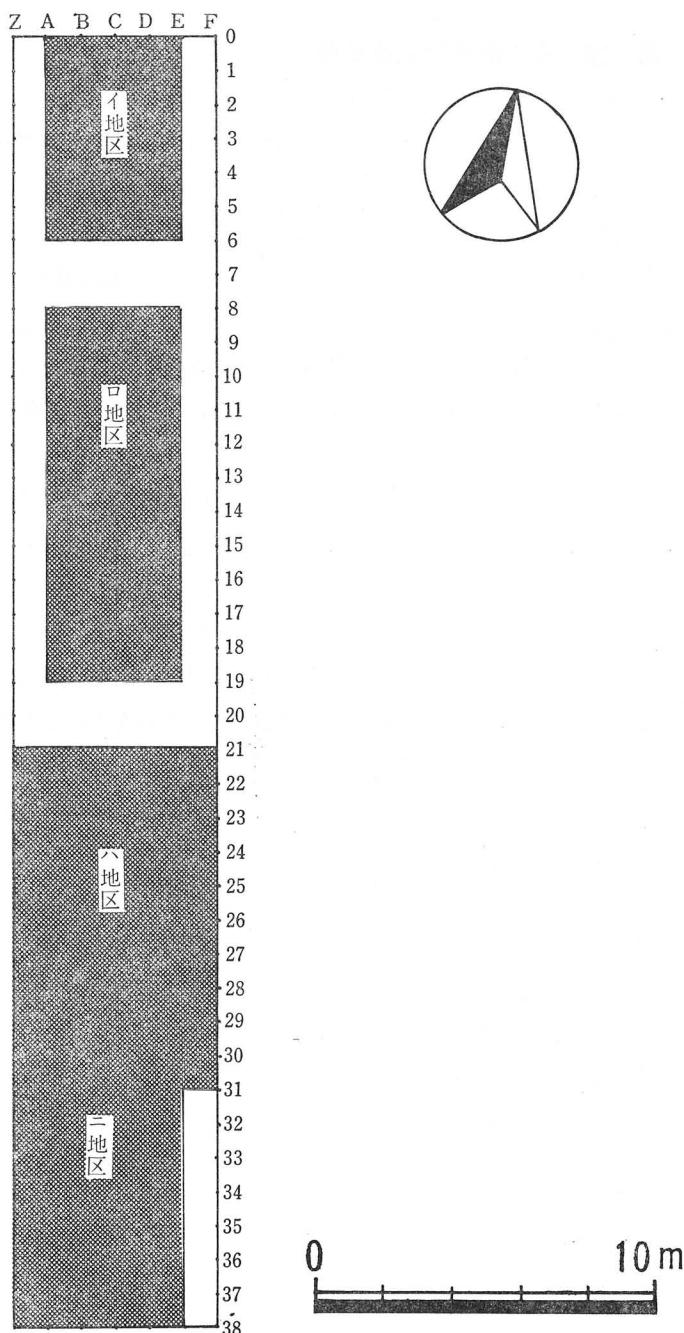
〃 8月1日 発掘調査開始

## 第2節 発掘調査の経過

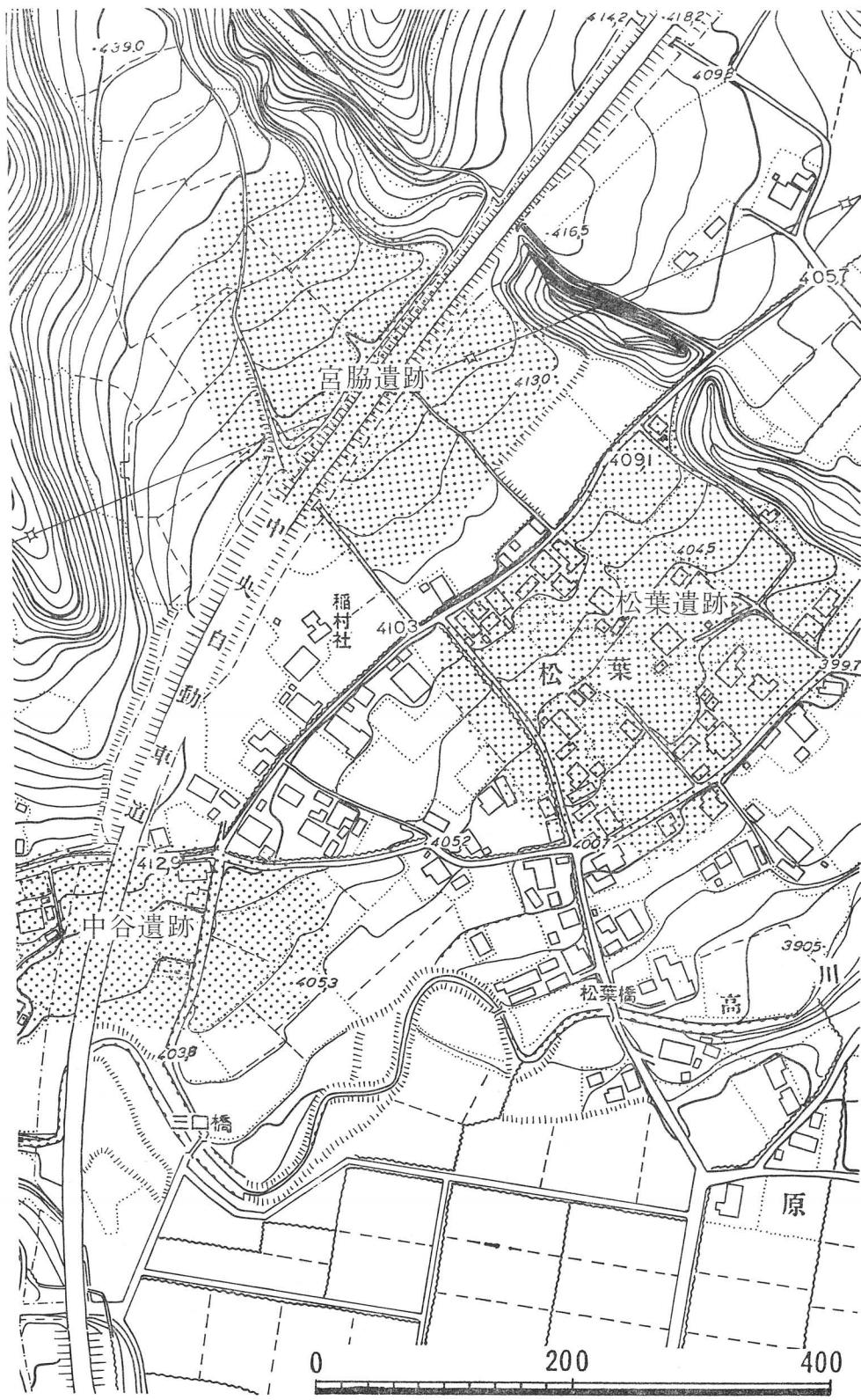
中谷遺跡発掘調査は、昭和54年8月1日より11月15日まで実施した。

調査方法は、南北に1~38、東西にZ~Eのグリッド(1m×1m)を設定し、グリッド単位に分層発掘を試みた。遺物の取り上げは、土器・石器・骨片など、全点主義を原則とした。

調査地区内には、電話線、道路が存在し、全体を3つに分断して調査せざるを得なかった。そこで、0~5区までをイ地区、8~18区までをロ地区、21~30区までをハ地区、31~37区までをニ地区として、各地区ごとに調査を進めた。



第3図 中谷遺跡調査地区全体図



第4図 中谷・宮脇遺跡 地形図

## 第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

### 第1節 遺跡の位置と自然環境

中部山岳地帯の南東に位置する山梨県は、地形上、甲府盆地を中心とした富士川水系に属する地域と、相模川、多摩川両水系に属する山梨県東部の、二つの地域に大別され、関東山地から連なる御坂山地が、この二つの地域を隔てる分水嶺となっている。

山梨県東部域は、山間地で平坦地こそ少ないが、多摩川水系に属する丹波川、小菅川及び、相模川水系に属する桂川、鶴川、道志川、秋山川の各流路には、河岸段丘が発達し、数多くの遺跡が立地している。

富士山の豊富な湧水を源とし山梨県東部を流れる桂川は、都留市内において、柄杓流川、菅野川、朝日川、大幅川等の各支流と合流する。この各流域には河岸段丘が発達し、縄文時代の遺跡を中心に、数多くの遺跡が立地している。このような遺跡群のひとつとして中谷遺跡は位置する。

中谷遺跡は、都留市小形山字中谷に所在し、北は高川山を背にし南にゆるやかなスロープを描く洪積台地の末端に位置し、遺跡の前面には桂川の支流高川がゆるく蛇行して流れる。高川の水面からの比高は、約5mである。



第5図 中谷遺跡発掘調査位置図

## 第2節 遺跡の考古学的環境

都留市内では現在64遺跡が知られている。この内縄文時代の遺跡は34遺跡で、第5図のように桂川の各支流の河岸段丘上に分布している。これらの遺跡は、発掘調査や工事中発見されたものもあるが、ほとんどが表面採集で確認されたものであり、この採集土器より各遺跡ごとの時期を調べると、第2表のようになる。これより当市内における遺跡は、発見される土器型式が数型式の短期的使用が行われたものが大半で、中谷遺跡のように縄文時代早期～同時代晚期まで間断なく長期に及ぶ遺跡は稀であることがわかる。

これは本遺跡が当市内における縄文時代の遺跡の中でも重要な位置を占めていたことを物語っていると思われる。



第6図 都留市遺跡分布図

第1表 遺跡時期別一覧表

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34
縄 文 時 代 期	上細法住西引桃宮落尾日生美入壁久御お馬大午鷹深古大下中中松宮堀桃神千 河ノ曾崎出道保海か場ノ久之内ノ 原野能吉畠田根原合原影山通沢谷地戸ね舟堀石巢田宿棚保溝谷葉脇原園出宮																																	
縄 草 創 期																																		
文 期	縄撚																																	
早 期	沈																																	
文 期	条																																	
時 代	前多縄																																	
時 代	竹管																																	
時 代	中期初																																	
時 代	中期中																																	
時 代	中期後																																	
時 代	後期初																																	
時 代	後期中																																	
時 代	後期末																																	
時 代	晚期前																																	
時 代	晚期後																																	

中谷遺跡の周辺遺跡は第3図のように、北東側400mに縄文時代前・中期の松葉遺跡、北側600mに宮脇遺跡、また、南東約700mに縄文時代中期新道式の遺物及び住居址が検出された中溝遺跡<sup>(註1)</sup>、北約800mには奈良・平安時代の住居址6軒検出された堀之内原遺跡<sup>(註2)</sup>、また、北東約3.2kmに縄文時代中期曾利式期及び、奈良時代の住居址が検出された大月遺跡がある。

(註1) 奥隆行他1974 「中溝遺跡発掘調査報告」 都留市教育委員会

(註2) 奈良泰史他1980 「堀之内原遺跡発掘調査報告」 都留市教育委員会

(註3) 平松康毅他1977 「大月遺跡(1)ー県立都留高等学校校舎改築に伴う第一次発掘調査報告」 山梨県教育委員会

### 第Ⅲ章 中谷遺跡研究小史

中谷遺跡の存在は早くから知られていて、大正年間、遺跡の北側にある尾県小学校の校庭拡張の際、堅穴住居址が、また遺跡南方の大野伝兵エ氏の畠からは、敷石居住址が発見されたと伝えられている。その際発見された美麗な小型の磨製石斧が大野氏から市に寄贈され、現在市教育委員会に於いて保管中である。

また、昭和47年7月、市教育委員会に於ける中谷遺跡発掘調査の際の土地所有者、小俣治良氏が耕作中採取された土器片及び大型の分銅型石斧、定角石斧、石刀を市に寄贈され、これらはまた、市教育委員会に於いて保管している。

昭和3年10月刊行の「日本石器時代人民遺物発見地名表」に「小形山」として「松葉」「フルヤド」「大タナ」「菖蒲沢」の五つの遺跡の存在を先学羽田一成氏が報告しているが、出土遺物も単に「土器」「石器」等と簡記されているのみで、詳細な調査は行われなかった模様である。

昭和30年5月に刊行された山本寿々雄氏の「甲斐石器時代遺跡遺物発見地名表」には、小形山より早期の茅山式、前期の諸磯C式、中期の加曾利E I・II式各土器の出土することを伝え、石器としては「石匙」「凹石」の出土例が伝えられ、堅穴住居址が乱掘されたと記されているが、小形山と広範囲の地名を使用しているので、遺跡の詳細については不明であるが、編年の位置づけに初めて具体的な知見が示された。

昭和37年実施の山梨県教育委員会刊行の「山梨県遺跡地名表」には都留市文化財審議員羽田富士男、渡辺長重両氏が、縄文の遺跡として報告しているが、縄文前・中期の遺跡として報告され、後、晩期の遺物を出土することについてはられることはなかった。

昭和39年7月に、中央自動車道建設事前調査として発掘調査が行われ、仁科義男氏を調査団長とし、立正大学文学部久保常晴教授、及び同坂詰秀一講師と考古学研究室員及び山梨県側から山本寿々雄学芸主事が発掘調査に当たり都留市からも前記羽田富士雄、渡辺長重氏の他に遠藤匡彦氏の三文化財審議会委員が参加した。

関俊彦、加藤邦雄、坂詰秀一の諸氏が「発掘調査の実施結果に基づく発掘調査報告書」にその成果を報じている。

坂詰秀一氏は、更にまた「都留市小形山に於ける縄文晩期配石遺跡の調査」を甲斐考古第8号に掲載しているが、二例の配石遺構を発見、表土中から加曾利B III式土器片及び配石遺構中から縄文晩期の土器、土版、石鏸と弥生後期の土器、磨製石斧等を発掘、ここにはじめて当時としては県下に数少ない、縄文後・晩期遺跡として注目を浴びるに至ったがその後積極的調査の行われることもなかった。

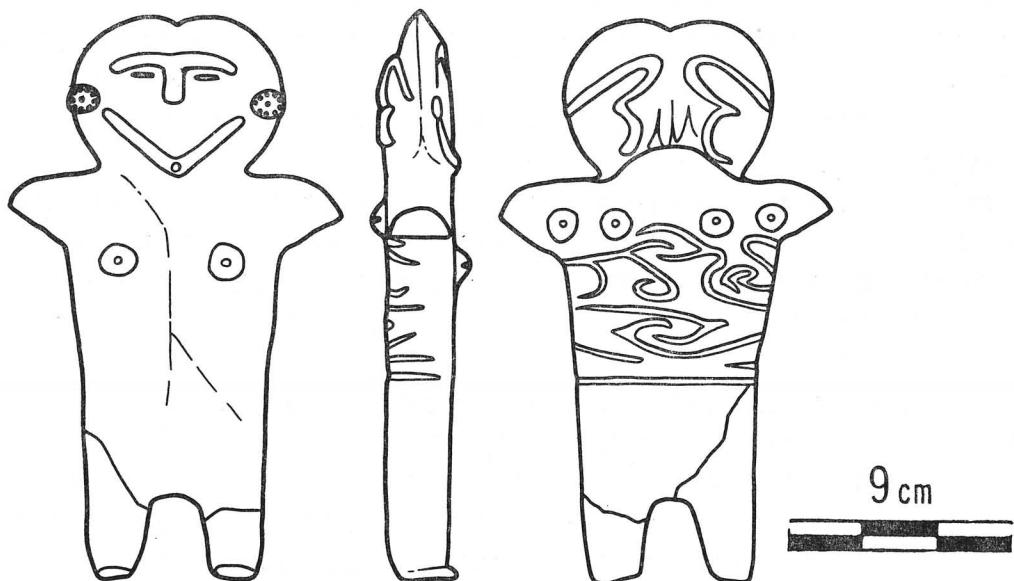
昭和46年12月16日の調査（表採）で、珍しい小型の獸面把手が採取され、同時に、附近から石棒・石皿の破片及び磨石と思われる石器類も多数発見された。

昭和47年3月には農道拡幅工事のため、けずりとられた壁面から、住居址と思われる落ち込みが発見され、同時に採取された土器片から4つの復元可能な土器及び小型磨製石斧（定角石斧）1、石鏸、注口土器注口部破片等を得たので、取り敢えず附近を実地測量し注目しておったところ、道路拡幅により自動車の運行が可能になったため、敷地所有者が現状を変更予定の由伝聞した

ので、都留市教育委員会は都留文科大学考古学研究会に調査を委嘱、発掘調査を行った。発掘調査の結果晩期の配石遺構と後期に属すると思われる敷石遺構及び同期に属する住居址一軒を発掘した。また配石遺構中、楕円形状に配置された石組みの中央部から、頭部を南に、顔面を上にし、やや斜めの状態で両腕の欠損した、耳栓を装着したハート型土偶を発掘、学界の注目を浴びた。



第7図 中谷遺跡発掘調査（第1次・第2次・第3次）位置図



## 第Ⅳ章 層序

### 第1節 層序 (第8図)

中谷遺跡の標準層序は、ほぼ12層に分かれる。

第I層 (表土層) 耕作土

第II層 (褐色土層) 黄褐色、赤色粒子及び、2mm大のスコリアを含有。粘性は弱い。

第III層 (黒褐色土層) 赤色粒子、2mm大のスコリア含有

第IV層 (暗褐色土層) 赤色粒子、黄褐色粒子含有

第V層 (黄褐色土層) 赤色粒子、黄褐色粒子及び2mm大のスコリア含有。本層は黄褐色の砂粒状の粒子によって形成されている。本層は土師式土器の包含層。住居址、溝、ピットの検出面となっている。

第VI層 (暗黄褐色土層) 黄褐色粒子を多量に含有。本層下部よりスコリアの純層が認められた。本層上部は縄文晩期の、下部は加曾利B式の、遺物包含層である。

第VII層 (暗茶褐色土層) 黄褐色、赤色粒子を若干含有し、2~3mm大のスコリアを含有。本層は加曾利B式・堀之内式の遺物包含層である。

第VIII層 (褐色土層) 黄褐色粒子、2mm大のスコリアを若干含有。堀之内式・加曾利E式・曾利式の遺物包含層である。

第IX層 (暗褐色土層) 黄褐色粒子を若干含有。曾利式土器の遺物包含層である。

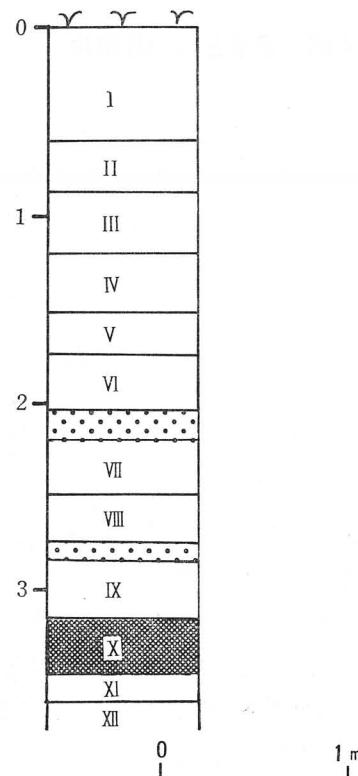
第X層 (黒褐色土層) 黄褐色、赤褐色の微粒子を若干含有。粘性の強い土層である。

第XI層 (暗黄褐色土層) ローム漸移層。

第XII層 (黄褐色土層) ローム層。

### 第2節 層序と遺物 (第9図)

中谷遺跡における各層中の遺物の出土状態は、第9図、第2表のよう、第VII層からの出土が最も多く以下、第VII層、第VIII層、第IX層と減少する。その内容は、第VI層中では第8群土器（縄文時代後期中葉）を主体として、第9群土器～第11群土器（縄文時代後期中葉～同時代晩期の土器群）が同層出土土器の内に過



第8図 中谷遺跡標準層序

半数を占めている。第VII層中では第8群土器～第11群土器が減少し、第5群土器（同時代中期後葉）～第7群土器（同時代後期初頭）が増加する。第VIII層中では第8群土器～第11群土器が増々減少し、第5群土器～第7群土器が、同層出土土器の内の大半を占める。第IX層中では第5群土器が、同層の出土土器中に、大半を占めている。なお、第I層～第IV層中からあまり遺物の出土をみなかつた。第V層中では土師式土器を主体として、縄文時代各期の土器片の出土をみたが、全体的な出土量はわずかであった。

出土遺物は、ほとんどが住居址、配石遺構に伴うものである。これらの土器は第2群～第11群まで、層位毎の増減は認められるものの、層序と遺物との関係（各期の文化層）については、あまり良好なデータを得ることはできなかつた。

### 第3節 層序と遺構

中谷遺跡で発見された遺構の内で、奈良時代の住居址（第1号址・第9号址）は、遺構の確認面が第V層中であり、覆土となっていたのが第IV層の暗褐色土であった。

縄文時代の住居址（第2号址・第8号址・第10号址・第11号址・第12号址・第13号址・第14号址）は、遺構の確認面が第VII層中であり、覆土となっていたのが第VI層の暗黄褐色土であった。

配石遺構は、第VI層～第IX層に渡って認められた。

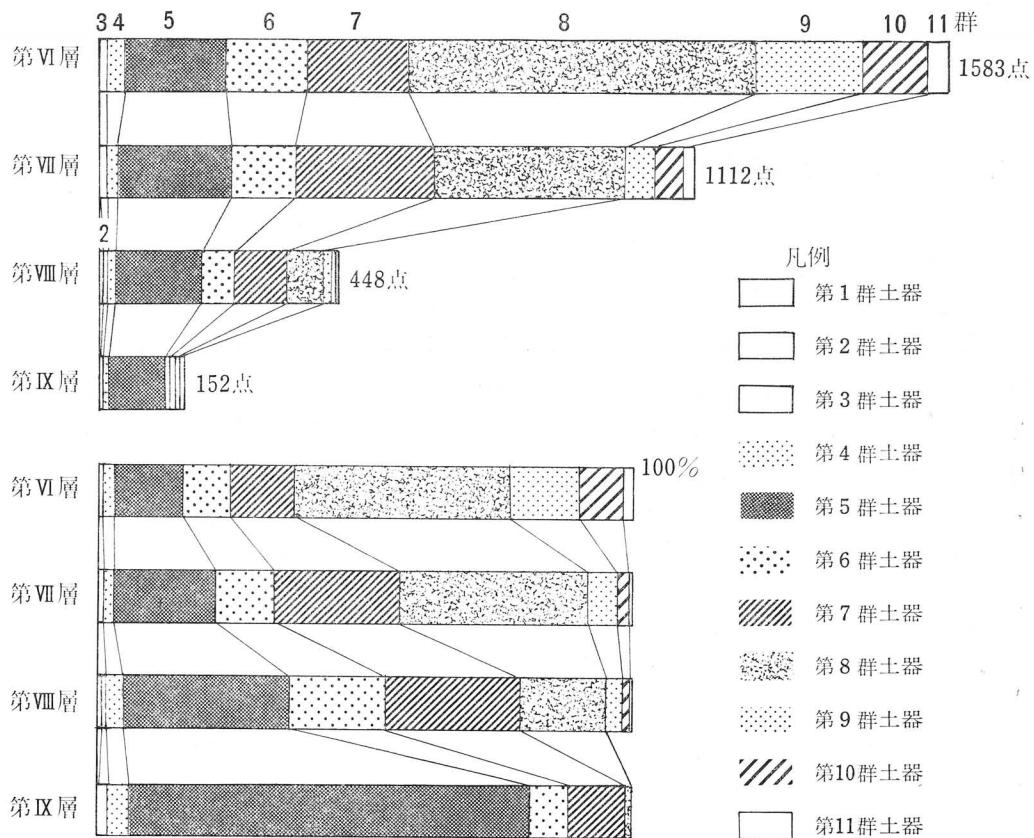
### 第4節 層序と火山堆積物

本遺跡では、第VI層下部と第VIII層下部において、火山堆積物層が認められた。これについては以前発表したことがあるが、第VI層下部で認められたものは、1～2mm大の黄褐色、灰色を呈するスコリア層である。<sup>(註1)</sup> 第VIII層下部で認められたものは、2～3mm大の灰色・黒色を呈するスコリア層である。

第VI層中のスコリア層は、ハ地区において最も良好に観察された。イ・ロ両地区においては、純層としては認められず、第VI層中に拡散していた。最も良好に観察されたハ地区では、スコリア下に第8群土器、スコリア上に第9群土器が認められた。また第2号址は第8群土器を伴う住居址で、覆土中にスコリアの堆積が認められ、この住居址を第9群土器を主体的に伴う第13号址が切って構築されていた。これらより、このスコリアの降下時期は、第8群土器の新しい時期から第9群土器の古い時期の間と推定される。

第VIII層中のスコリア層は、イ・ロ地区において良好に観察された。特に、第3号址（人骨を伴う土塙墓）の覆土中では、厚い堆積が認められた。このスコリア下には、第5群土器の古い時期のものが、スコリア上では、第5群土器の新しい時期以後のものが、それぞれ認められた。これは同市内久保地遺跡で確認された曾利Ⅲ式の新しい段階に降下したと推測されるスコリアに比定されるものと思われる。

(註1) 奈良泰史(1980)「山梨県東部一桂川流域一の火山堆積物と遺跡」(『考古学ジャーナル』No.178)



第9図 層位別土器出土相関図

層位	土器群	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計
第 VI 層	0(0)	0(0)	12(1)	37(2)	188(12)	149 (9)	189(12)	649(41)	203(13)	119(8)	37(2)	1, 583	
第 VII 層	0(0)	0(0)	16(1)	17(2)	211(19)	118(11)	258(23)	384(35)	55 (5)	52(5)	2(0)	1, 113	
第 VIII 層	0(0)	2(0)	4(1)	12(3)	162(36)	66(15)	114(25)	72(16)	13 (3)	2(0)	1(0)	448	
第 IX 層	0(0)	0(0)	4(3)	6(4)	114(75)	11 (7)	16(11)	1 (1)	0 (0)	0(0)	0(0)	152	
計	0(0)	2(0)	36(1)	72(2)	675(20)	344(10)	577(18)	1, 106(34)	271 (8)	173(5)	40(1)	3, 296	

第2表 層位別土器出土一覧表

( ) は%

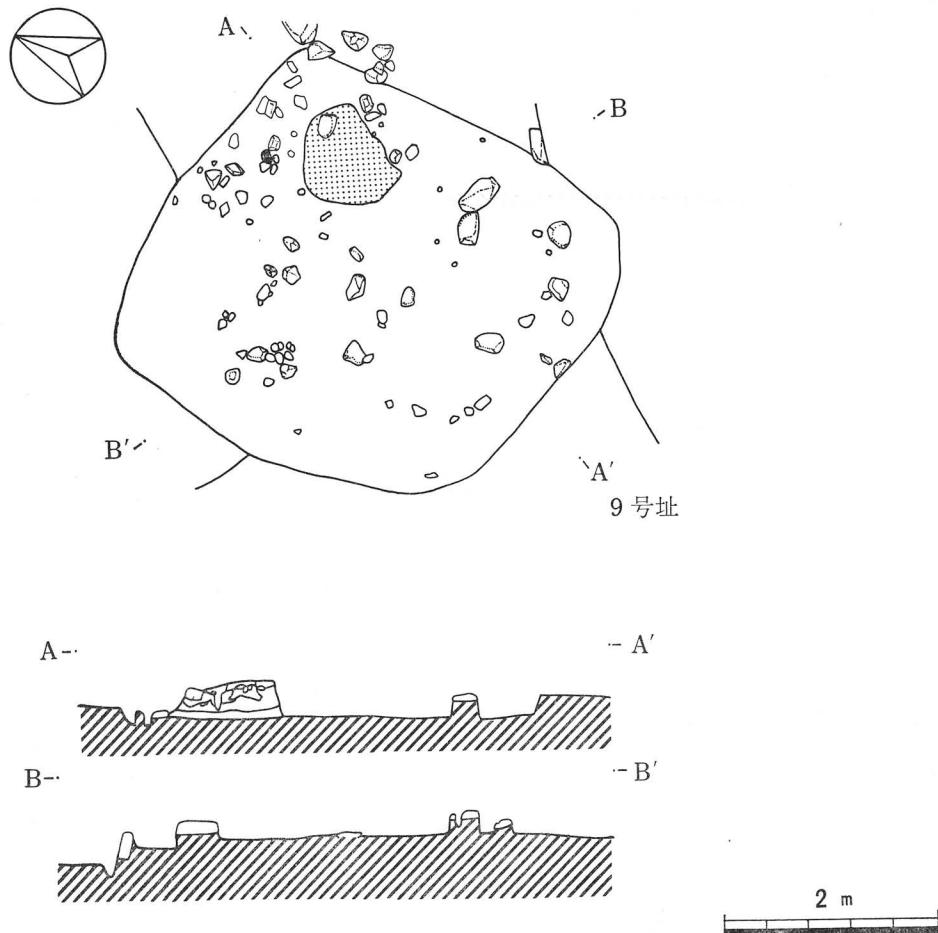
# 第V章 遺構

## 第1節 繩文時代の遺構

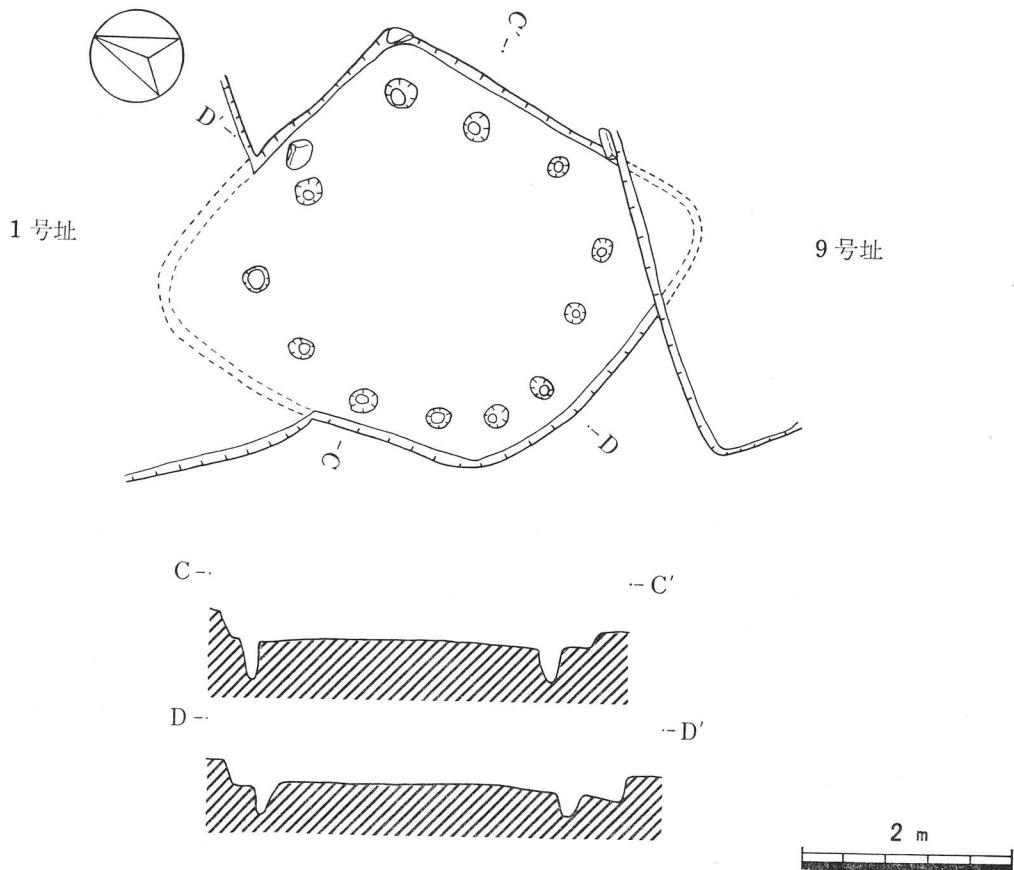
### 1 住居址

#### (1) 第8号址(第10図)

本住居址は、二地区A～E—27～33区に位置する。北側を1号址、南側を9号址にそれぞれ切られているため、その全貌は明らかではないが、一辺約3.2m～3.6mの方形プランを呈するものと思われる。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、約20cmを計る。床面は、平坦であるが軟弱である。柱穴は、壁面に沿って12本検出された。覆土は、スコリアを少量含有し、黒色を呈する。砂粒状で粘性は低い。本址内(D・E—31・32)から粘土を混在する焼土ブロックが検出された。(平林彰・伊藤正人)



第10図 第8号址平面図



第11図 第8号址平面図（掘り方）

#### 出土遺物

##### ① 土 器（第12～17図）

主に覆土中より出土し、中谷第10群土器を主体とする。

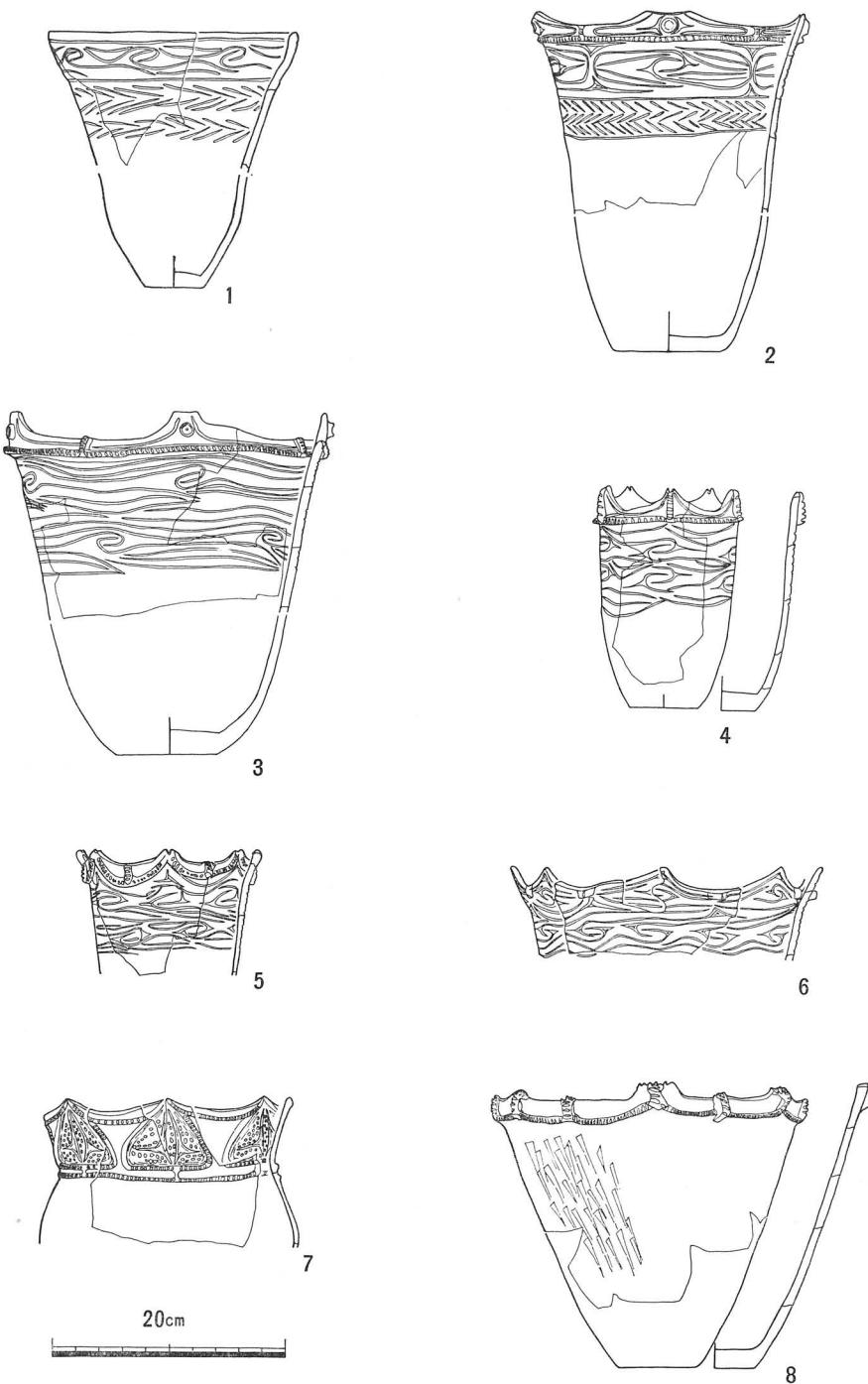
1は口縁部やや内湾した平縁の深鉢形土器である。口唇直下に有刻突帯を有する。口縁部文様帶は、有刻突帯によって上（I a）、下（I）の二つの文様帶を形成している。I a、Iの文様帶には、三叉文、三叉状入組文が、胴部文様帶（II）には、羽状沈線文が、それぞれ施されている。

2は口縁部4単位の小波状を呈する深鉢形土器である。口唇直下に有刻突帯を有する。口縁部文様帶は、有刻突帯によって上（I a）、下（I）の二つの文様帶を形成している。I a、Iの文様帶には、三叉文、三叉状入組文が、胴部文様帶（II）には、羽状沈線文が、それぞれ施されている。

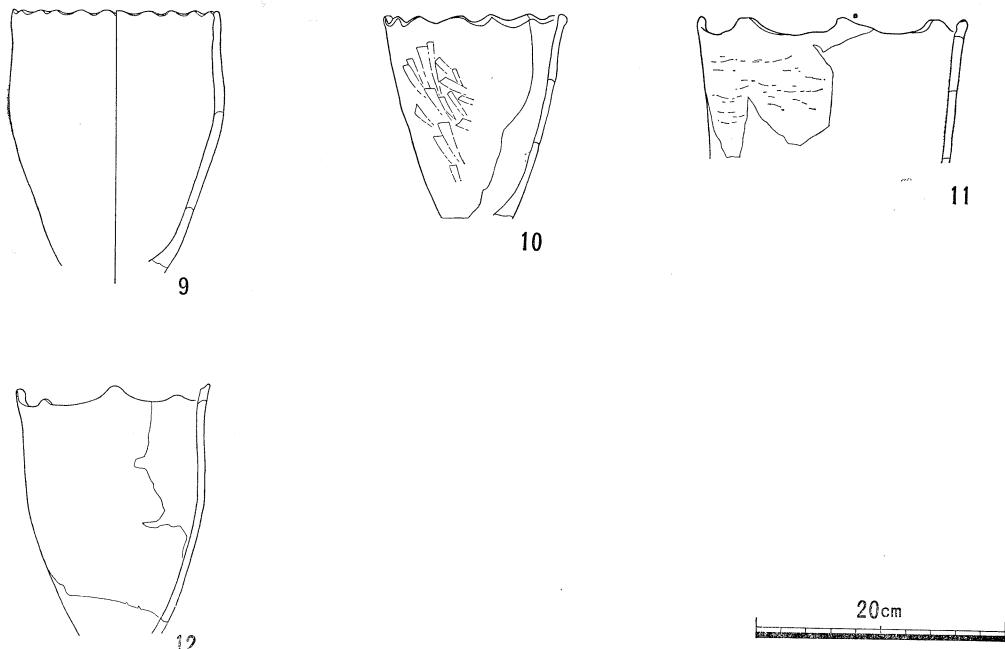
3は口縁部4単位の突起状の波状を呈する深鉢土器である。口唇直下に有刻突帯を有する。I a文様帶には1本の沈線、I文様帶には流水状の入組文が、それぞれ施されている。

4は口縁部5単位の波状を呈する深鉢形土器である。口唇直下に有刻突帯を有する。I a文様帶には1本の沈線、I文様帶には三叉状入組文が、それぞれ施されている。

5は口縁部波状を呈する深鉢形土器である。口唇直下に有刻突帯を有する。口縁部文様帶には



第12図 第8号址出土土器実測図(1)



第13図 第8号址出土土器実測図(2)

三叉状入組文が施されている。

6は口縁部波状を呈する深鉢形土器である。口縁部文様帶には三叉状の入組文が施されている。

7は口縁部波状を呈する深鉢形土器で、最大径は胴下半に存する。口縁部文様帶には有刻突帶による区画文が施され、その間隙に三叉文、刺突文が、それぞれ施文されている。

8は口縁部に5単位の小突起を有する無文の深鉢形土器である。口唇直下に有刻突帶を有する。

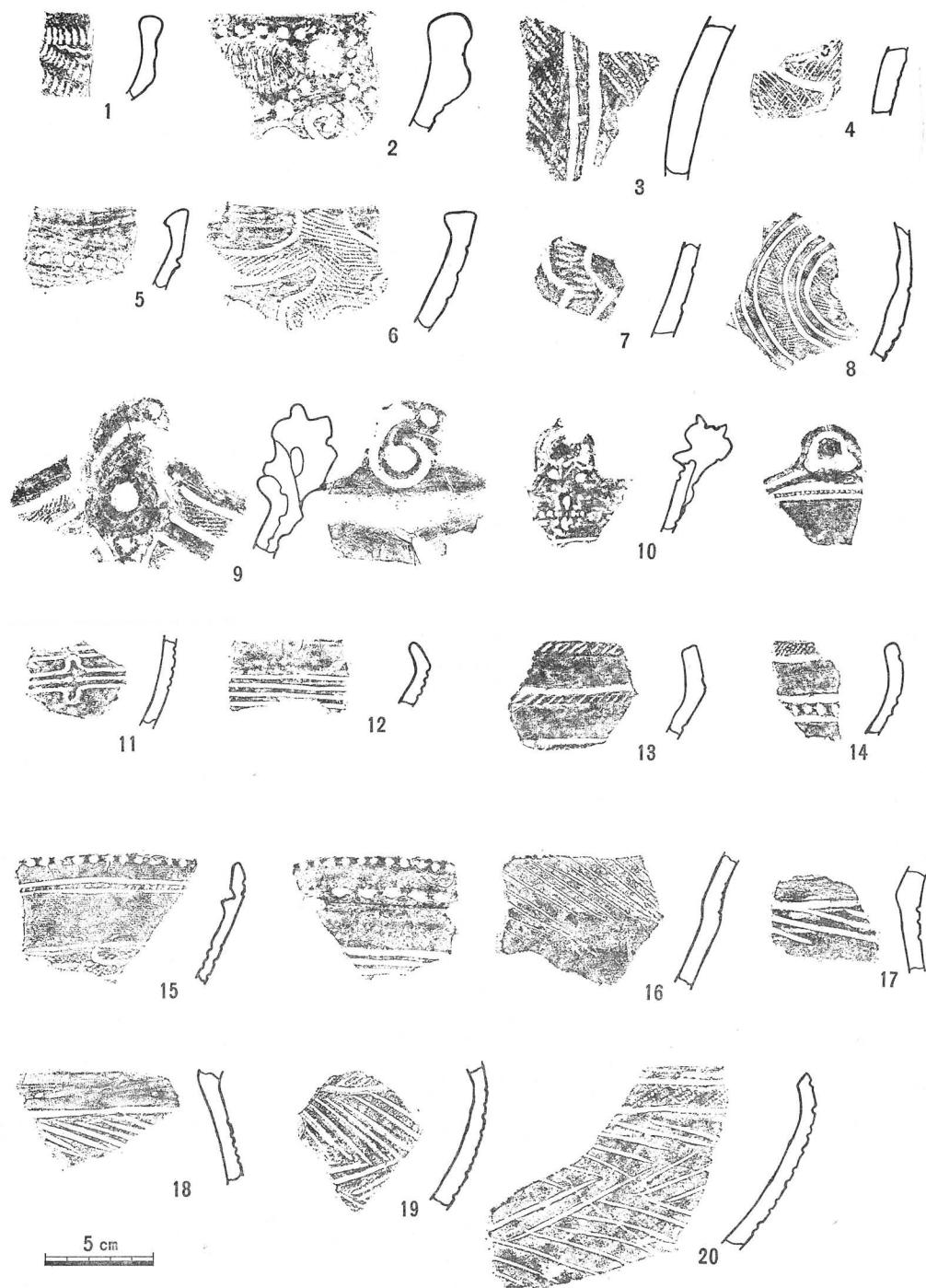
9・10は口縁部小波状を呈する無文の深鉢形土器である。

11・12は口縁部突起状に波状する無文の深鉢形土器である。

第14図～第17図は第8号址出土土器の拓影図である。中谷遺跡第11群土器を主体として、第4群～第11群の土器群が認められる。概要は第3表参照。

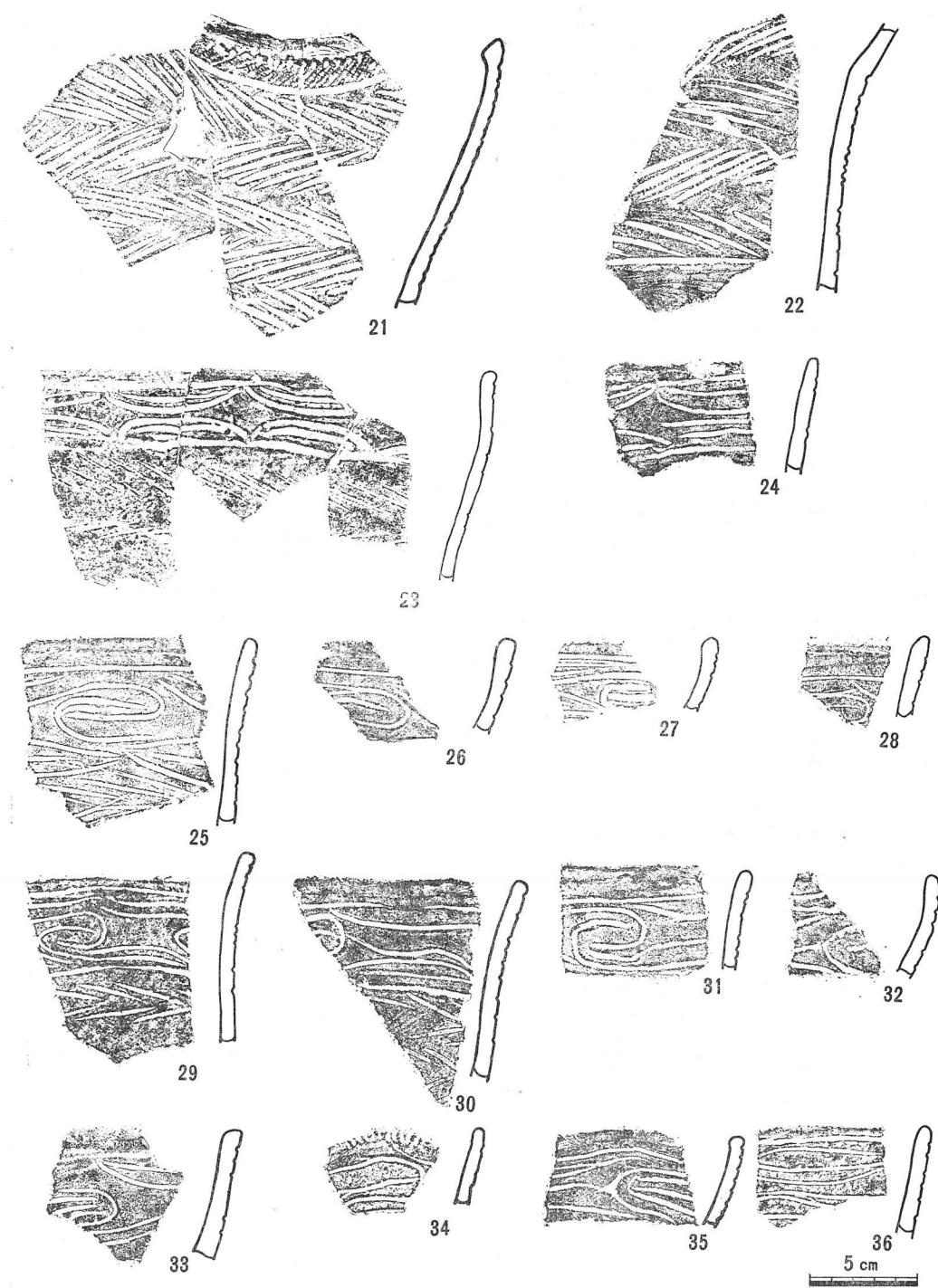
第3表 第8号址出土土器一覧表

No.	部位	施文具	文様	胎土	色調	時期	出土地点
1	口縁部	ヘラ状施文具	連続刺突文による横帯区画文	長石・石英粒含有	茶褐色	第4群第2類	覆土
2	"	棒状施文具	隆帯による橢円形状の横帯区画文	長石・雲母含有	灰褐色	第5群第4類	"
3	胴部	繩文原体(R L)	繩文を地文として懸垂文施文	"	明褐色	第5群第6類	"



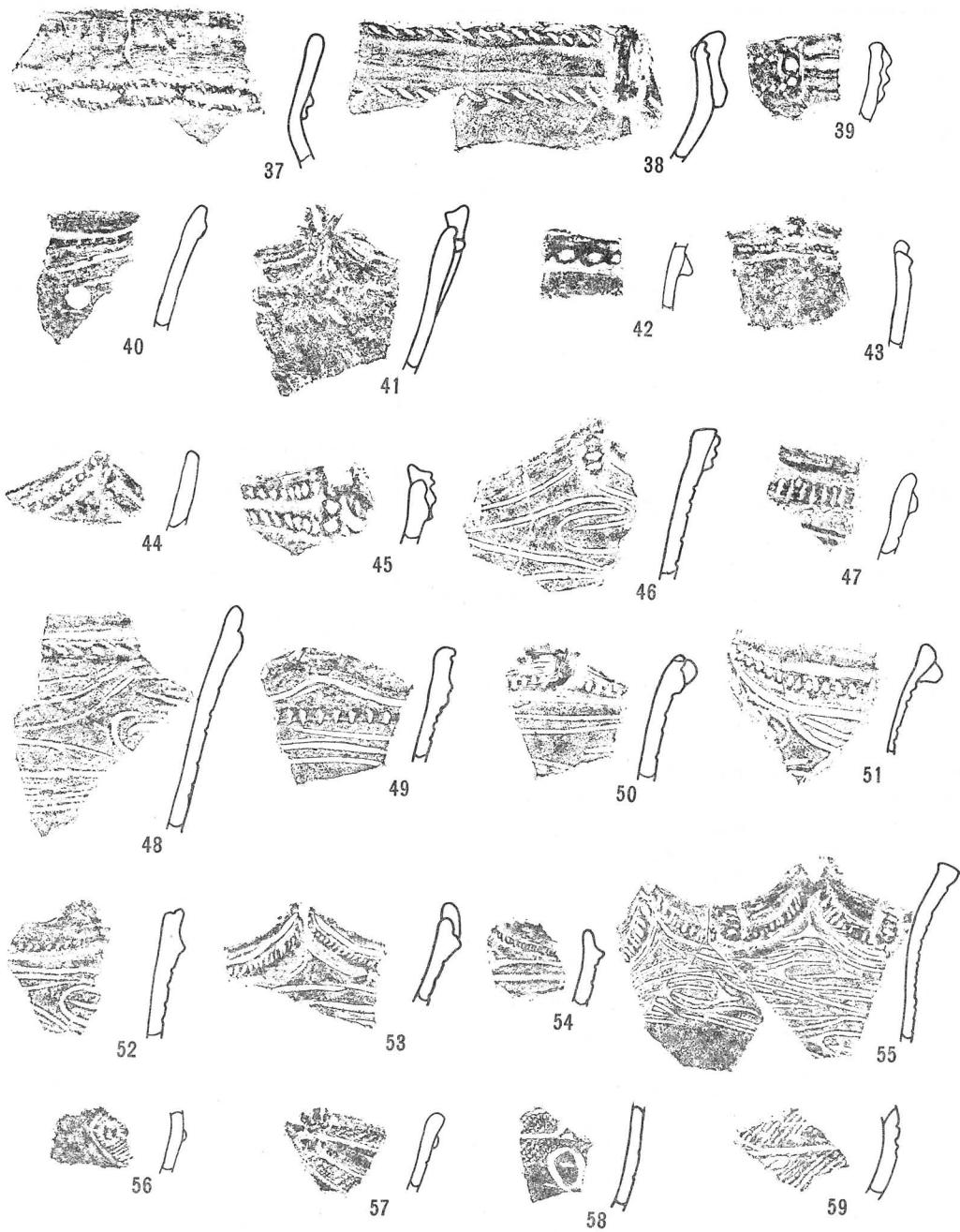
第14図 第8号址出土土器拓影図(1)

No.	部位	施文具	文様	胎土	色調	時期	出土地点
4	胴部	半截竹管 棒状施文具	半截竹管による綾杉状沈線文を地文として、棒状施文具による懸垂文が施文	長石・石英粒を多量に含有	明褐色	第5群第6類	覆土
5	口縁部	棒状施文具 縄文原体(L R)	口縁部に無文帯を形成し、その直下に断面三角の微隆帯施文。微隆帯上に円形刺突文が施文。	長石・石英粒を若干含有	暗褐色	第6群第2類	"
6	"	"	沈線区画内に充填縄文が施文す	"	茶褐色	第6群第6類	"
7	胴部	棒状施文具 縄文原体(R L)	"	石英粒・雲母多量に含有	明褐色	"	"
8	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	渦巻状沈線文、磨消縄文が施文	"	暗灰色	第8群第18類	"
9	口縁部	棒状施文具 縄文原体(R L)	C字状沈線と刺突を有する橋状把手。太い沈線区画内に磨消縄文が施文される。	"	茶褐色	第7群第1類	"
10	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	「8」字状貼付文、有刻隆線文が施文される。内面には、沈線文が施文される。	石英粒・長石若干含有	茶褐色	第7群第4類	"
11	胴部	棒状施文具 縄文原体(L R)	沈線文、磨消縄文が施文される。	"	"	第8群第13類	"
12	口縁部	棒状施文具	沈線文が施文	"	"	"	"
13	"	へラ状 "	沈線文、口唇及び陵線に刻みが施文	長石・石英粒 雲母多量に含有	明茶褐色	"	"
14	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	口唇直下に狭い縄文帯、列点状刺突が充填された平行沈線文	"	暗茶褐色	第8群第11類	"
15	"	棒状施文具 縄文原体(R L)	磨消縄文帯、口唇に刻み、口唇直下に列点状刺突充填の平行沈線文が施文	雲母・長石を多量に含有	茶褐色	第8群第1類	"
16	胴部	へラ状施文具	斜行沈線文が施文	雲母・石英粒を若干含有	暗灰色	第8群第6類	"
17	"	棒状施文具	"	長石・石英粒を多量に含有	暗灰色	"	"
18	"	"	"	"	"	第8群第6類	"
19	口縁部	棒状施文具 縄文原体(L R)	口唇直下縄文帯、羽状沈線文	"	"	第9群第8類	"
20	"	"	"	"	"	"	"
21	口縁部	棒状施文具 縄文原体(R L)	口唇直下に縄文帯、棒状施文具による羽状沈線文	雲母・石英粒を含有	暗褐色	第9群第8類	"
22	胴部	棒状施文具	羽状沈線文	"	"	第9群第5類	"
23	口縁部	棒状施文具 へラ状施文具	口縁部は棒状施文具による対弧状文、胴部はへラ状施文具による羽状沈線文	石英粒・雲母・長石を含有	"	第9群第7類	"
24	"	棒状施文具	口縁部に対弧状文	"	"	"	"
25	"	"	口縁部に巴状入組文、胴部に羽状沈線文	"	"	第10群	"
26	"	"	口縁部に巴状入組文	"	"	"	"
27	"	"	"	"	"	"	"
28	"	"	"	"	茶褐色	"	"
29	"	"	"	"	"	"	"
30	"	"	口縁部に巴状入組文、胴部に羽状沈線文	"	"	"	"
31	"	"	"	"	"	"	"
32	"	"	口縁部に巴状入組文	"	"	"	"
33	"	"	"	"	"	"	"
34	"	"	"	"	"	"	"
35	"	"	"	"	"	"	"



第15図 第8号址出土土器拓影図(2)

No.	部位	施文具	文様	胎土	色調	時期	出土地点
36	口縁部	棒状施文具	口縁部に三叉状入組文	石英粒・雲母・長石を含有	茶褐色	第10群	覆土
37	"	ヘラ状施文具	口縁部に有刻隆帯文	長石・石英粒を含有	灰褐色	"	"
38	"	"	口縁部に2条の有刻隆起線文貼付	"	暗褐色	"	"
39	"	棒状施文具	円形刺突が施された貼付文・三条の沈線文	石英粒・雲母を含有	"	"	"
40	"	"	有刻突帯文・羽状沈線文	"	"	"	"
41	"	"	波状口縁に沿った弧状隆帯文	"	"	"	"
42	胴部	"	有刻突帯	"	"	"	"
43	口縁部	ヘラ状施文具	"	"	"	"	"
44	"	"	"	"	"	"	"
45	"	棒状施文具	"	"	"	"	"
46	"	"	巴状入組文	"	茶褐色	"	"
47	"	ヘラ状施文具	有刻突帯文	石英粒・長石を若干含有	黄褐色	"	"
48	"	棒状施文具	有刻突帯文・口縁部に巴状入組文・胴部に羽状沈線文	"	"	"	"
49	"	"	有刻突帯文	"	"	"	"
50	"	"	"	"	"	"	"
51	"	"	巴状入組文	"	"	"	"
52	"	"	"	"	"	"	"
53	"	"	"	"	"	"	"
54	"	"	三叉状入組文	"	"	"	"
55	"	"	"	"	"	"	"
56	胴部	棒状施文具 縄文原体(L R)	曲線的な磨消縄文・ボタン状貼付文	長石・石英粒を若干含有	"	第9群	"
57	口縁部	棒状施文具 縄文原体(R L)	帶縄文・有刻ボタン状貼付文	"	"	"	"
58	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	縄文地に沈線文	"	"	"	"
59	"	"	"	"	"	"	"
60	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	口縁部に弧状沈線文, 三角形状の沈線文, 胴部に縄文	"	暗褐色	第11群第2類	"
61	胴部	棒状施文具 縄文原体(L R)	棒状施文具による三叉状入組文その間隙に, 磨消縄文	"	明褐色	"	"
62	口縁部	棒状施文具 縄文原体(L R)	弧状の磨消縄文	"	"	"	"
63	胴部	棒状施文具 縄文原体(L R)	鍵手状入組文	"	灰褐色	第11群第6類	"
64	口縁部	棒状施文具	三角陰刻文	石英粒・雲母を含有	暗褐色	第11群第3類	"
65	"	棒状施文具 撚糸文	撚糸文を地文として, 三角陰刻文	"	黄褐色	"	"
66	"	棒状施文具	平行沈線文間に刺突文施文	"	"	第11群第5類	"
67	"	"	口唇直下に1本沈線文を巡らし, その間隙に刺突文施文	"	"	"	"



5 cm

第16図 第8号址出土土器拓影図(3)

② 石 器（第18図）

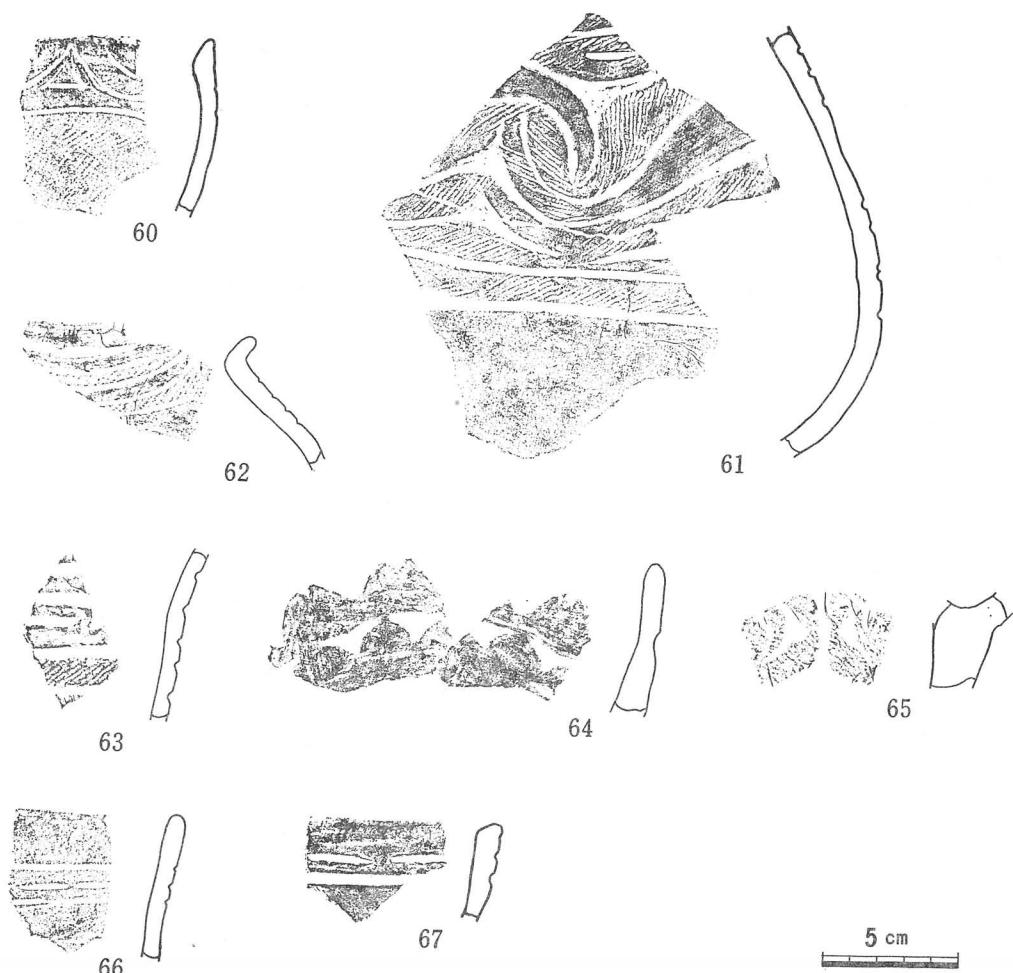
第18図は第8号址出土の主な石器の実測図である。

1・2は黒耀石製の石鏃である。

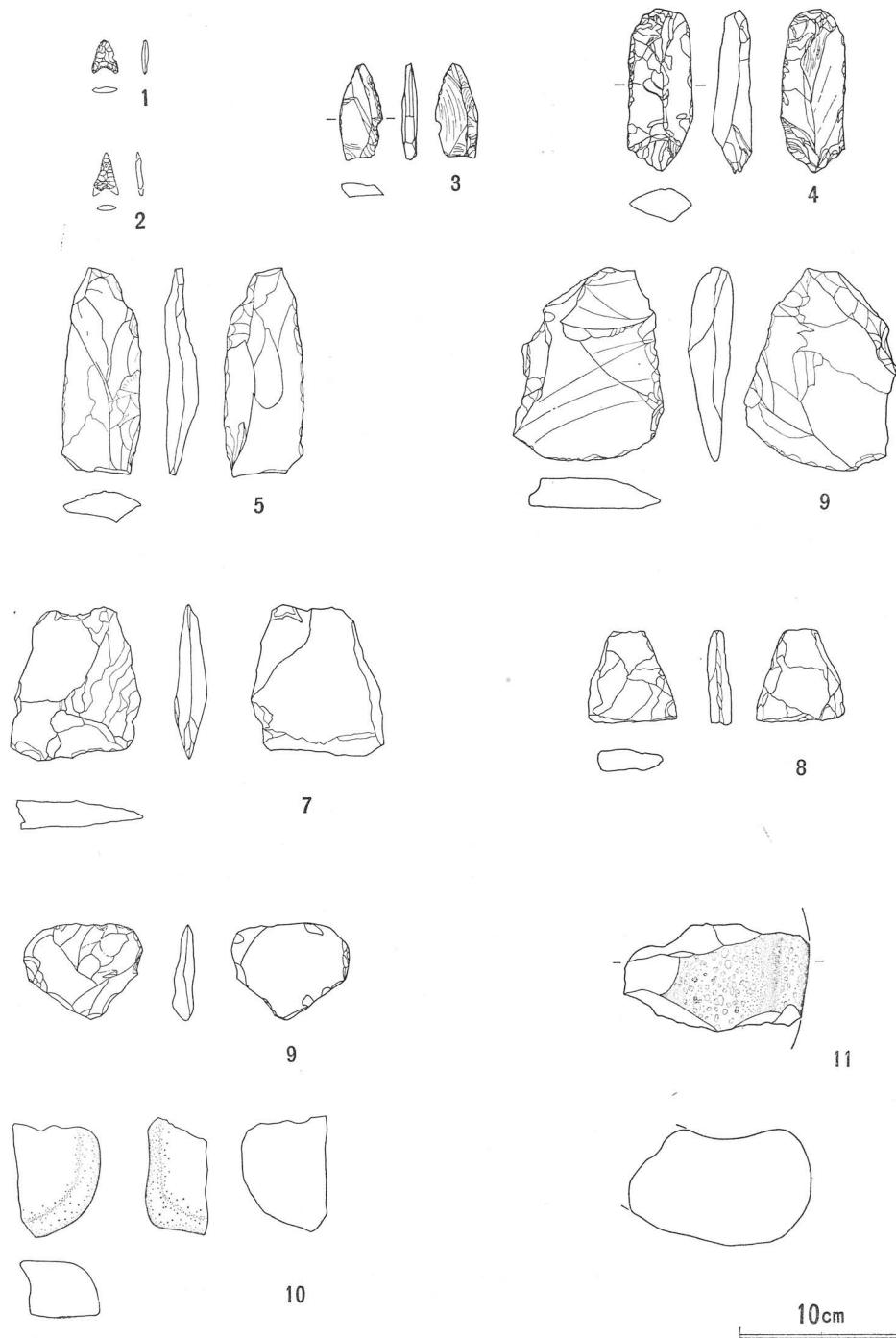
3・4はスクレイパーで、3はチャート製、4は黒耀石製のものである。

5～8は打製石斧で、いずれも頁岩製のものである。8は先端部が欠損している。

10・11は石皿の破片で、いずれも安山岩製のものである。



第17図 第8号址出土土器拓影図（4）



第18図 第8号址出土石器実測図

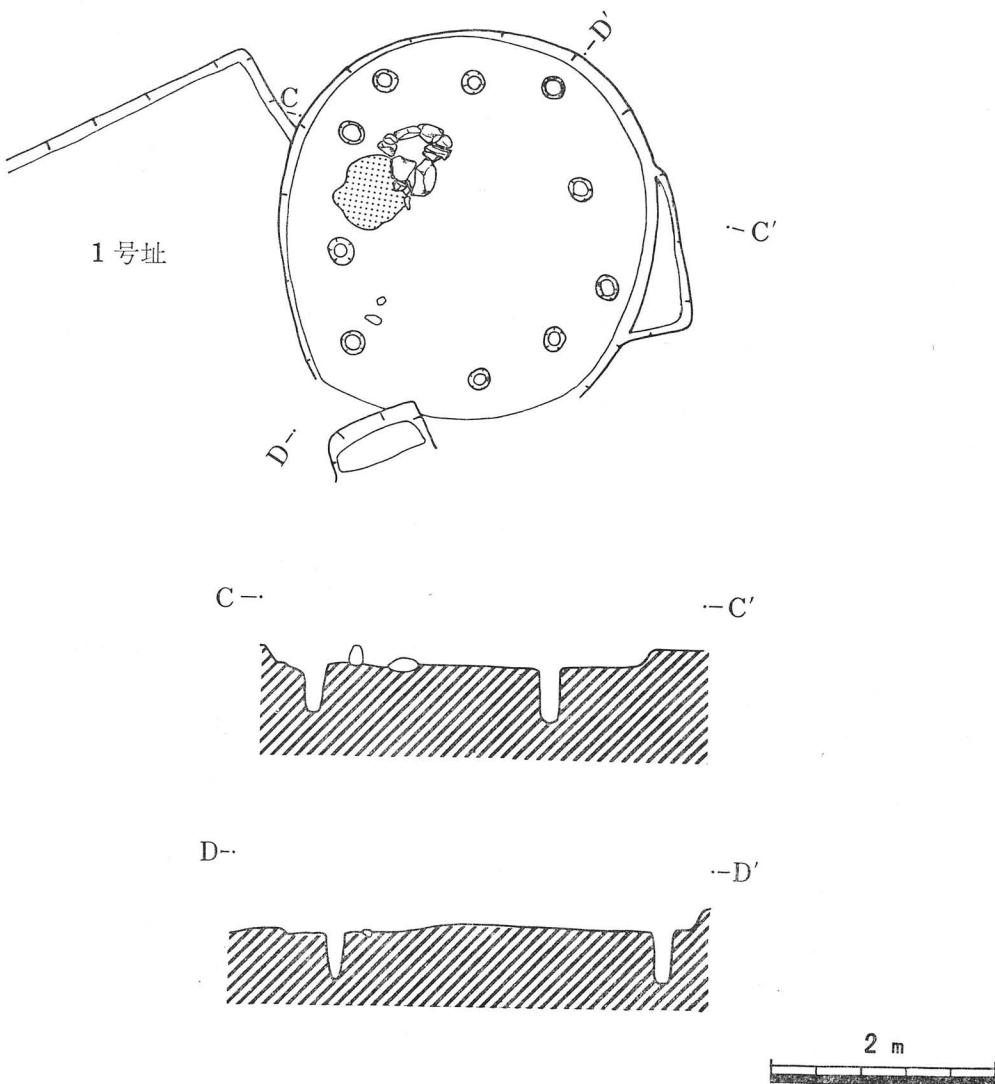
(2) 第12号址 (第19・20図)

本住居址は、Z～C-24～27区に位置し、10・14号址を切って構築されている。平面プランは長径 3.75m、短径 3.5m のほぼ円形を呈している。壁は、緩い角度で立ち上がり、壁高は、15～18cmを計る。床面は、平坦であるが軟弱である。柱穴は、壁に沿って10本検出された。炉は住居址中央よりやや南西寄りに位置し、20～40cm大の礫が、40cm×70cmの橢円形に配された石囲い炉である。炉の南東側に、炉からのかき出しと思われる焼土が、60×68cmの範囲で認められた。

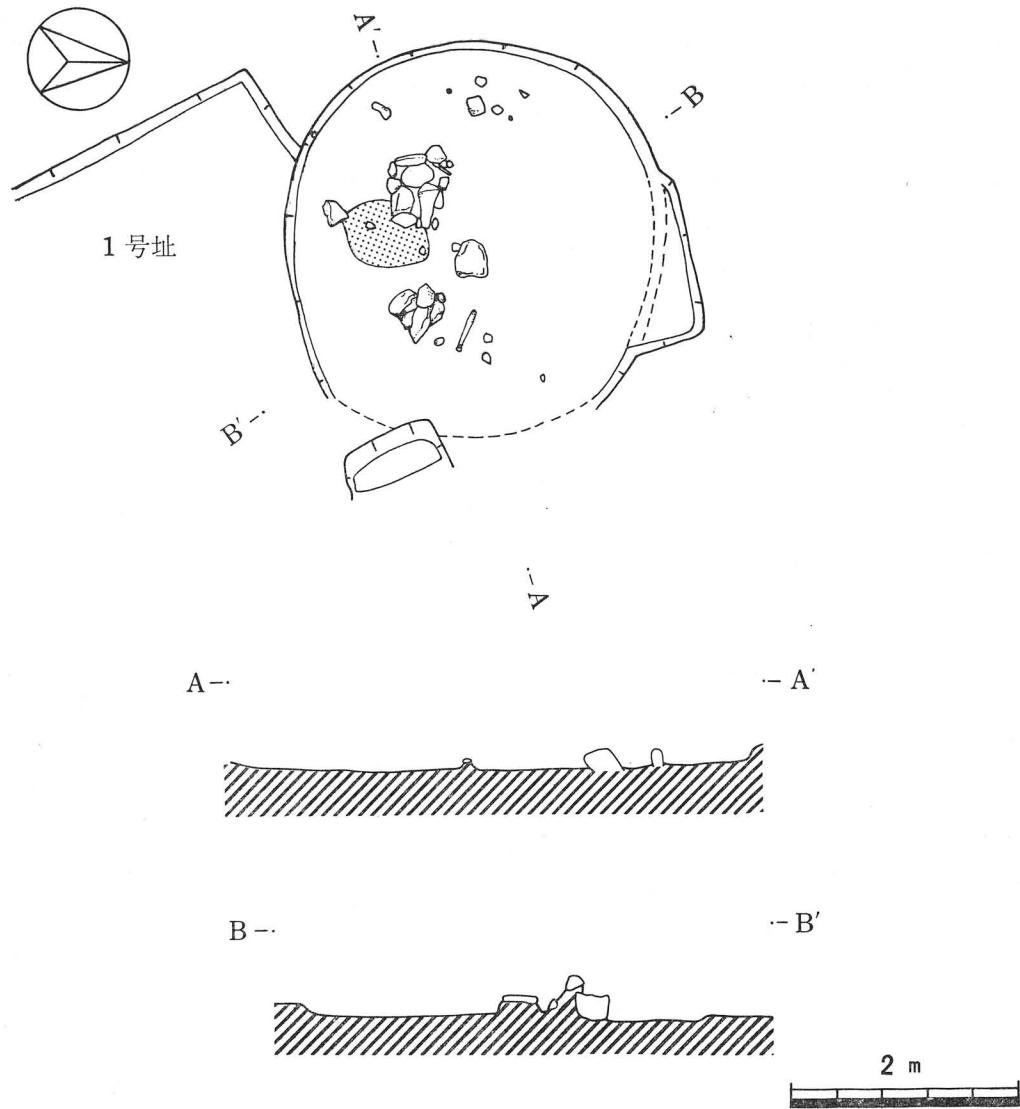
出土遺物

①土 器 (第21～23図)

1は浅鉢形土器で口縁部が欠損している。6条の平行沈線文を横位に施し、その間隙に「ハ」の字状沈線文が充填されている。



第19図 第12号址 平面図(1)



第20図 第12号址平面図(2)

2は口縁がやや内湾した深鉢形土器である。口縁部文様帶には4条の沈線文が、胴部文様帶には羽状沈線文が、それぞれ施されている。

3は口縁がやや外反した深鉢形土器である。口縁部文様帶には入組文が施されている。

4は口縁がやや外反した深鉢形土器である。口縁部文様帶には巴状入組文が、胴部には羽状沈線文が、それぞれ施されている。

5は浅鉢形土器である。口唇直下に3条の沈線文が施されている。

第22図～第23図は第12号址出土土器の拓影図である。中谷遺跡第10群土器を主体として、第5群～第10群の土器群が認められる。概要については、第4表参照。

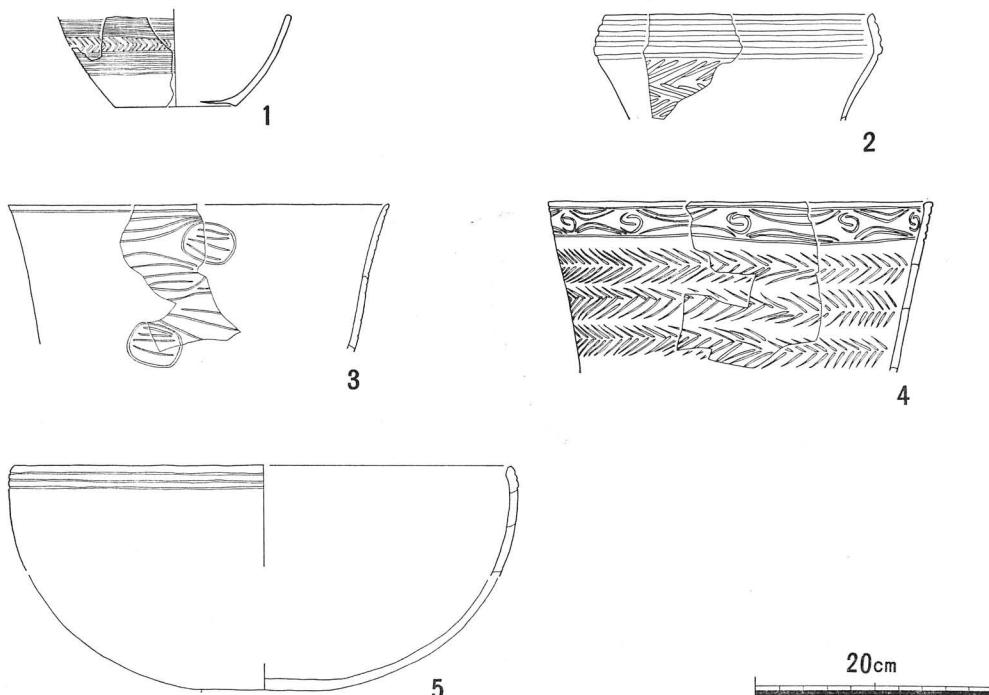
## ② 石 器 (第24図)

第24図は第12号址出土の主な石器の実測図である。

1～4・6は、打製石斧及び、それに類するものである。1・6は、凝灰岩製の、2～4は、砂岩系の、ものである。

7・8は、磨石で、安山岩製のものである。8には使用痕が認められる。

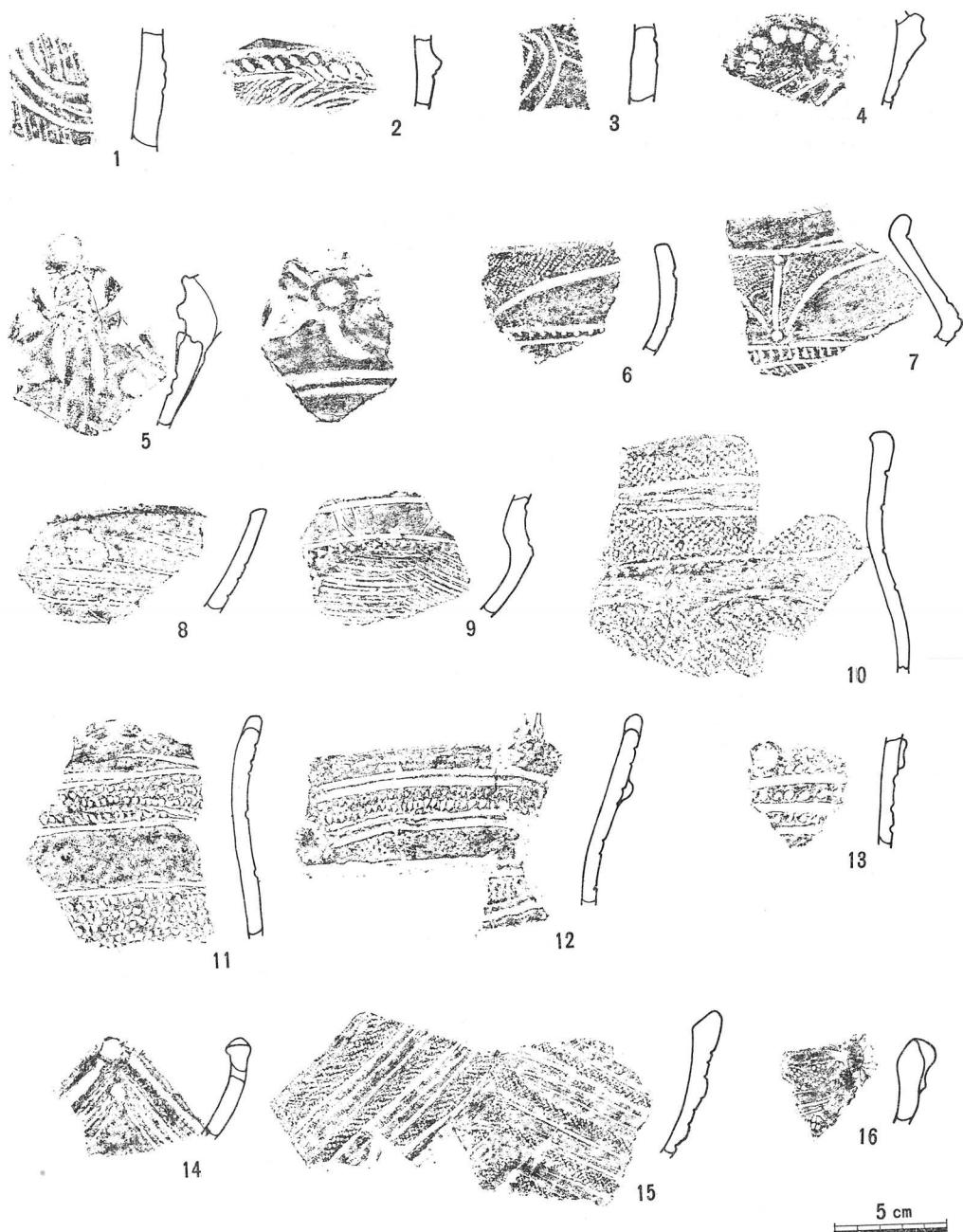
9は、頭部欠損の石棒で、凝灰岩製のものである。



第21図 第12号址出土土器実測図

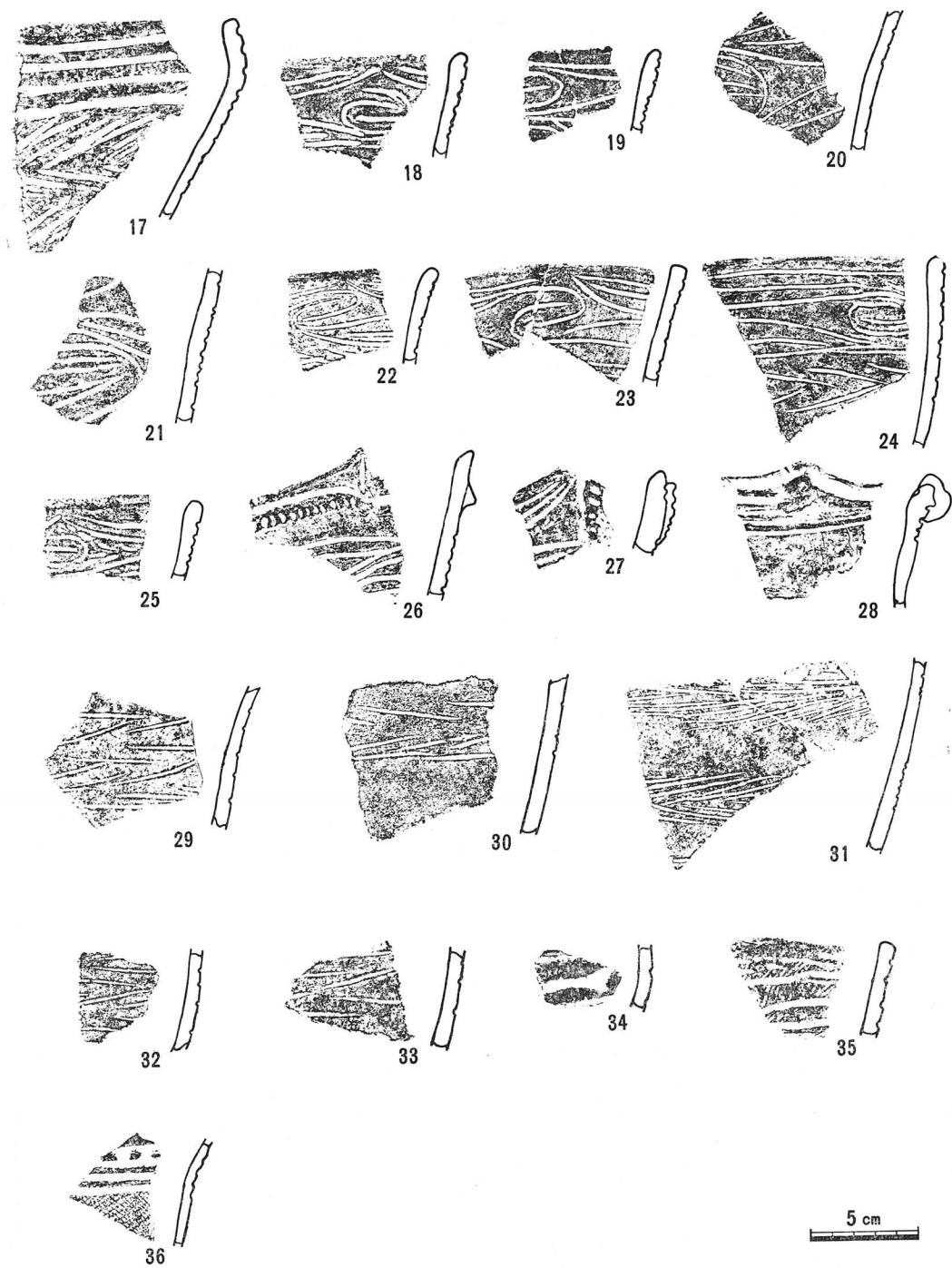
第4表 第12号址出土土器一覧表

No.	部位	施文具	文 樣	胎 土	色 調	時 期	出 土 地 点
1	胴 部	半截竹管 棒状施文具	半截竹管による条線を地文として、隆線による渦巻文施文	石英粒・長石 を含有	黄褐色	第5群第5類	覆土
2	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	縄文を地文として、太い沈線文施文。頸部に有刻隆帶文	"	茶褐色	第7群第2類	"
3	"	棒状施文具	曲線的な太い沈線文が施文	"	"	"	"
4	口縁部	"	口唇直下に弧状の有刻隆帶が貼付され、その直下から羽状沈線文が施文			第7群第1類	
5	"	"	口縁に小突起を有し、その直下に対弧状沈線文が施文	石英粒・長石 を含有	黒褐色	第8群第1類	"
6	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	口縁に横連の対弧文施文・対弧文間に磨消縄文が、その直下には2本の横線に画されて刻目文が巡っている。	"	"	第8群第10類	"

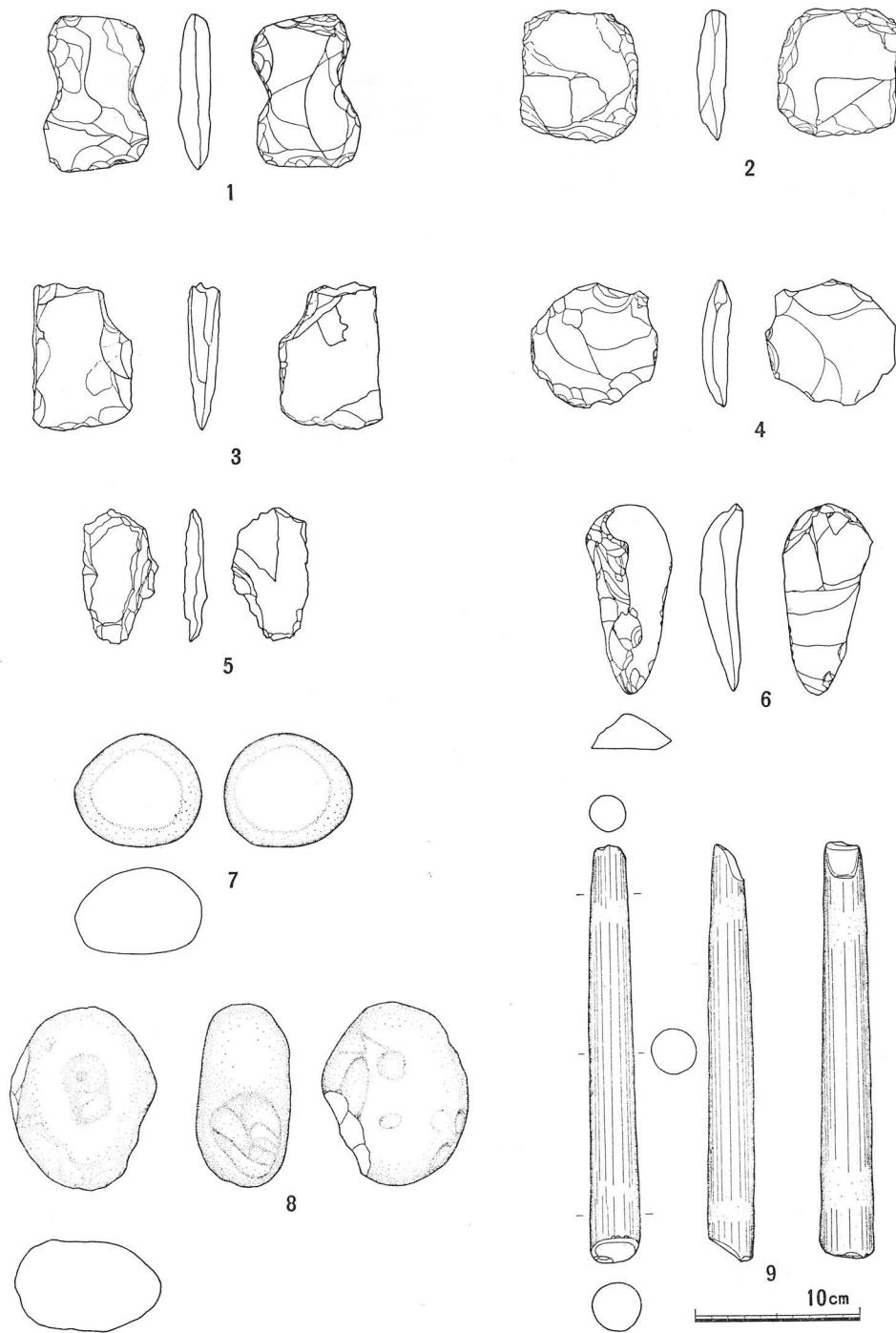


第22図 第12号址出土土器拓影図(1)

No.	部位	施文具	文様	胎土	色調	時期	出土地点
7	口縁部	棒状施文具 縄文原体(L R)	口縁に横連の対弧文が施文。対弧文間には充填縄文が、連結部には円形刺突文が、それぞれ施文。口縁部と胴部の境には2本の横線に画されて刻目文が巡っている。	石英粒・長石を含有	黄褐色	第8群第10類	覆土
8	"	ヘラ状施文具	口唇直下より斜行沈線文が施文	"	暗褐色	第8群第6類	"
9	胴部	棒状施文具 半截竹管	口縁部と胴部の境には有刻の隆線が巡り、その直下より斜行沈線文が施文されている。	"	"	第8群第17類	"
10	口縁部	棒状施文具 縄文原体(R L)	口縁部には帶縄文が、胴部にはコンパス文が、それぞれ施文されている。口縁部と胴部の境には2本の横線に画されて刻目文が巡っている。	"	"	第9群第1類	"
11	"	棒状施文具	2本の横線に画された帯状区画文が施文され、その間は列点状刺突文によって充填されている	雲母・石英粒を含有	"	第9群第3類	"
12	"	半截竹管	半截竹管によって2本の横線に画された帯状区画文が施文され、その間は列点状刺突文によって充填されている。帯状区画文の間に瘤状貼付文が貼付されている。	"	"	"	"
13	胴部	棒状施文具 縄文原体(R L)	縄文を地文として、横線が施文され、その間は列点状刺突文によって充填されている。	"	"	第9群第13類	"
14	口縁部	半截竹管	波状口縁の波頂部に円形刺突文が施文され、それより口縁に沿って横帯区画状に沈線文が施文されている。	雲母・石英粒を含有	黒褐色	第9群第12類	"
15	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	波状口縁に沿って帶縄文が施文されている。	"	"	第9群第1類	"
16	"	棒状施文具 縄文原体(R L)	口唇直下に瘤状貼付文が貼付され、それより帶縄文が施文されている。	"	"	"	"
17	"	棒状施文具	口縁部文様帶には4条の沈線文が、胴部文様帶には羽状沈線文が、それぞれ施文されている。	長石・石英粒・雲母を若干含有	暗褐色	第9群第6類	"
18	"	"	口縁部文様帶に巴状入組文が施文されている。	長石・石英粒を含有	茶褐色	第10群	"
19	"	"	"	"	"	"	"
20	"	"	"	"	"	"	"
21	"	"	"	"	"	"	"
22	"	"	"	"	"	"	"
23	"	"	"	"	"	"	"
24	"	"	口縁部文様帶に巴状入組文が、胴部文様帶に羽状沈線文が、それぞれ施文されている。	"	"	"	"
25	"	"	口縁部文様帶に巴状入組文が施文され、その間隙に刺突文が充填されている。	"	暗褐色	"	"
26	"	"	口唇直下に有刻突帶が施文され、口縁部文様帶は上(I a文様帶)と下(I文様帶)に2分されている。I a文様帶には対弧状沈線文と、それより発する沈線文が、I文様帶には入組文が、それぞれ施文されている。	"	"	"	"
27	"	"	波状口縁の波頂部直下に有刻の貼付文が貼付され、それを起点として弧状沈線文が施文されて	"	"	"	"



第23図 第12号址出土土器拓影図(2)

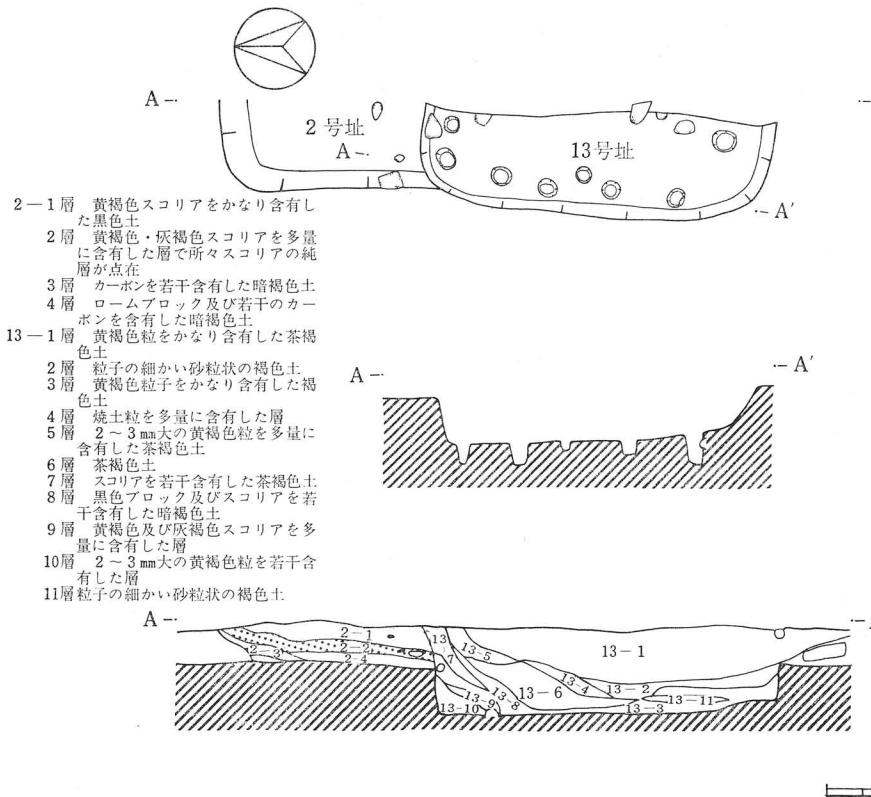


第24図 第12号址出土石器実測図

No.	部位	施文具	文様	胎土	色調	時期	出土地点
28	口縁部	半截竹管	いる。 口唇直下に口縁に沿って沈線文が施文されている。波状口縁の波頂部の直下には瘤状貼付文が貼付されている。	長石・石英粒を若干含有	暗褐色	第10群	覆土
29	胴部	棒状施文具	羽状沈線文が施文されている。	"	"	"	"
30	"	"	"	"	"	"	"
31	"	ヘラ状施文具	"	"	"	"	"
32	"	棒状施文具	"	"	"	"	"
33	"	"	"	"	"	"	"
34	"	"	三叉文が施文されている。	石英粒・雲母を若干含有	茶褐色	"	"
35	口縁部	棒状施文具 縄文原体(R L)	縄文を地文として、横線及び入組状沈線文が施文され、その間は、縄文を磨消している。	"	暗褐色	"	"
36	"	"	口縁部には羊齒状文が、胴部には縄文が、それぞれ施文されている。	長石・石英粒を若干含有	灰褐色	"	"

### (3) 第2号址(第25図)

本住居址は、八地区D～E-23～26区に位置し、東側の大半は調査対象地区外のため、また、南側は第13号址に切られているため、その全貌は明らかでないが、方形プランを呈するものと思われる。壁は、緩やかに立ち上がり、壁高は、約40cmを計る。現存している床面は、平坦である



第25図 第2・13号址平面図

が軟弱である。覆土中にスコリアが層を成して検出された。(片山雅文)

### 出土遺物

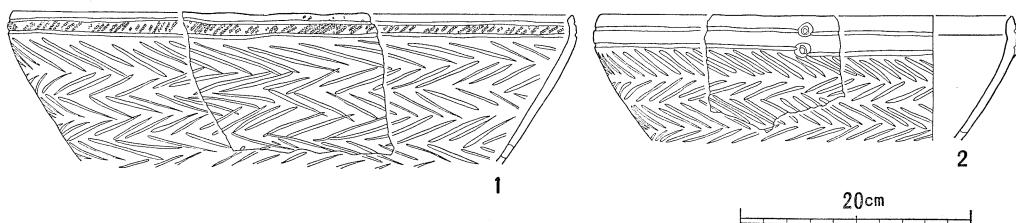
#### ① 土器(第26・27図)

主に覆土中より出土し、中谷第8群土器を主体とする。

1は覆土第1層中より出土したもので、口縁が平縁の浅鉢形土器と思われる。文様は口唇直下に横位に縄文(L R)を施文し、その後に2本横線を巡らしている。胴部は羽状沈線文が施文されている。

2は覆土第2層中(スコリア層)より出土したもので、口縁部が平縁の浅鉢形と思われる。文様は口唇直下に2本の横線が巡らされ、横線上にボタン状貼付文が上下2個貼付されている。胴部は羽状沈線文が施文されている。

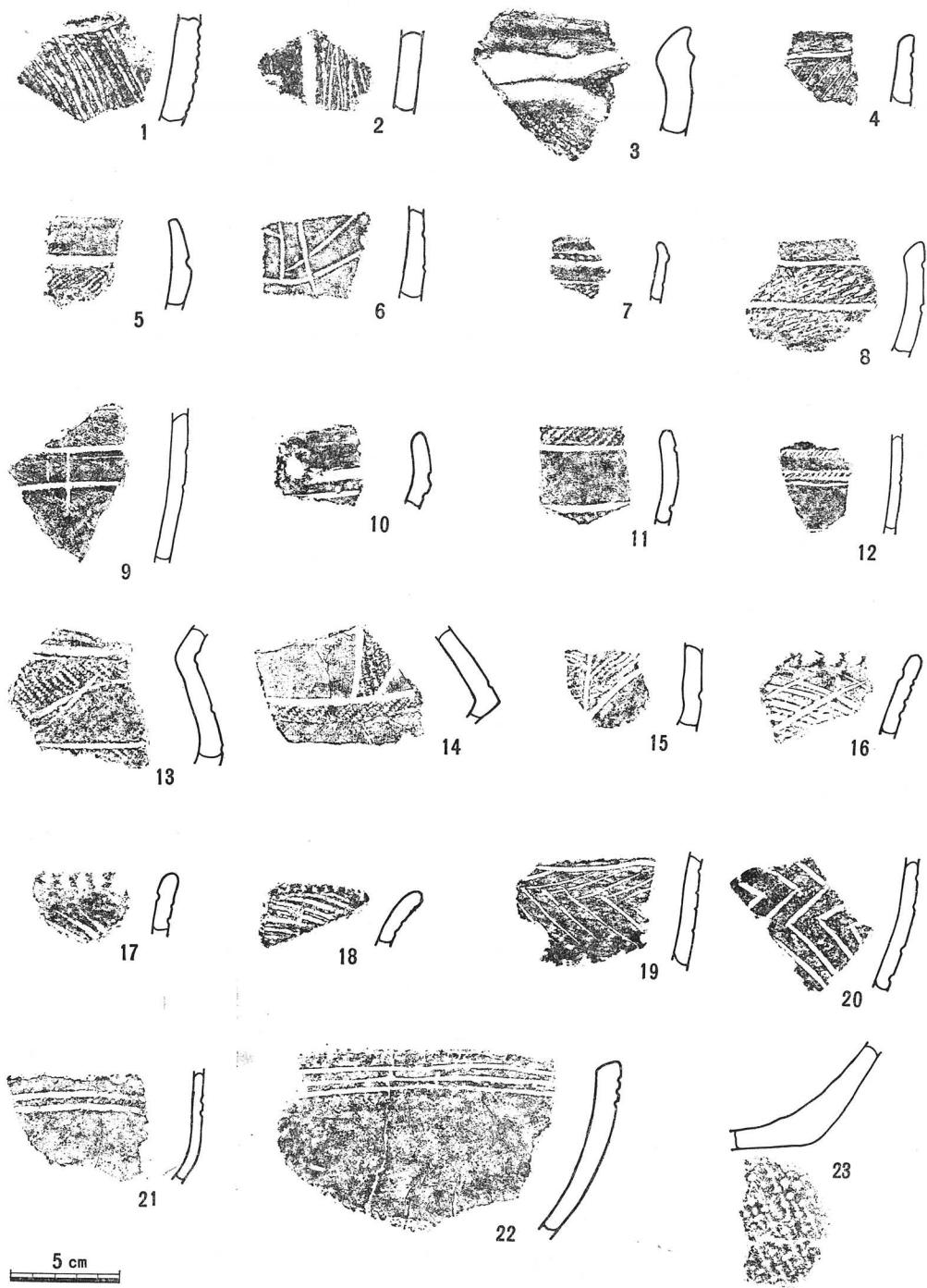
第27図は第2号址出土土器の主なものの拓影図である。中谷遺跡第8群土器を主体として、第5群～第8群まで認められる。概要は第5表参照。



第26図 第2号址出土土器実測図

第5表 第2号址出土土器一覧表

No.	部位	施文具	文様	胎土	色調	時期	出土地点
1	胴部	半截竹管 棒状施文具	半截竹管による条線を地文として、棒状施文具による沈線文が施文されている。	石英粒・長石 を含有	茶褐色	第5群	覆土
2	"	"	半截竹管による条線を地文として、棒状施文具による沈線文が垂下している。	"	"	"	"
3	口縁部	縄文原体(L R)	隆線によって、横位の区画文が施文され、その間隙に縄文が充填されている。	"	黄褐色	"	"
4	"	棒状施文具 半截竹管	口唇部直下に1本の沈線文が巡らされ、その直下より綾杉状の条線文が施文されている。	"	"	"	"
5	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	口唇部直下に無文帯を置いて、1本の沈線文が巡らされ、その直下より縄文が施文されている。	石英粒・雲母 含有	"	"	"
6	胴部	棒状施文具	太い沈線文が施文されている。	石英粒・長石 を含有	第7群	"	"
7	口縁部	棒状施文具 縄文原体(L R)	口唇直下に有刻隆線が1本巡らされ、口縁部文様帶には、帶縄文が施文されている。	よく精選されたものである	茶褐色	"	"
8	"	棒状施文具 撚糸文	撚糸文を地文として2本の横線文が施文されている。	石英粒・長石 を含有	第8群	"	"



第27図 第2号址出土土器拓影図

No.	部位	施文具	文様	胎土	色調	時期	出土地点
9	"	棒状施文具	2本の横線文と「縦単対弧文」が施文されている。	"	暗褐色	"	"
10	"	"	口唇部直下に「お玉杓子文」が施文されている。	"	"	"	"
11	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	口縁端部と、口縁、胴部の境に幅の狭い縄文帯が施文されている。	"	黒褐色	"	"
12	胴部	棒状施文具	連続横S字状文が施文されている。	よく精選されて緻密なものである。	"	"	"
13	口縁部	棒状施文具 縄文原体(R L)	2本の横線と、その間に弧線文が施文されている。弧線文間に磨消縄文が施文されている。	長石・石英粒を若干含有	"	"	"
14	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	磨消縄文が施文されている。	"	"	"	"
15	"	"	弧状沈線文、磨消縄文が施文されている。	"	"	"	"
16	"	棒状施文具	斜交沈線が施文されている。口唇部には刻みが入れられている。	"	暗褐色	"	"
17	"	"	"	"	"	"	"
18	"	"	斜線文が施文されている。	"	"	"	"
19	胴部	△状施文具 棒状施文具	羽状沈線文が施文されている。	"	"	第9群	"
20	"	"	"	"	"	"	"
21	"	"	2本の横線文が施文されている。	"	"	第8群	"
22	口縁部	棒状施文具	3本の横線文が施文されている。	長石・石英粒を若干含有	暗褐色	第8群	覆土
23	底部		網代底	"	黒褐色	"	"

## ② 石器(第28図)

第28図は第2号址出土石器の主なものの実測図である。

1～3は薄手の剥片を素材とした石器で、1・3は正面左下に第2次加工が施され刃部が作出されている。2は下端に刃部が作出されている。1・2は完形品であるが、3は刃部のみの破損品である。石質は1～3共に、緑色凝灰岩である。4・5は、玄武岩製の磨石である。

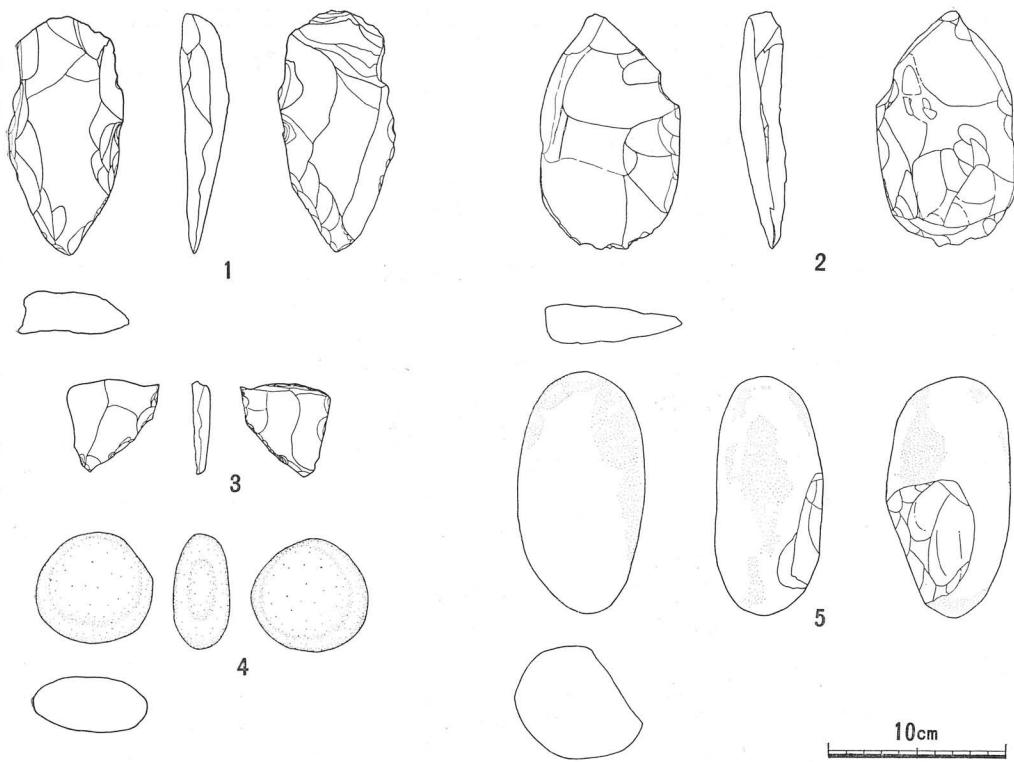
## (4) 第13号址(第25図)

本住居址は、ハ地区D～E-26～36区に位置し、東側の大半は調査対象地区外のため、その全貌は明らかではないが、一辺約3.9m程の隅丸方形プランを呈するものと思われる。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約98cmを計る。床面は平坦であるが軟弱である。柱穴は壁に沿って8本検出された。(大崎裕美・平佐枝子・日向容子)

出土遺物

## 土器(第29図)

全体的に出土量は少なく、主に壁際に集中的にみられた。覆土中からは、中谷第9群を主体として、中谷第3群～第10群まで認められた。第6表参照。



第28図 第2号址出土石器実測図

第6表 第13号址出土土器一覧表

No.	部位	施文具	文様	胎土	色調	時期	出土地点
1	胴部	半截竹管	半截竹管による横位押引文	雲母を多量に含有	暗褐色	第3群	覆土
2	"	棒状施文具 縄文原体(R L R)	縄文を地文として、沈線文が施文されている。	雲母を多量に含有	暗褐色	"	"
3	口縁部	ペン先状施文具	ペン先状施文具によって、連続刺突文が施文されている。	石英粒・雲母を若干含有	茶褐色	第4群	"
4	"	棒状施文具	太い沈線文が施文	長石・石英粒を含有	黄褐色	第7群	"
5	"	"	口唇直下に1条の横線文が施文、又、内面にも1本の横線文が巡らされている。	"	暗褐色	第8群	"
6	"	"	口縁部に小突起を有し、それより横位に弧線文が施文されている。	"	"	"	"

No.	部位	施文具	文様	胎土	色調	時期	出土地点
7	口縁部	棒状施文具 縄文原体(L R)	口縁部に波状口縁に沿って帶縄文が施文され、その直下に、2本の沈線文が巡らされている。	長石・石英粒を含有	暗褐色	第8群	覆土
8	"	棒状施文具	口縁部に縦長有刻の突帯が貼付され、それより横位に対弧状の沈線文が施文されている。	"	"	第9群	"
9	"	"	口縁部には2本の太い沈線文が巡らされ、胴部には羽状沈線文が施文されている。	"	"	"	"
10	"	縄文原体(L R)	口縁に帶縄文が施文されている。	"	黒褐色	"	"
11	"	半截竹管	半截竹管による横線文が施文されている。器面はていねいに研磨が施され、また、赤色塗彩が施こされている。	よく精選された緻密なものである。	"	"	"
12	"	棒状施文具	口縁部に弧線文が施文されている。	石英粒・長石を含有	黄褐色	第10群	"
13	"	"	口縁部に巴状入組文が施文されている。	"	"	"	"
14	胴部	ヘラ状施文具	斜行沈線文が施文	"	暗褐色	第8群	"
15	"	棒状施文具	羽状沈線文が施文	"	"	第9群	"
16	"	"	"	"	"	"	"
17	"	"	斜行沈線文が施文	"	"	第8群	"
18	"	"	"	"	"	"	"
19	"	"	"	"	黄褐色	"	"
20	底部	網代底		"	黒褐色	"	"
21	"		"	"	"	"	"

### (5) 第10号址(第31図)

本住居址は、ハ地区Z～A—24～27区に位置し、西側の大半は調査対象地区外のため、その全貌は明らかでないが、直径約4.6mの円形プランを呈するものと思われる。壁はだらだらとした立ち上がりで、壁高は約60cmを計る。床面は平坦であるが軟弱である。柱穴は壁に沿って6本検出された。覆土は3層に分けられ、第1層は2～3mm大の黄褐色粒を若干含有し、粘性を有する暗褐色土である。第2層は2～3mm大の黄褐色粒及びスコリアを含有する暗茶褐色土である。第3層はロームブロック、山砂利のブロック混在の茶褐色土である。(海老名康江)

#### 出土遺物

遺物の出土数は少なく、小片が多い。

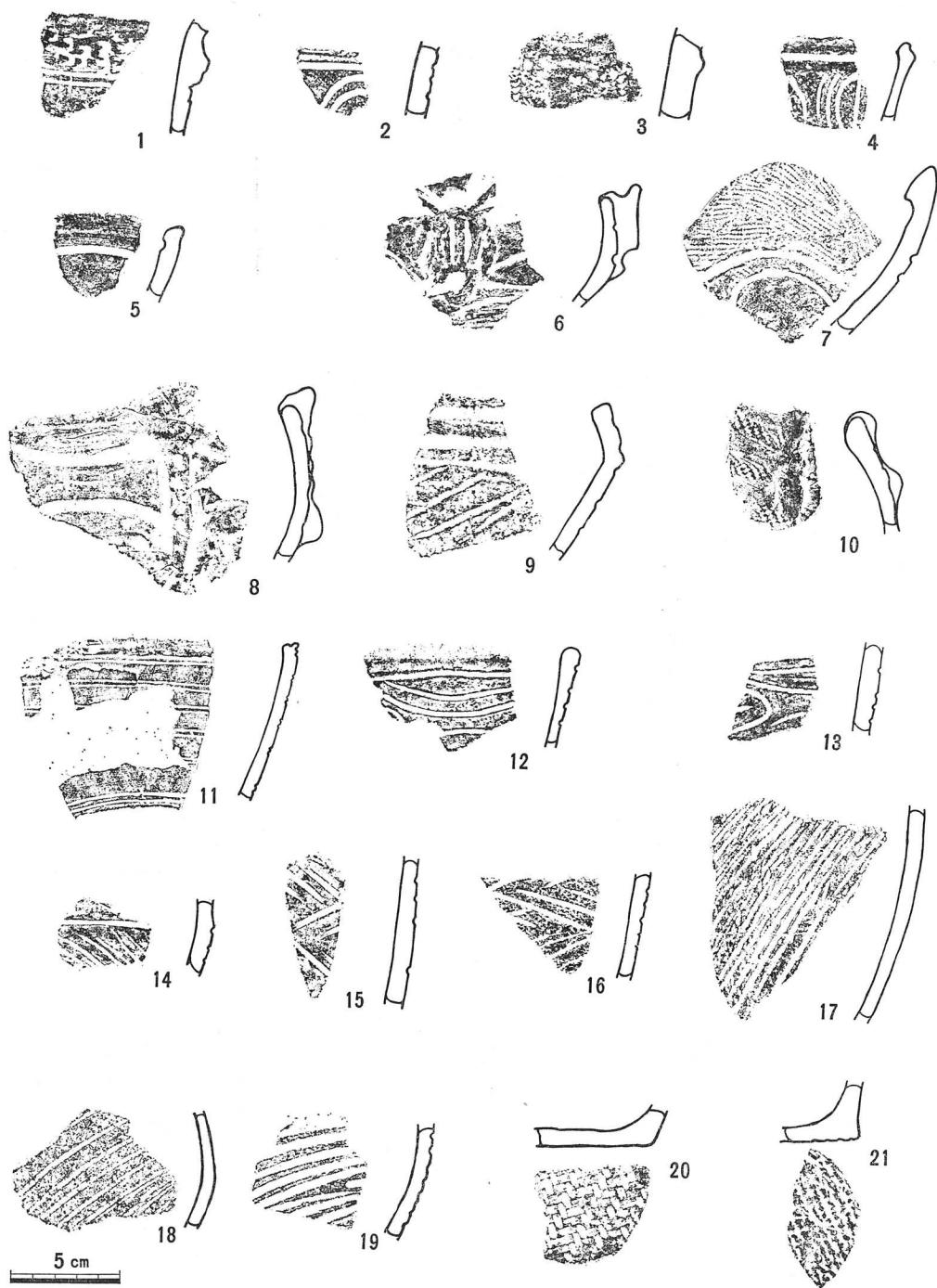
##### ① 土器(第32図)

中谷第8群～第11群までの土器が出土したが、いずれも小破片であった。第7表参照。

##### ② 石器(第30図)

1は、緑色凝灰岩製の石棒で、先端部欠損している。床面から出土した。

2は、黒耀石製の石鎌である。覆土中から出土した。



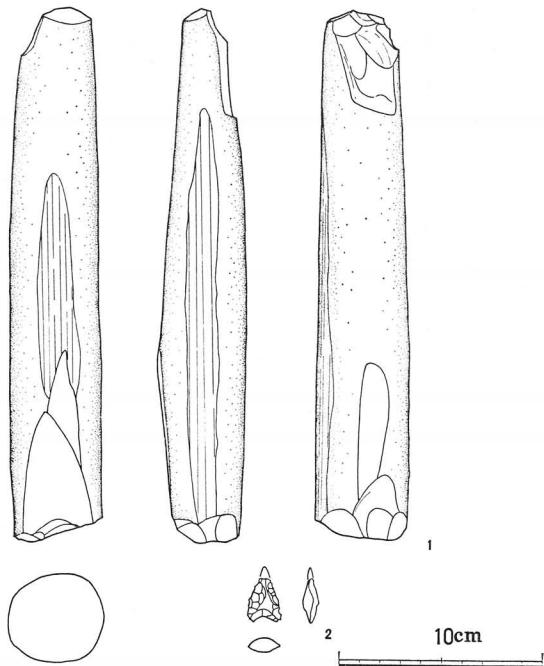
第29図 第13号址出土土器拓影図

(6) 第11号址 (第31図)

本住居址は、ハ地区 Z～A-29～31区に位置し、西側の大半は調査地区外のため、また北側は第14号址、東側は第1号址に、それぞれ切られているため、その全貌は明らかではないが、方形に近いプランを呈するものと思われる。壁は比較的ゆるやかに立ち上がり、壁高は約15cmを計る。床面は軟弱なものである。覆土は若干カーボン、焼土を含有した暗褐色土である。（富元久美子）

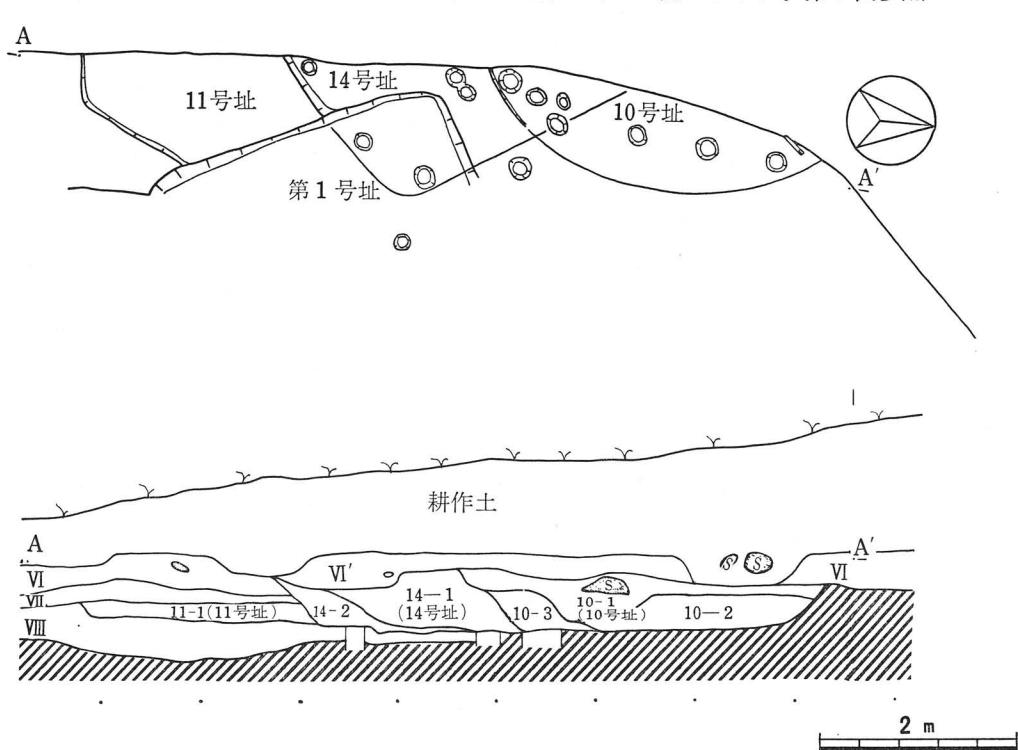
出土遺物

出土遺物は、床面からはほとんど認められず、覆土中より若干の出土をみた。



土 器 (第32図)

中谷第8群を主体として、中谷第3群～第8群まで認められた。第7表参照



第31図 第10・11・14号址平面図

(7) 第14号址 (第31図)

本住居址は、ハ地区Z～A—26～29区に位置し、西側大半は調査対象地区外のため、また、東側は第1号址に、北側は第10号址に、それぞれ切られているため、その全貌は明らかではないが、方形に近いプランを呈するものと思われる。壁はだらだらとした立ち上がりで、壁高は約50cmを計る。床面は軟弱である。柱穴は本住居址に伴うと思われるものが、5本検出された。覆土は2層に分けられ、第1層は黄褐色スコリア、砂礫混じりの暗褐色土層、第2層は焼土、カーボン、2～3mm大の砂礫混じりの粘性を有する暗褐色土層である。(大崎裕美・日向容子・平佐枝子)

出土遺物

出土遺物は、床面からはほとんど認められず、覆土中より若干の出土をみた。

土 器 (第32図)

中谷第8群を主体として、中谷第5群～第10群まで認められる。第7表参照

第7表 第10・11・14号址出土土器一覧表

No.	部位	施文具	文様	胎土	色調	時期	出土地点
1	口縁部	棒状施文具	口唇部に刻み、内面に1本の横線文が、それぞれ施文されている。	石英粒を多量に含有	暗褐色	第 8 群	第10号址 覆土
2	胴部	棒状施文具 縄文原体(R L)	口縁と胴部の境に有刻隆線を巡らし、胴部には縄文が施文されている	石英粒・長石を含有	"	"	"
3	口縁部		口唇直下に縦長の突帯が貼付されている。	"	"	第 9 群	"
4	"	棒状施文具 縄文原体(R L)	2本の横線文間に挟まれた帶縄文と、三叉文が施文されている。	"	茶褐色	第 11 群	"
5	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	2本の沈線に挟まれた帶縄文が施文されている。	"	"	"	"
6	"	"	玉抱き三叉文が施文されている。	"	"	"	"
7	胴部	半截竹管 縄文原体(L R)	胴部にY字状懸垂文が施文されている。	雲母を多量に含有	暗褐色	第 3 群	第11号址 覆土
8	口縁部	ヘラ状施文具	ペン先状の施文具による押引き文が施文されている。	石英粒と、若干の雲母を含有	"	第 4 群	"
9	"	棒状施文具	2本の横線文間に縦位の対弧文が施文されている。	石英粒・長石を含有	黒褐色	第 8 群	"
10	"	棒状施文具 縄文原体(R L)	横線を巡らし、その間に縄文が充填されている。横線の連結部には「区切り対弧文」が施文されている。	"	"	"	"
11	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	口唇直下に有刻隆線が、口縁部には横線が、それぞれ巡らされている。横線内には縄文が施文されている。	"	"	"	"



第32図 第10・11・14号址出土土器拓影図

No.	部位	施文具	文様	胎土	色調	時期	出土地点
12	口縁部	棒状施文具 縄文原体(L R)	口唇直下と、胴部との境に幅の狭い縄文帯が施文されている。	石英粒・長石を含有	黒褐色	第8群	第11号址 覆土
13	"		口縁部に突起が付けられている。突起の直下には1本の沈線が巡らされている。	"	"	"	"
14	胴部	半截竹管 縄文原体(L R)	縄文を地文として、沈線文が施文されている。	"	黄褐色	第5群	第14号址 覆土
15	口縁部	棒状施文具	口唇直下に貼付文が貼付され、それに棒状施文具による円形刺突が加えられている。	"	"	第7群	"
16	胴部	棒状施文具 縄文原体(L R)	幾何学的な沈線文と、磨消縄文が施文されている。	"	暗褐色	"	"
17	口縁部	棒状施文具 縄文原体(R L)	口縁部に有刻隆線と、横線文が巡らされ、横線間には縄文が充填されている。	"	"	"	"
18	胴部	棒状施文具 縄文原体(L R)	横線文と、その直下に縄文が施文されている。	"	"	第8群	"
19	"	"	2本の沈線が曲線的に施文され、その間に縄文が充填されている。	"	黒褐色	"	"
20	口縁部	棒状施文具	口縁部には弧線文を巡らし、口唇部との間に、刺突文が加えられている。胴部には斜行沈線文が施文されている。	"	"	"	"
21	"	"	口縁部に入組文が施文されている。	"	暗褐色	第10群	"
22	胴部	"	羽状沈線文が施文されている。	"	"	"	"
23	"	"	"	"	"	"	"

## 2 土 塚

(1) 第5号址(第33図・第34図)

位 置 イ地区D—3～4区

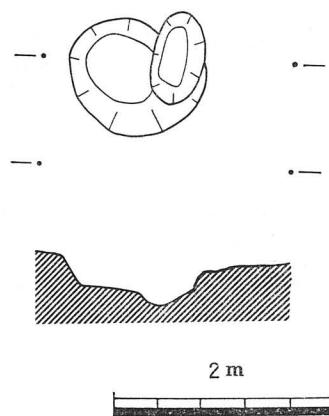
確認面 第VII層

規 模 約60cm×50cm, 深さ確認面より約40cm

形 状 全貌は明らかでないが、橢円形を呈するものと思われる。

覆 土 燃土及び、多量のカーボンを含有する黒色土

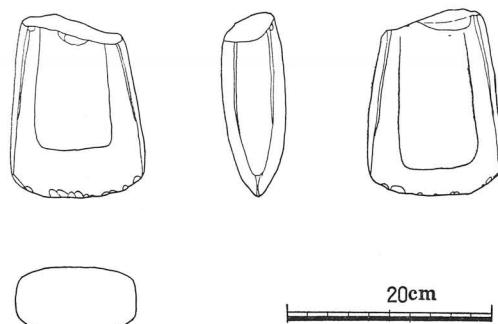
出土遺物 中谷第5群～第8群の土器が数点出土・主体となるものは、第8群であった。石器は定角磨製石斧が1点、覆土中より出土した。(和泉 昭二)



第33図 第5号址遺構図

(2) 第6号址(第35図)

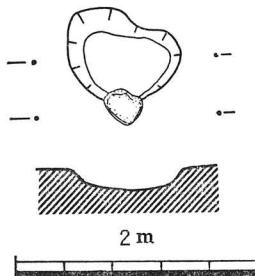
位置 イ地区B～C—5～6区  
 確認面 第VII層  
 形状 楕円形プランを呈し、立ち上がりはゆるく傾斜している。  
 規模 約69cm×96cm、深さ確認面より25cm  
 覆土 覆土上面には18cm×28cm大の礫が東側壁際に於て認められた他、拳大の礫が散在していた。覆土は焼土、カーボンを多量に含有する黒色土である。  
 出土遺物 中谷第6群～第7群の土器片が数点出土した。石器は打製石斧の欠損品と思われるものが1点出土した。(平佐枝子)



第34図 第5号址出土石器実測図

(3) 第3号址(第36～38図・第40図)

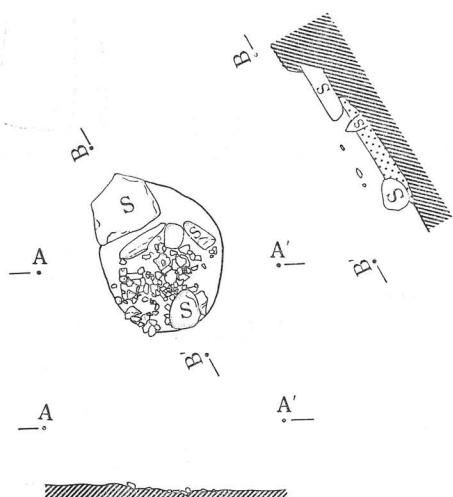
位置 イ地区B～C—O～2区  
 確認面 第VII層  
 形状 東西を主軸とする楕円形を呈する。本址を囲むように大きな河原石が認められた。  
 規模 約140cm×170cm、深さ確認面より70cm、壁は緩やかに立ち上がる。  
 覆土 覆土は6層に分けられる。第1層はカーボンと焼土を含有する黒色土層、第2層は10cm前後の薄い角礫が集中する黒色土層、第3層はかなり粘性の強い灰層、第4層は焼土、カーボンを混在する黒色土層、第5層は焼けたスコリアを多量に混在した焼土層、第6層は焼土を若干含有する黒色土層である。  
 出土遺物 第5層中より中谷第5群の土器片が出土した。  
 その他 本土塙からは、人骨が出土した。これはあまり保存状態がよくなく、どのような状態で埋葬されていたかは、知る由もないが、頭骨は東側に位置し、やや湾曲して、背骨、下肢骨と思われるものが認められた。(工藤信一郎)



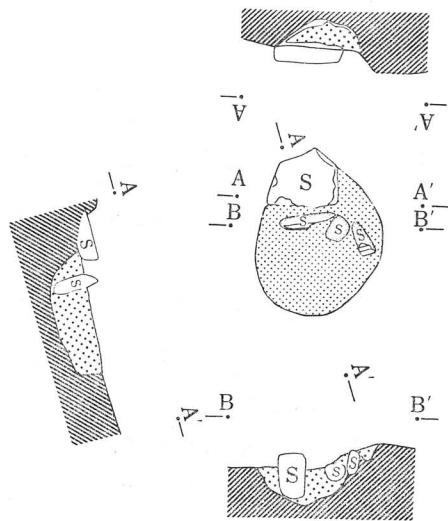
第35図 第6号址遺構図

(4) 第4号址(第39図・第40図)

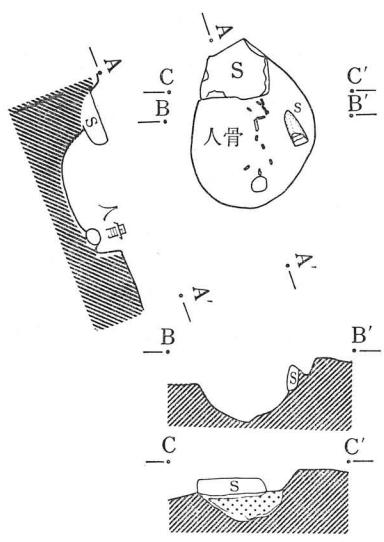
位置 イ地区A～B—2～3区  
 確認面 第VII層  
 形状 西側の大半が調査対象地区外のため、その全貌は明らかでないが、楕円形プランを呈するものと思われる。  
 規模 推定、約110cm×200cmの規模を有する土塙かと思われる。  
 覆土 覆土上面において、焼土・カーボンを伴う20～30cm大の偏平な河原石が集中して認められた。覆土はスコリア・カーボンを含有する暗褐色層である。



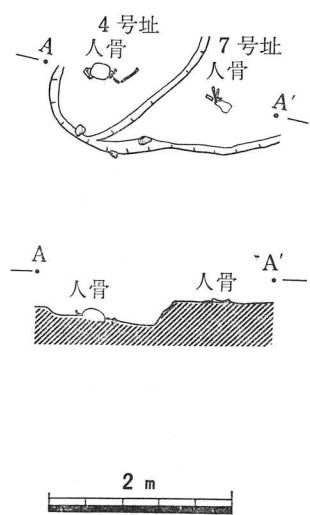
第36図 第3号址遺構図(1)



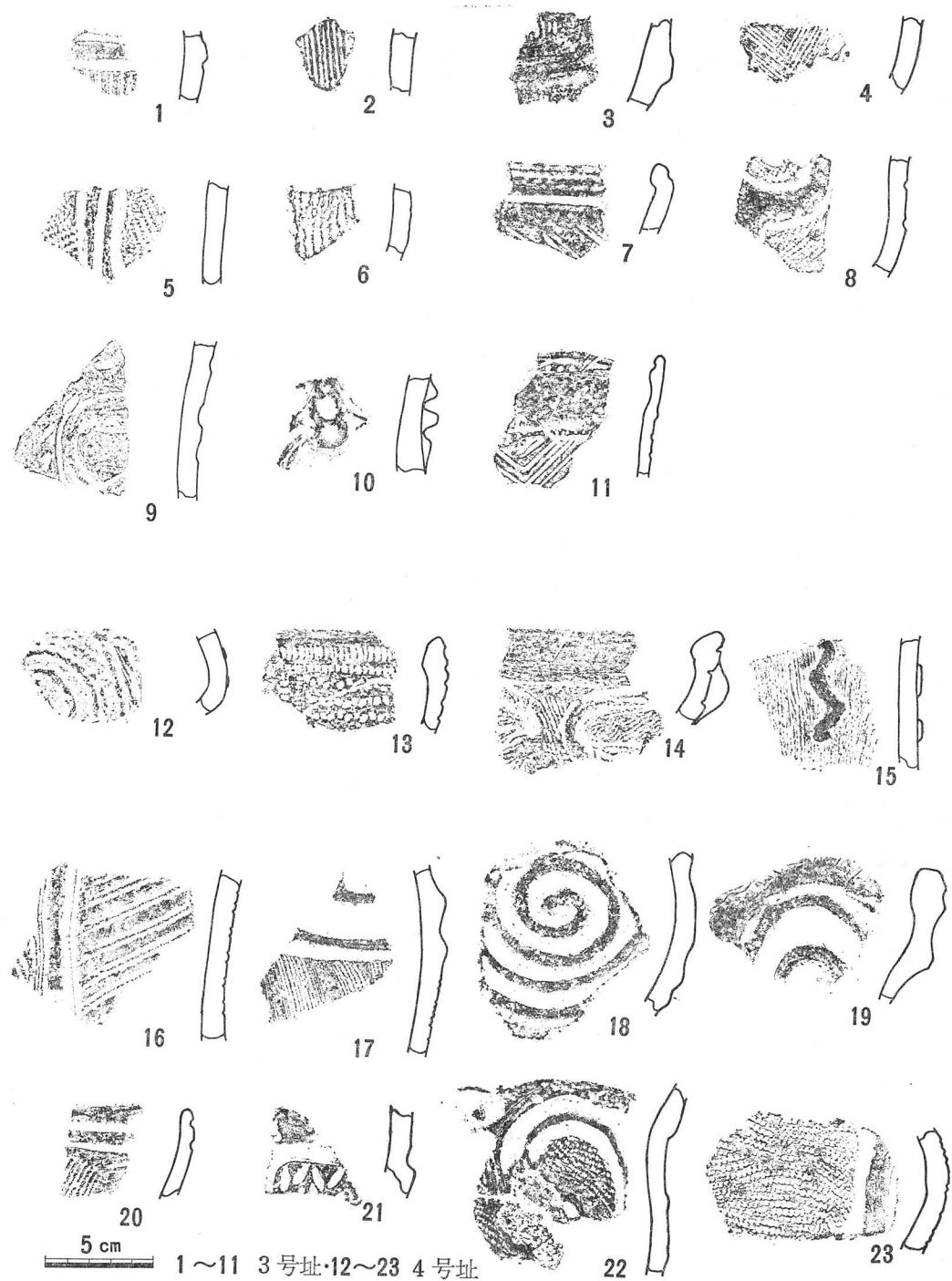
第37図 第3号址遺構図(2)



第38図 第3号址遺構図(3)



第39図 第4・7号址遺構図



第40図 第3・4号址出土土器拓影図

出土遺物 覆土中より中谷第5群（曾利III式）の土器片が多量に出土した。また、頭骨下に曾利III式の大破片が敷かれるようにして検出された。

その他 本土塙からは人骨の出土を見た。人骨は、頭骨を東に位置し、やや北西向きの状態で認められた。頭骨より肩甲骨、上腕骨、肋骨が西に伸びた状態で認められた。（大崎 裕美）

(5) 第7号址（第39図）

位 置 イ地区A～B—1～3区

確認面 第VII層

形 状 西側の大半は調査対象地区外のため、また、南側は第4号址に切られているためその全貌は明らかではないが、橢円形を呈するものと思われる。

規 模 約130cm×240cm

覆 土 覆土上面には、30～50cm大、厚さ4cmの偏平な礫を用いた配石が認められた。覆土はカーボン・スコリアを含有する暗褐色土である。

出土遺物 遺物は少ないが、覆土中より中谷第5群の土器片が16点出土した。

その他 本址から検出された人骨は、頭骨、歯、及び肩甲骨で、頭骨は北東側壁近くに、西側へ向いた状態で検出された。（富元 久美子）

### 3 配 石

今回の調査で検出された配石は、調査対象地区が幅4mと限定されていたために、その全貌をまた、その形状を、充分に把握するには至らなかった。

配石は第VI層まで下げたところから確認され始め、第IX層まで折り重なって認められた。特に第VII層中で著しく配石の集中が認められた。ここでは、各地区毎、各層毎に、配石の状態を述べゆくこととする。

(1) イ地区第VII層中の配石（第41・43～45図）

#### 配石の状態（第41図）

A・B—1・2区において、第VII層に続くと思われる礫の集中が認められるのみで、全体的には散然としたものであった。

#### 土器の出土状態（第43図）

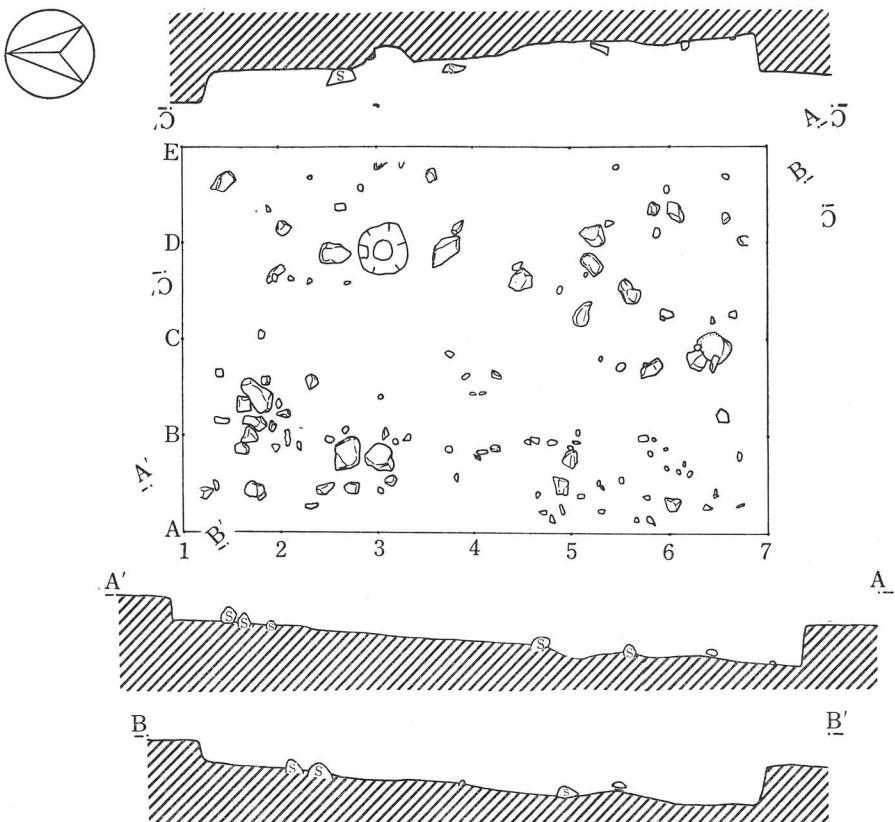
第51図のように、中谷第8群を主体として、中谷第4群～第11群まで認められる。土器の状態は第81図2を除くとほとんどが小破片で、完形品や大破片はあまり認められない。

#### 石器の出土状態（第44図）

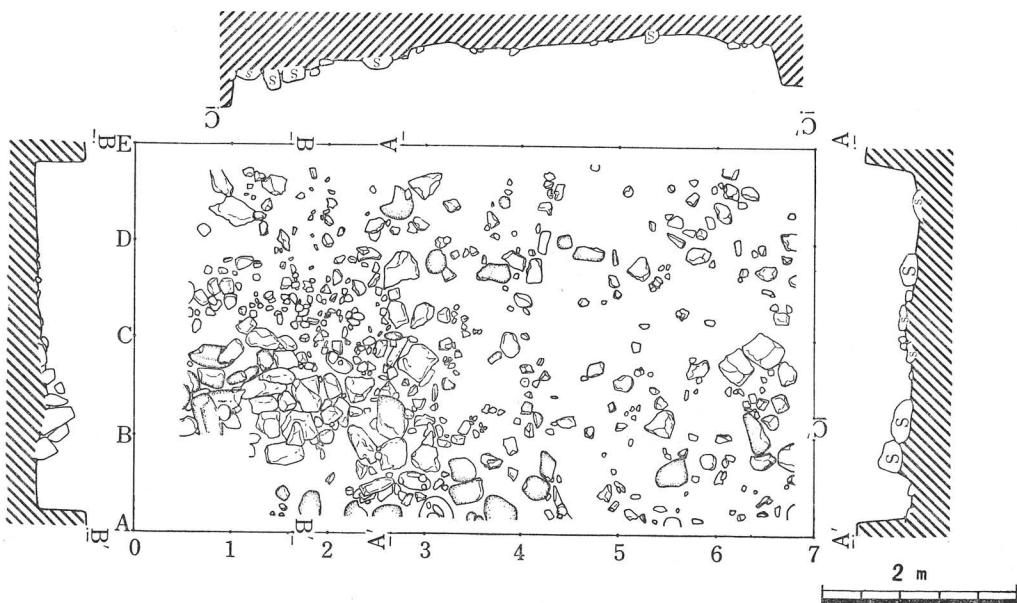
無茎の石鎚11点、石錘2点、軽石1点が、それぞれ出土した。石鎚は完形品7点、欠損品4点であった。

#### 骨片の出土状態（第45図）

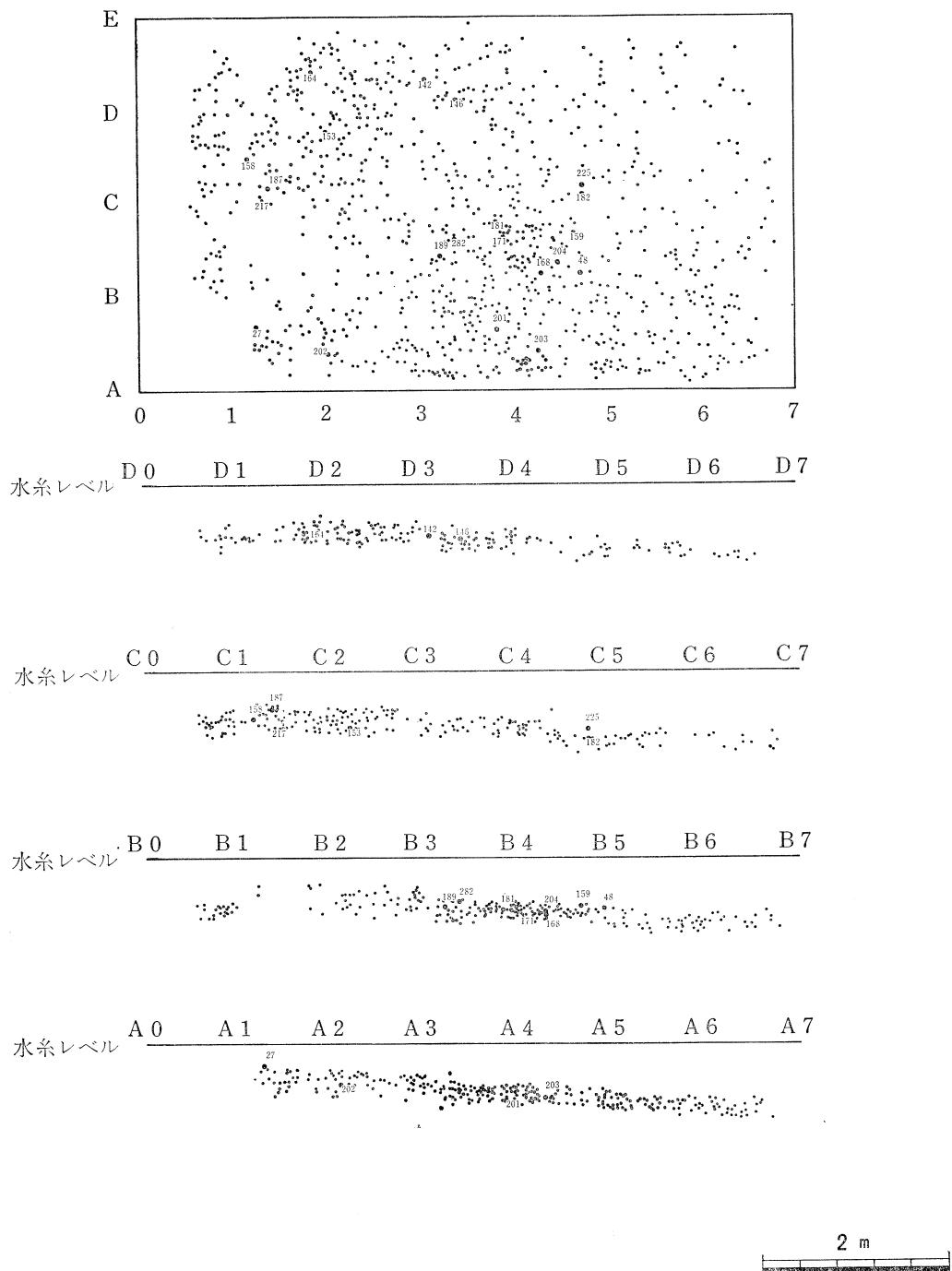
A・B—3・4区を中心に骨片が散在している。骨はほとんどが1cm以下の小片であるために獸骨である以外は、どんな種類のものかは不明である。



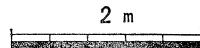
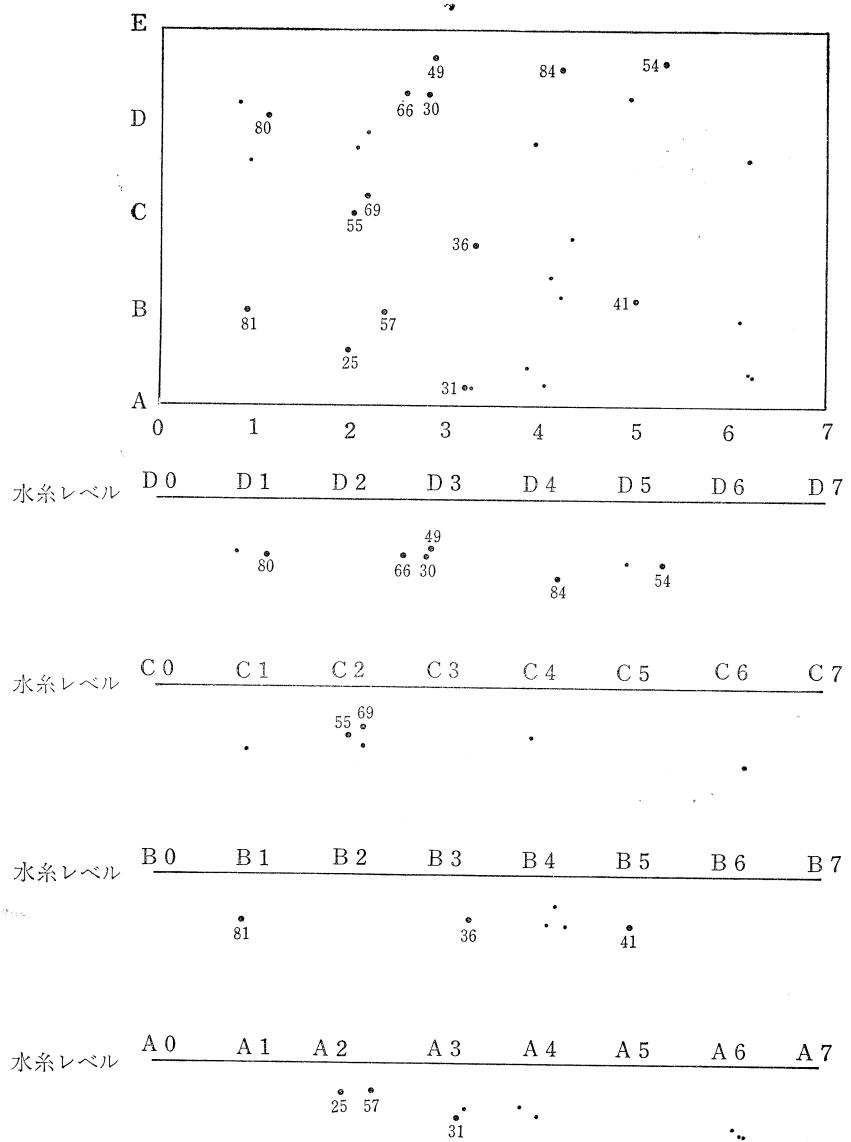
第41図 イ地区 第VI層中配石出土状態図



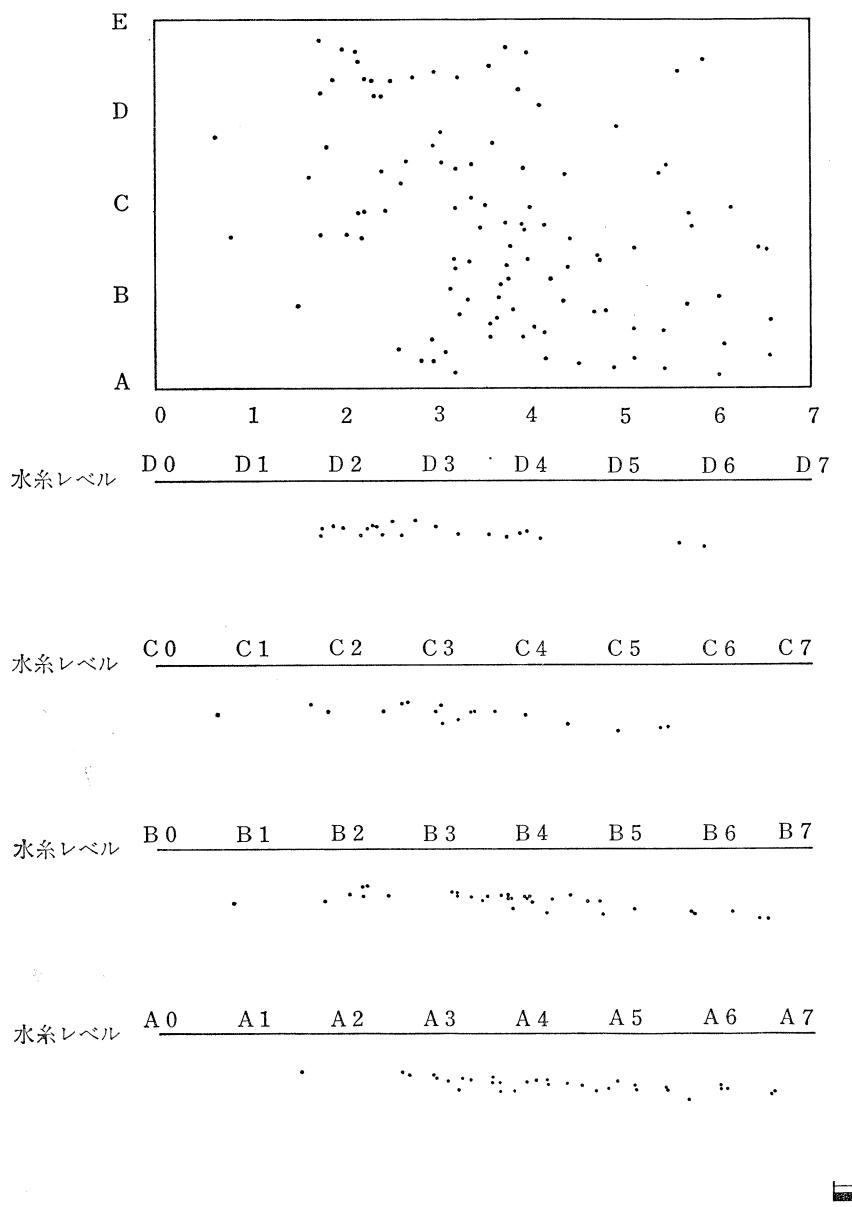
第42図 イ地区 第VII層中配石出土状態図



第43図 イ地区 第VI層土器出土分布図



第44図 イ地区 第VI層石器出土分布図



第45図 イ地区 第VI層骨片出土分布図

第8表 イ地区 第VI層配石出土遺物一覧表

配 石 出 土 遺 物	
土器(第86~89・93~98・103・104, 81・84図)	27・48・59・77・146・149・153・158・164・168・170・171・181・182・187・189・201・202・203・204・215・217・225・280・282・302, 2・6・24
石器(第115・116・117図)	25・30・31・36・41・49・54・55・57・66・69・80・81・84
土製品(第113図)	19

## (2) イ地区第VII層中の配石 (第42・48~50図)

## 配石の状態 (第42図)

A・B-0~2区においては50cm~70cm大の河原石が、C-0~2区においては10cm~15cm大の偏平な礫が、それぞれ集中して認められた。全体としてはA・B-0~2区を中心に礫の散在が認め得るのみで、形状の把握には至らなかった。

## 土器の出土状態 (第48図)

第51図のように、中谷第8群土器の占める割合が高く、第VI層中で認められた中谷第9~11群土器はほとんど影をひそめ、かわって中谷第7群土器の割合がかなり上がっているのが認められる。土器の出土数は第VI層よりかなり増加しているものの、やはり、ほとんどが小破片で、完形品や大形の破片はあまり認められない。

## 石器の出土状態 (第49図)

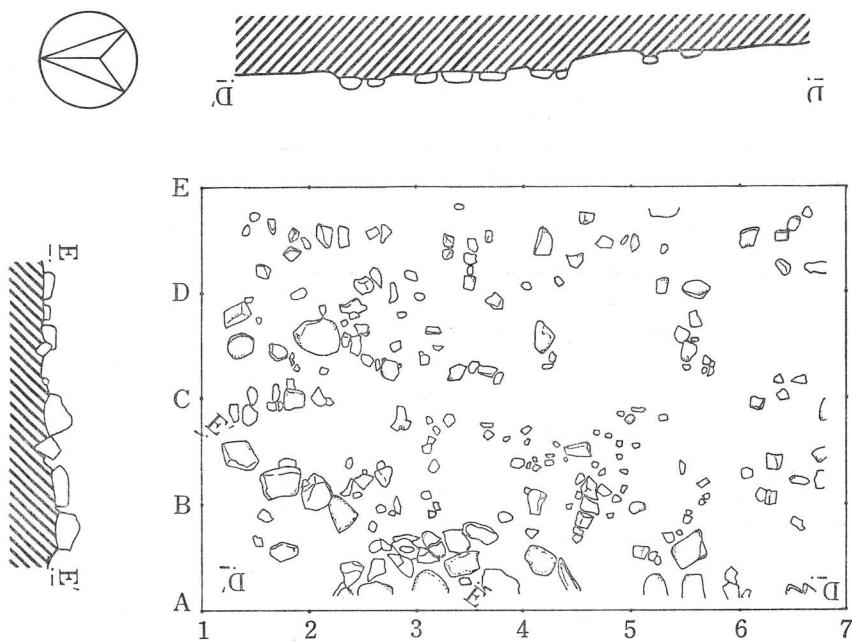
石鎌23点(内完形品6点、欠損品17点)、定角磨製石斧5点(内完形品2点、欠損品3点)、輕石1点、打製石斧3点(内すべて欠損品)、磨石8点が、それぞれ出土した。出土状態は欠損した石器等が、配石に混じって、散然として認められた。

## 骨片の出土状態 (第50図)

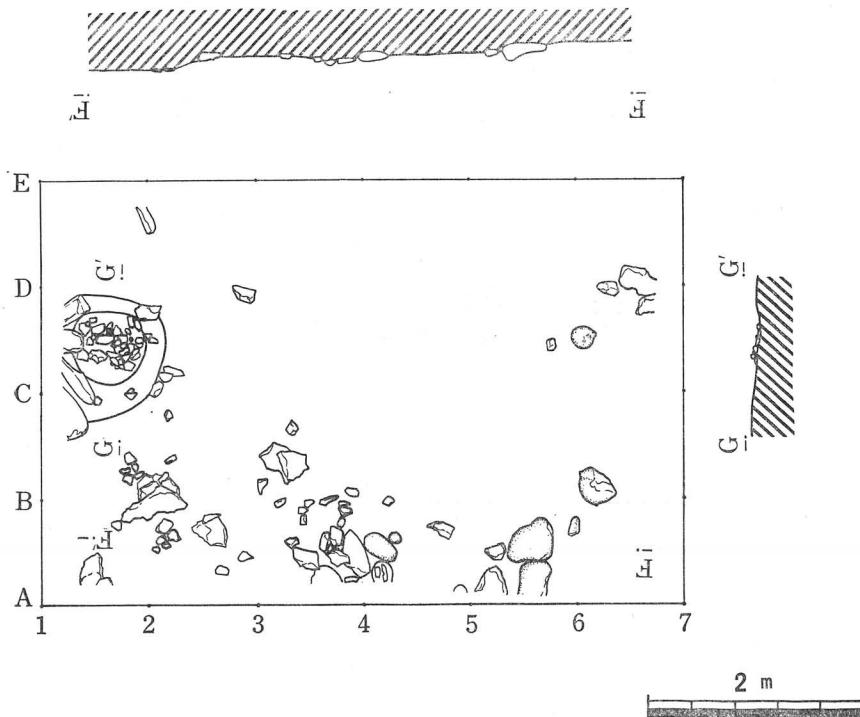
第VII層中に比べて、骨片の出土量の増加が認められる。骨は、第VI層中と同様に、ほとんどが1cm以下の小片であるために、どんな種類のものかは不明である。わずかではあるが、鹿の歯と思われるものが認められた。

第9表 イ地区 第VII層配石出土遺物一覧表

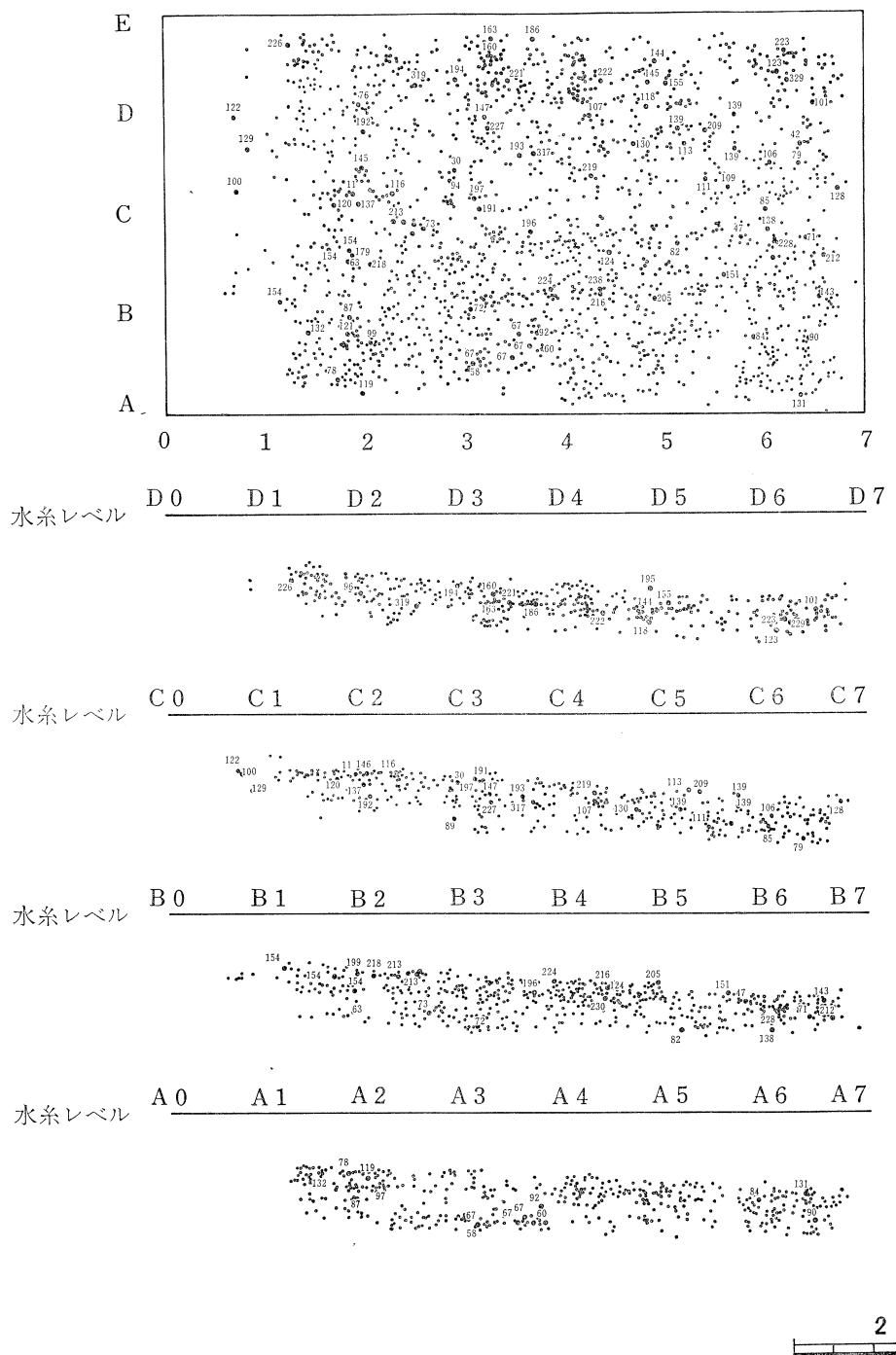
配 石 出 土 遺 物	
土器(第85~87・89~99・105, 81図)	11・30・42・47・71・72・78・82・84・96・97・101・106・107・113・116・118・121・122・124・130・131・144・145・147・151・155・160・163・186・191・193・195・196・197・198・199・205・209・213・216・218・219・221・222・223・226・227・228・229・238・317, 4・7
把手(第109図)	1・2・3・4・13
石器(第114~116図)	5・9・11・12・14・15・16・17・20・21・22・23・24・32・40・61



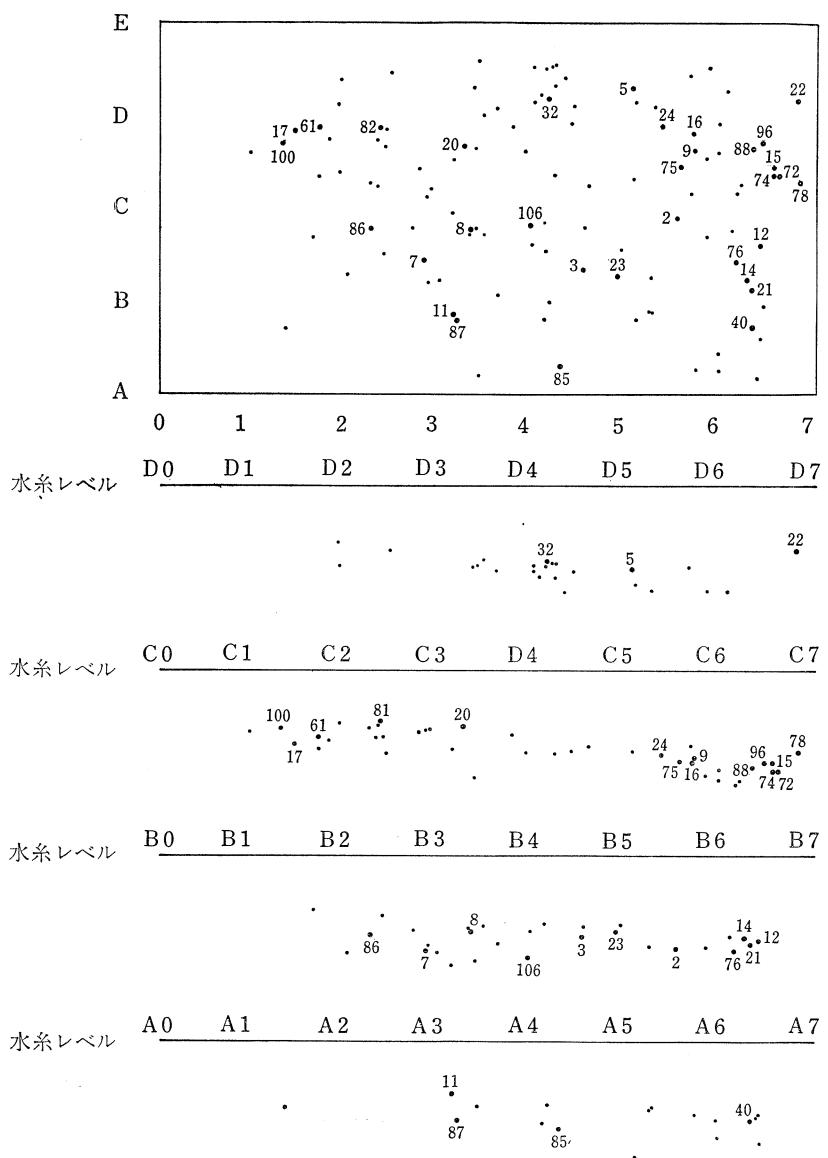
第46図 イ地区 第VIII層中配石出土状態図



第47図 イ地区 第IX層中配石出土状態図

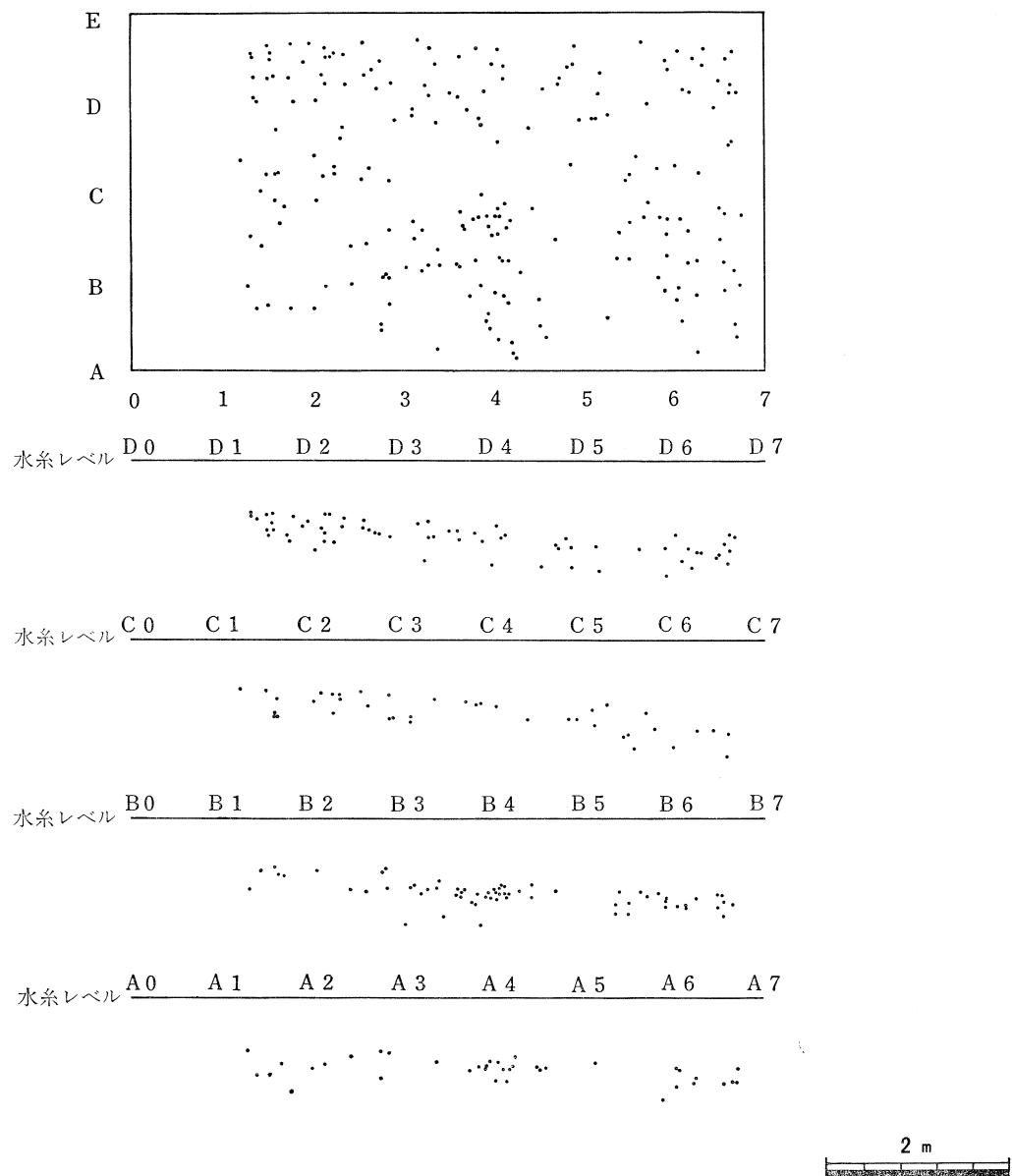


第48図 イ地区 第VII・VIII層土器出土分布図



2 m

第49図 イ地区 第VII・VIII層石器出土分布図



第50図 イ地区 第VII・VIII層骨片出土分布図

(3) イ地区第VII層中の配石（第46・48～50図）

配石の状態（第46図）

第VII層中に比べて、長大な礫は数が減り、10cm～20cm大の礫の散在が認められる。A—2・3区においては依然として、30cm～50cm大の河原石の集中が認められる。

土器の出土状態（第48図）

第51図のように、土器の出土数は第VII層の半分以下になり、中谷第8群土器に変わって、中谷第5～7群土器のように縄文時代中期後葉～同時代後期初頭の土器群が大半を占めるようになった。

石器の出土状態（第49図）

石鎧4点（内すべて欠損品）、磨石1点、スクレイパー1点が、それぞれ出土した。

骨片の出土状態（第50図）

第VII層までかなり認められた骨片は、第VIII層に入ると減少の傾向がうかがわれる。

第10表 イ地区 第VIII層配石出土遺物一覧表

配 石 出 土 遺 物	
土器（第88～94・96 ・98・105図）	58・60・63・67・73・85・87・89・90・92・99・100・109・111・119・120・123 ・128・129・132・137・138・143・154・194・214・224・319
石器（第114・117図）	2・7・8・85
把手（第109図）	

(4) イ地区第IX層中の配石（第47図）

配石の状態（第47図）

本層中の配石は、人骨が検出された第3・4・7号址の、それぞれ覆土上面において認められこれに用した礫は、20cm～40cm大の偏平な山石である。第3号址では40cm～60cm大の河原石が、本号址を囲むかのように配されている。

土器の出土状態

第51図のように、土器の出土数は著しく減少し、中谷第5群土器が大半を占めるようになった。

石器の出土状態

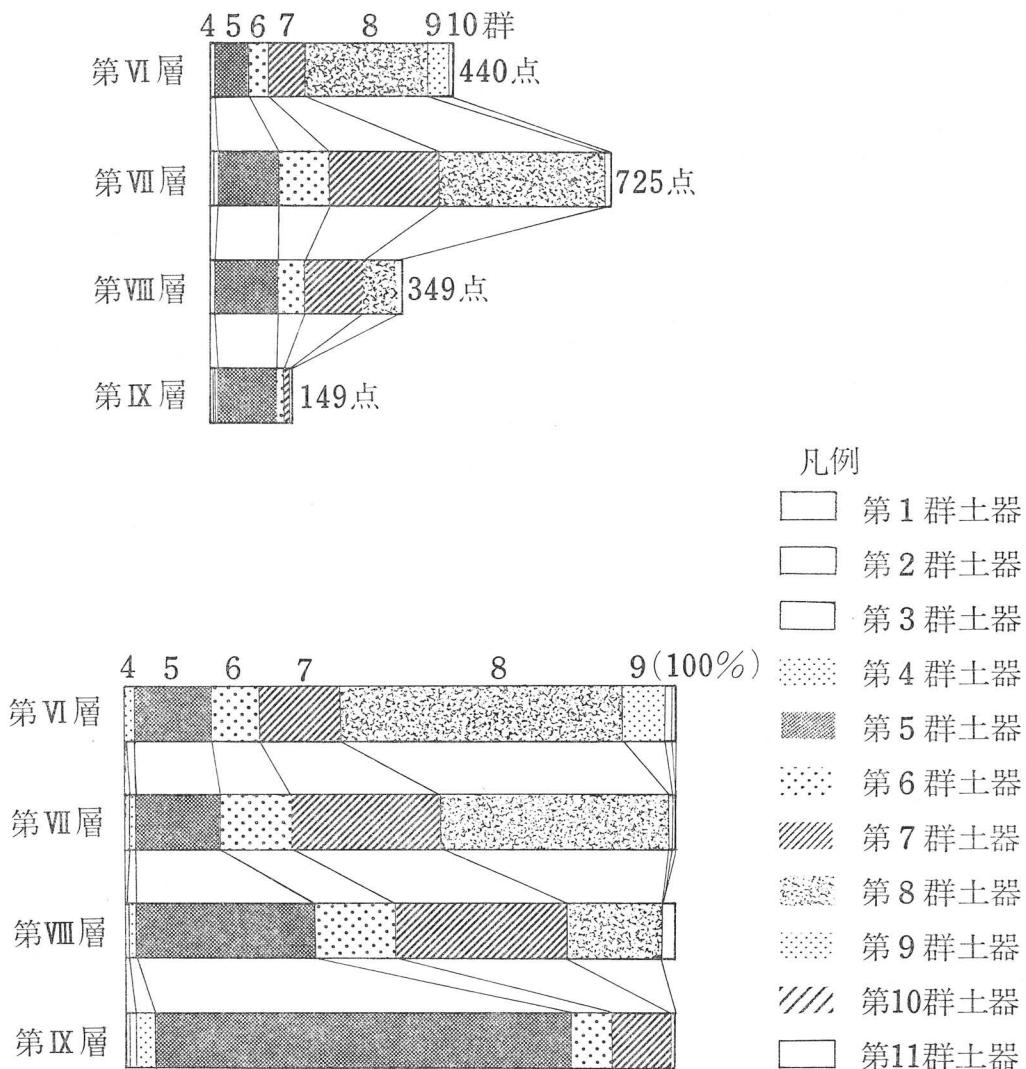
石鎧1点、磨石2点が出土したのみである。

骨片の出土状態

本層中では、骨片はほとんど認められない。

第11表 イ地区 第IX層配石出土遺物一覧表

配 石 出 土 遺 物	
土器（第85～89・91 図）	5・12・26・33・34・40・43・44・49・50・53・56・57・61・62・64・65・75・ 76・80・103・105・108
石器（第114・119図）	3・106



第51図 イ地区 層位別土器出土相関図

第12表 イ地区 層位別土器出土点数表 (カッコ内は%)

層位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計
第VI層	0(0)	0(0)	7(2)	63(14)	37( 8)	66(15)	225(51)	35( 8)	6(1)	1(1)	0(0)	440(100)
第VII層	0(0)	0(0)	5(1)	8( 1)	112(15)	94(13)	200(41)	300( 1)	5(0)	0(0)	1(0)	725(100)
第VIII層	0(0)	0(0)	0(0)	6( 2)	116(33)	50(14)	108(31)	62(18)	7(2)	0(0)	0(0)	349(100)
第IX層	0(0)	0(0)	3(2)	5( 3)	113(76)	11( 7)	16(11)	1( 1)	0(0)	0(0)	0(0)	149(100)
計	0(0)	0(0)	15(1)	82( 5)	378(23)	221(13)	549(33)	398(24)	18(1)	1(0)	1(0)	1,663(100)

### (5) □地区第VI層中の配石（第52・54～56図）

#### 配石の状態（第52図）

本層中では、10cm～40cm大の河原石によって、小さな集石状のものが認められるが、全体的には散然としたものとなっている。

#### 土器の出土状態（第54図）

本層中からは、第54図が示すとおり、かなり濃密に土器片が出土した。その内容は、第61図のように、中谷第3群土器～中谷第11群土器まで認められ、この内、中谷第8群土器～中谷第11群土器の、縄文時代後期中葉～同時代晚期までの土器が過半数を占めている。土器はほとんどが小破片で、完形品や大破片は認められない。

#### 土製品の出土状態

耳栓2点、土製円盤3点が、それぞれ出土した。

#### 石器の出土状態（第55図）

石鏃13点（内、完形品3点、欠損品10点）、スクレイパー1点、打製石斧1点（欠損品）、磨石2点が、それぞれ出土した。

#### 骨片の出土状態（第56図）

配石付近を中心に、1cm以下の骨片が、第56図のように、かなりの点数認められた。

第13表 □地区 第VI層配石出土遺物一覧表

	配 石 出 土 遺 物
土器（第85～87・89 ～105, 81・82 ・84図）	3・6・9・15・23・32・45・51・55・81・83・91・94・102・104・110・114・117 ・133・136・140・141・150・152・156・159・162・165・166・167・175・178・ 185・188・190・200・206・207・208・210・211・220・236・237・247・249・ 252・255・256・259・260・265・266・267・272・274・275・277・278・281・283・ 287・288・290・294・295・296・297・298・299・301・303・304・306・307・ 308・309・311・312・313・314・315・322・323・326, 6・9・12・27
土製品（第112・113 図）	3・10・14・17・21・22
把手（第109図）	10・12・14
石器（第115・116・ 118・119図）	28・31・33・35・37・38・42・44・45・46・52・56・89・95・105

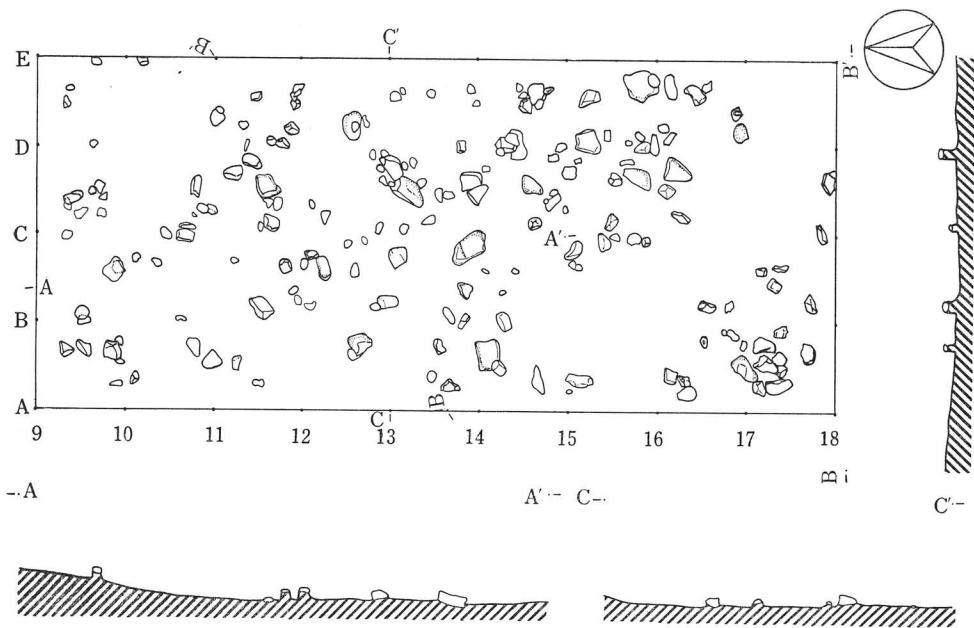
### (6) □地区第VII層中の配石（第53・57～60図）

#### 配石の状態（第53図）

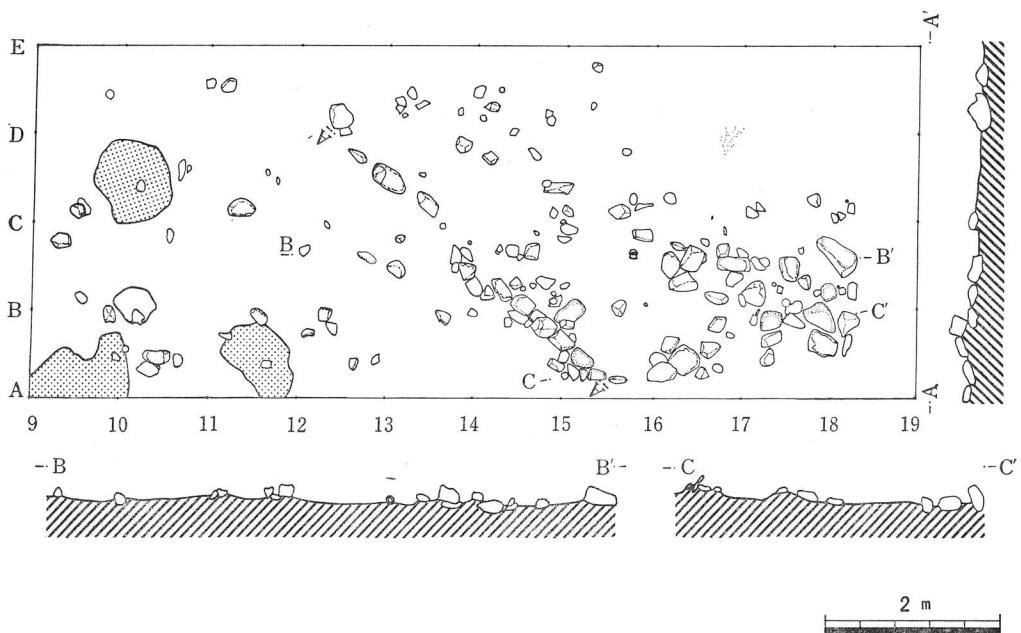
本層中の配石は、第53図のように、直線的な配石列、セクションA—A'、A・B—16・17区に認められる集石状のもの、とによって構成されている。配石列北側では、焼土が3ヶ所で認められた。焼土はいずれもブロック状のもので、約10cm～20cmの厚さを有していた。

#### 土器の出土状態（第58図）

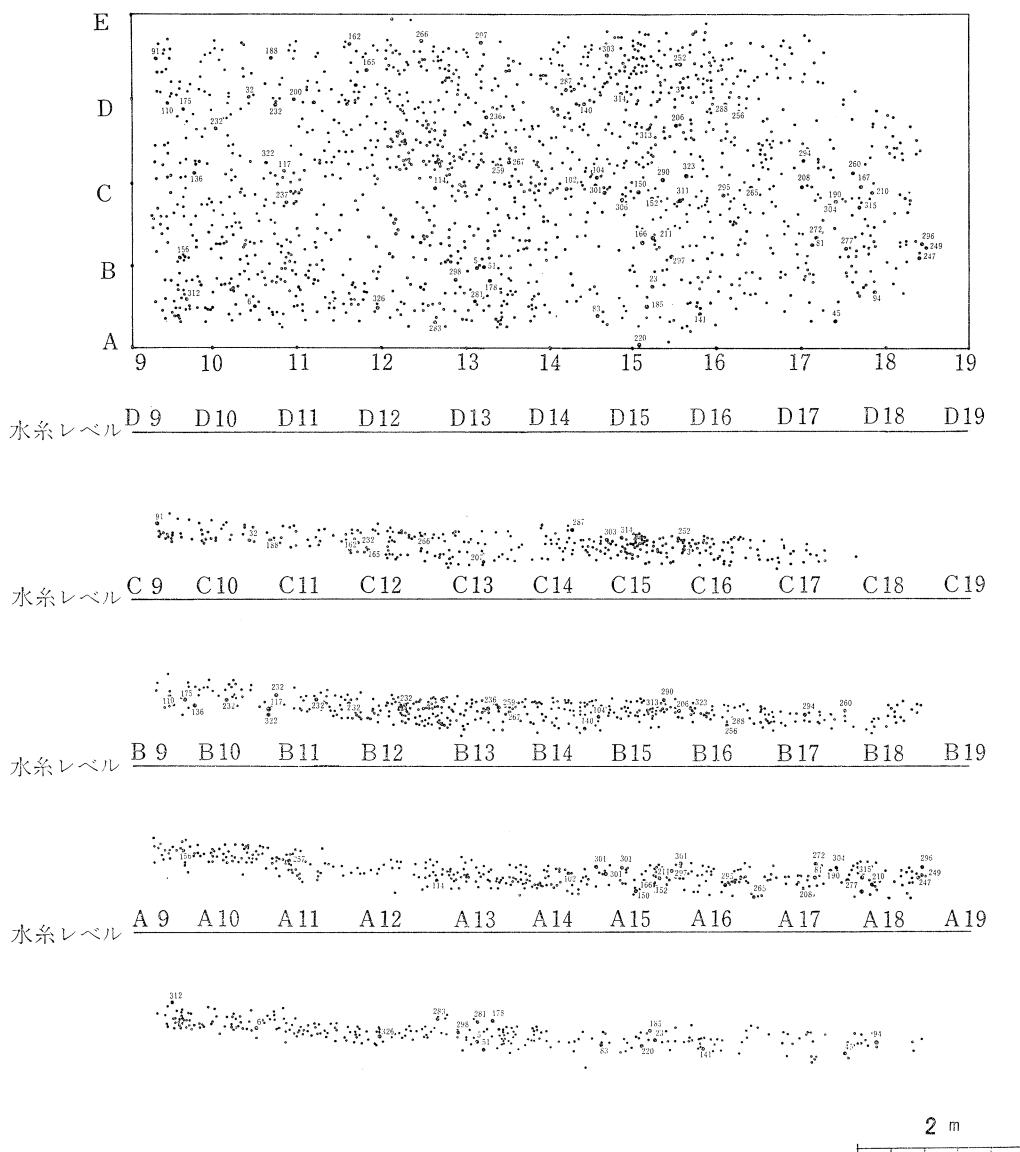
第61図のように、第VII層に入ると、土器の出土量は第VI層の3分の1に減少し、その内容は、中谷第8群土器以降の土器は減少し、変わって、中谷第5～7群土器が増加する。第82図13の土



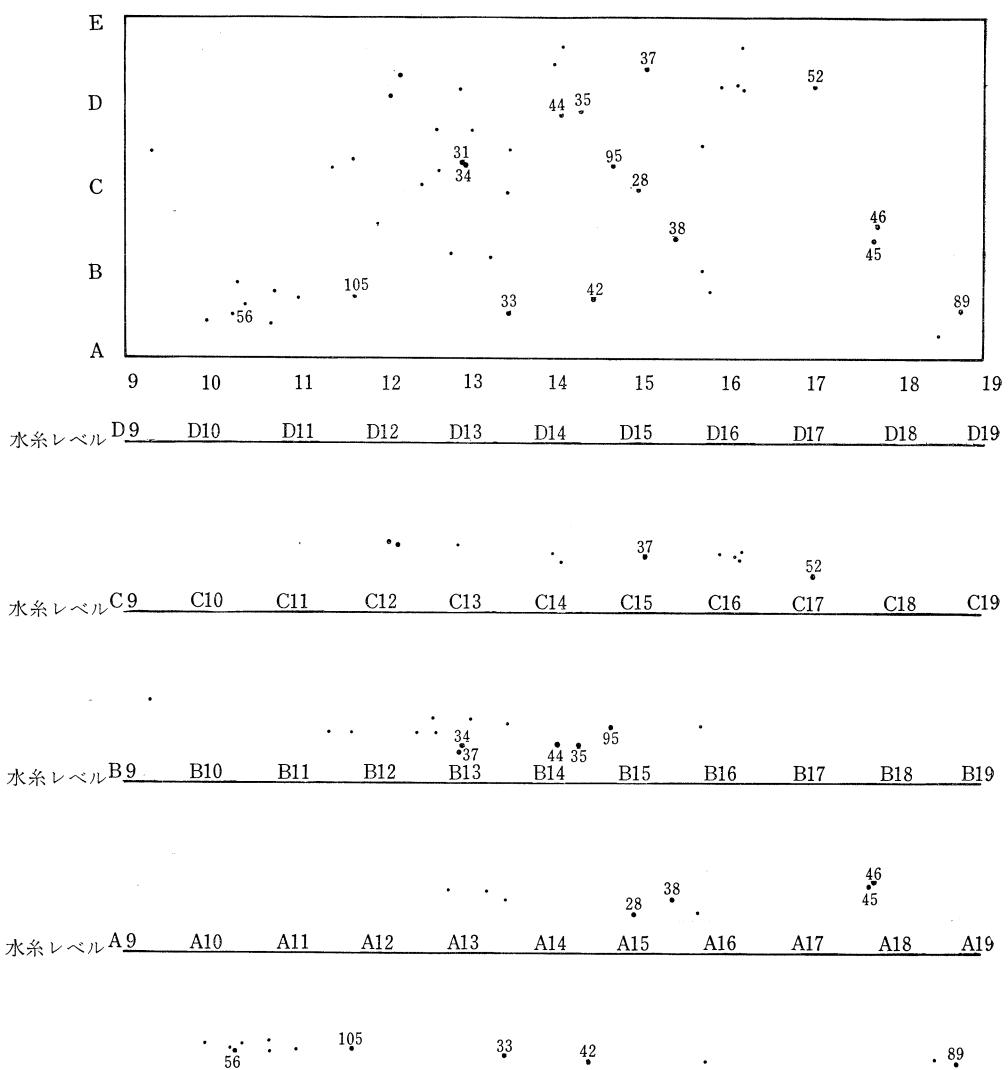
第52図 □地区 第VI層中配石出土状態図



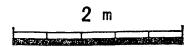
第53図 □地区 第VII層中配石出土状態図

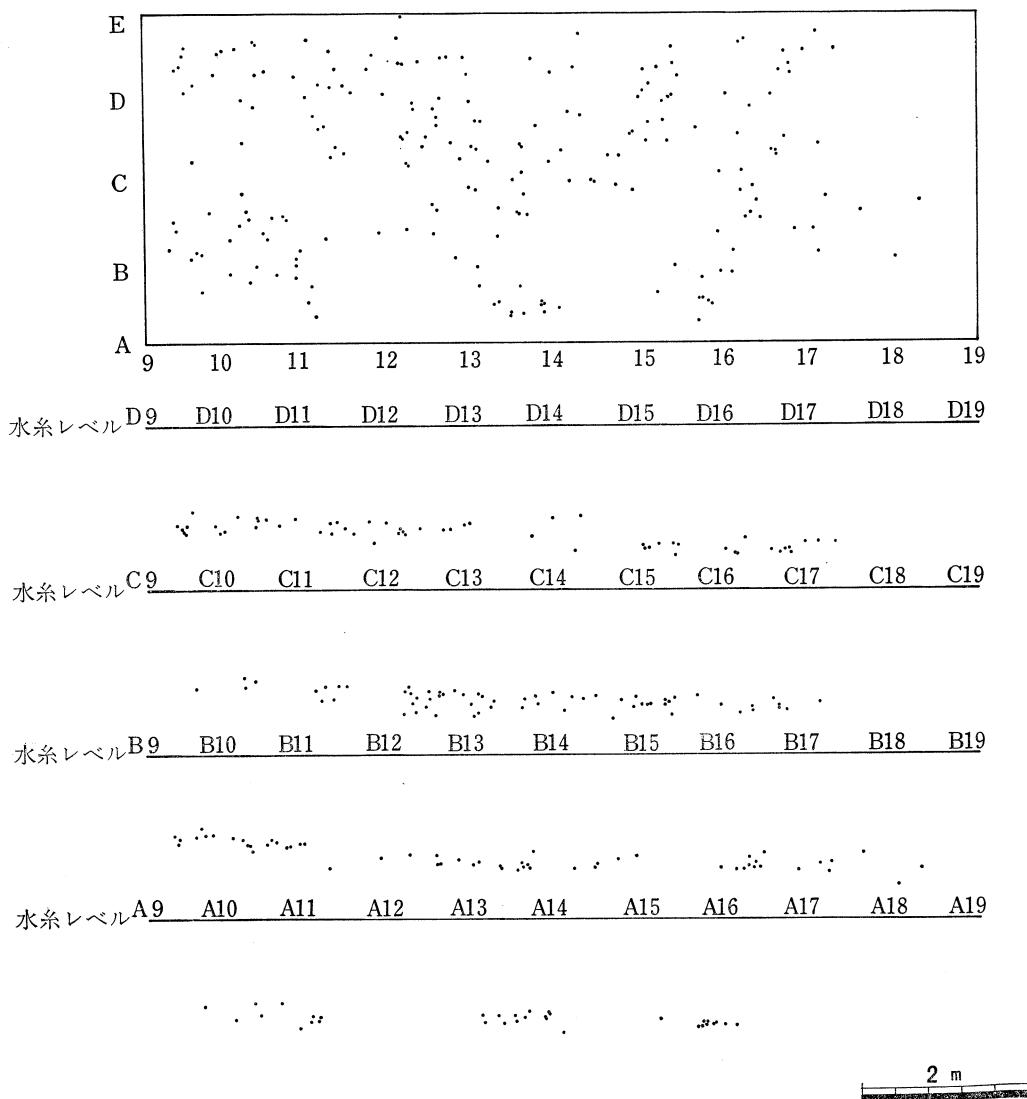


第54図 K地区 第VII層土器出土分布図



第55図 □地区 第VI層石器出土分布図





第56図 □地区 第VI層骨片出土分布図

器が配石内より完形で出土した他は、ほとんどが小破片であった。

土製品の出土状態（第57図）

本層中からは、耳栓が3点出土した。

石器の出土状態（第59図）

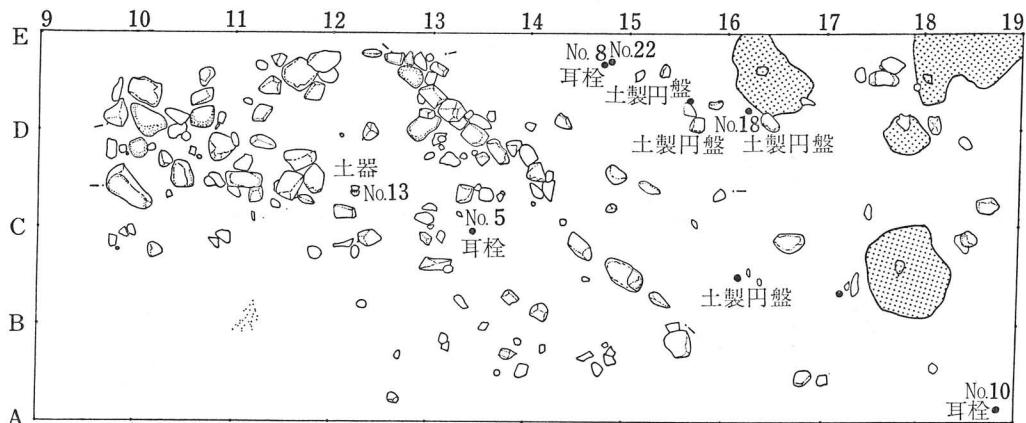
本層中からは、石鏃2点（すべて欠損品）、打製石斧の欠損品1点が、それぞれ出土した。

骨片の出土状態（第60図）

本層に入ると、骨片もあまり認められなくなり、第VII層に至ると全く認められない。

第14表 ロ地区 第VII層配石出土遺物一覧表

	配 石 出 土 遺 物
土器（第85～87・89 ～93・98・103 ・105, 82図）	1・19・22・29・31・35・36・37・38・41・46・52・68・86・95・115・126・134 ・139・212・285・318・327, 8・13
土製品（第112図）	5・8・11
把手（第109図）	6
石器（第114・118図）	4・10・99

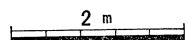
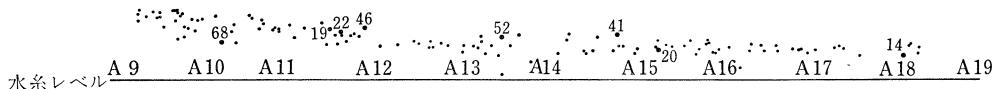
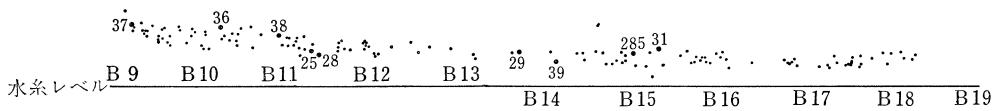
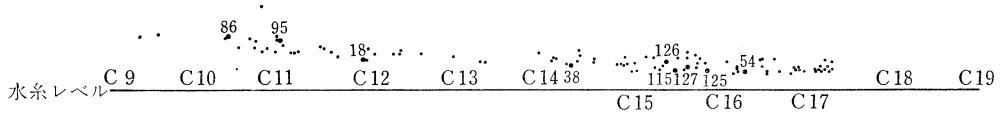
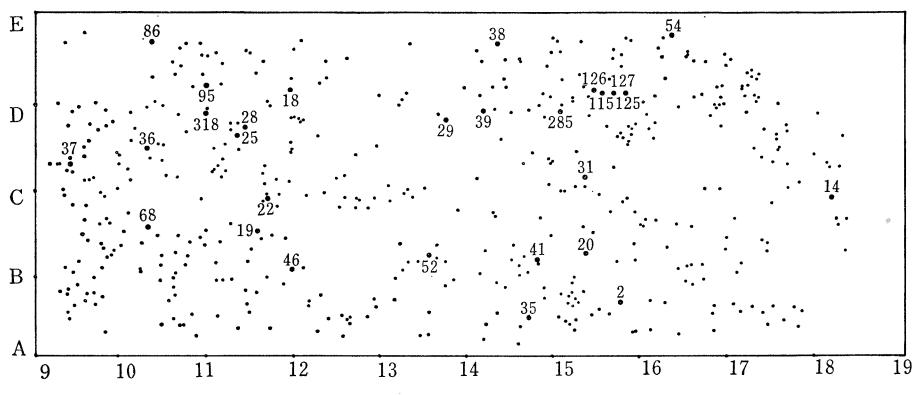


第57図 ロ地区 第VI・VII層土製品出土分布図

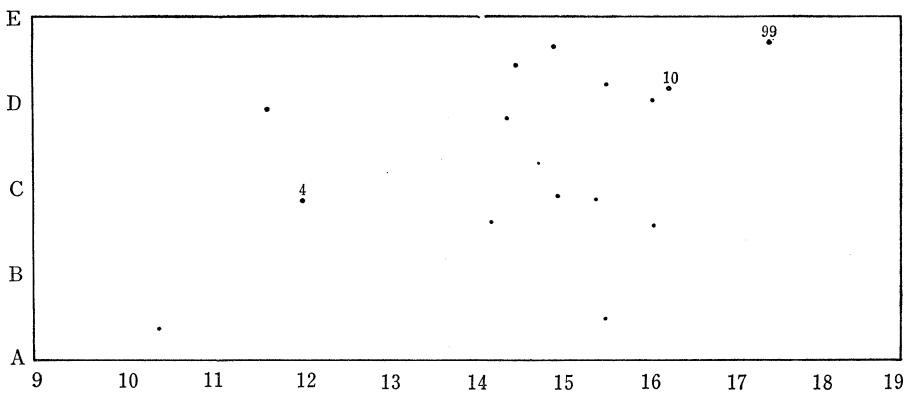
(7) ハ地区第VII層中の配石（第62・65・67・69図）

配石の状態（第62図）

第70図のように、本層中では2基の小サークル状の配石が検出された。セクションA-A'上の配石は、長径約2m、短径約1.3mの橢円形に、約20cm～50cm大の河原石が配され、その区画された内側に、石棒が倒れた状態で出土した。石棒の基部付近には、10cm大の礫4個が基部を取り囲んでいたかのような状態で認められた。セクションA-A'上の配石の北側に近接して認め



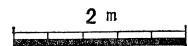
第58図 □地区 第VII・VIII層土器出土分布図



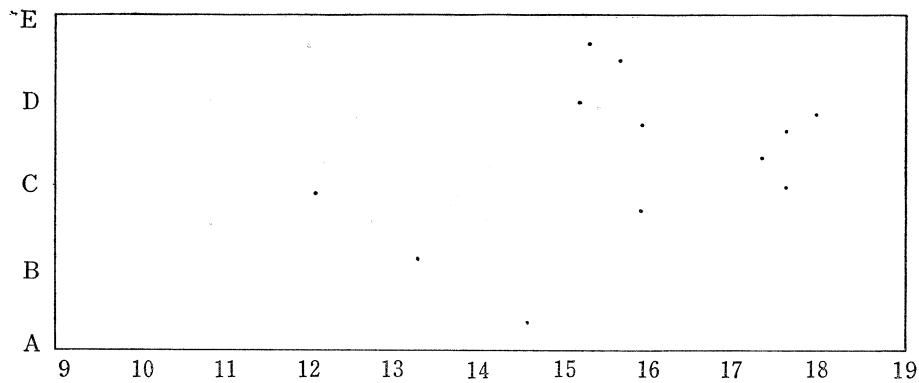
水系レベル C9 C10 C11 C12 C13 C14 C15 C16<sup>10</sup> C17<sup>99</sup> C18 C19

水系レベル B9 B10 B11 B12 B13 B14 B15 B16 B17 B18 B19

水系レベル A9 A10 A11 A12 A13 A14 A15 A16 A17 A18 A19



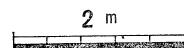
第59図 口地区 第VII・VIII層石器出土分布図



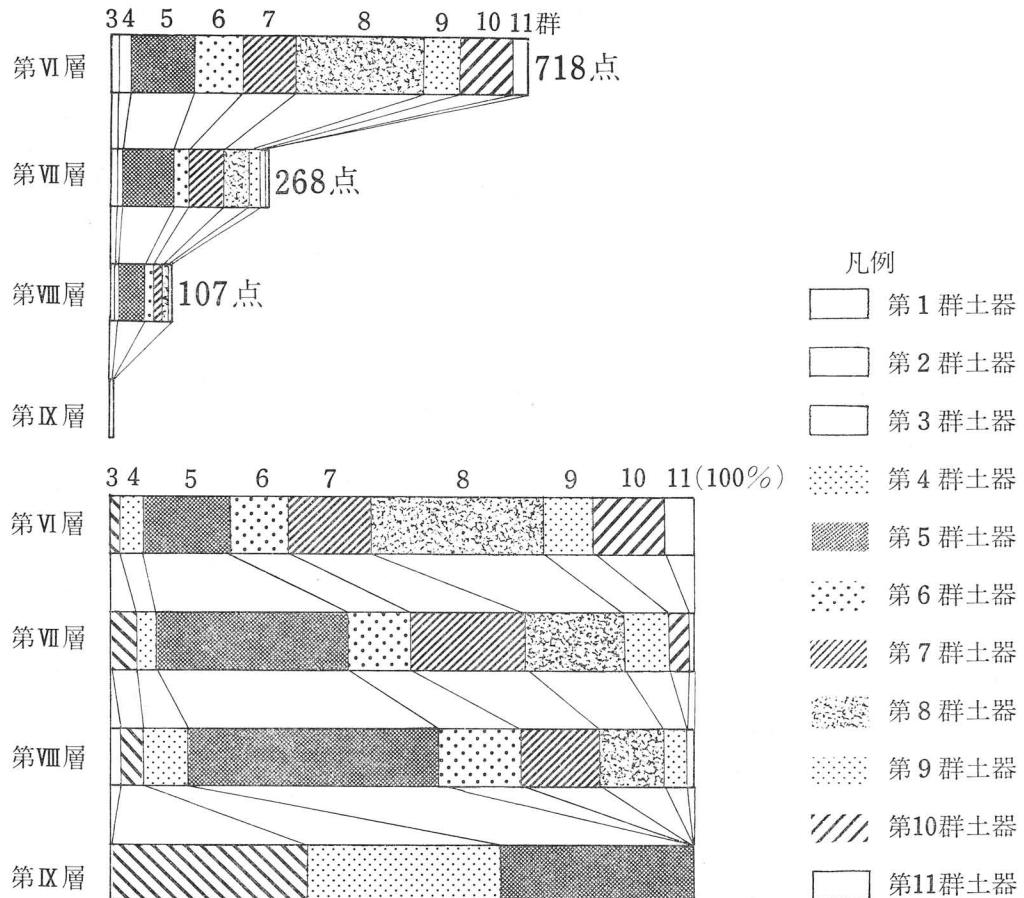
水系レベル C 9    C10    C11    C12    C13    C14    C15    C16    C17    C18    C19

水系レベル B 9    B10    B11    B12    B13    B14    B15    B16    B17    B18    B19

水系レベル A 9    A10    A11    A12    A13    A14    A15    A16    A17    A18    A19



第60図 □地区 第VII・VIII層骨片出土分布図



第61図 ロ地区 層位別土器出土相関図

第15表 ロ地区 層位別土器出土点数表 (カッコ内は%)

層位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計
第 VI 層	0(0)	0(0)	11(1)	27(4)	106(15)	78(11)	95(13)	216(30)	63(9)	89(12)	33(5)	718(100)
第 VII 層	0(0)	0(0)	11(4)	10(4)	88(33)	28(10)	55(21)	44(16)	22(8)	9(3)	1(1)	268(100)
第 VIII 層	0(0)	2(2)	4(4)	8(7)	46(43)	16(15)	15(14)	11(10)	4(4)	0(0)	1(1)	107(100)
第 IX 層	0(0)	0(0)	1(33.3)	1(33.3)	1(33.3)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	3(100)
計	0(0)	2(0)	27(3)	46(4)	241(22)	122(11)	165(15)	271(25)	89(8)	98(9)	35(3)	1,096(100)

られた配石は、直径約1mのほぼ円形に近い形に配されたもので、区画された内側には、40cm大の偏平な角礫が配されていた。

#### 土器の出土状態（第65図）

土器は、配石上面（第VI層）においてかなり出土したが、配石面に至るとあまり認められなくなった。その内容は第70図のように、中谷第8群土器～第10群土器が大半を占めている。

#### 石器の出土状態（第67図）

本層中からは、石鏃5点（内完形品3点、欠損品2点）、スクレイパー1点、打製石斧1点がそれぞれ出土した。

#### 骨片の出土状態（第69図）

本層中からは、あまり骨片は認められなかった。

第16表 ハ地区 第VII層配石出土遺物一覧表

	配 石 出 土 遺 物
土器（第85・99図）	8・241
石器（第114～116・118・119図）	1・6・13・48・53・97・104
土製品（第112図）	11
把手（第109図）	8・9

#### (8) ニ地区第VII層中の配石（第63・65・67・69図）

##### 配石の状態（第63図）

本層中からは、A・B—34・35区において、約2m×0.6mの長方形状に組まれた組石状の配石が検出された。これは、50cm大の偏平な石を中心に、10cm大～40cm大の礫を用いて形を作られたものである。

##### 土器の出土状態（第65図）

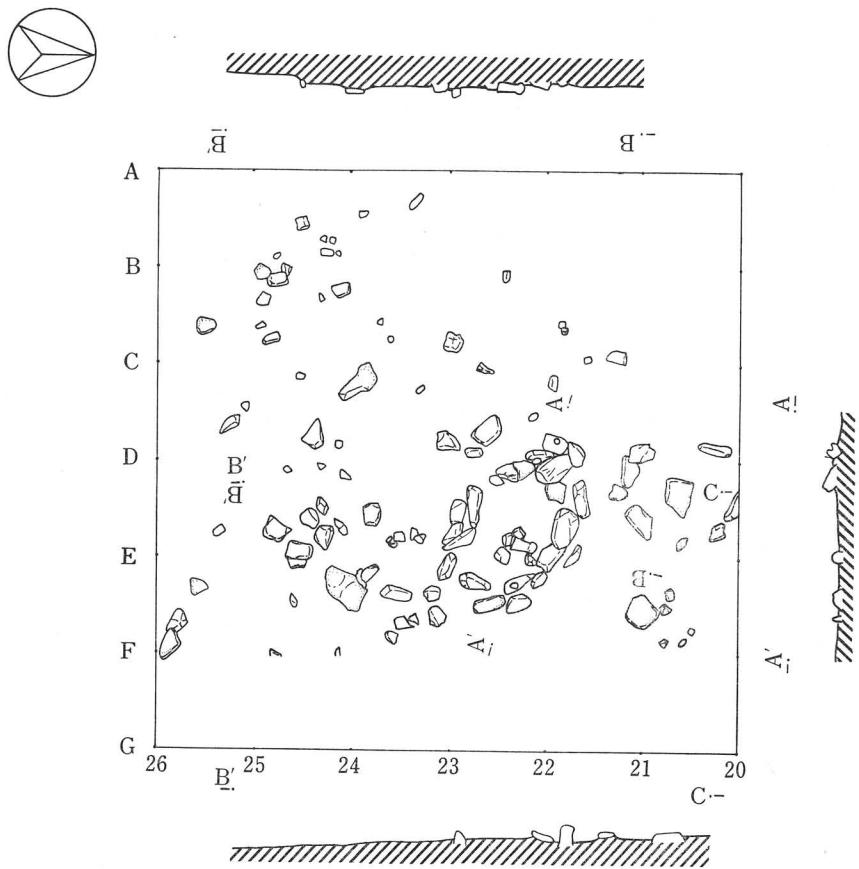
土器は、配石面において、中谷第8群土器～第10群土器を中心にかなり出土した。しかし、ほとんどが小破片であった。

##### 石器の出土状態（第67図）

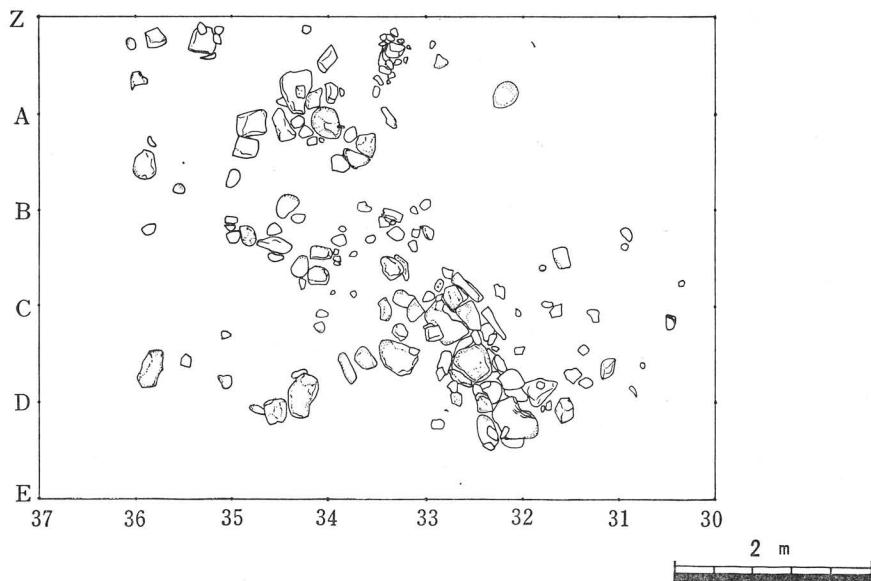
本層中からは、石器の出土はあまり見られず、石鏃1点（欠損品）、磨石1点が、それぞれ出土した。

##### 骨片の出土状態（第69図）

骨片も、本層中からは、あまり認められない。



第62図 ハ地区 第VII層中配石出土状態図



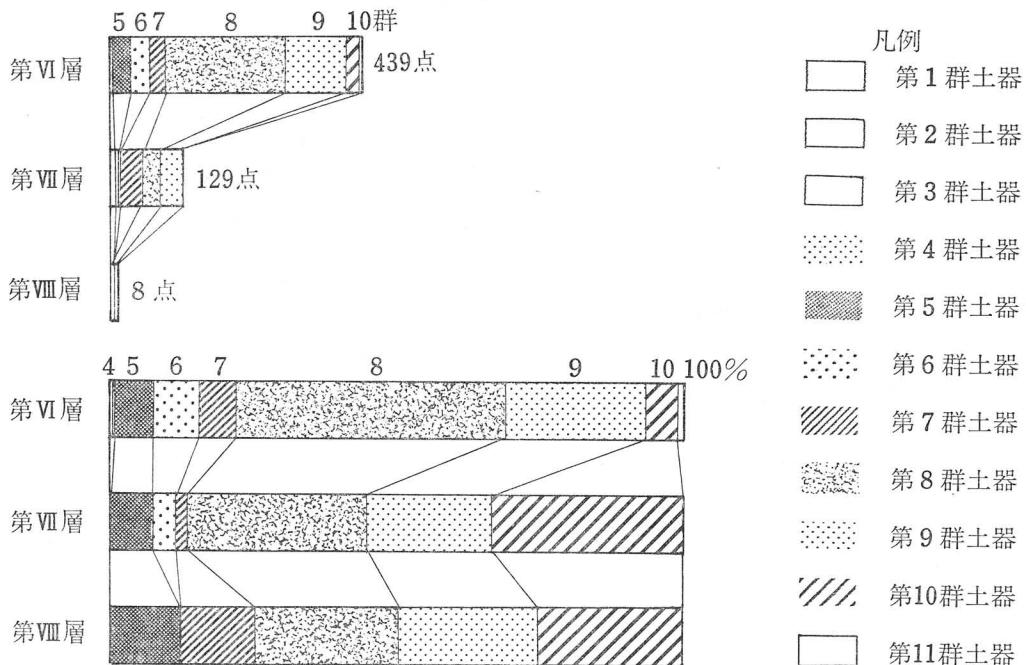
第63図 ニ地区 第VII層中配石出土状態図

第17表 二地区 第VII層配石出土遺物一覧表

配 石 出 土 遺 物	
土器 (第85・89・93・100・102・103・105図)	13・69・70・148・242・273・292・321
石器 (第116・119図)	65・108

第18表 ハ・ニ地区 第VI層出土遺物一覧表

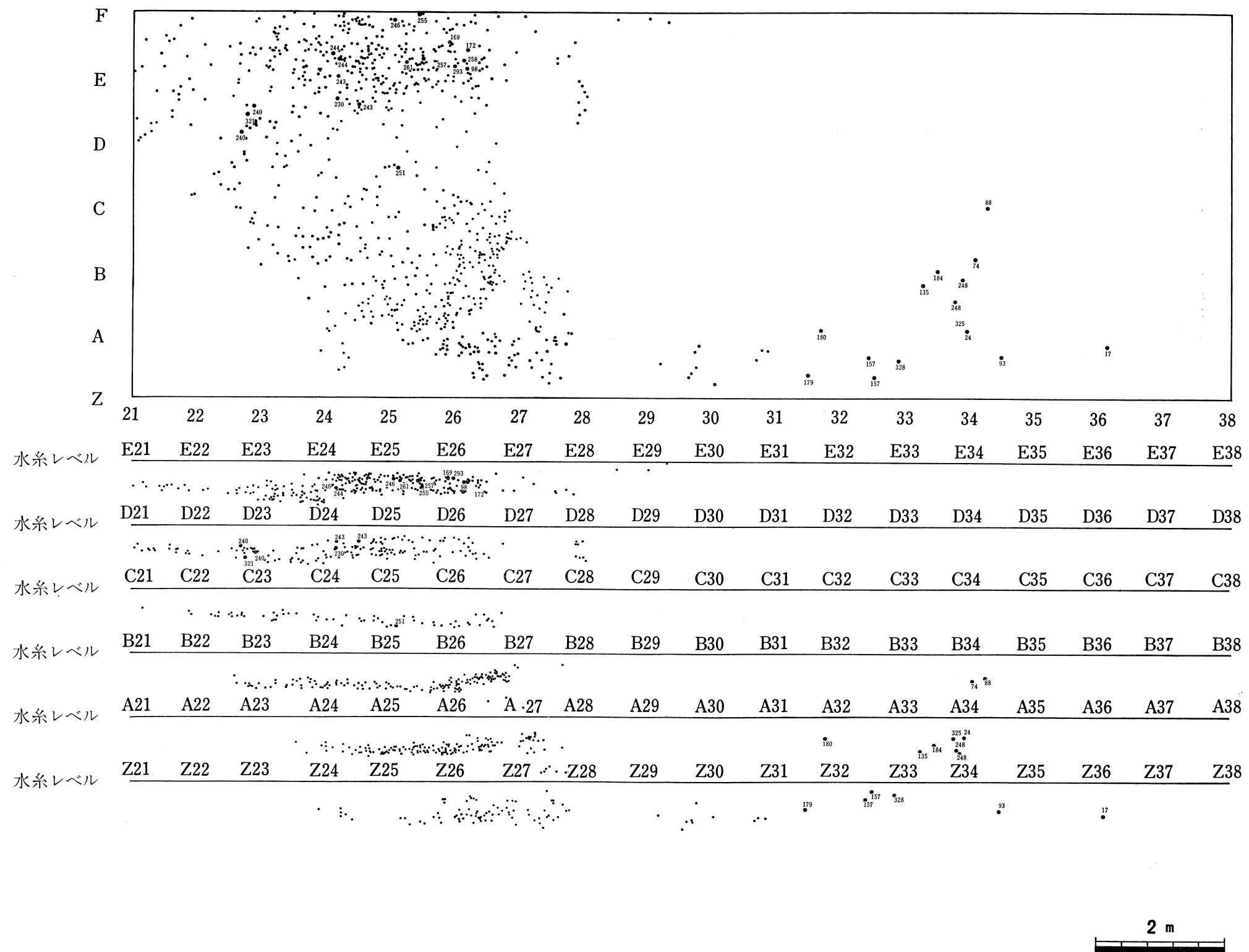
出 土 遺 物	
土器 (第85・89~96・99~103・105図)	17・24・74・88・93・98・112・135・142・157・161・172・173・174・179・180・184・232・239・244・248・250・251・254・257・258・264・268・269・270・276・279・284・286・289・291・293・316・320・324・328
石器 (第115~117図)	29・50・51・73・83
土製品 (第113図)	13



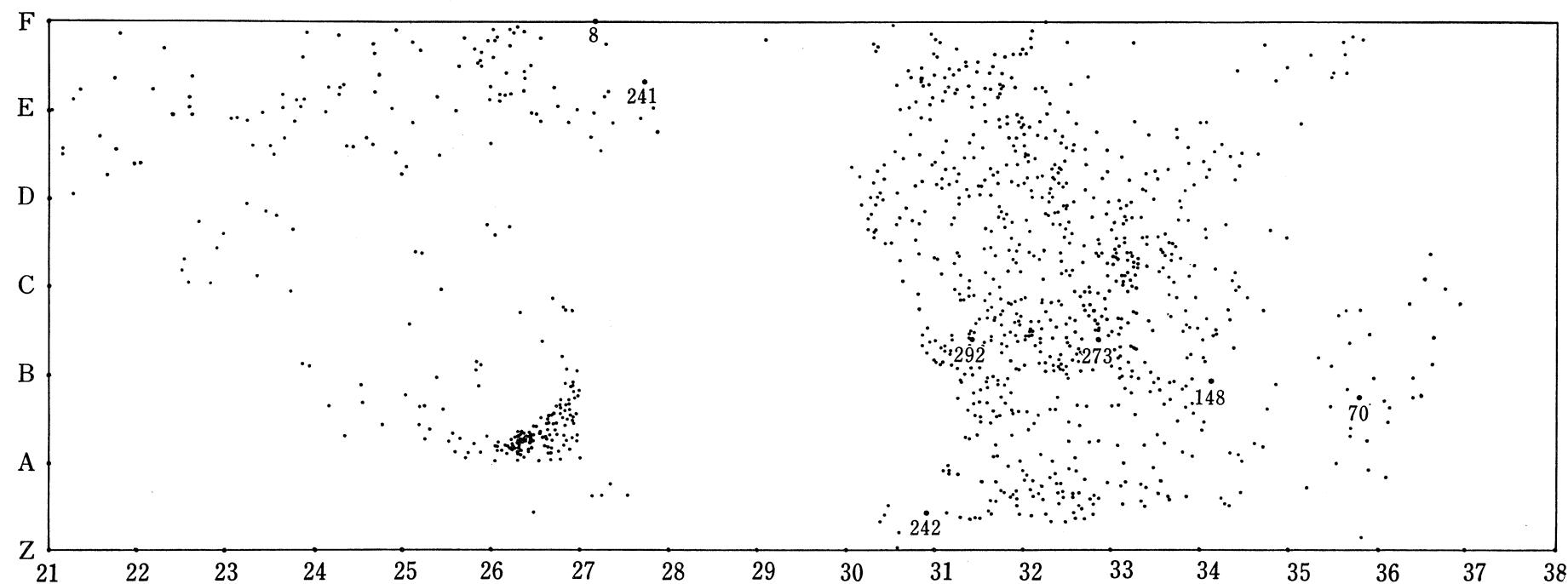
第70図 ハ・ニ地区 層位別土器出土相関図

第19表 ハ・ニ地区 層位別土器出土点数表 (カッコ内は%)

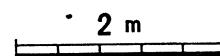
層位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計
第VII層	0(0)	0(0)	1(0)	3(1)	31(7)	34(8)	28(8)	205(47)	109(24)	24(5)	4(0)	439(100)
第VII層	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	10(8)	5(4)	3(2)	40(31)	28(22)	43(33)	0(0)	129(100)
第VIII層	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(12.5)	1(12.5)	2(25)	2(25)	2(25)	0(0)	0(0)	8(100)
第IX層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	0	0	1(0)	3(0)	42(7)	40(7)	33(6)	247(43)	139(24)	67(12)	4(1)	576(100)



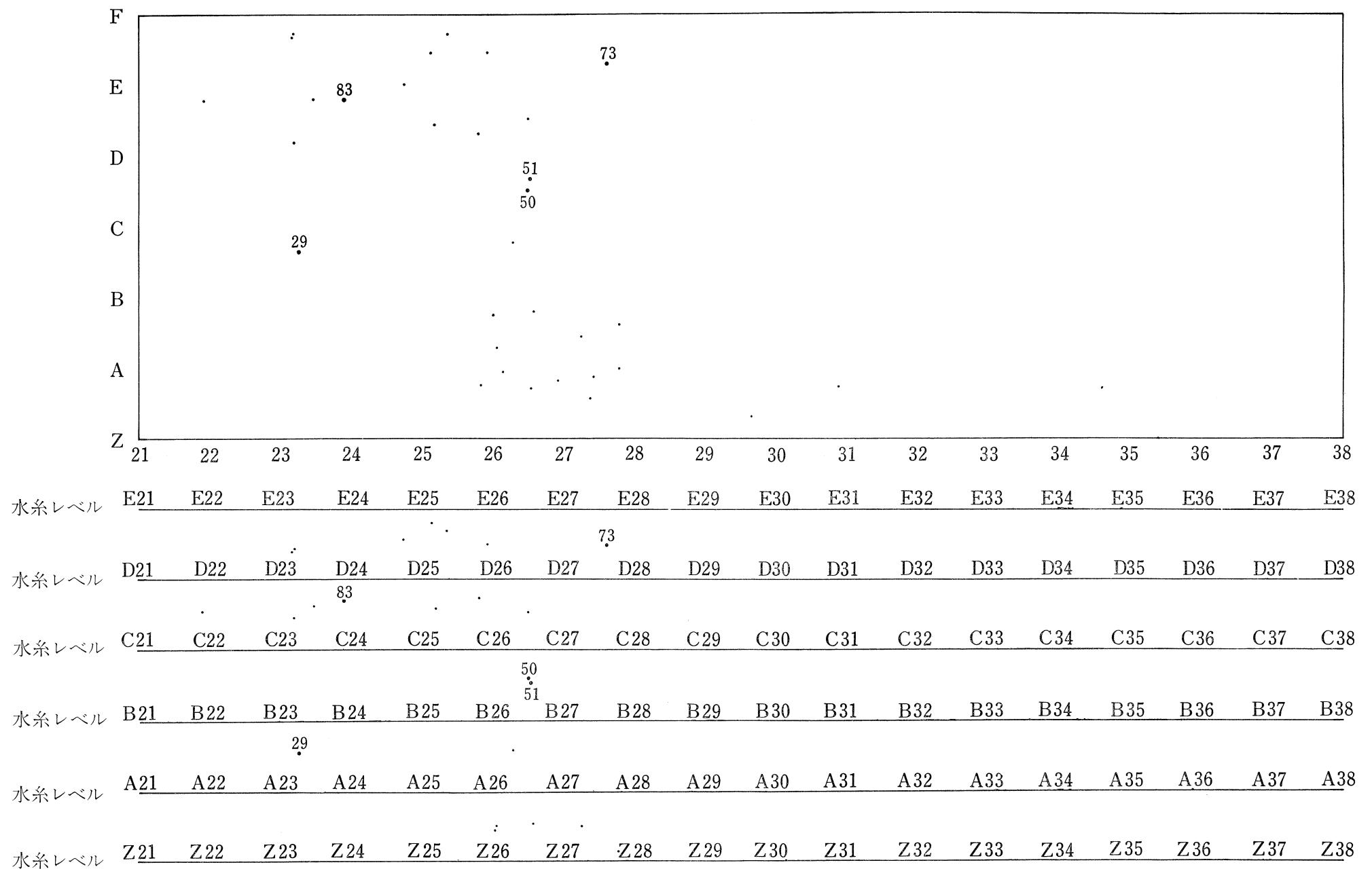
第64図 ハニ地区 第VI層土器出土分布図



水系レベル	E21	E22	E23	E24	E25	E26	E27	E28	E29	E30	E31	E32	E33	E34	E35	E36	E37	E38
水系レベル	D21	D22	D23	D24	D25	D26	D27	D28	D29	D30	D31	D32	D33	D34	D35	D36	D37	D38
水系レベル	C21	C22	C23	C24	C25	C26	C27	C28	C29	C30	C31	C32	C33	C34	C35	C36	C37	C38
水系レベル	B21	B22	B23	B24	B25	B26	B27	B28	B29	B30	B31	B32	B33	B34	B35	B36	B37	B38
水系レベル	A21	A22	A23	A24	A25	A26	A27	A28	A29	A30	A31	A32	A33	A34	A35	A36	A37	A38
水系レベル	Z21	Z22	Z23	Z24	Z25	Z26	Z27	Z28	Z29	Z30	Z31	Z32	Z33	Z34	Z35	Z36	Z37	Z38

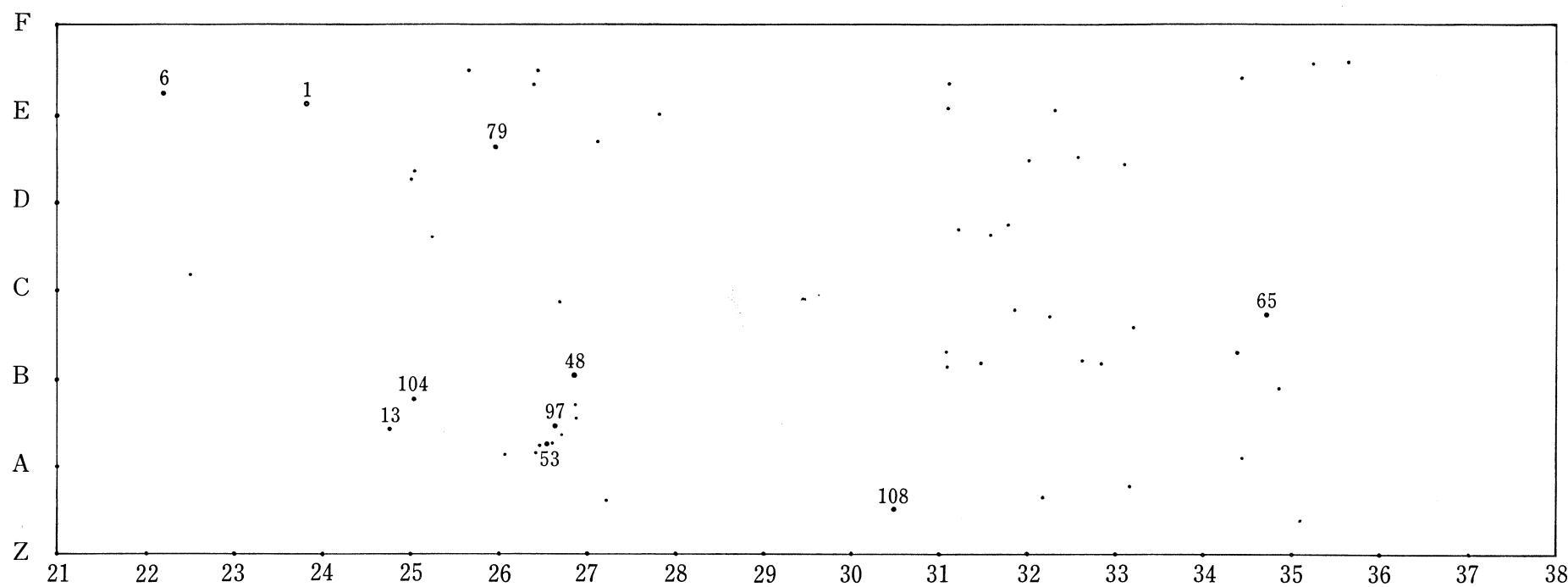


第65図 ハ・ニ地区 第VII層土器出土分布図

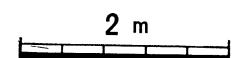


2 m

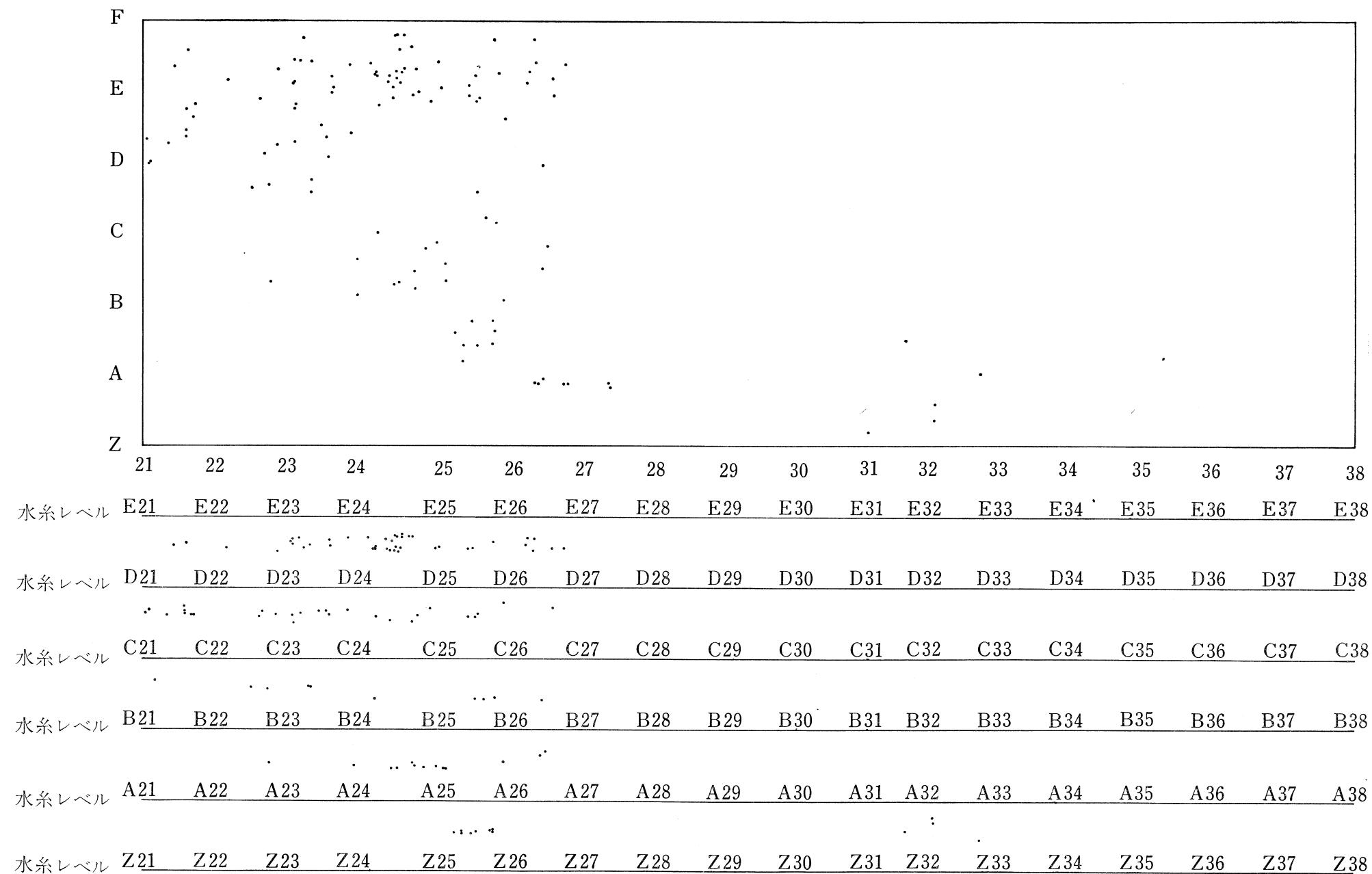
第66図 ハニ地区 第VII層石器出土分布図



水系レベル	E21	E22	E23	E24	E25	E26	E27	E28	E29	E30	E31	E32	E33	E34	E35	E36	E37	E38
	6			1														
水系レベル	D21	D22	D23	D24	D25	D26	D27	D28	D29	D30	D31	D32	D33	D34	D35	D36	D37	D38
水系レベル	C21	C22	C23	C24	C25	C26	C27	C28	C29	C30	C31	C32	C33	C34	C35	C36	C37	C38
水系レベル	B21	B22	B23	B24	B25	B26	B27	B28	B29	B30	B31	B32	B33	B34	B35	B36	B37	B38
水系レベル	A21	A22	A23	A24	A25	A26	A27	A28	A29	A30	A31	A32	A33	A34	A35	A36	A37	A38
水系レベル	Z21	Z22	Z23	Z24	Z25	Z26	Z27	Z28	Z29	Z30	Z31	Z32	Z33	Z34	Z35	Z36	Z37	Z38

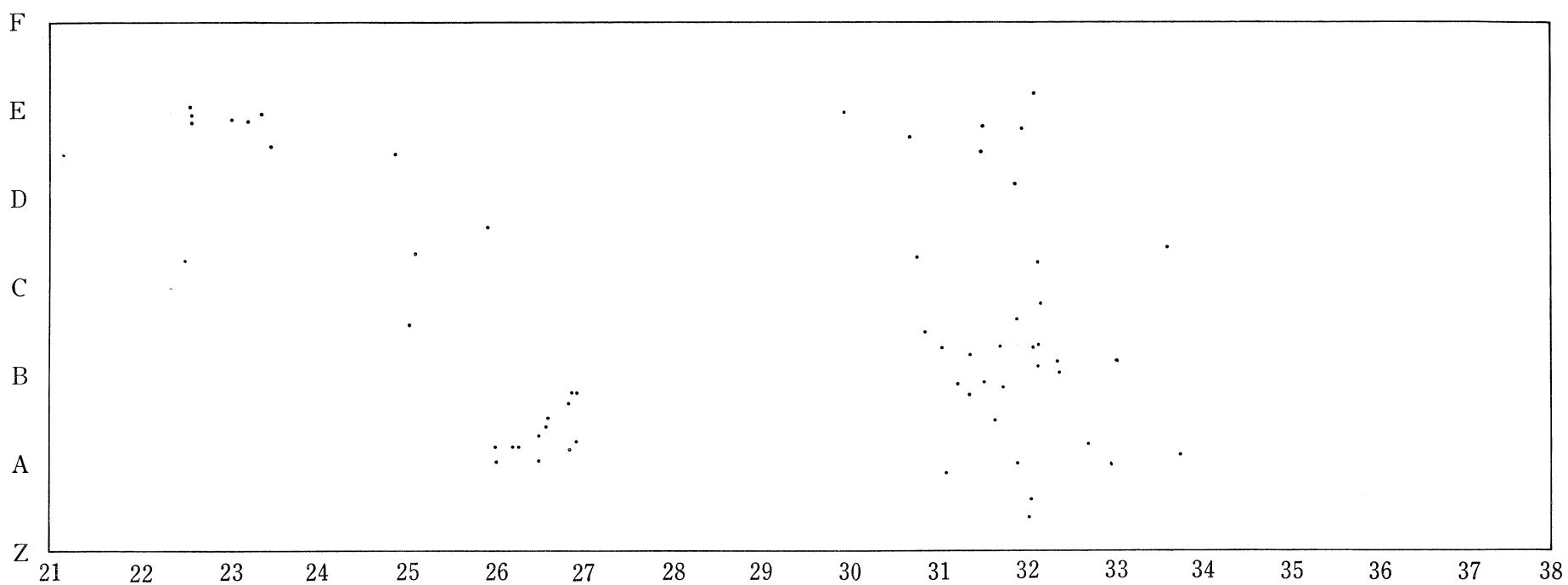


第67図 ハニワ地区 第VII層石器出土分布図



2 m

第68図 ハニワ地区 第VI層骨片出土分布図



水糸レベル E 21 E 22 E 23 E 24 E 25 E 26 E 27 E 28 E 29 E 30 E 31 E 32 E 33 E 34 E 35 E 36 E 37 E 38

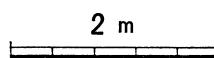
水糸レベル D 21 D 22 D 23 D 24 D 25 D 26 D 27 D 28 D 29 D 30 D 31 D 32 D 33 D 34 D 35 D 36 D 37 D 38

水糸レベル C 21 C 22 C 23 C 24 C 25 C 26 C 27 C 28 C 29 C 30 C 31 C 32 C 33 C 34 C 35 C 36 C 37 C 38

水糸レベル B 21 B 22 B 23 B 24 B 25 B 26 B 27 B 28 B 29 B 30 B 31 B 32 B 33 B 34 B 35 B 36 B 37 B 38

水糸レベル A 21 A 22 A 23 A 24 A 25 A 26 A 27 A 28 A 29 A 30 A 31 A 32 A 33 A 34 A 35 A 36 A 37 A 38

水糸レベル Z 21 Z 22 Z 23 Z 24 Z 25 Z 26 Z 27 Z 28 Z 29 Z 30 Z 31 Z 32 Z 33 Z 34 Z 35 Z 36 Z 37 Z 38



第69図 ハニ地区 第VII層骨片出土分布図

## 第2節 歴史時代の遺構

### 1 住居址

#### (1) 第1号址（第71図）

本住居址は、ハ地区Z～D-26～30区に位置し、長軸約4m、短軸（主軸方向）約3mの横長の長方形を呈する。壁は南、北側が垂直に、東、西側はゆるやかに、それぞれ立ち上がり、壁高は約50cmを計る。床面は堅緻なものであり、ほぼ平坦である。覆土は3層に分けられ、第1層は赤色、灰色、黄色粒及び5mm大のスコリアを含有する暗褐色土層。第2層は第1層と含有物を同じくする暗茶褐色土層。第3層は第2層とほぼ同様の暗茶褐色土層であるが第2層に比して粘性が高い。柱穴は住居址中央と北東コーナーのほぼ中間、カマド焚口の南東で1本確認されたのみである。径は28cm×22cm、床面よりの深さは30cmである。

カマドは北壁中央よりやや東寄りに位置し、全長150cm、幅110cmで、残存状態は良好である。焚口部は床を径約75cmの円形に、約5cm掘り下げて作られている。袖部は右側3個、左側4個の石を芯材として組み、その上を粘土で覆っている。煙道右側にも2個の石が認められる。カマドの中央に径約8cm、高さ約22cm、断面不整八角形の粘土の支脚（第72図）が認められた。

遺物は覆土中より真間期に位置する土師器甕3個体、同壺2個体、須恵器甕1個体、同壺2個体、同蓋2個体が、それぞれ破片で発見された。また、本住居址は、縄文時代の住居址を切って構築されているため縄文時代の遺物もかなり出土した。（伊藤 正人）

#### 出土遺物

##### (1) 土器（第73図）

本住居址に直接伴うものは、第73図の土師器、須恵器である。

##### 土師器（第73図、1～3、9～13）

###### 壺形土器（1～3）

やや膨みを有する底部より胴下半において「く」の字状に立ち上がり口縁に至る器形を呈する壺形土器である。胴下半に2段に箇削りが施されている。

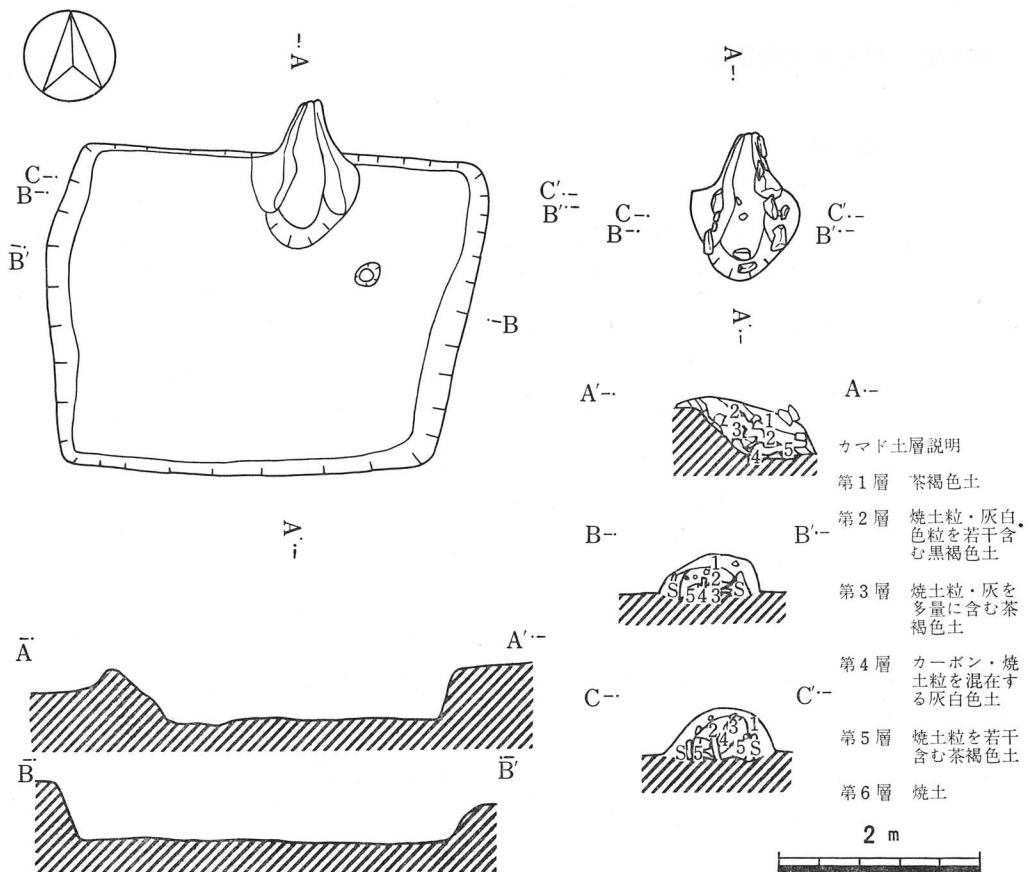
###### 甕形土器（9～13）

3個体分検出された。9は肩に陵を有し、器外面縦方向の箇削り、器内面横方向の箇磨きが施された小型甕である。10は器外面に縦方向に箇削りが施された長胴甕である。11は器外面、器内面共に細かいハケ目整形の施された長胴甕である。12・13は口縁部が「く」の字状に外反した胴張り甕である。器外面は櫛状工具によるかき目整形後、箇磨きが、器内面は櫛状工具によるかき目整形が、それぞれ施されている。

##### 須恵器（4～8）

###### 高台付壺形土器（4・5）

高台付の壺形土器である。高台部は、付高台による。底部に丸味を有するもの（4）と、角ばったもの（5）が認められる。



第71図 第1号址遺構図

本住居からは、土師器、須恵器の他に、第74図～第79図のように縄文時代の遺物が多量に出土した。

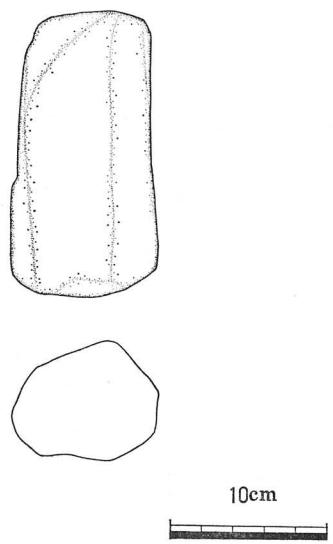
第74図、1～3は、中谷第9群に属する把手である。5は、欠損した土製品である。

4は、口唇部に刻みを有する粗製の深鉢形土器である。

第74図～第77図は、本住居址出土の縄文式土器で中谷第10群を主体として、中谷第4群～第11群まで認められる。概要は第21表のとおりである。

## ② 支脚 (第72図)

カマド内より出土したもので、径約8cm、長さ約22cm、断面不整八角形の支脚である。



第72図 第1号址カマド内出土支脚

坏形土器（6）

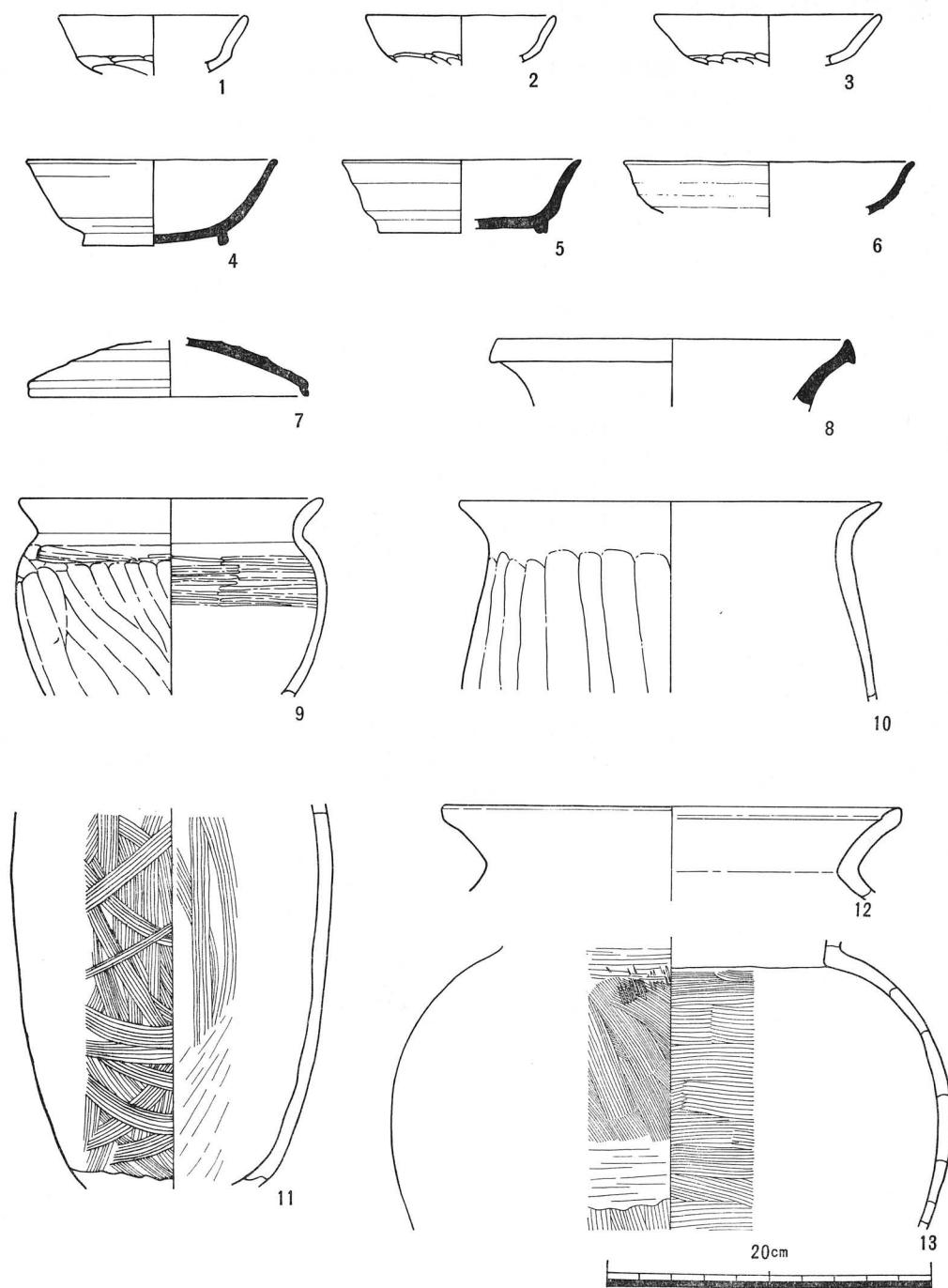
口縁部やや外反し、底部に丸味を有する坏形土器である。

蓋（7）

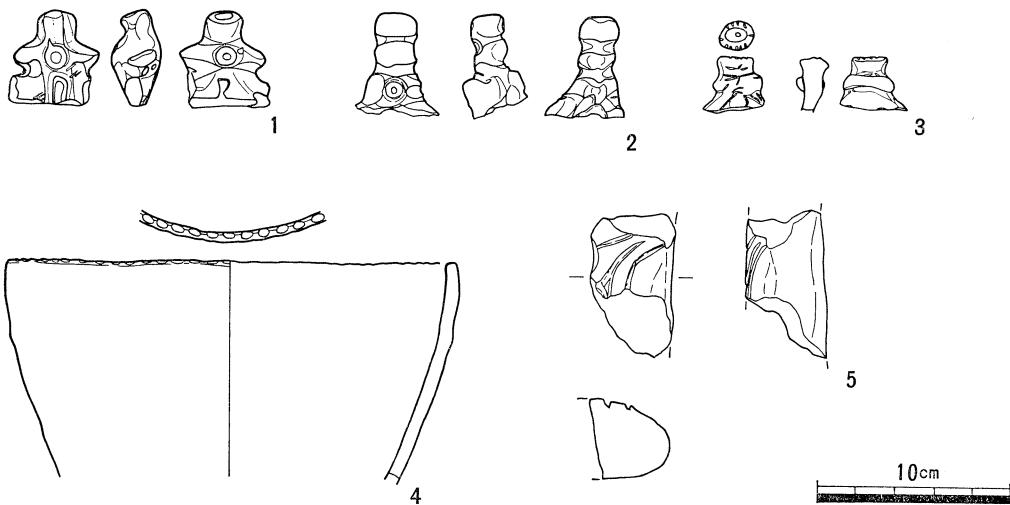
緩い「S」字状の返しを有する蓋である。

第20表 第1号址出土土器一覧表

No.	種類	器形	法量(口径)(底径)(器高)	整 形	胎 土	色 調
1	土師器	坏形土器	(口径) 15.5cm ( " ) 11.5cm ( " ) 13.8cm	ロクロ横ナデ、胴下半へラ削り	小砂粒を含有	黄茶褐色
2	"	"		"	"	"
3	"	"		"	"	"
4	須恵器	高台付坏形土器	(口径) 15 cm (器高) 5.2cm (底径) 8.8cm	ロクロ水引き整形	雲母及び黑色粒含有	淡い灰褐色
5	"	"	(口径) 14.5cm (器高) 4.4cm (底径) 8.3cm	"	黑色粒多量に含有	灰褐色
6	"	坏形土器	(口径) 17.7cm	ロクロ横ナデ	"	"
7	"	蓋	(口径) 17 cm		"	"
8	"	"	(口径) 21.3cm		"	"
9	土師器	甕形土器	(口径) 18.4cm	器内面一ハケ目整形後、ナデ調整が施されている。 器外面一口縁直下に横方向にへラナデによって陵を形成。その直下は縦方向にへラ削りが施されている。	1~2mm大の砂粒及び、雲母含有	茶褐色
10	"	"	(口径) 25.7cm	器外面一縦方向にへラ削りが施されている。	砂粒、石英粒を多量に含有	淡い茶褐色
11	"	"		器外面、器内面共に細かいハケ目が縦横に施されている。	多量の砂粒及び若干の雲母を含有	黄褐色
12	"	"	(口径) 28.4cm	器外面一櫛状工具によるかき目整形後、範磨きが施されている。 器内面一櫛状工具によるかき目整形が施されている。		



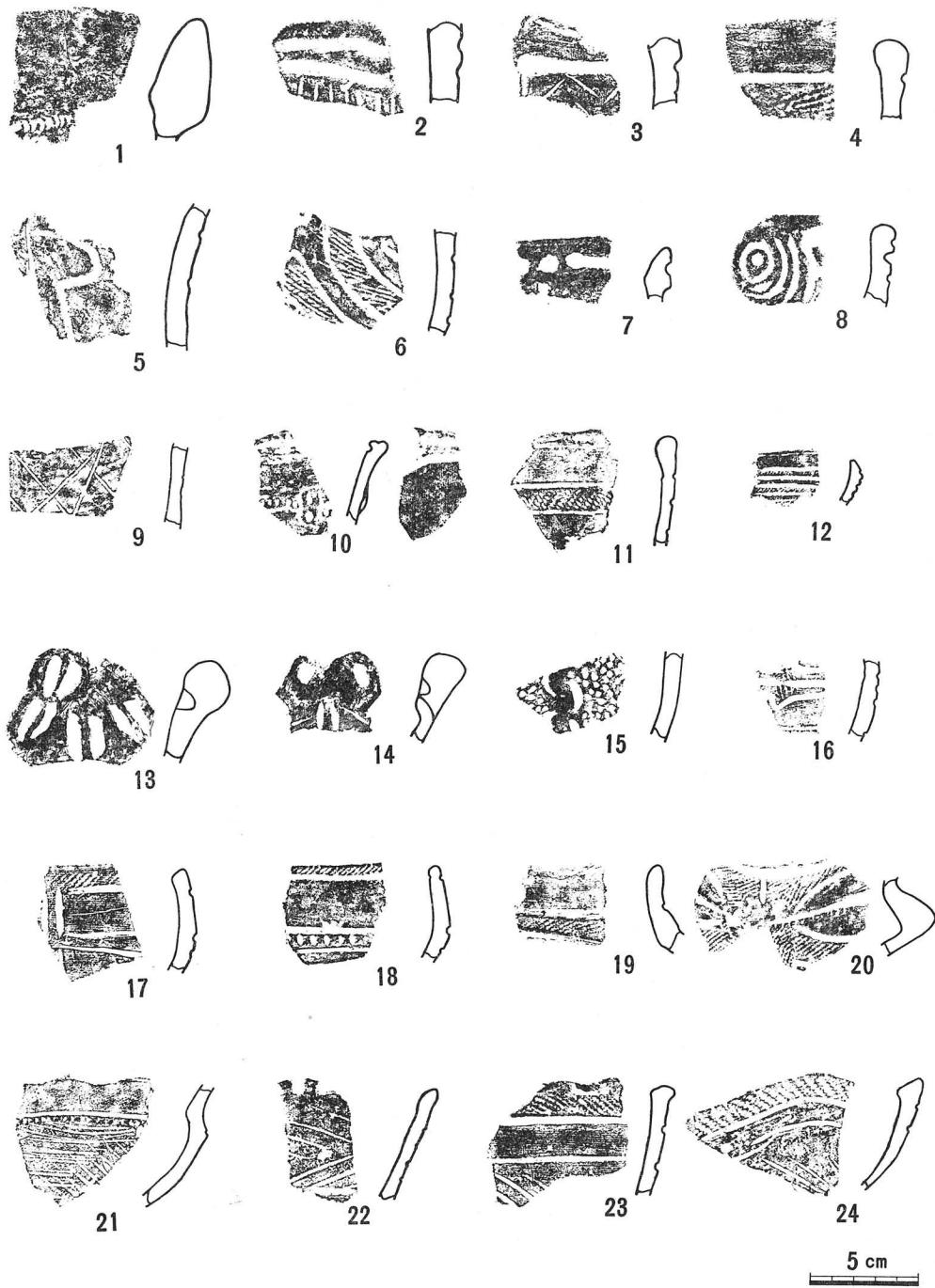
第73図 第1号址出土土器実測図



第74図 第1号址出土遺物実測図

第21表 第1号址出土土器一覧表

No.	部位	施文工具	文様	胎土	色調	時期	出土地点
1	口縁部	ヘラ状施文具	押引文が施文			第4群第2類	覆土
2	胴部	棒状施文具 半截竹管	胴部に条線文が施文			第5群第2類	"
3	"	棒状施文具 ヘラ状施文具	隆帯による「匚」状の区画文が施され、「ハ」の字状沈線文によって充填されている。			第5群第6類	"
4	口縁部	棒状施文具 縄文原体(L R)	沈線による「匚」状の区画文が施され、縄文が充填されている。			第6群第4類	"
5	胴部	棒状施文具	太い沈線文が施文されている。			第6群第6類	"
6	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	曲線的な沈線文が施文され、その間隙に縄文が充填されている。			第6群第4類	"
7	口縁部	棒状施文具	口唇直下に円形刺突文と沈線文が施文されている。			第7群第1類	"
8	"	"	口唇直下に同心円状の沈線文が施文されている。			"	"
9	胴部	"	斜交沈線文が施文されている。			第8群第7類	"
10	口縁部	"	口唇直下に、「8」の字状貼付文、有刻隆帯が巡らされている。内面に沈線文が施文されている。			第8群第1類	"
11	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	2本の沈線文によって横帯区画文が施文され、その間に縄文が充填されている。	石英粒を若干含有	黒褐色	第8群第1類	"
12	"	棒状施文具	横位に沈線文が施文され、その間に刻みが施されている。	"	"	第8群第13類	"



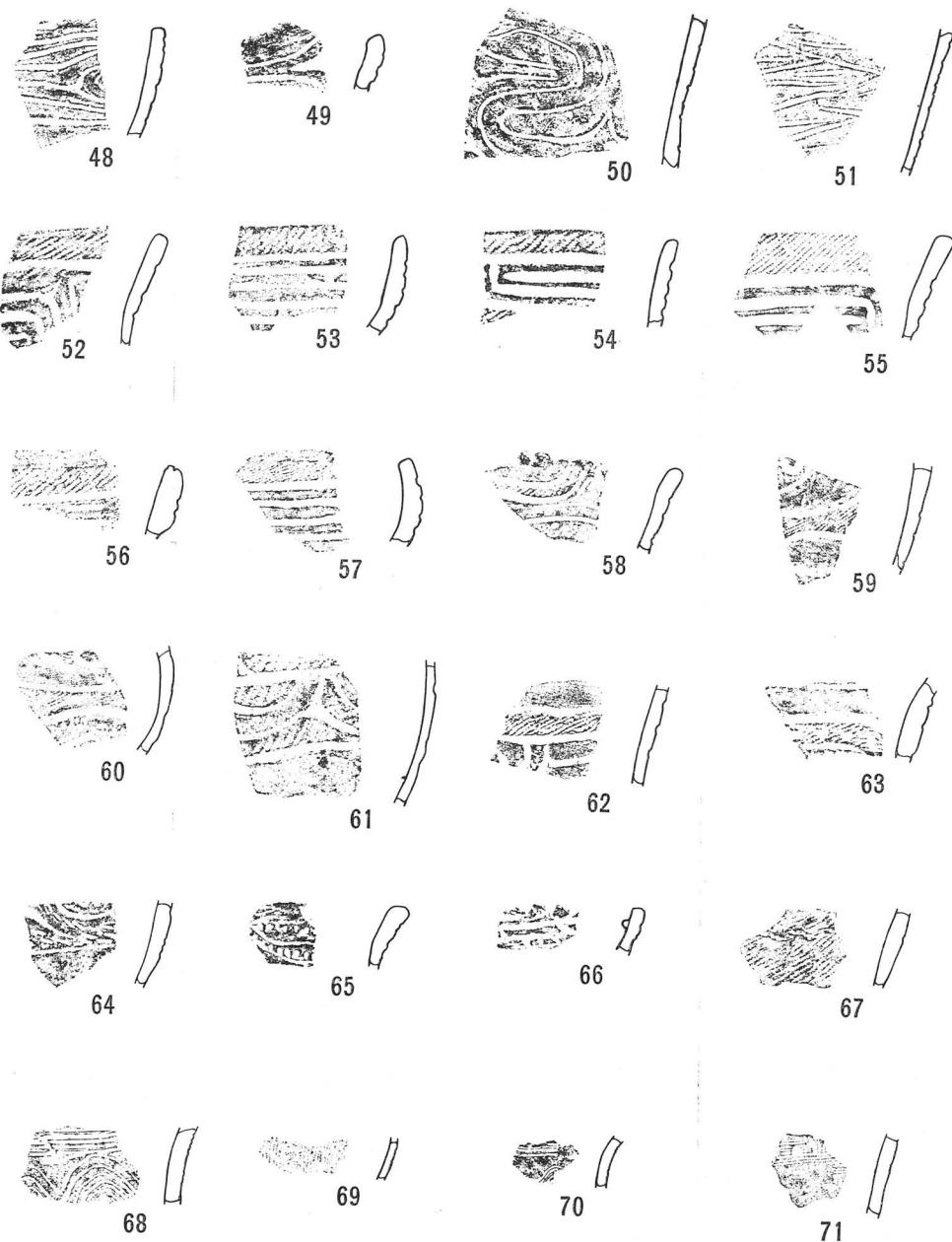
第75図 第1号址出土土器拓影図（1）

No.	部位	施文具	文様	胎土	色調	時期	出土地点
13	口縁部	棒状施文具	口唇部及び、口唇直下に縦位の対弧状沈線文が施文されている。	石英粒を若干含有	黒褐色	第8群第2類	覆土
14	"	"	口唇直下に縦位の対弧状沈線文が施文されている。	"	"	"	"
15	"	"	縦位の対弧状沈線文が施文されその両側に、刺突文が施されている。	"	黄褐色	"	"
16	"	棒状施文具 撫糸文	地文に撫糸文が施され、棒状施文具によって横帯文が施文されている。	"	"	第8群第13類	"
17	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	口唇直下に沈線文が巡らされ、幅の狭い縄文帯が形成されている。口縁部と胴部との境には2本の沈線文による横帯文が施文されている。縄文帯と横帯文の間に、縦位の対弧状文が施文されている。	"	黒褐色	第8群第11類	"
18	"	"	口唇直下に幅の狭い縄文帯が、口縁部と胴部との境に有刻の横帯文が施文されている。	"	暗褐色	"	"
19	"	"	口唇直下に縄文帯が施されている。			"	"
20	"	"	遮光器状沈線文が施文され、その間隙に縄文が充填されている。	石英粒・長石含有	黄褐色	第8群第3類	"
21	胴部	半截竹管	口縁部と胴部との境に沈線文と刻みを巡らし、胴部に斜行沈線文が施文されている。	石英粒を若干含有	黒褐色	第8群第17類	"
22	口縁部	棒状施文具	羽状沈線文が施文されている。口唇部には刻みが入れられている。	"	"	第9群第14類	"
23	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	2本の沈線文が施文され、口唇直下には縄文帯が、沈線文下には斜行沈線文が、それぞれ施文されている。	石英粒・雲母を若干含有。	暗褐色	"	"
24	"	"	波状口縁に沿って、口唇直下に2本の沈線文が巡らされ、口唇部との間隙に縄文帯が形成されている。	"	"	"	"
25	"	棒状施文具	波状口縁に沿って沈線文が施文されている。	石英粒を若干含有	黒褐色	第9群	"
26	"	半截竹管 縄文原体(R L)	波状口縁に沿って口唇直下に縄文帯が形成され、その下端に半截竹管による沈線文が巡らされている。波頂部の直下には有刻の縦長の突帯が貼付されている。	石英粒・雲母を若干含有	暗茶褐色	"	"



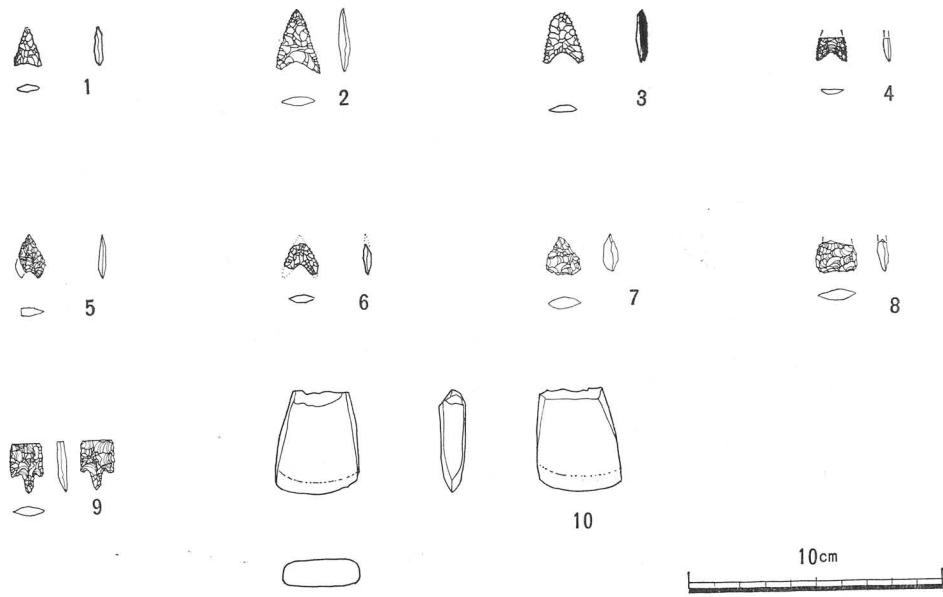
第76図 第1号址出土土器拓影図（2）

No.	部 位	施 文 具	文 様	胎 土	色 調	時 期	出 土 地 点
27	口縁部	棒状施文具 縄文原体(L R)	口唇直下に縄文帯が形成され、 その上に沈線文が重ねられてい る。	石英粒・雲母 を若干含有	黄褐色	第 9 群	覆土
28	"	棒状施文具	波状口縁の波頂部直下にボタン 状貼付文が施され、それを起点 として2本の沈線文が巡らされ ている。	石英粒・長石 を含有	暗褐色	"	"
29	"	"	口縁部に有刻隆帯文が貼付され ている。	"	"	"	"
30	"	"	"	"	"	"	"
31	"	"	口唇直下に有刻隆帯が巡らさ れ、口唇部との間には放射状の 沈線文が、その直下からは斜行 沈線文が、それぞれ施文されて いる。	"	黄褐色	"	"
32	"	"	口縁部に對弧状の沈線文が施文 されている。	"	"	"	"
33	"	"	口縁部に横帶状沈線文が施文さ れ、その間隙に刺突文が充填さ れている。	"	暗褐色	"	"
34	"	"	巴状入組文が施文されている。	"	"	第 10 群	"
35	"	"	"	"	"	"	"
36	"	"	口唇直下に横帶文が施文され、 その間に列点状刺突文が施され ている。口唇直下に突起が貼付 されている。	"	"	"	"
37	"	"	口縁部文様帯に巴状入組文が施 文されている。	"	黄褐色	"	"
38	"	"	口縁部文様帯に入組文が施文さ れている。	石英粒・雲母 を若干含有	"	"	"
39	"	"	口縁部文様帯に巴状入組文と、 弧状沈線文が施文されている。	石英粒・長石 を含有	暗褐色	"	"
40	"	"	"	"	"	"	"
41	"	"	"	"	"	"	"
42	"	"	"	"	"	"	"
43	"	"	口縁部文様帯には巴状入組文、 胴部文様帯には羽状沈線文が、 それぞれ施文されている。	"	"	"	"
44	"	"	口縁部文様帯に巴状入組文、三 叉状印刻文が施文されている。	"	"	"	"
45	"	"	"	"	"	"	"
46	"	"	"	"	"	"	"
47	"	"	口縁部文様帯に三叉状入組文が 施文されている。	"	黄褐色	"	"
48	"	"	"	"	暗褐色	"	"
49	"	"	三叉状印刻文が施文されている	"	"	"	"
50	"	"	三叉文と流水状沈線文が施文さ れている。	"	"	"	"



第77図 第1号址出土土器拓影図（3）

No.	部位	施文具	文様	胎土	色調	時期	出土地点
51	胴部	棒状施文具	羽状沈線文が施文されている。	石英粒・長石 を含有	暗褐色	第10群	覆土
52	口縁部	棒状施文具 縄文原体(R L)	口唇直下に縄文帶が形成され, その直下には鍵の手状入組文が 施文されている。	"	灰褐色	第11群	"
53	"	棒状施文具	"	"	"	"	"
54	"	縄文原体(L R)	"	"	"	"	"
55	"	"	"	"	"	"	"
56	"	"	"	"	"	"	"
57	"	"	"	"	"	"	"
58	"	"	2本の沈線が弧状に施され, そ の間に縄文が充填されている。 弧線の間には三角形状の沈線文 が施文されている。	"	黒褐色	"	"
59	胴部	"	曲線的な磨消縄文が施文されて いる。	"	"	"	"
60	"	"	"	"	"	"	"
61	"	"	曲線的な磨消縄文と三叉文が施 文されている。	"	"	"	"
62	"	"	"	"	"	"	"
63	"	"	隆起帶縄文が施文され, 帯縄文 上に刺突文が施されている。	"	"	"	"
64	"	棒状施文具	入組文が施文され, その間隙に 刺突文が充填されている。	"	"	"	"
65	"	"	"	"	"	"	"
66	口縁部	"	羊歯状文が施文されている。	"	"	"	"
67	胴部	縄文原体(L R)	結節縄文が横位に施文されてい る。	"	"	"	"
68	"	櫛齒状施文具	横位に波状沈線文, 簾状文が施 されている。	よく精選され て緻密であ る。	灰褐色	"	"
69	"	"	"	"	"	"	"
70	"	"	"	"	"	"	"
71	"	"	"	"	"	"	"



第78図 第1号址出土石器実測図（1）

### ③ 石 器（第78・79図）

第78図1～8は無茎の石鏃，9は有茎の石鏃で，いずれも黒耀石製のものである。10は小型の定角磨製石斧で閃緑岩製である。

第79図11～14は打製石斧で，11・12は分銅形，13は揆形，14は短冊形である。石材は11～13が硬質砂岩，14が粘板岩である。

15～19はスクレイパーで，石材は15～17が硬質砂岩，18が頁岩，19が粘板岩である。

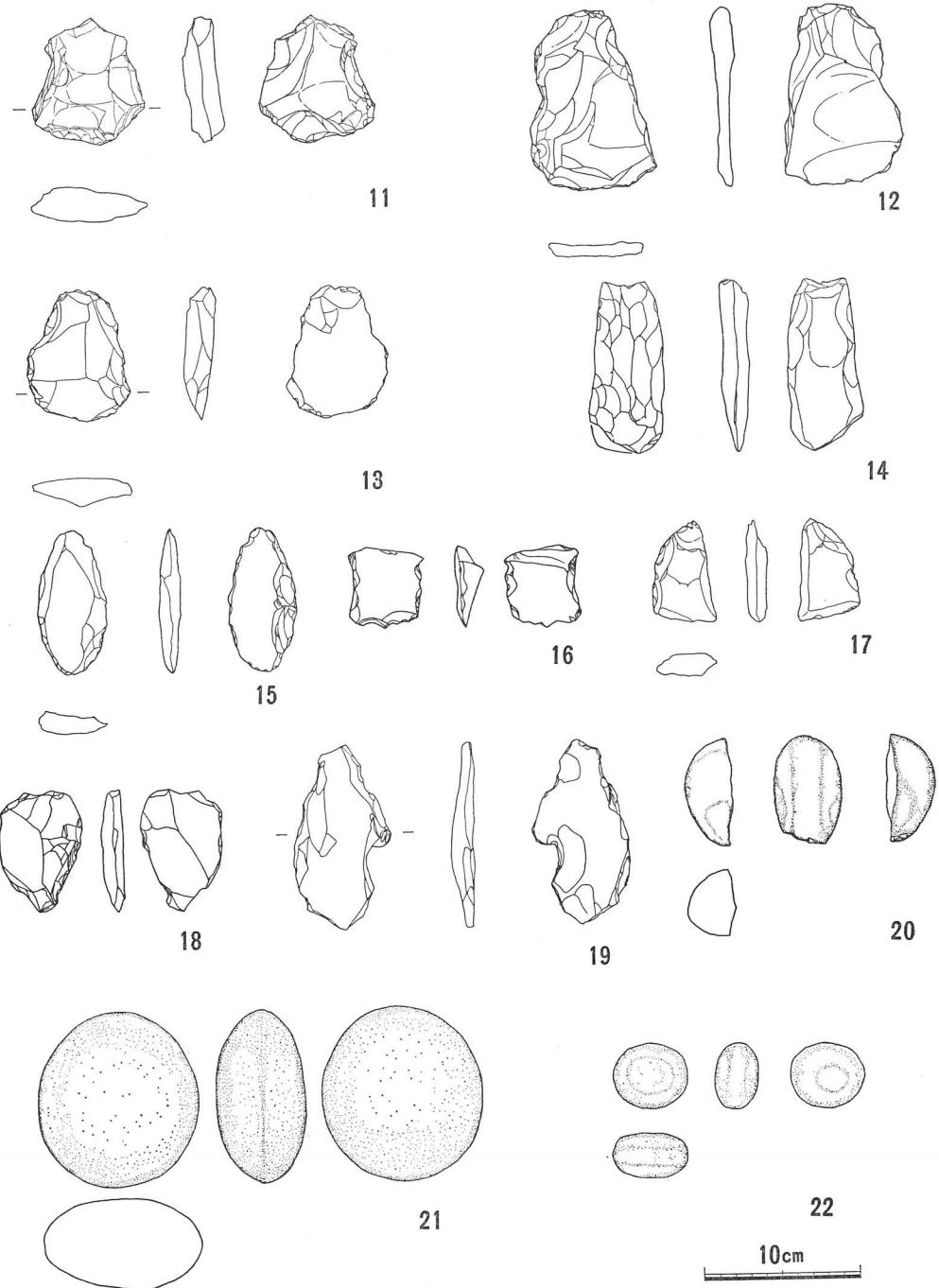
20～22は磨石で，22は小型のものと思われる。石材はいずれも安山岩である。

### (2) 第9号址（第80図）

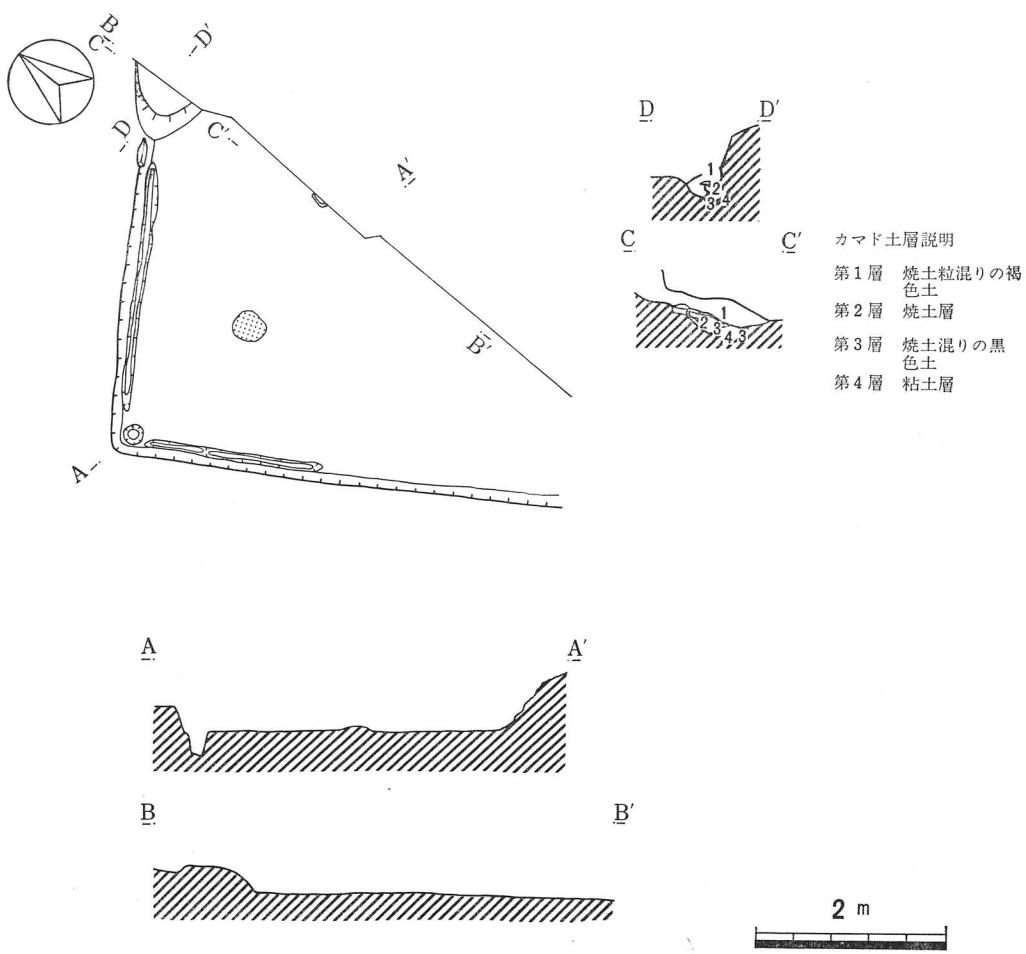
本住居址は，ニ地区C～E—33～39区に位置し，東側半分は調査対象地区外のため，その全貌は明らかではないが，一辺約8mの方形プランを呈するものと思われる。壁は垂直に立ち上がりで，壁高は約30cmを計る。床面は山砂利状の礫混じりのもので軟弱である。覆土は粒子の荒いスコリアを含んだ暗褐色土である。

カマドは北壁のほぼ中央部に位置すると思われ，規模は全長約80cm，幅約110cmと推定され，粘土を主体に構築されたものと思われる。

出土遺物は覆土中より縄文土器片がかなり認められ，本住居に伴うと思われる土師器は床直より若干破片で認められた。（林 宏一）



第79図 第1号址出土石器実測図(2)



第80図 第9号址遺構図

#### 出土遺物

本住居址からは、床直から土師器片が数点出土したが、小破片のために実測は不可能であった。

出土した土師器片は、壺形土器が10点、甕形土器が15点であった。

## 第VI章 遺物

### 第1節 繩文式土器

本遺跡からは、縩文時代早期～同時代晩期までの土器が4,499点出土した。これらの内、1,204点については無文であったり、文様の判読が不可なものであった。残り3,295点は、本遺跡での時間的経過に重点をおくことによって中谷第1群土器～第11群土器までの大別を行った。

中谷第1群土器	縩文時代早期
第2群土器	縩文時代前期
第3群土器	縩文時代中期初頭
第4群土器	縩文時代中期中葉
第5群土器	縩文時代中期後葉
第6群土器	縩文時代中期末葉～後期初頭
第7群土器	縩文時代後期前半
第8群土器	縩文時代後期中葉
第9群土器	縩文時代後期末葉
第10群土器	縩文時代晩期前半
第11群土器	縩文時代晩期前半～晩期末葉

各群の土器は、それぞれさらに形態、文様などにより細別を行い編年的位置づけを試みた。

#### (1) 第1群土器（第85図-1）

縩文時代早期に属する土器を本群とした。本遺跡からの出土は、小破片が数片出土したのみである。1は山形押型文が施文されている。

#### (2) 第2群土器（第85図-2・3）

縩文時代前期に属する土器を本群とした。本遺跡からは、小破片が少量出土したのみである。2・3は縩文（原体L R）を地文とし結節浮線文が施されている。縩文時代前期末葉の「十三菩提式」に比定されるものと思われる。

#### (3) 第3群土器（第85図-4～8）

縩文時代中期初頭に属する従来「五領ヶ台式」と呼ばれているものを一括して本群とした。本遺跡からの出土はきわめて少量である。本群は集合沈線によるもの（第1類）、縩文地のもの（第2類）の二つに分類される。

第1類(4) 口縁部付近の破片で、集合沈線文が施されている。

第2類(5～8) 5・6は口縁部片で、口唇部には刻み目が、やや肥厚した口縁には縩文（原体R L）が、それぞれ施文されている。その直下には、棒状施文具によって列点状に刺突され鋸歯状文が表出されている。7・8は胴部片で、縩文（原体R L）地に半截竹管による沈

線文が「Y」字状に垂下している。

(4) 第4群土器（第85図—10～24）

縄文時代中期中葉に属する從来「貉沢式」・「新道式」・「藤内式」と呼ばれているものを一括して本群とした。本遺跡からの出土は小破片のみである。本群は施文具などによって4類に分類した。

第1類(10～16) 角棒状施文具によって、押引き文、連續刺突文が施文されたものである。

第2類(9・17・18) ペン先状の施文具による、押引き文、連續刺突文が施文されたものである。

第3類(19～23) ヘラ状施文具による、幅広の連續爪形状刺突文が施文されたものである。

第4類(24) 無文の浅鉢で、口唇内面に有刻の隆帶文が施文されたものである。

これらの内、第1類は「貉沢式」、第2類は「新道式」、第3・4類は「藤内式」に、それぞれ比定されるものと思われる。

(5) 第5群土器（第86図—25～77、第81図—1、第106図—1）

縄文時代中期後葉に属する從来「曾利式」と呼ばれているものを一括して本群とした。完形品はなく、やや大形の破片で器形がうかがわれる程度のものは認められたが、大半は小破片であった。本群は9類に分類される。

第1類(25～33) 所謂「重弧文土器」の口縁部片を一括して本類とした。本類はまた、3つに類別される。

a種(25～27) 粘土紐の貼付によってカゴメ状に施されたものである。

b種(28～29) 半截竹管によって重弧状に施されたものである。

c種(30～33) 半截竹管によって斜行状に施されたものである。

第2類(34～37) 地文に条線を有し、粘土紐・沈線による小波状の懸垂文が施されたものである。本類はまた、3つに類別される。

a種(34・35) 粘土紐による小波状の懸垂文が施されたものである。

b種(36) 半截竹管によって小波状の懸垂文が施されたものである。

c種(37) 棒状施文具によって小波状の懸垂文が施されたものである。

第3類(38～42) 地文に縄文、撲糸文を有し、半截竹管文・貼付文が施されたものである。本類はまた、3つに類別される。

a種(38～40) 地文に縄文（原体L R L）を有し、半截竹管によって、弧状沈線文（38）懸垂文（40）が施されている。

b種(41) 地文に縄文（原体L  $\begin{array}{c} R \\ R \\ R \end{array}$  ）を有し、頸部に小波状の貼付文が施されたものである。

c種(42) 地文に撲糸文を有し、頸部に小波状の貼付文が施されたものである。

第4類(43～49) 肥厚した口縁部に、「S」字状、橢円形状の沈線文が施された深鉢の口縁部片（43～46）、胴部片（47～49）を一括して本類とした。

第5類(50～59) いずれも胴部片で、偏平幅広の(57～59)、カマボコ状の(50～56)、隆線によって大渦巻文、渦巻状区画文が、それぞれ施されたものである。

第6類(60～64) 「口」状の区画文が施された深鉢の口縁部片(60～61)、胴部片(62～64)を一括して本類とした。本類はまた、3つに類別される。

a種(60～62 第106図-2) 「口」状の区画文内に綾杉状の条線が施文されたものである。62は区画内に懸垂文が垂下する。

b種(63) 「口」状の区画文内に「ハ」字状沈線文が施文されたものである。

c種(64) 「口」状の区画文内に「ワラビ手状」の懸垂文が施文されたものである。

第7類(65～67) 口縁部に隆帯文(65)、沈線文(66・67)、胴部に櫛歯状施文具によって綾杉文(65)、条線文(66・67)が施文された深鉢の口縁部片を一括して本類とした。

第8類(68～74) 棒状施文具による「ハ」字状沈線文が施文された深鉢を本類とした。本類はまた、4つに類別される。

a種(68) 口縁部に沈線による橢円形状の区画文を有するものである。

b種(69～71) 口縁部文様として、区画文が喪失して沈線化したものである。

c種(72・73) 胴部片で、「カマボコ状」の隆線で懸垂文が施されたものである。

d種(74) 胴部片で、沈線による懸垂文が施されたものである。

第9類(第81—1, 75～77) 櫛歯状施文具による刺突文が施文されたものである。

以上、第5群土器は9類に分類されたが、現行の「曾利式」五細分(曾利I式～曾利V式)との対応は、第1類～第3類は曾利II式、第4類～第5類は曾利III式、第6類は曾利IV式、第7類～第8類は曾利V式、にそれぞれ比定されるものと思われる。

#### (6) 第6群土器(第89図-80～82, 第90図-83～100, 第106-2)

縄文時代中期末葉～後期初頭に属する從来「加曾利E4式」、「称名寺式」と呼ばれているものを一括して本群とした。完形品ではなく、中にやや大形の破片で器形がうかがわれる程度のものが一部認められたが、大半は小破片であった。

第1類(78・79) 太い沈線による区画文内に磨消縄文が施文されたものである。78は口縁部無文帶に列点状刺突文が施されている。

第2類(80・81) 断面三角の微隆線による区画文が施され、その間隙に磨消縄文が施文されている。

第3類(82) 「カマボコ状」隆線によって、口縁部に橢円形状の区画文が施文されたものである。

第4類(83～92, 第106-2) 太い沈線によって曲線的な区画文が施され、その間隙に充填縄文が施されたものである。

第5類(93～98) 太い沈線による曲線的な区画文が施され、その間隙に列点状刺突文が施文されたものである。

第6類(99・100) 太い沈線による曲線的な区画文が施文されたものである。

これらの内、第3類は「加曾利E3式」、第1・2・4類は「加曾利E4式」、第5・6類は「称

名寺2式」に、それぞれ比定されるものと思われる。

(7) 第7群土器(第91図—101~119, 第92図—120~138, 第93図—139~142)

縄文時代後期初頭に属する從来「堀之内式」と呼ばれているものを一括して本群とした。完形品はなく、やや大形の破片で器形がうかがわれる程度のものが一部認められたが、大半は小破片であった。本群は器形と文様から、4類に分類される。

第1類(101~111) 太い沈線で文様が施されたものである。

a種(101) 口縁部に2本の太い沈線で曲線的に施されたものである。

b種(102~103) 若干肥厚した口縁部に太い沈線で同心円状の弧線文が施されたものである。

c種(104~106) 口唇直下に2本の横線と刺突文が施されたものである。

d種(107・111) 口縁部に曲線的な沈線文が施されたものである。

e種(109・110) 胴部に弧状・曲線的な沈線文が施されたものである。

第2類(108~114) 胴部の文様が主として沈線によって構成される甕形土器である。

a種(108) 胴部に曲線的な沈線文が施されているものである。

b種(112・113・114) 頸部に有刻の隆線が巡り、その直下より曲線的な沈線が施されているものである。

第3類(115~119) 胴部の文様が縄文を地文に沈線文によって構成される甕形土器である。

第4類(120~142) 磨消縄文によって文様が構成される深鉢形土器である。

a種(120) 口縁上部に有刻隆線が巡らされ、その直下に沈線文で菱形状区画が施されたものである。

b種(121~131) 口縁上部に有刻隆線が巡らされ、その直下に沈線文で三角形状区画が施されたものである。

c種(132~134) 口縁上部に有刻隆線が巡らされ、その直下に沈線文で曲線的区画が施されたものである。

d種(136~141) 口縁上部に有刻隆線が巡らされ、その直下に横位の磨消縄文が施されたものである。

e種(135・142) 口縁部に横位の磨消縄文が施されたもので、有刻隆線を持たないものである。

これらの内、第1類~第3類は「堀之内I式」に、第4類は「堀之内II式」にそれぞれ比定されるものと思われる。

(8) 第8群土器(第93図~99図—143~241, 第22図—6~9, 第81図・第82図—2~9, 第106図—3・4)

縄文時代後期中葉に属する從来「加曾利B式」と呼ばれているものを一括して本群とした。本遺跡出土土器中最も出土量の多い土器群である。本群は器形と文様から、18類に分類される。

第1類(第93図・第94図—143~154) 胴上半に「横帶文」が巡らされ、内面の胴上部に沈線等が施される深鉢形土器

a 種(第93図—143・144) 口縁上部に有刻隆帯が巡らされ、その直下に「横帯文」が施されたものである。内面の胴上部に沈線文が施されている。

b 種(第93図—145) 2段の「横帯文」と「対弧文」が施されたものである。内面の胴上部に沈線文が施されている。

c 種(第93図・第94図—146・151) 3段の「横帯文」が施されたものである。146は横帯文内に「対弧文」が施文されている。

d 種(第93図・第94図—147~150・152) 「横帯文」と区切り縦線文が施されたものである。

e 種(第94図—154) 「横帯文」が巡らされ、間隙に条線文が施されたものである。

第2類(第94図・第95図—155~168) 胴上半に「縦単対弧文」・「縦連対弧文」が施された深鉢形土器である。

a 種(第94図—155) 「縦単対弧文」と「横帯文」との組み合わせによって施文されたものである。

b 種(第94図・第95図—156~161, 164~168) 「縦連対弧文」と「横連対弧文」との組み合わせによって施文されたものである。

c 種(第95図・第96図—162~163・177) 「入組弧線文」が施されたものである。

d 種(第96図—178) 「入組弧線文」の間隙に列点状刺突文が施されたものである。

第3類(第96図—192~195) 連續横「S」字状文が施された深鉢形土器である。

第4類(第97図—196~198) 幾何学的な集合沈線文が施された深鉢形土器である。

第5類(第99図—230~233) 胴部に斜線文が施された深鉢形土器である。口縁部が「く」の字状に内湾する。

a 種(第99図—230・231) 口唇直下と口縁部・胴部の境に列点状刺突文が巡らされたものである。

b 種(第99図—233) 口縁部に磨消弧線文が施されたものである。

c 種(第99図—232) 口縁部に横線と刺突文・胴部に2本の横線とその間隙に斜線文が施されたものである。

第6類(第99図—234・235) 胴部に斜線文・羽状沈線文が施された深鉢形土器である。

第7類(第99図—236・238) 胴部に斜格子目状沈線文が施された深鉢形土器である。

第8類(第99図—239・第75図—24) 羽状沈線文が施された波状口縁を呈する深鉢形土器である。

a 種(第99図—239) 口唇直下から羽状沈線文が施されたものである。

b 種(第75図—24) 口唇直下に帶状繩文が施されたものである。

第9類(第75図—23) 口縁部に帶状繩文、その直下には羽状沈線文が施された平縁の深鉢形土器である。

第10類(第95図・第96図—171~176) 口縁部に磨消弧線文を持つ(浅)鉢形土器である。

a 種(第95図—171~174, 第96図—176) 弧線文間に「対弧文」が施されたものである。

b 種(第96図—175) 弧線文間に貼付文が施されたものである。

第11類(第96図—181～184) 口縁部に帯状縄文が施された浅鉢形土器である。

a 種(第96図—181) 口縁部に帯状縄文が施され、口縁部と胴部の境に2本の横線が巡らされ、その間隙に刺突文が施されている。

b 種(第82図—9, 第96図—183・184) 口縁部に小突起状貼付文が施されたものである。

第12類(第96図—185) 口縁部に2本の横線文が施され、その間隙に刺突文が施された浅鉢形土器である。

第13類(第96図—180・186～191) 口縁部に有刻の横線が、胴上半に数本の横線文が、それぞれ施された浅鉢形土器である。

a 種(第96図—180・182・188・191) 横線文と縄文が組み合わさったものである。

b 種(第96図—186・187) 横線文と刻み目が組み合わさったものである。

c 種(第96図—189・190) 横線文と「区切り弧線文」とが組み合わさったものである。

第14類(第97図・第98図—199～228) 無文の浅鉢形土器である。内面に沈線文が施されている。

a 種(第97図—199～204) 内面に数本の横線と刻みが施されたものである。

b 種(第97図—205～208) 内面に数本の横線・刻み・円形刺突文がそれぞれ施されたものである。

c 種(第98図—209) 内面に数本の横線と区切り弧線文が施されたものである。

d 種(第98図—210) 内面に対弧文と横線文が施されたものである。

e 種(第98図—211・212・228) 内面に渦巻状沈線文が施されたものである。

第15類(第99図—240) 口唇直下に3本の横線文が施された浅鉢形土器である。

第16類(第99図—241) 本群の粗製土器である。

第17類(第22図—9・第75図—21) 口縁と胴部に斜線文が施された台付鉢形土器である。

第18類(第98図・第99図—213～229) 注口土器を一括して本類とした。

a 種(第98図—213～215) 入組状及び「S」字状沈線文と集合沈線文が施されたものである。

b 種(第98図—216) 横線文と「縱連対弧文」が施されたものである。

c 種(第98図—217～219) 集合沈線文が施されたものである。

d 種(第98図—220～221) 渦巻状等の曲線的沈線文が施されたものである。

e 種(第98図—222～227, 第99図—229) 連続横「S」字状文、集合沈線文が施されたものである。

これらの内、第1・2・3・4・13・14・18類は加曾利B1式に、第5・6・7・10・12類は加曾利B2式に、第8・9・11・16・17類は加曾利B3式に、それぞれ比定されるものと思われる。

#### (9) 第9群土器

縄文時代後期末葉に属するものを本群とした。本群は器形と文様とから、13類に分類される。

第1類(第22図—10・15・16, 第29図—10, 第101図—257・259) 帯状縄文が施された深鉢形土器である。

a 種(第22図—10, 第101図—257) 口縁平縁で胴下半に膨みを有する深鉢形土器で, 口縁部に帶状繩文, 胴下半にコンパス文が施されたものである。

b 種(第22図—16・第29図—10・第101図—259) 口縁部平縁で内湾する深鉢形土器で, 口縁部に帶状繩文, 胴下半にコンパス文が施されたものである。

c 種(第22図—15) 波状口縁を呈する深鉢形土器で, 胴上半に帶状繩文と, その間隙に沈線文が施されたものである。

第2類(第101図—250・251) 波状口縁を呈した深鉢形土器で, 胴上半に稻妻状沈線文が施されたものである。

第3類(第101図—261) 頸部に有刻隆線が巡らされ, 胴部に斜行沈線文が施された粗製土器である。

第4類(第107図) 浅鉢形土器である。

a 種(第107図—15) 口唇部とその直下に瘤状貼付文が施され, そこを起点として弧状の沈線文が巡らされたものである。

b 種(第107図—16) 口縁部に横帯区画文が施され, その間隙に対弧状沈線文, 瘤状貼付文が施文されたものである。

c 種(第101図—260) 口縁部に帶繩文と有刻の貼付文が施され, 胴部に斜行沈線文が施文されたものである。

第5類 口縁部に沈線文, 胴部に羽状沈線文が施された口縁部平縁でやや外反氣味の深鉢形土器である。

a 種(第100図—243, 第83図—17) 口唇直下に一条の横線文が巡らされたものである。

b 種(第100図—242) 口縁部に二条の横線文が巡らされたものである。

第6類 口唇部に沈線文, 胴部に羽状沈線が施された, 口縁部平縁で「く」の字状に内湾した深鉢形土器である。

a 種(第106図—6) 口縁部に三条の横線文が施されたものである。

b 種(第21図—2) 口縁部に四条の横線文が施されたものである。

c 種(第100図—244) 口縁部に帶状繩文, ボタン状貼付文が施されたものである。

d 種(第100図—245, 第106図—8) 口縁部に緩い弧線状の沈線文と小突起状貼付文が施されたものである。

e 種(第100図—246) 口縁部に貼付文と四条の横線文が施されたものである。

第7類 口縁部に沈線文, 胴部に羽状沈線文が施された口縁部平縁で, やや直立氣味の深鉢形土器である。

a 種(第83図—16, 第100図—243) 口縁部に1本の沈線文が施され, 胴部に羽状沈線文が施されたものである。

b 種(107図—9) 口縁部に沈線で横帯区画文が施されてその間隙に対弧状沈線文が施されているものである。

c 種(第83図—19) 口縁部に沈線で横帯区画が施され, その間隙に二本の沈線で対弧状線文

が施されたものである。

d 種(第83図—18) 口縁部に三条の横線が巡らされ、その間隙に刺突文が施されたものである。

e 種(第100図—247) 口縁部に三条の横線と縦長の有刻貼付文が施されたものである。

第8類(第15図—21) 口縁部波状を呈する深鉢形土器で、口唇直下に帶繩文が施されたものである。胴部には羽状沈線文が施されている。

第9類 口縁部に沈線文、小突起状貼付文、胴部に羽状沈線文が施された浅鉢形土器である。

a 種(第14図—20, 第26図—1) 口縁部に一段の帶状繩文が施されたものである。

b 種(第106図—5) 口縁部に五条の横線と二段の帶状繩文が施されたものである。

c 種(第26図—2) 口縁部に二条の横線文とその始点と終点との間隙に上下2列のボタン状貼付文が施されたものである。

d 種(第106図—7) 口縁部に四条の沈線文と小突起状の貼付文が施されたものである。

第10類 口縁部が波状又は小突起を有する深鉢形土器で、口縁部に有刻突帯又は、貼付文を有するものである。

a 種(第29図—8) 口縁部に対弧状沈線文と縦区切りの有刻貼付文が施されたものである。

b 種(第76図—26) 口縁部に対弧状沈線文と縦区切りの有刻貼付文が施されたもので、口唇直下に繩文が施されている。

第11類 口縁部平縁の深鉢で、口縁部に沈線文及び縦長の貼付文が施されたものである。

a 種(第16図—38) 口縁部に二条の有刻隆線と縦長の貼付文が施されたものである。

b 種(第16図—39) 口縁部に三本の沈線文と縦区切りの貼付文が施されたものである。

第12類 波状口縁を呈する深鉢形土器で、口唇に沿って沈線文が巡らされたものである。

a 種(第22図—14, 第76図—28) 波頂部及び波頂直下に円形刺突が施され、それより口縁に沿って沈線文が巡らされたものである。

b 種(第101図—254) 沈線間に、列点文が施されたものである。

第13類 口縁部平縁又は緩い波状を呈する深鉢形土器で胴上半に瘤状貼付文と横帯文が施され、横帯文内に刺突文が充填されたものである。

a 種(第22図—11~13) 横帯文が口縁部に沿って巡るものである。

b 種(第101図—253) 横帯文が緩い弧を描くものである。

これらの内、第1類—a種は曾谷式、同類b・c種は安行1式の精製の深鉢形土器に、それぞれ比定されると思われる。第3類・第4類は、第1類に伴う粗製の深鉢形土器、及び浅鉢形土器と思われる。第5類~第9類は、胴部に羽状沈線文を有する土器群で、本群の中で主体をなす存在である。本書ではこれを「羽状沈線文系土器群」と仮称し、第VII章でその編年的位置付けを試みるので、ここではあえて触れないでおくこととする。

第2・10~12類は、東海地方の吉胡下層式及び大坪式に、第13類は、東北地方のコブ付土器にそれぞれ、その系譜を求める事のできる土器群と思われる。

## (10) 第10群土器

縄文時代晚期前半に属する從来「清水天王山式」と呼ばれているものを一括して本群とした。本群に属するものはすべて深鉢で、有文のものは、口縁平縁で緩く内湾又は直立する深鉢形土器(第1形式)、口縁平縁で外反する深鉢形土器(第2形式)、口縁部に小突起を有する深鉢形土器(第3形式)、波状口縁を呈する深鉢型土器(第4形式)の4つの器形を有する。無文のものは、口縁部平縁の深鉢形土器(第5形式)、口縁部に小突起を有する深鉢型土器(第6形式)、口縁部が小波状を呈する深鉢型土器(第7形式)の3つの器形を有する。

有文のものは、大きく羽状沈線文が施された胴部文様帶〔II文様帶〕、弧線文、巴状入組文、三叉状入組文が施された口縁部文様帶〔I文様帶〕の二つの文様帶によって構成されている。なお、本土器群中には、口縁部に有刻突帯が巡らされた一群が認められ、これには口唇部と有刻突帯との間隙に沈線文、三叉文が施されている。これを〔I文様体〕から分離し〔1a文様帶〕と称することにする。

これらの文様帶の構成から本群の土器群は、〔I文様帶〕+〔II文様帶〕で構成されているもの<A類型>、〔1a文様帶〕+〔1文様帶〕+〔II文様帶〕で構成されているもの<B類型>、〔1a文様帶〕+〔1文様帶〕で構成されているもの<C類型>、〔I文様帶〕のみで構成されているもの<D類型>、無文のもの<E類型>の以上5つの類型に分類される。文様帶の構成(A~E類型)と器形(1型~7型)とから以下のように類別される。

〔A類型〕 I・II文様帶で構成されているものである。

A<sub>1</sub>型式 口縁部が平縁で緩く内湾又は直立する深鉢形土器である。

第1類(第23図-18・25、第76図-37、第102図-262・265・266) 1文様帶に弧状沈線文とその間隙に巴状入組文が1段施されたものである。

第2類(第76図-38) 1文様帶に弧状沈線文とその間隙に「S」字状沈線が施されている。

第3類 1文様帶に弧状沈線文と巴状入組文とが一体化した入組文が1段施されたものである。弧線文の原型を留めるものa種(第15図-26・27・28、第76図-39、第102図-263~266、268、第107図-10)、弧線文が崩れたものb種(第12図-1、第15図-25、33、第23図-23、24、第102図-273)に類別される。

第4類(第76図-44・45) 1文様帶に弧状沈線文とその間隙に2段の巴状入組文及び三叉文が施されたものである。

第5類(第15図-32、第77図-48) 1文様帶に流水状の三叉状入組文が施されたものである。

A<sub>2</sub>型式 口縁部が平縁で外反する深鉢形土器である。

第1類(第21図-4) 1文様帶に弧状沈線文とその間隙に巴状入組文が施されるものである。

第2類(第23図-18・19、第76図-43) 1文様帶に弧状沈線文と巴状入組文とが一体化した入組文が施されたものである。

第3類(第15図-29~31、第23図-23、第76図-41、第83図-20、第102図-269~271) 1文様帶に弧状沈線文が崩れて入組化した文様が施文されたものである。

第4類(第76図—42) 1文様帶に2段の入組文が施されたものである。

第5類(第83図—21・第76図—41, 第107図—21) 1文様帶に流水状の三叉状入組文が施されたものである。

[B類型] 1a・1・2文様帶で構成されているものである。

B<sub>4</sub>型式 口縁部が波状を呈する深鉢形土器である。

第1類(第12図—2, 第103図—284・285) 1文様帶に三叉状入組文が施されたものである。

[C類型] 1a・1文様帶で構成されているものである。

C<sub>3</sub>型式 口縁部に小突起を有する深鉢形土器である。

第1類(第107図—13) 1文様帶に流水状の沈線文が施されたものである。

第2類(第107図—12) 1文様帶に入組文が施されたものである。

第3類(第12図—3) 1文様帶に流水状の入組文が施されたものである。

C<sub>4</sub>型式 口縁部が波状を呈するものである。

第1類(第12図—4・5) 1文様帶に、三叉状の入組文が、施されたものである。

第2類(第12図—6) 1a文様帶は退化し、瘤状貼付文と沈線文と化し、1文様帶は連鎖化した三叉状入組文が施されたものである。

[D類型] 1文様帶のみで構成されているものである。

D<sub>2</sub>型式 口縁部平縁で外反した深鉢形土器である。

第1類(第21図—3, 第23図—21) 1文様帶に弧状及び橢円形状の沈線文が施されたものである。

第2類(第77図—50, 第103図—291) 1文様帶に流水状の沈線文が施されたものである。

第3類(第103図—292・293) 1文様帶に流水状の三叉状入組文が施されたものである。

D<sub>3</sub>型式 口縁部に小突起を有する深鉢形土器である。

[E類型] 粗製土器である。

E<sub>5</sub>型式 口縁部平縁の深鉢形土器である。

第1類(第84図—24) 口縁部が外反するもの。

第2類(第84図—22・26) 口縁部が「く」の字状に外反するもの。

第3類(第84図—23) 口縁部が内弯するもの。

E<sub>6</sub>型式(第12図—8, 第108図—21・22) 口縁部に小突起を有する深鉢形土器である。

E<sub>7</sub>型式 口縁部が小波状を呈する深鉢形土器である。

第1類(第13図—9・10, 第84図—27) 口縁部が小波状を呈するもの。

第2類(第13図—11・12, 第84図—25) 口縁部が緩い波状を呈するもの。

以上、本群を器形及び文様帶の構成で大別を、文様で細別を試みた。これらの編年的位置付けは、第VII章で触れようと思うので、ここでは詳しくは取り扱わないが、A<sub>1</sub>型式、第1類・第2類・第3類a種・第4類、A<sub>2</sub>型式、第1類・第2類、D<sub>2</sub>型式、第1類は大洞B式及び安行3a式に、A<sub>1</sub>型式、第3類b種、A<sub>2</sub>型式、第3類・第4類、B<sub>4</sub>型式、第1類、C<sub>3</sub>型式、第1類・

第3類，C<sub>4</sub>型式，第1類，D<sub>2</sub>型式，第2類は大洞B—C式及び安行3b式に，A<sub>1</sub>型式，第5類，A<sub>2</sub>型式，第5類，C<sub>4</sub>型式，第2類，D<sub>2</sub>型式，第3類は，大洞C<sub>1</sub>式及び安行3c式に，それぞれ併行するものと思われる。

#### (1) 第11群土器

本群は縄文時代晩期前半～末葉に属する第10群以外の土器群を一括して本群とした。器形と文様から12類に分類される。

第1類(第16図—58，第17図—61，第23図—34・35，第104図—294～296・298・299) 磨消縄文及び三叉文が施された深鉢形土器である。

第2類 磨消縄文が施された浅鉢形土器である。

a種(第17図—60，第77図—58・61，第104図—297) 口縁部外反気味に開いた浅鉢形土器で口縁部に弧状の磨消縄文がまたその間隙に三角形状の沈線が施されたものである。

b種(第108図—19) 口縁部やや内湾気味に開いた浅鉢形土器で，口縁部に玉抱き三叉状文が施文されたものである。

c種(第104図—301) a種と同様の器形を呈し，口縁部に太い沈線文で施された連續横「S」字状文と三叉文が施文されたものである。

d種(第17図—62) 口唇部で「く」の字状に外反する浅鉢形土器で口縁部に弧状の磨消縄文が施文されたものである。

e種(第104図—300) 口縁部内湾する浅鉢形土器で，太い沈線文と三叉文が施文されたものである。

f種(第77図—59・60・304) 曲線的な磨消線文が施された浅鉢形土器である。

第3類(第77図—64・65) 弧線状の沈線文が施され，その間隙に三叉文，刺突文が施された浅鉢形土器である。

第4類(第108図—18) 口縁部直立し，胴部で膨みを有する浅鉢形土器で胴上半部に入組文が施されたものである。

第5類(第23図—36，第77図—66，第104図—302，第108図—20) 大洞系の浅鉢形土器で，口縁部に羊歯状沈線文が施文されたものである。

第6類 鍵ノ手状入組文(雷文)が施文された浅鉢形土器である。

a種(第17図—63，第77図—52・54・55，第104図—307～310) 太い沈線文で鍵ノ手状入組文(雷文)が施されたものである。

b種(第77図—56，第104図—307～310) 鍵ノ手状入組文(雷文)が退化して工字文風に施されたものである。

第7類(第108図—17) 口縁部が直立する浅鉢形土器で口縁部に有刻突帯と三叉文が施されたものである。

第8類(第104図—306) 縄文が施文された口縁部に太い沈線文で木ノ葉状文が施されたものである。

第9類(第104図—305) 「S」字状沈線が施文されたものである。

第10類(第104図—315・35) 突帯文が施文されたものである。

第11類(第77図—68・69, 第104図—316) 櫛齒状施文具で波状沈線文が施されたものである。

第12類(第104図—313) 口縁部に棒状施文具による刺突文が, その直下には, 横位に撲糸文が施されたものである。

これらの内, 第1類~第4類は安行系の, 第5類は大洞系の, 第6類~第10類は, 中部・東海東部の, それぞれの土器群と思われ, 又第11類は東海西部の「大宮式」に比定されるものと思われる。

大洞系とした第5類は, 羊齒状文が施され, 大洞B—C式に比定されると思われる。

安行系とした第1類~第4類の内で, 第1類は安行3a式に, 第2類a・b・d・e種, 第4類は安行3b式に, 第3類は安行3c式に, それぞれ比定されるものと思われる。第2類C種は「T」字形三叉文が施され, 佐野1式にその系譜を求めることができると思われる。また同f種は大洞B—C式に比定されるものと思われる。

第6類は, a種・b種に分類され, 前者は大洞B—C式に, 後者は大洞C<sub>1</sub>式に, それぞれ併行するものと思われる。

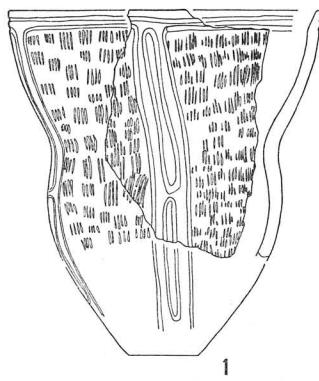
第7類~第10類は, 第6類を含めて, 中部地方及び, 東海東部において, 清水天王山式と共に晩期前半を構成する土器群である。

第12類は, 口縁直下に横位に撲糸文が施されたもので, 大洞A式に併行するものと思われる。

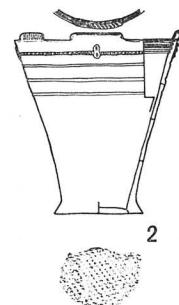
本群は, 浅鉢形土器が主体を占め, 深鉢形土器が主体を占める第10群土器と相まって, 当遺跡の晩期の土器群を構成しているものと思われる。

第22表 配石及びグリッド出土の土器(実測図)一覧表

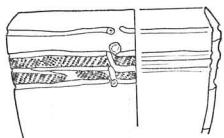
No.	器 形	施 文 具	文 標 様	胎 土	色 調	時期・分類	出 地 点
1	深鉢形土器	棒状施文具 櫛齒状施文具	口唇直下に1本の沈線が巡らされその直下より「T」状の区画文が施されている。区画文間に長楕円形の沈線文が, 区画文内には櫛齒状施文具による刺突文が, それぞれ施文されている。	雲母・石英粒・長石を含有した, やや粒子の荒いものである。	明褐色	第5群第9類	表 採
2	深鉢形土器	棒状施文具	3単位の突起上には棒状施文具による羽状の刺突が, その他の口唇部には刻みが, それぞれ施され, 口縁部には「8」字状貼付文を伴う有刻の隆線が1本巡らされ, その直下には3本の横線が巡らされている。器内面には4本の横線が巡らされ, 横線間には有刻の隆帶が1本施文されている。	石英粒・長石を若干含有したよく精選されたものである。	黒褐色	第8群第1類	D—3 第VI層
3	深鉢形土器	棒状施文具 繩文原体(R L)	口縁部に刺突文と組み合わさった横線が巡らされ, その直下に	雲母・白色砂粒子・石英粒	暗黒色	〃	C—1 第VII層



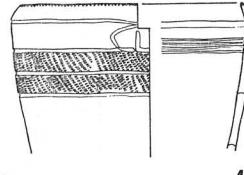
1



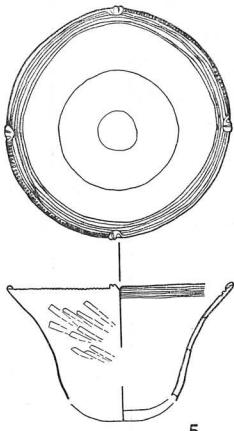
2



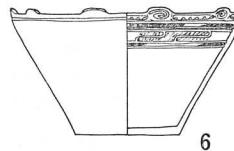
3



4



5



6

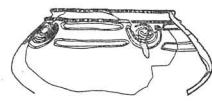


7

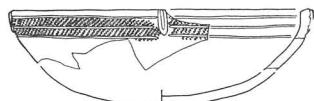
20cm

第81図 配石及びグリッド出土土器実測図（1）

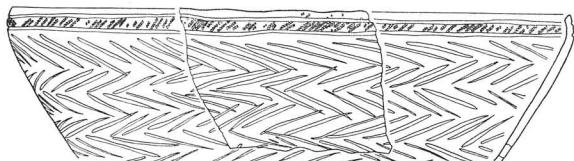
No.	器形	施文具	文様	胎土	色調	時期・分類	出土地点
4	深鉢形土器	棒状施文具 縄文原体(R L)	2段の横帯文が施されている。横帯文を構成している横線の始点と終点には刺突文が施され、「お玉杓子文」状に構成されている。器内面には4本の横線が施されている。 口縁部に1本の横線が巡らされその直下には「対弧文」、2段の横帯文が、それぞれ施されている。器内面には4本の横線が巡らされている。	を含有			
5	浅鉢形土器	棒状施文具	無文の浅鉢形土器で、口唇に4単位の小突起を有し、器内面には3本の横線が巡らされている。	白色粒・雲母 を若干含有	黒褐色 〃	第8群第1類 第8群第14類	C—1 A—14 第VII層 第VI層
6	浅鉢形土器	棒状施文具	口唇に10単位の小突起を有し、その直下に横線が1本巡らされている。器内面口唇部には渦巻状沈線文、列点状刺突が施されその直下には5条の横線が巡らされ、その間隙には細い爪形文・磨消縄文が施文されている。	白色粒子を若 干含有	〃	〃	D—3
7	注口土器	半截竹管	口縁部には半截竹管による横線が9本巡らされ、横線の始点と終点の間には「対弧文」状の沈線文が施されている。横線間には列点状刺突が施文されている。	雲母・白色粒 を若干含有す るよく精選さ れたものであ る。	〃	第8群第18類	B—4 第VII層
8	注口土器	棒状施文具	口唇部及び、その直下に、各々有刻隆線が巡らされ、胴部には4単位の渦巻状沈線文と、その間隙には上下2段の横方向の長楕円形状沈線文が施文されている。	雲母を多量 に、石英粒を 若干含む粒子 の細かいもの である。	灰白色	〃	B—10 第VII層
9	浅鉢形土器	棒状施文具 縄文原体(L R)	口縁部に、二段の「横帯文」と縦長の貼付文が施文されている。	白色粒子・雲 母を含有	灰褐色	第8群第11類	B—13 E—23 第VI層 第VI層 (スコリ ア中)
10	深鉢形土器	棒状施文具 縄文原体(L R)	口縁部には2本の横線と、その間に縄文が、それぞれ施され、胴部には羽状沈線文が施文されている。	石英粒・白色 粒子を若干含 有	〃	第9群第9類	ハ地区 第VI層 (スコリ ア上) 2号址 覆土
11	浅鉢形土器		無文の小型浅鉢形土器	長石・石英粒 をかなり多量 に含有	明褐色	〃	Z—31 第VI層
12	深鉢形土器	棒状施文具	口縁部には2本の横線と、上下2列のボタン状貼付文が、それ	白色粒・雲母・ 石英粒を若干	黒褐色	〃	E—25 第VI層



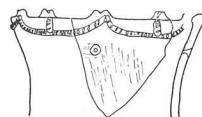
8



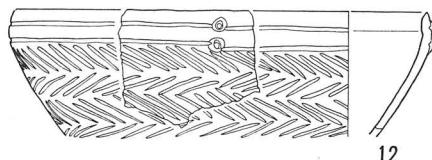
9



10



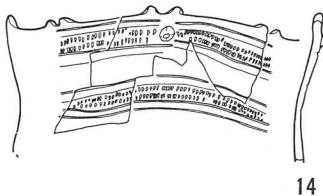
11



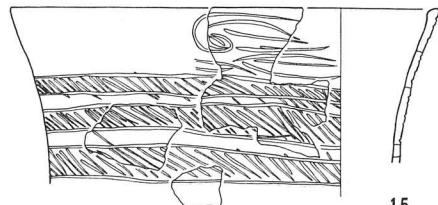
12



13



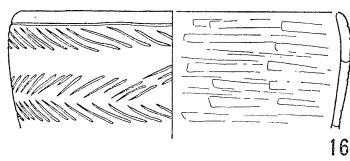
14



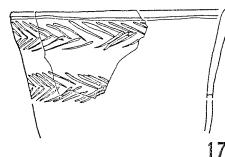
15

第82図 配石及びグリッド出土土器実測図（2）

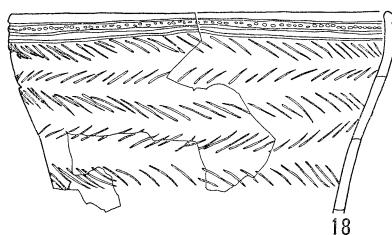
No.	器 形	施 文 具	文 様	胎 土	色 調	時期・分類	出 土 点
			ぞれ施され、胴部には羽状沈線文が施文されている。	含有する緻密なものである。			(スコリア中) 2号址 覆土口地区
13	小型深鉢形土器	棒状施文具	口縁部には列点状刺突文が1列巡らされ、頸部から胴上半にかけては、2本の横線と弧状沈線文が施文されている。	雲母・長石を多量に含有	灰褐色	第11群	
14	深鉢形土器	半截竹管	口縁部ゆるやかな波状を呈し、波頂部に2つの小突起を有する。口縁部に呼応してゆるい波状を呈する「横帶文」が巡らされ、その間隙に刺突文が充填されている。	白色粒子・石英粒を含有	茶褐色	第9群第13類	B—25 第VII層 C—26 第VII層
15	深鉢形土器	棒状施文具	口縁部に入組文、胴部には「横帶文」が巡らされ、その間隙に、斜行沈線文が施文されている。	大粒な白色粒子を含有	灰褐色	第10群	A—26 第VII層 B—26 第VII層
16	深鉢形土器	棒状施文具	口縁部に1本横線が巡らされ、その直下より、羽状沈線文が施文されている。	雲母・白色粒子を含有	暗褐色	第9群第7類	D—24
17	深鉢形土器	棒状施文具	"	雲母を多量に含有	黒褐色	第9群第5類	ハ地区
18	深鉢形土器	ヘラ状施文具 棒状施文具	口縁部に棒状施文具によって、3本の横線が巡らされ、その内上中2本の横線間には列点状刺突文が施され、胴部にはヘラ状施文具による羽状沈線文が施文されている。	赤褐色・白色粒子を多量に、雲母を少量含有	茶褐色	第9群第7類	A—25
19	深鉢形土器	棒状施文具 ヘラ状施文具	口縁部には2本の横線によって横帯区画が形成され、その間隙には対弧状沈線文が施され、胴部にはヘラ状施文具による羽状沈線文が施文されている。	雲母・白色粒子を若干含有	黒褐色	"	A—26 第VII層
20	深鉢形土器	棒状施文具	口縁部には入組文、胴部には羽状沈線文が、それぞれ施されている。	雲母・白色粒子・赤色粒子を含有	口縁部付近は赤褐色 胴部は茶褐色	第10群	B—23 第VII層
21	深鉢形土器	棒状施文具	口縁部には流水化した三叉状入組文が2段施され、胴部には羽状沈線文が施文されている。 口縁部文様帶は拡大化し、胴部文様帶は縮小化(退化)の傾向がうかがわれる。	雲母・長石を多量に、石英粒を少量含有	茶褐色	"	D—15
22	深鉢形土器 (粗製土器)	棒状施文具	口縁内面に1本の横線が巡らされている。	白色粒子を多量に、雲母・石英粒を若干含有	暗褐色	"	A—33



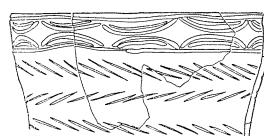
16



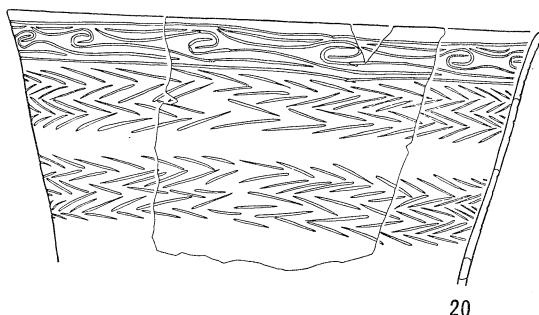
17



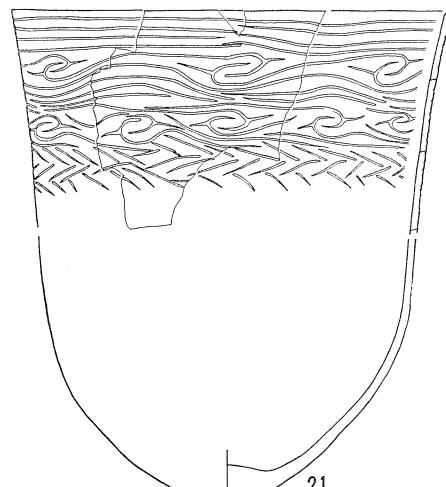
18



19



20

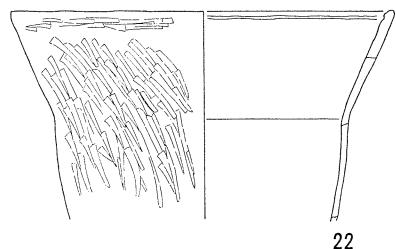


21

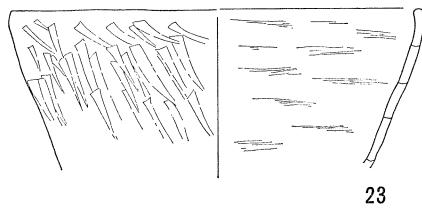
A scale bar at the bottom right of the drawing, labeled "20 cm".

第83図 配石及びグリッド出土土器実測図（3）

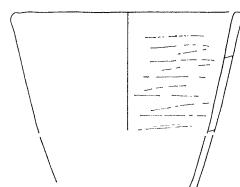
No.	器 形	施 文 具	文 様	胎 土	色 調	時期・分類	出 地 点
23	深鉢形 土器 (粗製 土器)		器外面はヘラ状工具による斜めの調整痕が、器内面はハケ目状工具による横方向の調整痕が、それぞれ認められる。	白色粒子・雲母を多量に含有	灰褐色	第10群	A-25
24	深鉢形 土器 (粗製 土器)		器面には指頭による調整痕が認められる。	雲母を多量に含有	暗褐色	"	A-3 第Ⅶ層
25	深鉢形 土器 (粗製 土器)	棒状施文具	波状口縁を呈し、その波頂の一つに棒状施文具による刻み目が施されている。器面にはヘラ及び指頭による整形が施されている。	雲母・白色粒子・石英粒を多量に含有	黒褐色	"	E-31
26	甕形土 器 (粗製 土器)		器面にヘラ状工具による横方向の調整痕が認められる。	"	暗褐色	"	表 採
27	甕形土 器 (粗製 土器)		口唇に指頭による押圧が加えられている。器内外面ともにヘラによる横方向の調整が施されている。胴下半は2次焼成を受けてもろくなっている。	雲母・白色粒子を含有	黒褐色	"	C-15 第Ⅶ層



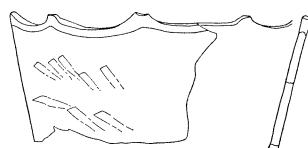
22



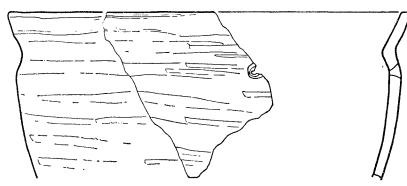
23



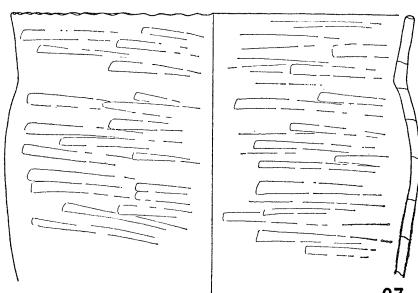
24



25



26



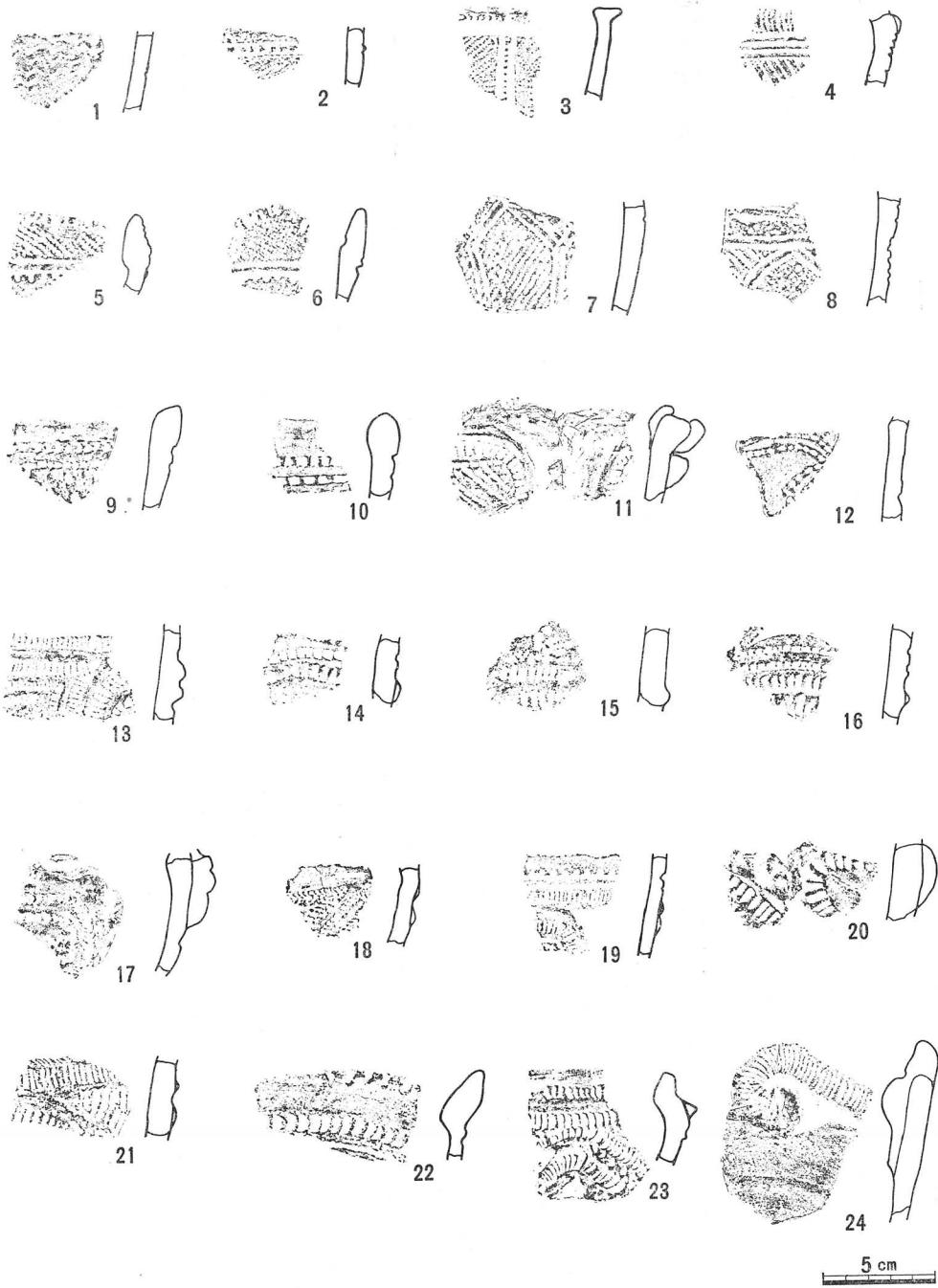
27

20cm

第84図 配石及びグリッド出土土器実測図（4）

第23表 配石出土土器一覧表

No.	部位	施文具	文様	胎土	色調	時期・分類	出土点
1	胴部	棒状施文具	山形押型文が横位に施文されている。	雲母を多量に含有	明灰色	第1群	D-13 第VII層
2	"	半截竹管 縄文原体(L R)	縄文を地文として、横位に結節浮線文が施文されている。	雲母・石英粒等をかなり密に含有	明褐色	第2群	A-15 第VIII層
3	口縁部	半截竹管 縄文原体(L R)	縄文を地文として、口唇直下に横位に1本、それより垂下するよう1本、それぞれ結節浮線文が施文されている。	長石を若干含有した粒子の細かいものである。	暗茶褐色	"	D-15 第VI層
4	"	半截竹管	集合沈線文が施文されている。	雲母・長石・石英粒を若干含有	暗灰色	第3群第1類	B-5 第IX層
5	"	半截竹管 縄文原体(R L)	やや肥厚した口縁に縄文が施文され、その直下には2本の沈線文と三角形の陰刻文が施されている。	石英粒、長石、雲母をやや密に含有	明褐色	第3群第2類	A-13 第VI層
6	"	"	"	"	"	"	A-10 第VI層
7	胴部	"	縄文を地文として、半截竹管によって「Y」字状の懸垂文が施文されている。	"	暗茶褐色	"	A・B -9・10 第VIII層
8	"	"	"	"	明茶褐色	"	E-27 第VII層
9	口縁部	角棒状の施文具	連続刺突文が施文されている。	長石・雲母をやや密に含有	暗灰色	第4群第2類	D-11 第VI層
10	"	"	押引き文が施文されている。	長石を若干含有	暗茶褐色	第4群第1類	B-17
11	"	"	押引き文、連続刺突文が施文されている。	石英粒・長石粒・雲母を密に含有	"	"	C-1 第VII層
12	胴部	"	押引き文が施文されている。	長石等の粒子をまばらに含有		"	
13	"	"	連続刺突文が施文されている。	石英粒・長石・雲母をかなり密に含有	明茶褐色	"	A-36 第VII層
14	"	"	"	雲母・長石を多量に含有	"	"	B-18 第VIII層
15	"	"	"	"	明褐色	"	C-11 第IV層
16	"	"	"	石英粒・雲母・長石をかなり密に含有	"	"	B-9 第VIII層
17	"	ペン先状に尖った施文具	押引き文が施文されている。	"	明茶褐色	第4群第2類	Z-36 第VI層
18	"	"	"	石英粒・雲母・長石が若干含有	"	"	D-11 第VIII層



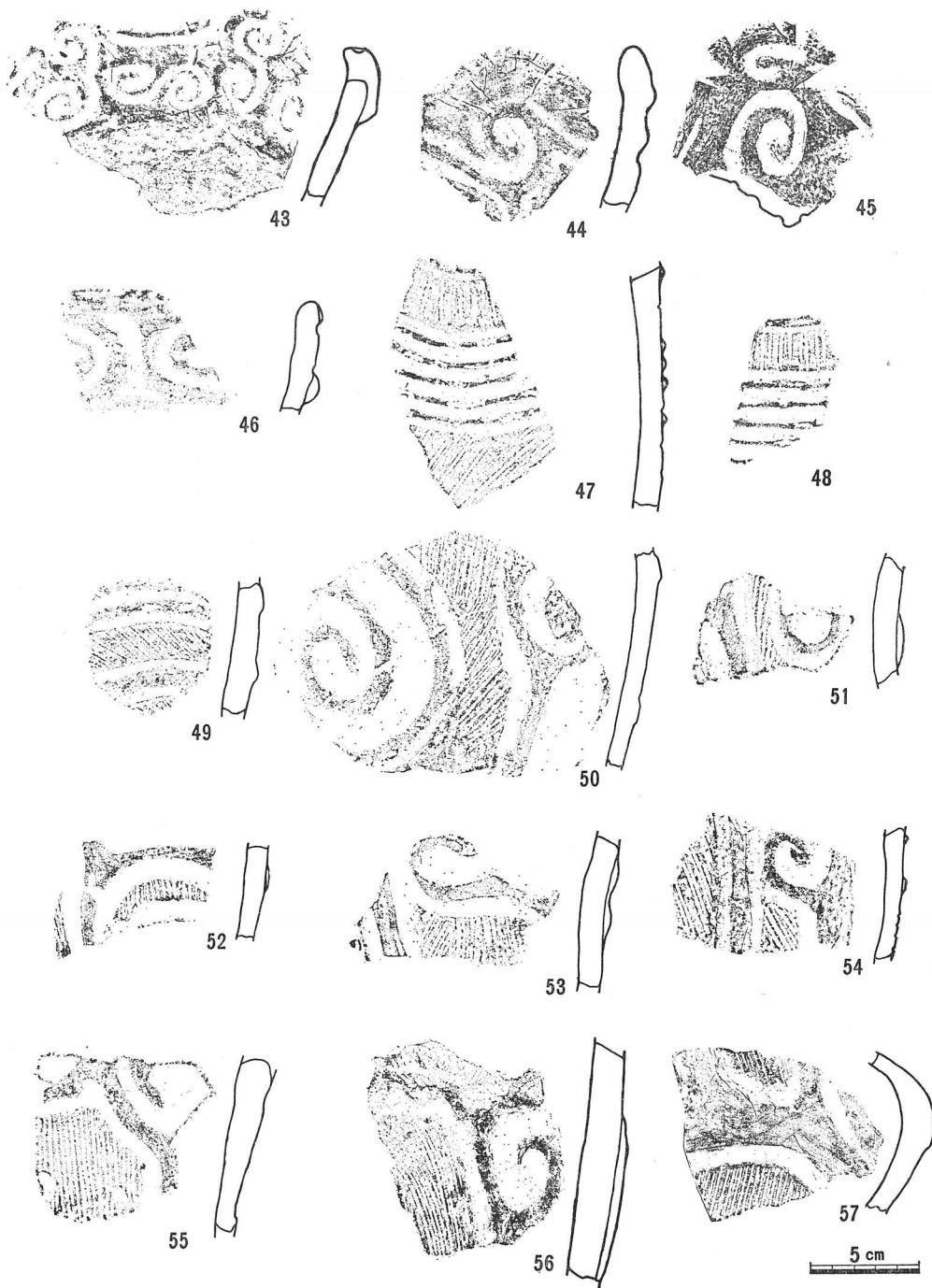
第85図 配石及びグリッド出土土器拓影図（1）

No.	部 位	施 文 具	文 様	胎 土	色 調	時 期・分 類	出 土 点
19	胴 部	ヘラ状施文具 棒状施文具	連続爪形状刺突文、三角形印刻 状の刺突文が、それぞれ施文さ れている。	石英粒・雲母・ 長石を若干含 有	明褐色	第4群第3 類	B-11 第VII層
20	"	ヘラ状施文具	連続爪形状刺突文が施文さ れている。	長石・雲母を かなり含有	"	"	B-15 第VIII層
21	"	"	"	"	暗灰色	"	B-9 第VIII層
22	口縁部	"	"	"	明茶褐色	"	B-11 第VII層
23	"	"	連続爪形状刺突文によって、山 形状の横帯区画文を形成してい る。	雲母・石英粒 を若干含有	明褐色	"	A-15 第VI層
24	"	"	器外面無文の浅鉢、器内面の口 唇部に有刻の隆帯が施文さ れている。	"	"	第4群第4 類	A-33 第VI層
25	"	半截竹管	カゴメ状の貼り付け文が施文	石英粒・長石 を多量に含有	暗褐色	第5群 第1類-a	C-11 第VIII層
26	"	"	"	雲母・石英粒 を多量に含有	"	"	B-3 第IX層
27	"	"	"	石英粒・長石 を多量に含有	"	"	A-1 第VI層
28	"	"	重弧状沈線文が施文	石英粒・砂粒 を多量に含有	"	第5群 第1類-b	C-11 第VIII層
29	"	"	"	石英粒・砂粒・ 雲母を多量に 含有	"	"	C-13 第VII層
30	"	"	斜行状沈線文が施文	石英粒・長石 を多量に含有	明褐色	第5群 第1類-c	C-2 第VII層
31	"	"	"	"	明茶褐色	"	C-15 第VII層
32	"	"	"	"	"	"	D-10 第VI層
33	"	"	"	石英粒を多量 に、雲母を若 干、それぞれ 含有	暗褐色	"	C-3 第IX層
34	胴 部	"	条線を地文として、貼り付けに よる波状懸垂文が施文	石英粒・砂粒 を多量に含有	明茶褐色	第5群 第2類-a	C-4 第IX層
35	"	櫛歯状施文具	"	"	暗茶褐色	"	A-14 第VII層
36	"	半截竹管	条線を地文として、半截竹管に よって波状懸垂文が施文	石英粒・長石 を多量に含有	明褐色	第5群 第2類-b	C-10 第VII層
37	"	ヘラ状施文具 棒状施文具	ヘラ状施文具による条線を地文 として、棒状施文具によって波 状懸垂文が施文	石英粒・雲母・ 砂粒を含有	明茶褐色	第5群 第2類-c	C-9 第VII層
38	口縁部	半截竹管 繩文原体（L R L）	繩文を地文として、半截竹管に よって弧状沈線文が施文	雲母を多量 に、石英粒・ 砂粒を若干、 それぞれ含有	暗茶褐色	第5群 第3類-a	D-14 第VIII層



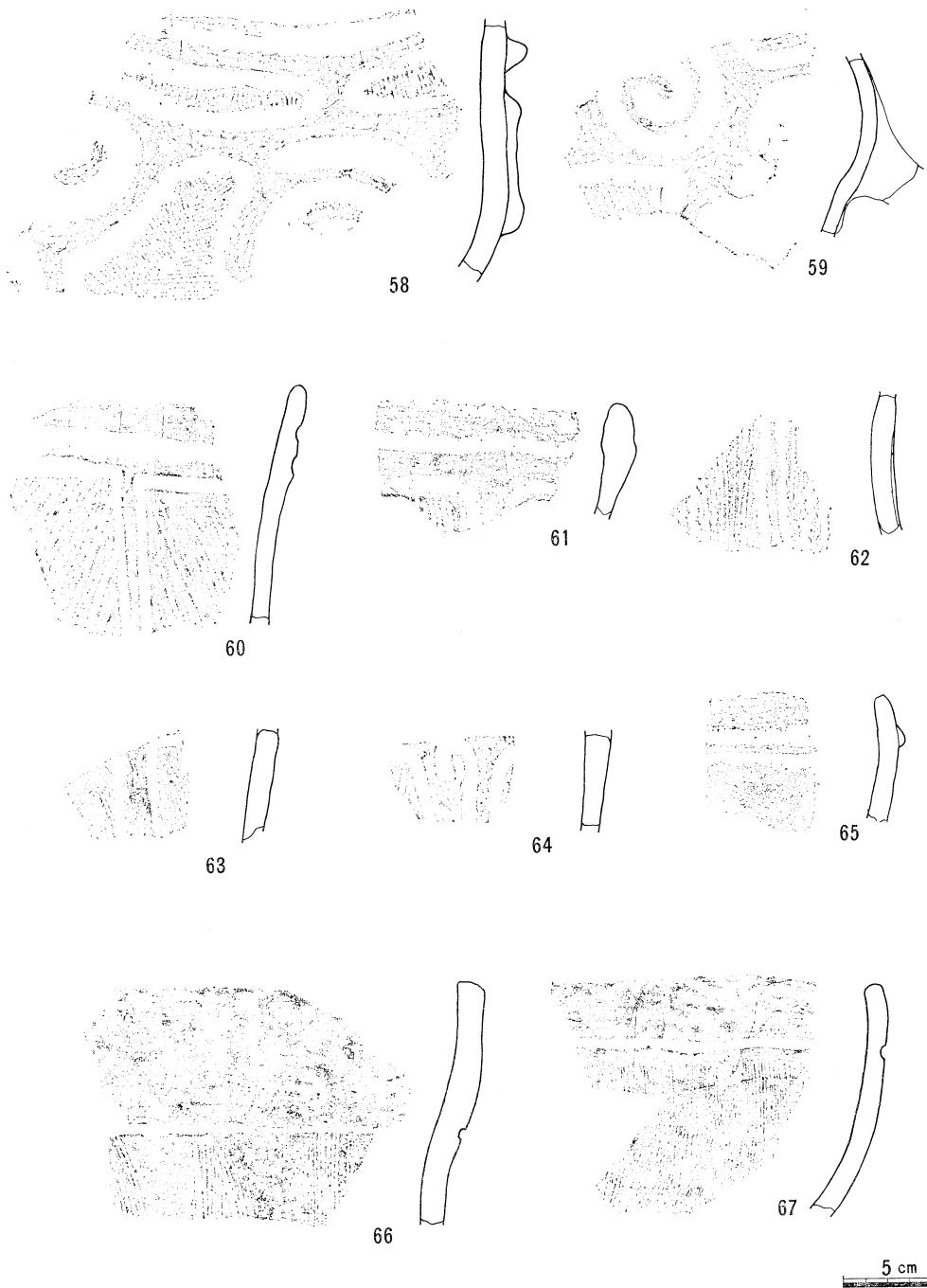
第86図 配石及びグリッド出土土器拓影図（2）

No.	部位	施文具	文様	胎土	色調	時期・分類	出土地点
39	胴部	半截竹管 縄文原体(L R L)	縄文を地文として、半截竹管によって波状懸垂文が施文	石英粒・雲母を多量に含有	明茶褐色	第5群 第3類-a	C-14 第VII層
40	"	棒状施文具 縄文原体(R L)	縄文を地文として、棒状施文具によって懸垂文が施文	"	明褐色	"	C-4 第IX層
41	頸部	縄文原体(L R)	縄文を地文として、横位に小波状の貼り付け文が施文	"	暗褐色	第5群 第3類-b	B-14 第VII層
42	"	撚糸文	撚糸文を地文として、横位に小波状の貼り付け文が施文	石英粒・長石・雲母を含有	"	"	C-6 第VII層
43	口縁部	棒状施文具	肥厚した口縁部に、「S」字状沈線文が施文	"	明茶褐色	第5群第4類	A-4 第IX層
44	"	"	"	"	暗褐色	"	A-3 第IX層
45	"	"	"	"	"	"	A-17 第VII層
46	"	"	肥厚した口縁部に、橢円形状の沈線文が施文	"	明褐色	"	B-11 第VII層
47	胴部	半截竹管	隆線によって渦巻文が施文されその間隙に、半截竹管によって条線文が施されている。	"	"	第5群第5類	B-5 第VII層
48	"	"	"	"	"	"	B-4 第VI層
49	"	"	"	"	"	"	A-2 第IX層
50	"	"	カマボコ状隆線によって、渦巻文が施文され、その間隙に半截竹管によって条線文が施されている。	"	"	"	B-3 第IX層
51	"	"	カマボコ状の隆線によって、渦巻文が施文され、その間隙に条線文が施されている。	若干の石英粒・砂粒と多量の雲母を含有	"	"	A-13 第VI層
52	"	"	"	"	"	"	B-13 第VII層
53	"	"	"	"	暗褐色	"	A-1 第IX層
54	"	櫛歯状施文具	"	"	"	"	D-16 第VIII層
55	"	"	"	若干の雲母と多量の砂粒を含有	明褐色	"	A-14 第IV層
56	"	"	"	長石・雲母を多量に含有	明茶褐色	"	A-1 第IX層
57	"	"	偏平幅広の隆線によって、渦巻状の区画文が施文され、その間隙に条線文が施されている。	石英粒・長石・雲母を含有	暗灰色	"	B-3 第IX層
58	"	"	"	若干の雲母と多量の長石を含有	暗茶褐色	"	A-3 第VII層



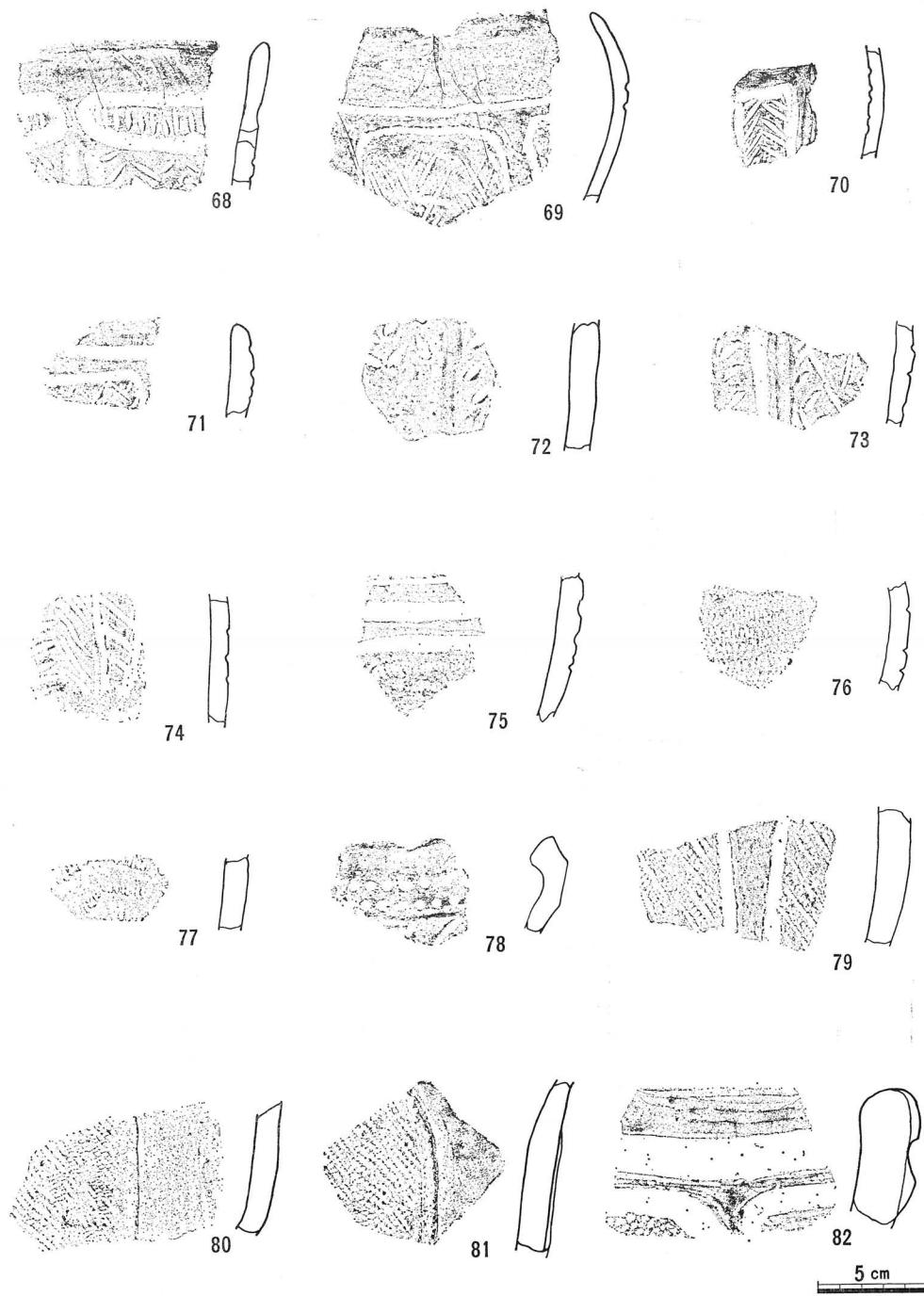
第87図 配石及びグリッド出土土器拓影図（3）

No.	部 位	施 文 具	文 様	胎 土	色 調	時 期・分類	出 土 点
59	胴 部	櫛歯状施文具	偏平幅広の隆線によって、渦巻状の区画文が施文され、その間隙に条線文が施されている。	若干の長石と多量の雲母を含有	明褐色	第5群第5類	C-4 第VII層
60	口縁部	棒状施文具 半截竹管	「[]」状の区画文が施され、区画内に綾杉状の条線文が施文されている。	雲母・石英粒・長石を多量に含有	暗茶褐色	第5群 第6類-a	A-3 第VIII層
61	"	棒状施文具 櫛歯状施文具	"	"	暗灰色	"	A-3 第IX層
62	胴 部	"	「[]」状の区画内に、条線文、小波状の懸垂文が施文	"	暗茶褐色	"	B-5 第IX層
63	"	半截竹管	「[]」状の区画文が施され、その間隙に綾杉状沈線文が施文	雲母・長石を若干含有した粒子の細いものである。	暗灰色	第5群 第6類-b	B-1 第VIII層
64	"	"	「[]」状の区画文が施され、その間にワラビ手状の懸垂文、区画内に綾杉状沈線文が、それぞれ施文	"	"	第5群 第6類-c	A-2 第IX層
65	口縁部	櫛歯状施文具	口唇直下に1本の隆帯を巡らしその直下より綾杉状沈線文が施文されている。	雲母・長石をかなり密に含有	暗灰色	第5群第7類	B-5 第IX層
66	"	棒状施文具 櫛歯状施文具	口縁部に1本沈線を巡らし、その直下より条線文が施されている。	長石・石英粒を多量に含有	明褐色	"	表 採
67	"	"	"	"	茶褐色	"	A-3 第VIII層
68	"	棒状施文具	口縁部に橢円形状の区画文が施され、胴部には「ハ」字状沈線文が施文されている。	石英粒・雲母・砂粒を多量に含有	黒褐色	第5群 第8類-a	B-10 第VII層
69	"	"	口縁部に1本の沈線、胴部には「[]」状の区画文が施され、区画内には「ハ」字状沈線文が施文されている。	石英粒・雲母を若干含有	暗灰色	第5群 第8類-b	A-33 第VII層
70	胴 部	"	「[]」状の区画文が施され、区画内に「ハ」字状沈線文が施文されている。	"	暗褐色	"	A-35 第VII層
71	"	"	"	"	黒褐色	"	B-6 第VII層
72	"	"	カマボコ状隆線による懸垂文が施され、その間に「ハ」字状沈線文が施文されている。	石英粒・雲母を多量に含有	明茶褐色	第5群 第8類-c	B-3 第VII層
73	"	"	"	"	暗褐色	"	B-2 第VIII層
74	"	"	沈線による懸垂文が施され、その間に「ハ」字状沈線文が施文されている。	石英粒・雲母を多量に含有	"	"	B-34 第VI層
75	口縁部	棒状施文具 櫛歯状施文具	口縁部に1本の沈線、胴部に「[]」状の区画文が施され、そ	石英粒・雲母を含有	"	第5群第9類	B-1 第IX層



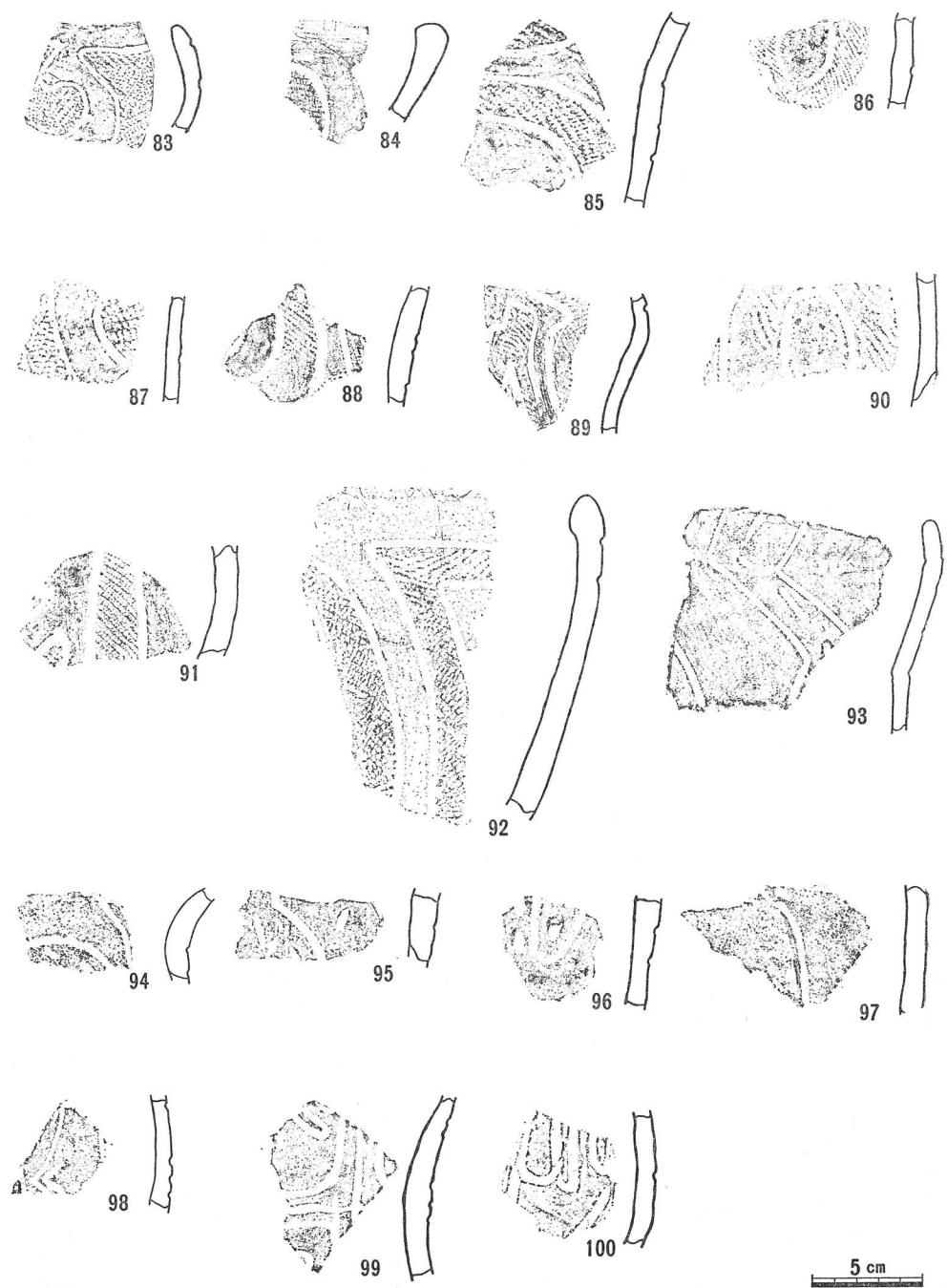
第88図 配石及びグリッド出土土器拓影図（4）

No.	部位	施文具	文様	胎土	色調	時期・分類	出土地
76	胴部	櫛齒状施文具	の間隙に櫛齒状施文具による刺突が施されている。 櫛齒状施文具による刺突文が施文されている。	石英粒・長石・雲母を含有	暗褐色	第5群第9類	B-3 第Ⅸ層
77	"	"	"	"	"	"	B-2 第Ⅶ層
78	口縁部	棒状施文具 縄文原体(L R)	無文の口縁部には列点状の刺突文が、胴部には区画文が、それぞれ施され、区画内には磨消縄文が施文されている。	石英粒・砂粒・雲母を多量に含有	明茶褐色	第6群第1類	A-1 第Ⅷ層
79	胴部	棒状施文具 縄文原体(R L)	太い沈線で区画文が施され、その間隙に磨消縄文が施文されている。	"	暗褐色	"	C-6
80	"	縄文原体(L R)	断面三角の微隆線による区画文が施され、その間隙に磨消縄文が施文されている。	石英粒・長石・砂粒をかなり含有	"	第6群第2類	C-5 第Ⅸ層
81	"	"	"	"	"	"	B-17 第Ⅵ層
82	口縁部	"	口縁部にカマボコ状の隆線によって、橢円形状の区画文が施され、区画内には縄文が施文されている。	石英粒・雲母を若干含有	明茶褐色	第6群第3類	B-5 第Ⅶ層
83	"	棒状施文具 縄文原体(L R, R L)	太い沈線によって曲線的な区画文が施され、その間隙に充填縄文が施文されている。	石英粒・雲母・長石等を若干含有	暗茶褐色	第6群第4類	A-14 第Ⅵ層
84	"	棒状施文具 縄文原体(R L)	"	若干の長石と、多量の雲母を含有	暗灰色	"	A-5 第Ⅶ層
85	胴部	棒状施文具 縄文原体(L R)	"	若干の雲母と、多量の石英粒・長石を含有	明褐色	"	C-6 第Ⅷ層
86	"	"	"	"	"	"	D-10 第Ⅶ層
87	"	棒状施文具 縄文原体(R L)	"	"	暗灰色	"	A-1 第Ⅷ層
88	"	"	"	"	"	"	B-34 第Ⅵ層
89	"	"	"	"	暗茶褐色	"	C-2 第Ⅷ層
90	"	"	"	石英粒・長石・雲母を多量に含有	"	"	A-6 第Ⅷ層
91	"	"	"	石英粒・長石・雲母を若干含有	暗灰色	"	D-9 第Ⅶ層
92	口縁部	"	"	石英粒・長石・雲母をかなり密に含有	暗茶褐色	"	A-3 第Ⅷ層



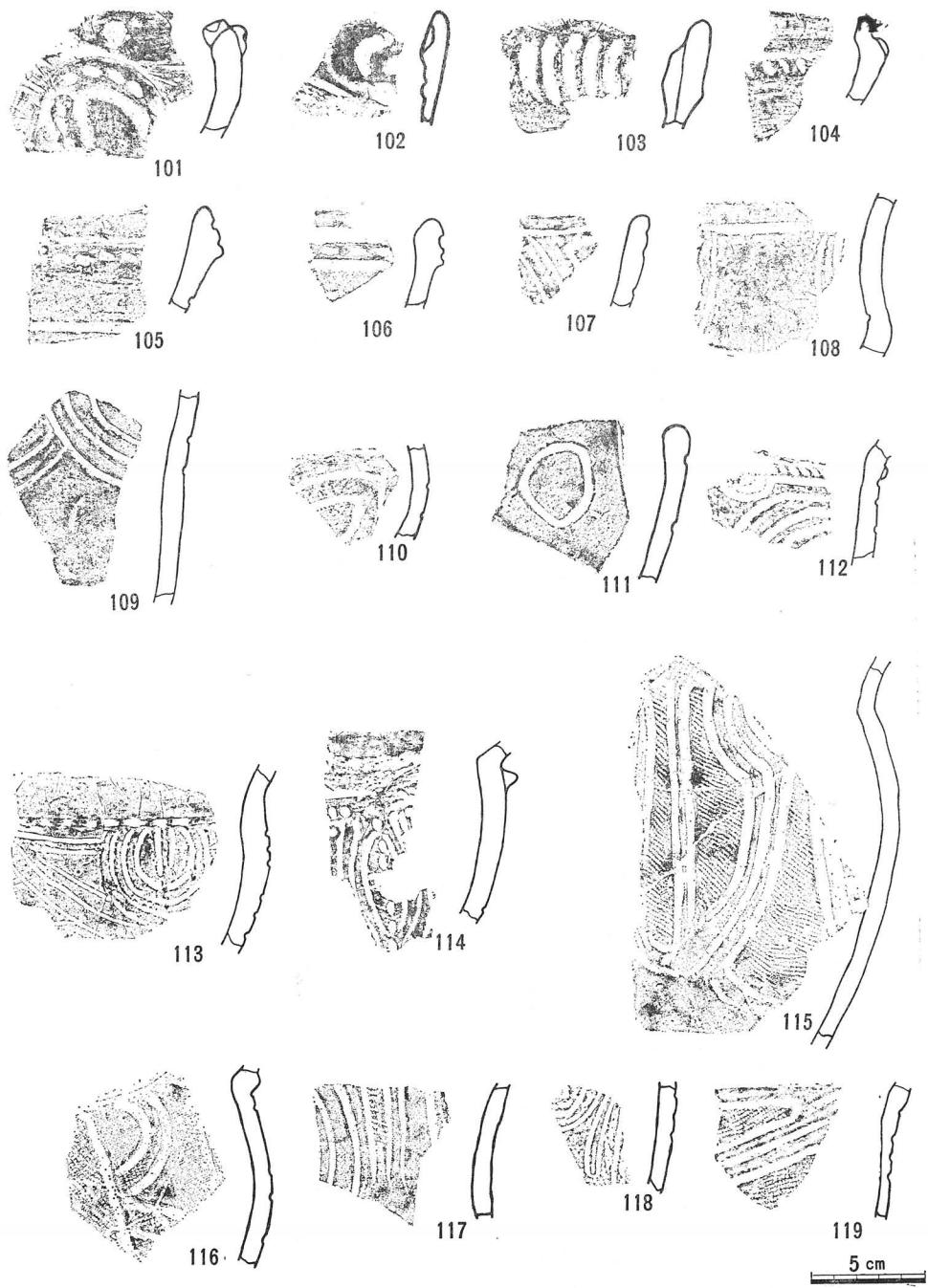
第89図 配石及びグリッド出土土器拓影図（5）

No.	部 位	施 文 具	文 様	胎 土	色 調	時期・分類	出 土 点
93	胴 部	棒状施文具	太い沈線文による区画文が施され、その間隙に列点状刺突文が施文されている。	石英粒・長石・雲母をかなり密に含有	明褐色	第6群第5類	Z-34 第VII層
94	"	"	"	石英粒・長石・雲母を若干含有	暗灰色	"	A-17 第VII層
95	"	"	"	"	明褐色	"	D-10 第VII層
96	"	"	"	"	"	"	D-1 第VII層
97	"	"	"	"	"	"	A-6 第VII層
98	"	"	太い沈線による区画文が施されその間隙に列点状刺突文が施文されている。	若干の雲母と、多量の石英粒・長石を含有	"	"	E-26 第VI層
99	"	"	太い沈線による曲線的な区画文が施文されている。	"	明灰色	第6群第6類	A-2 第VII層
100	"	"	"	石英粒・長石を非常に密に含有	明褐色	"	C-0 第VII層
101	口縁部	"	曲線的な太い沈線文が施文されその間に、列点状の刺突文が施されている。	雲母・長石等の微粒子を若干含有	"	第7群第1類	D-6 第VII層
102	"	"	やや肥厚した口縁部に、円形刺突文と、円形刺突文を中心横位に同心円状に連なる弧状沈線文が施文されている。	"	暗灰色	"	B-14 第VI層
103	"	"	"	"	明褐色	"	B-5 第IX層
104	"	"	口唇直下に有刻の隆線が施されている。	若干の雲母と多量の石英粒・長石を含有	"	"	C-14 第VI層
105	"	"	"	"	灰褐色	"	C-5 第IX層
106	"	"	"	長石・石英粒を若干含有	"	"	C-6 第VII層
107	"	"	口唇直下に1本沈線を巡らし、それより、弧線状の沈線文が垂下する。	長石・石英粒をかなり含有	明褐色	"	C-4 第VII層
108	胴 部	"	頸部に1本沈線を巡らし、その直下より、弧状の沈線文が垂下する。	"	赤褐色	第7群第2類	C-5 第IX層
109	"	"	太い沈線によって、弧状を主とした文様が施されている。	"	明褐色	第7群第1類	C-5 第VII層
110	"	"	太い沈線によって、弧線を主とした文様が施されている。	雲母・長石等の微粒子を若干含有	暗茶褐色	"	C-9 第VI層



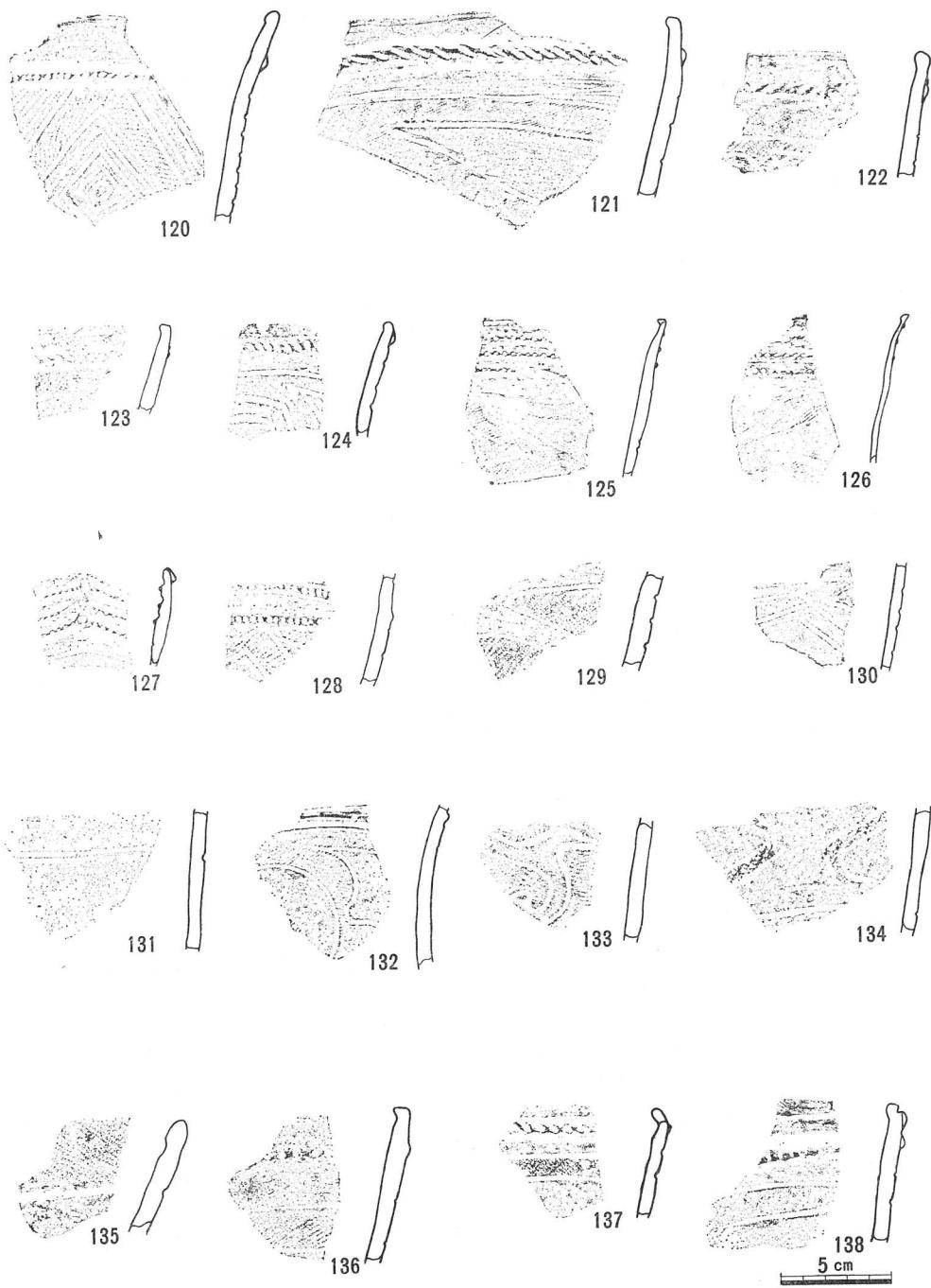
第90図 配石及びグリッド出土土器拓影図（6）

No.	部位	施文具	文様	胎土	色調	時期・分類	出土点
111	口縁部	棒状施文具	太い沈線によって、円形状、弧状の沈線文が施されている。	石英粒・長石を非常に密に含有	明褐色	第7群第1類	C—5 第VII層
112	胴部	"	頸部に有刻隆線を巡らし、その直下より弧線を主とした沈線文が施されている。	長石等の粒子を若干含有	"	第7群第2類	E—24
113	"	"	頸部に列点状の刺突文を巡らしその直下より弧線を主とした沈線文が施されている。	雲母・長石等の粒子を若干含有	茶褐色	"	C—5 第VII層
114	"	"	"	"	"	"	B—12 第VI層
115	"	棒状施文具 縄文原体(R L)	縄文を地文として、太い弧線を主とした沈線文が施され、沈線文の間隙は、縄文が磨り消されている。	石英粒・長石を密に含有	茶褐色	第7群第3類	D—15 第VII層
116	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	"	"	灰褐色	"	C—2 第VII層
117	"	棒状施文具 縄文原体(R L)	"	"	明褐色	"	C—10 第VI層
118	"	"	"	石英粒・長石・雲母を多量に含有	明灰色	"	D—4 第VII層
119	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	"	"	茶褐色	"	A—1 第VII層
120	口縁部	棒状施文具 縄文原体(L R)	口縁部に有刻隆線を巡らし、その直下より、菱形状区画文が施されている。	長石・雲母を若干含有	灰褐色	第7群第4類	C—1 第VII層
121	"	棒状施文具 縄文原体(R L)	口縁部に有刻隆線を巡らし、その直下より、三角形状区画文が施されている。	"	黒褐色	"	A—1 第VII層
122	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	"	"	暗茶褐色	"	C—0 第VII層
123	口縁部	棒状施文具 縄文原体(R L)	口縁部に有刻隆線が巡らされ、その直下より、三角形状区画文が施されている。	長石・石英粒・雲母を若干含有	暗灰褐色	"	D—6 第VII層
124	"	棒状施文具	"	長石・雲母をやや密に含有	茶褐色	"	B—4 第VII層
125	"	棒状施文具 縄文原体(R L)	"	"	"	"	D—15 第VII層
126	"	"	"	"	"	"	D—15 第VII層
127	"	"	"	"	"	"	D—15 第VII層
128	胴部	棒状施文具 縄文原体(L R)	"	長石を若干含有	明褐色	"	C—6 第VII層
129	"	棒状施文具 縄文原体(R L)	"	若干の雲母と多量の石英	暗茶褐色	"	C—0 第VII層



第91図 配石及びグリッド出土土器拓影図(7)

No.	部 位	施 文 具	文 样	胎 土	色 調	時期・分類	出 土 点
130	胴 部	棒状施文具 縄文原体(R L)	口縁部に有刻隆線が巡らされ、 その直下より、三角形状区画文 が施されている。	粒・長石を含 有 若干の雲母と 多量の石英 粒・長石を含 有	橙褐色	第7群第4 類	C—4 第VII層
131	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	"	"	黒褐色	"	A—2 第VII層
132	"	棒状施文具 縄文原体(R L)	渦巻状区画文が施されている。	長石・石英粒・ 雲母をかなり 密に含有	赤褐色	"	A—1 第VII層
133	"	"	"	"	明褐色	"	B—10 第VII層
134	"	"	曲線的な区画文が施されてい る。	若干の雲母と 多量の長石を 含有	"	"	B—9 第VII層 "VIII"
135	口縁部	"	口唇直下に帯状縄文が施されて いる。	"	暗灰色	"	A—33 第VII層
136	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	口縁部に有刻の貼付文が1本巡 らされ、その直下に帯縄文が施 されている。	若干の長石と 多量の雲母を 含有	暗茶褐色	"	C—9 第VII層
137	"	"	"	長石・石英粒 を若干含有	明灰色	"	C—1 第VIII層
138	"	"	"	"	"	"	B—6 第VIII層
139	"	棒状施文具 縄文原体(R L)	"	石英粒・砂粒 を若干含有	暗灰色	"	C—15 第VII層
140	"	"	"	石英粒・砂粒・ 雲母を多量に 含有	"	"	C—14 第VII層
141	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	"	石英粒・砂粒・ 雲母を若干含 有	黒褐色	"	A—15 第VII層
142	"	棒状施文具 縄文原体(R L)	口縁部に帶縄文が施文されてい る。	"	暗茶褐色	第8群第11 類	D—23 第VII層
143	"	"	口縁部に有刻の貼り付け文が巡 らされ、その直下に、縄文地に横 線が施されている。器内面には 4本の横線が巡らされている。	"	黒褐色	第8群第1 類	B—6 第VIII層
144	"	"	"	"	"	"	D—4 第VII層
145	"	棒状施文具 櫛齒状施文具 縄文原体(R L)	口縁部に1本の横線が巡り、そ の直下には、2段の横帶文と、 対弧文が、それぞれ施文されて いる。	"	"	"	C—1 第VII層
146	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	縄文のある部分とない部分が交 互に置かれた3段の横帶文が巡 らされ、横帶文内には「対弧文」 が施されている。	石英粒・砂粒 を若干含有	茶褐色	"	D—3 第VII層

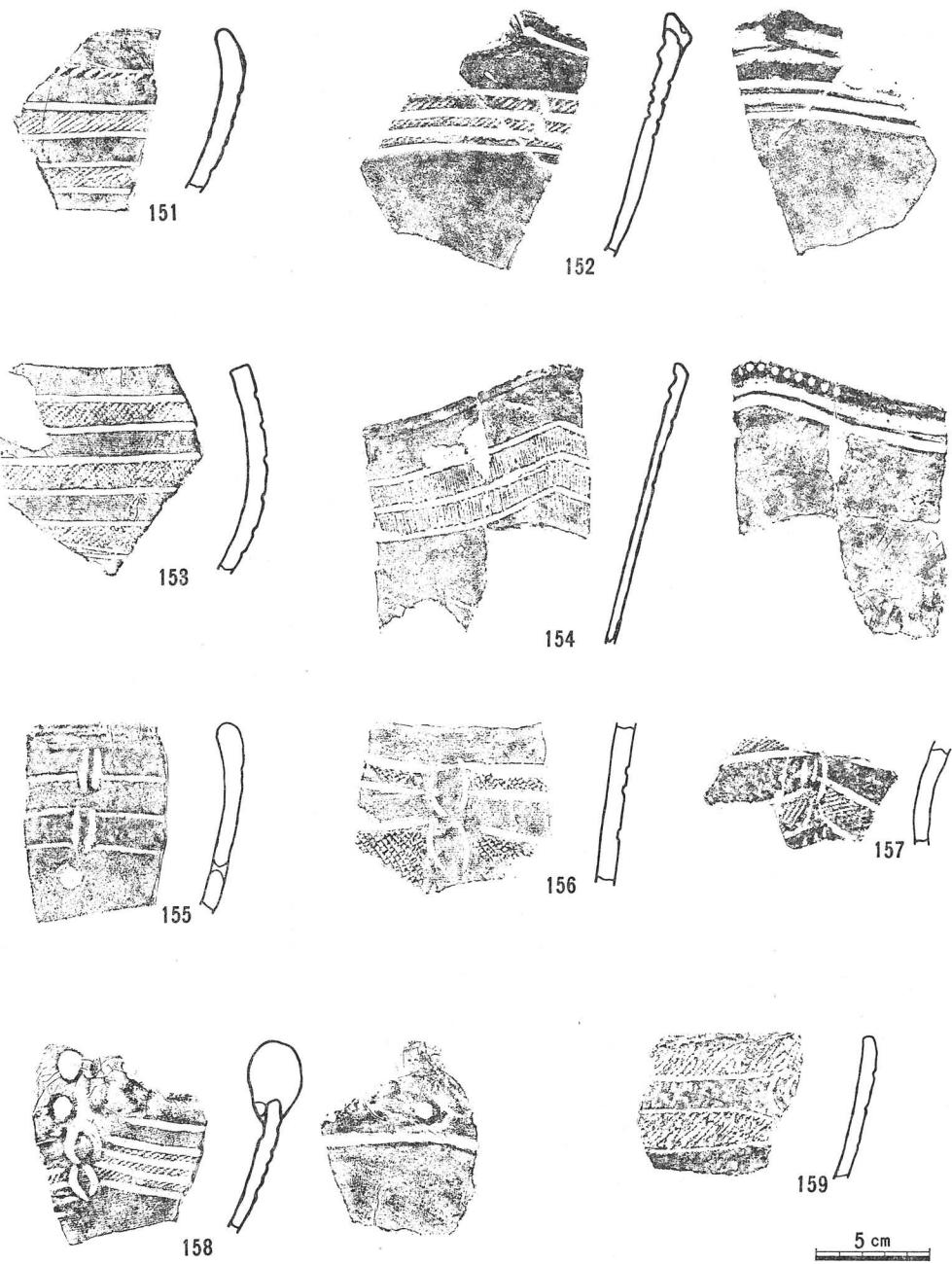


第92図 配石及びグリッド出土土器拓影図（8）

No.	部 位	施 文 具	文 様	胎 土	色 調	時 期・分 類	出 土 点
147	口縁部	棒状施文具 縄文原体(L R)	口縁部には1本の横線が巡らされ、横線の開始点は「お玉杓子」状に施文されている。その直下には「横帯文」が巡らされている。	石英粒・砂粒を若干含有	暗茶褐色	第8群第1類	C-3 第VII層
148	胴 部	棒状施文具 縄文原体(L R)	「横帯文」と「対弧文」が施文されている。	石英粒・雲母を若干含有	黒褐色	"	A-34 第VII層
149	口縁部	棒状施文具 縄文原体(R L)	口縁部に1本横線を巡らし、その直下には、2段の「横帯文」と区切り縦線文が、それぞれ施されている。器内面には3本の横線が巡らされている。	石英粒・長石・雲母をかなり含有	"	"	C-1 第VI層
150	"	"	口唇部には刻みと1本の横線が施され、その直下には、「横帯文」と区切り縦線文が施されている。器内面には、列点状刺突文と横線文が施されている。	"	"	"	B-15 第VI層
151	"	"	口縁部と体部の境には刻み入りの横線が巡らされ、その直下には、縄文のある部分とない部分が交互に置かれた3段の「横帯文」が巡らされている。	"	暗褐色	"	B-5 第VII層
152	"	"	口唇部に1本横線文が巡らされその直下には、3段の「横帯文」が巡らされている。	"	"	"	B-15 第VI層
153	"	"	縄文のある部分とない部分が交互に置かれた「横帯文」が巡らされている。	"	黒褐色	"	C-2 第VI層
154	"	棒状施文具 櫛歯状施文具	波状口縁に沿って2段の「横帯文」が巡らされ、その間には、条線文が施されている。器内面には2本の沈線文が巡らされている。	"	"	"	B-0 B-1 第VIII層
155	"	棒状施文具	2段の「横帯文」と「横帯文」内に「対弧文」が、それぞれ施文されている。	石英粒・砂粒をかなり含有	明茶褐色	第8群第2類	D-5 第VII層
156	胴 部	棒状施文具 縄文原体(R L)	「縦連対弧文」とそれを起点とした「横帯文」が施されている。	"	黒褐色	"	B-9 第VI層
157	"	"	"	"	"	"	Z-32 第VI層
158	口縁部	"	"	石英粒・長石・砂粒・雲母を多量に含有	暗灰色	"	C-1 第VI層
159	"	"	口唇直下より縄文のある部分とない部分が交互に置かれた3段の「横帯文」が巡らされている。	"	黒褐色	"	B-14 第VI層
160	"	棒状施文具 縄文原体(R L)	「縦連対弧文」とそれを起点とした「横帯文」が施されている。	"	"	"	D-3 第VII層

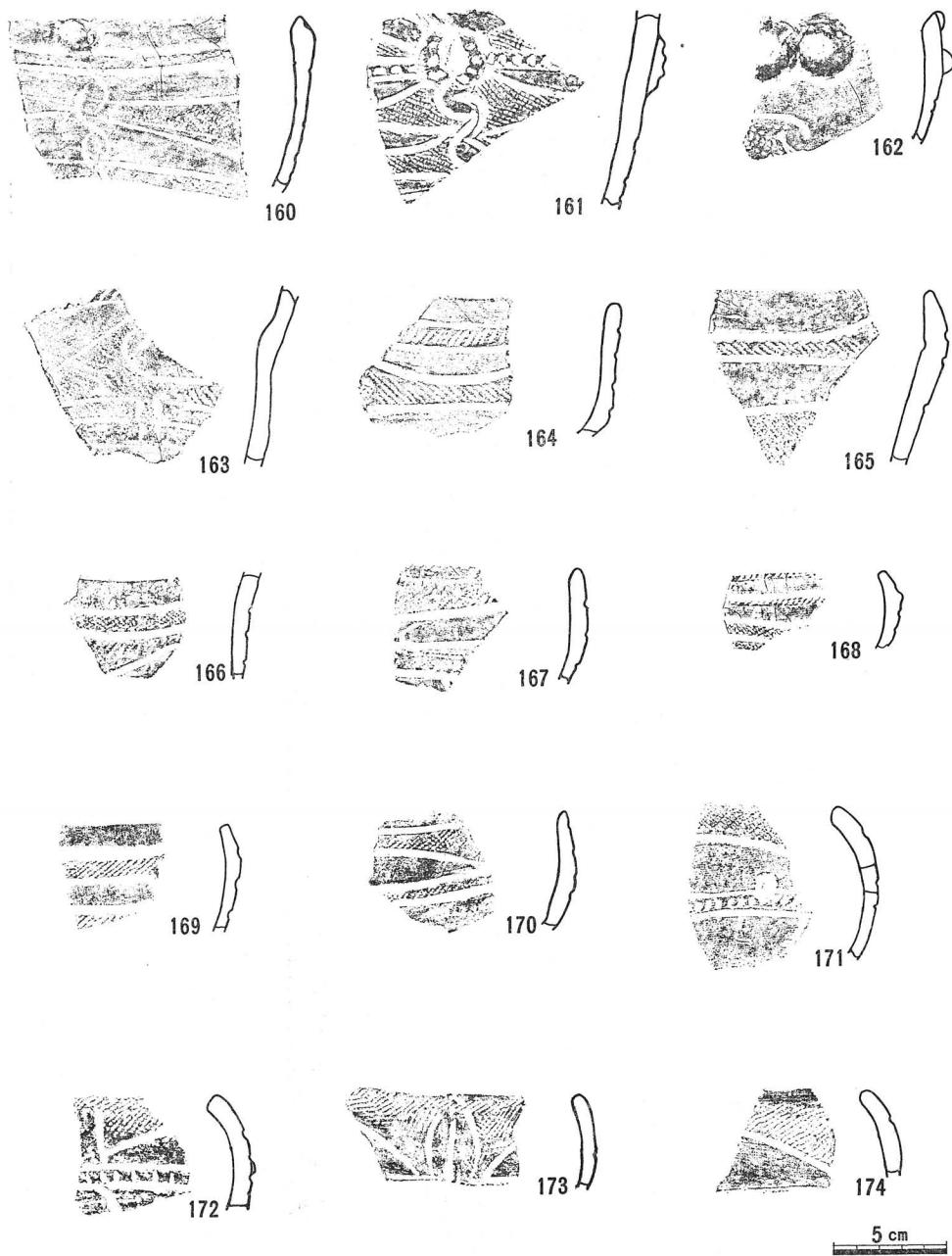


第93図 配石及びグリッド出土土器拓影図（9）



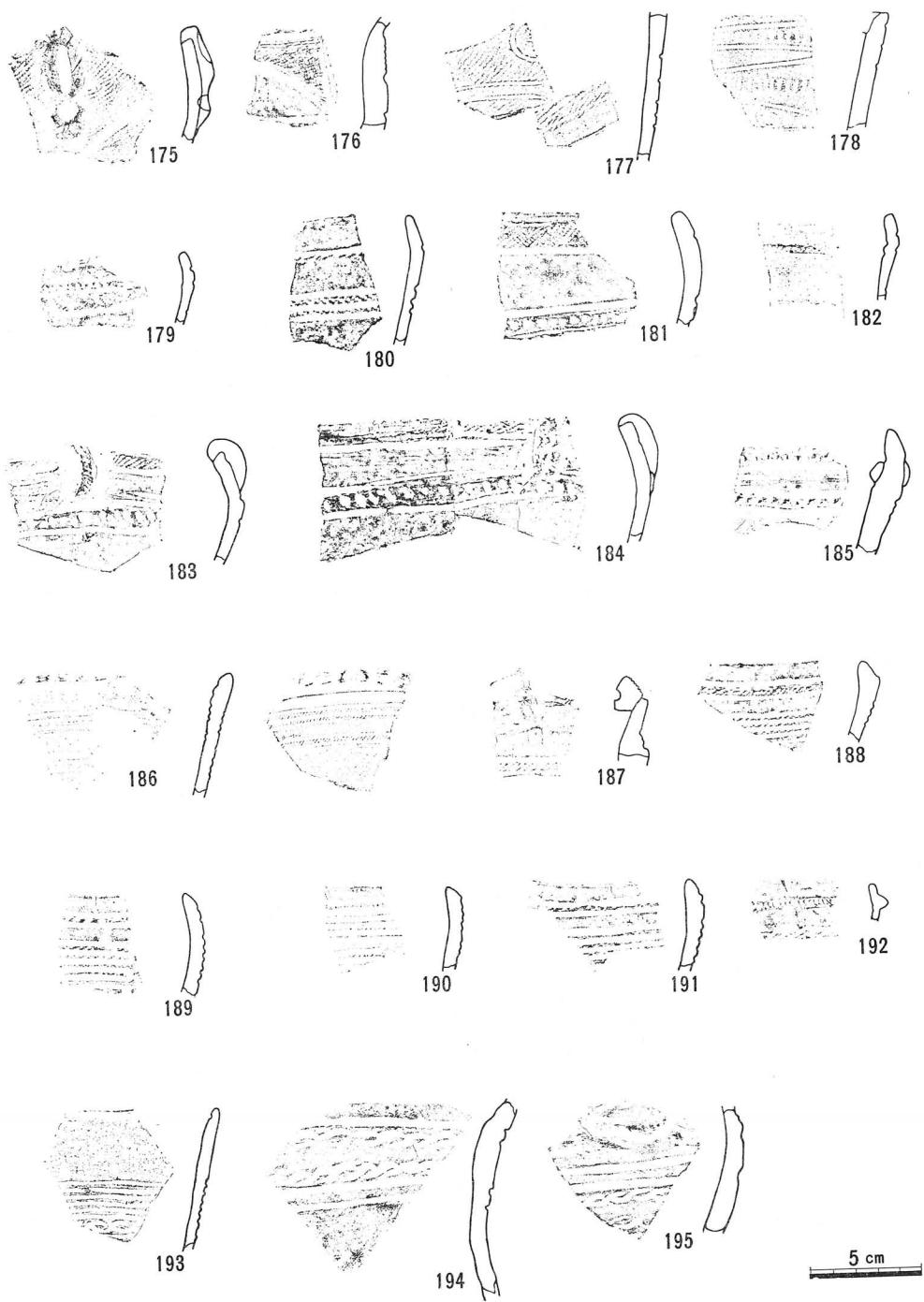
第94図 配石及びグリッド出土土器拓影図 (10)

No.	部位	施文具	文様	胎土	色調	時期・分類	出土地
161	胴部	棒状施文具 縄文原体(R L)	口縁部には有刻隆線が巡らされ その直下より、「横連対弧文」 「縦連対弧文」が施文されている。  口唇直下に「8」字状貼付文が 施され、その直下より、「入組 弧線文」が施文されている。 「入組弧線文」の間隙には、刺 突文が充填されている。	石英粒・長石・ 砂粒・雲母を 多量に含有	暗茶褐色	第8群第2 類	E-29 第VI層
162	口縁部	棒状施文具	口縁部には有刻隆線が巡らされ その直下より、「横連対弧文」 「縦連対弧文」が施文されている。 「入組弧線文」の間隙には、刺 突文が充填されている。	"	黒褐色	"	D-11 第VI層
163	胴部	棒状施文具 縄文原体(R L)	口縁部には有刻隆線が巡らされ その直下より、「入組弧線文」 が施文されている。	"	明灰色	"	D-3 第VI層
164	口縁部	"	口縁部には有刻隆線が巡らされ その直下より、「横連対弧文」 が施文されている。	"	暗褐色	"	D-1 第VI層
165	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	「横帯文」が施文されている。	"	黒褐色	"	D-11 第VI層
166	胴部	"	「横連対弧文」状に施されている。	"	"	"	B-15 第VI層
167	口縁部	棒状施文具 縄文原体(R L)	口唇直下より、縄文のある部分 とない部分が交互に置かれた 「横帯文」が施文されている。	石英粒・砂粒 を若干含有	"	"	B-17 第VI層
168	"	"	口唇部、口縁部には刻みが巡ら され、その直下より、「横帯文」 が施文されている。	"	明茶褐色	"	B-4 第VI層
169	"	"	口縁部に「エ」字状の磨消縄文 が施文されている。	石英粒・砂粒・ 雲母を若干含 有	暗茶褐色	第8群第10 類	E-25
170	"	"	口縁部に連弧状磨消縄文が施さ れ、口縁部と胴部の境には、幅 の狭い「横帯文」が巡らされて いる。	"	黒褐色	"	A-3 第VI層
171	"	"	口縁部に連弧状磨消縄文が施さ れ、口縁部と胴部の境には、2 本の横線に挟まれて刻目が巡ら されている。	石英粒・砂粒・ 雲母を多量に 含有	暗褐色	"	B-3 第VI層
172	"	"	"	"	"	"	E-26 第VI層
173	"	"	口縁部に連弧状磨消縄文が、そ の連結部には「対弧文」が、そ れぞれ施文され、口縁部と胴部 の境には、2本の横線に挟まれ て刻目が巡らされている。	石英粒・砂粒 を若干含有	暗茶褐色	"	B-22 第VI層
174	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	"	"	黒褐色	"	ハ地区 第VI層
175	"	棒状施文具 縄文原体(R L)	口縁部に連弧状磨消縄文が、そ の連結部には貼付文が、それぞ れ施文され、口縁部と胴部の境	石英粒・長石・ 雲母をかなり 密に含有	明褐色	"	C-9 第VI層



第95図 配石及びグリッド出土土器拓影図(11)

No.	部位	施文具	文様	胎土	色調	時期・分類	出土地点
176	胴部	棒状施文具 縄文原体(L R)	には、2本の横線に挟まれて刻目が巡らされている。 口縁部に連弧状磨消縄文が、その連結部には「対弧文」が、それぞれ施文されている。	石英粒・長石・雲母をかなり密に含有	暗茶褐色	第8群第10類	B-24 第VII層
177	"	棒状施文具 縄文原体(R)	「入組対弧文」が施文されている。	"	赤褐色	第8群第2類	D-29 第VII層
178	口縁部	棒状施文具	横線が施され、その間隙に、刺突文、「対弧文」が施されている。	"	茶褐色	"	A-13 第VI層
179	"	棒状施文具 縄文原体(R L)	口縁部に二条の横線に挟まれて刻目が巡らされ、その直下より「横帯文」が施されている。	長石・雲母を若干含有	"	第8群第11類	Z-31 第VI層
180	"	"	口縁部に有刻の横線が巡らされその直下には、3本の横線によって幅の狭い「横帯文」が施文されている。	雲母・石英粒・長石をやや密に含有	暗灰色	第8群第13類	A-31 第VI層
181	"	"	口唇直下には帯縄文が、口縁部と胴部の境には2本の横線に挟まれた刻目が巡らされている。	長石・雲母を若干含有	茶褐色	第8群第11類	B-3 第VI層
182	"	"	口縁部に幅の狭い帶縄文が巡らされている。	"	黒褐色	"	C-4 第VI層
183	"	"	口唇直下には幅の狭い帶縄文が、口縁部と胴部の境には二条の横線に挟まれた刻目が、巡らされている。両者の間隙に、貼付文が施されている。	"	"	"	B-29 第VII層
184	"	"	"	"	"	"	A-33 第VI層
185	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	口唇直下に1本横線が巡らされ口唇部と横線との間隙に刻目が巡らされ、口縁部と胴部の境には幅の狭い縄文帯が施されている。	"	暗灰色	第8群第12類	A-15 第VI層
186	"	櫛歯状施文具	横線文が施され、器内面には刻目が施された横線が巡らされている。	長石・石英粒・雲母を密に含有	黒褐色	第8群第13類	D-3 第VII層
187	"	棒状施文具	2本の幅の狭い横線に挟まれた刻目が巡らされている。	長石を密に、雲母を若干含有	暗灰色	"	C-1 第VI層
188	"	棒状施文具 縄文原体(R L)	口唇直下に2本の横線に挟まれた刻目が巡らされ、その直下には、5本の横線文が施されている。	"	茶褐色	"	D-10 第VI層
189	"	棒状施文具 縄文原体(R L)	口唇直下に2本の横線に挟まれた刻目が巡らされ、その直下には「横帯文」が施されている。	石英粒・長石を若干含有	明褐色	"	B-3 第VI層
190	"	棒状施文具 ヘラ状施文具	横線文と刻目が巡らされている。	"	灰白色	"	B-17 第VI層



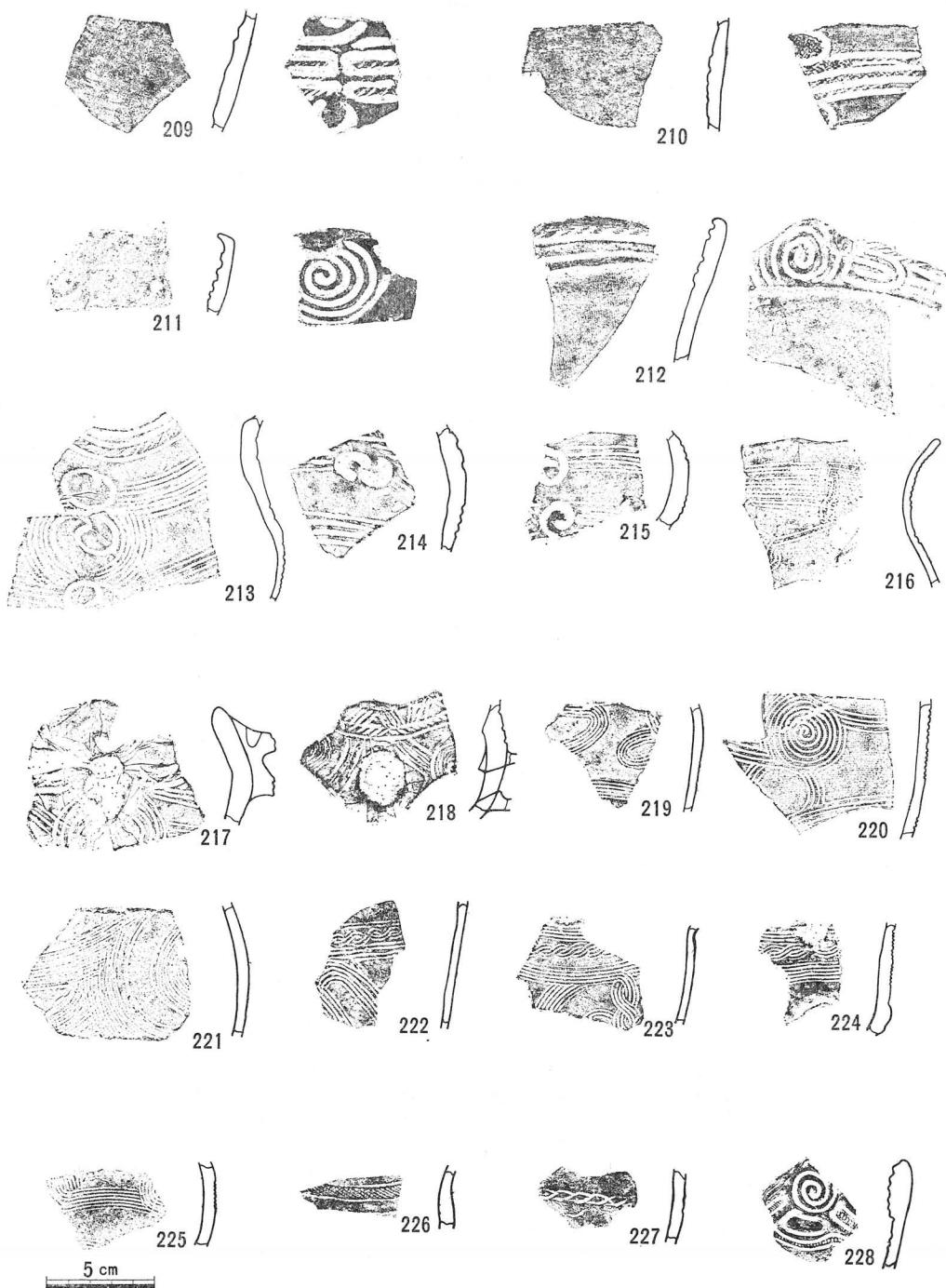
第96図 配石及びグリッド出土土器拓影図(12)

No.	部位	施文具	文様	胎土	色調	時期・分類	出土地
191	口縁部	棒状施文具	横線文が巡らされている。	長石を若干含有	灰褐色	第8群第13類	C-3 第VII層
192	"	"	口縁部に有刻の隆線が巡らされ、その直下には、連続横「S」字状文が施されている。	長石・雲母を若干含有	茶褐色	第8群第3類	C-2 第VII層
193	"	"	横線文と連続横「S」字状文が施されている。	"	"	"	C-3 第VII層
194	胴部	"	"	"	"	"	D-2 第VII層
195	"	"	"	"	"	"	D-4 第VII層
196	"	"	幾何学的な集合沈線文が施されている。	石英粒を若干含有	黒褐色	第8群第4類	B-3 第VII層
197	"	"	"	石英粒・雲母を若干含有	"	"	C-3 第VII層
198	底部	"	"	"	"	"	D-4 第VII層
199	口縁部	"	無文の浅鉢形土器である。器内面には横線文と刻目が巡らされている。	石英粒を若干含有	"	第8群第14類	B-1 第VII層
200	"	"	"	石英粒・雲母を多量に含有	"	"	C-10 第VI層
201	"	半截竹管	"	"	"	"	A-3 第VI層
202	"	棒状施文具 ヘラ状施文具	"	"	"	"	A-2 第VI層
203	"	"	"	"	暗茶褐色	"	A-4 第VI層
204	"	"	"	"	黒褐色	"	B-4 第VI層
205	"	"	"	"	"	"	B-4 第VII層
206	"	"	無文の浅鉢形土器である。口唇直下には、円形刺突文が巡らされている。器内面には横線文と刻目が巡らされている。	石英粒・雲母を若干含有	"	"	C-15 第VI層
207	"	"	"	"	"	"	D-13 第VI層
208	"	"	"	"	"	"	B-17 第VI層
209	胴部	棒状施文具	無文の浅鉢形土器である。器内面には「横帶文」が施されている。	長石・石英粒をやや密に含有	暗灰色	"	C-5 第VII層
210	"	"	"	"	"	"	B-17 第VI層
211	口縁部	"	無文の浅鉢形土器である。器内面には渦巻状沈線文が施されている。	"	灰褐色	"	B-15 第VI層



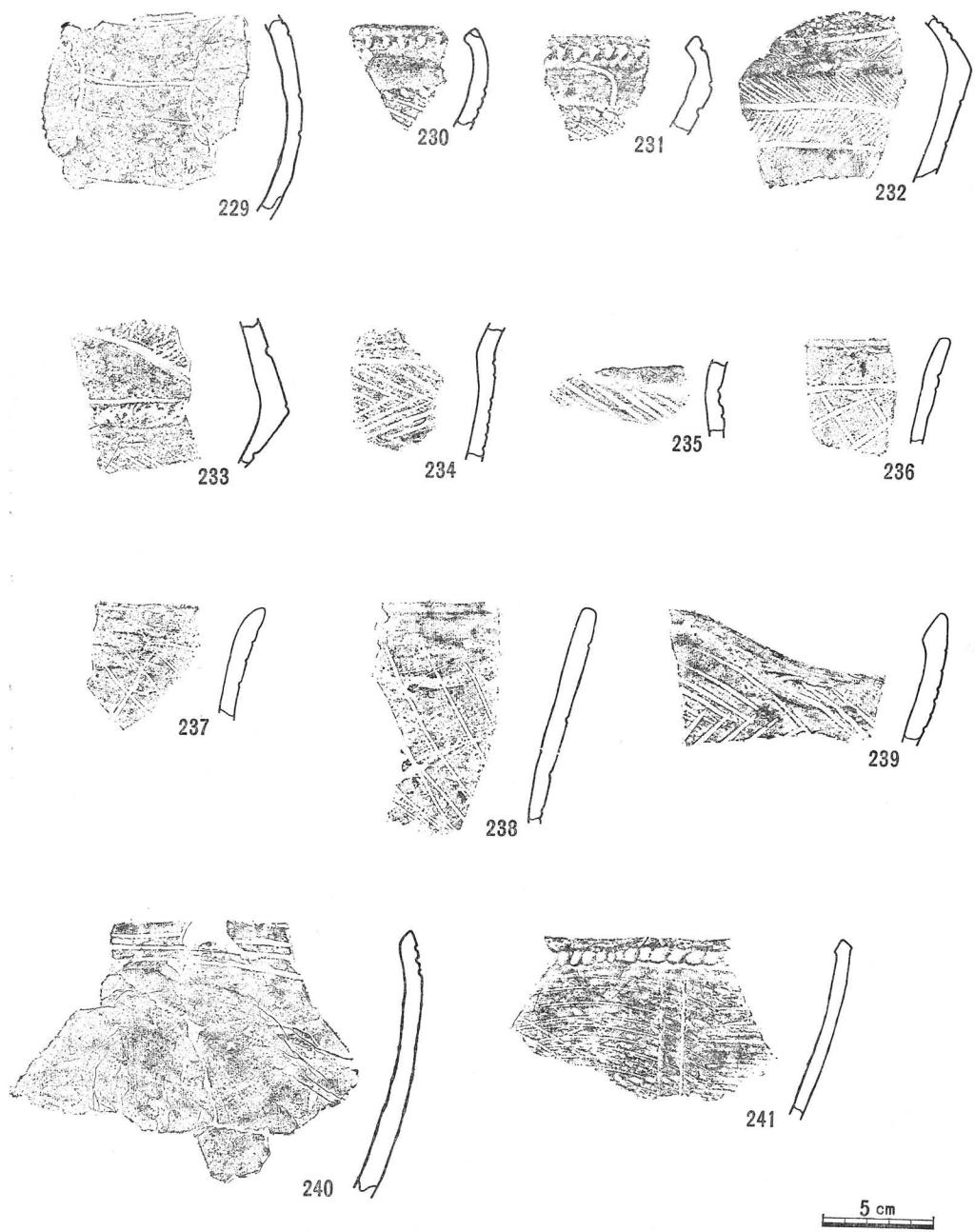
第97図 配石及びグリッド出土土器拓影図 (13)

No.	部 位	施 文 具	文 様	胎 土	色 調	時期・分類	出 土 点
212	口縁部	棒状施文具	無文の浅鉢形土器である。器内面には渦巻状沈線文が施されている。	長石・石英粒をやや密に含有	灰褐色	第8群第14類	B-6 第VII層
213	胴 部	棒状施文具 櫛齒状施文具	注口土器の胴部片である。入組状沈線文、集合沈線文が施文されている。	長石・石英粒、雲母を若干含有	茶褐色	第8群第18類	B-2 第VII層
214	"	"	"	"	暗灰色	"	B-0 第VII層
215	"	"	"	石英粒・長石を密に、雲母を若干含有	黒褐色	"	B~ D-0 第VI層
216	口縁部	半截竹管	横線文と「縱連対弧文」が施文されている。	長石・雲母を若干含有	黒褐色	"	B-4 第VII層
217	"	櫛齒状施文具	集合沈線文が施文されている。	"	茶褐色	"	C-1 第VI層
218	胴 部	"	"	"	"	"	B-2 第VII層
219	"	"	"	"	"	"	C-4 第VII層
220	"	棒状施文具	渦巻文などの曲線的な集合沈線文が施文されている。注口土器の胴部片である。	"	暗茶褐色	"	A-15 第VI層
221	"	"	"	"	"	"	D-3 第VII層
222	"	半截竹管	連續横「S」字状文、集合沈線文が施文された注口土器である。	"	黒褐色	"	D-4 第VII層
223	"	"	"	長石・石英粒・雲母を若干含有	暗茶褐色	"	D-6 第VII層
224	"	"	"	"	"	"	B-3 第VII層
225	"	"	"	"	"	"	C-4 第VI層
226	"	棒状施文具 繩文原体(L R)	横帶文と連續横「S」字状文が施されている。	長石・石英粒・雲母を多量に含有	暗灰色	"	D-1 第VII層
227	"	棒状施文具	連續横「S」字状文が施されている。	長石・石英粒・雲母を若干含有	"	"	C-3 第VII層
228	口縁部	"	無文の浅鉢の口縁部で、器内面に渦巻文、「横帶文」が施文。	"	"	第8群第14類	B-6 第VII層
229	胴 部	"	連續横「S」字状文が施文。	"	黒褐色	第8群第18類	D-6 第VII層
230	口縁部	"	口唇部及び、口縁部と胴部の境に刻目が巡らされ、胴部は斜行沈線文が施されている。	"	"	第8群第5類	D-24
231	"	"	"	"	茶褐色	"	D-24 第VII層



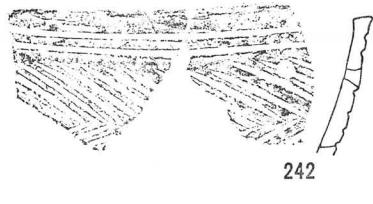
第98図 配石及びグリッド出土土器拓影図 (14)

No.	部位	施文具	文様	胎土	色調	時期・分類	出土地点
232	胴部	棒状施文具	「横帯文」が施され、その間に は、刺突文、斜行沈線文が施文 されている。	石英粒・長石・ 雲母を多量に 含有	黒褐色	第8群第5 類	C-10 C-11 C-12 D-11 第VI層
233	"	棒状施文具 ヘラ状施文具 縄文原体(L R)	口縁部には連弧状磨消縄文が、 胴部には斜行沈線文が、それぞ れ施され、口縁部と胴部との境 には2本の横線で挟まれた刻目 が巡らされている。	石英粒・長石・ 砂粒・雲母を かなり多量に 含有	明褐色	"	E-24 第VII層
234	"	棒状施文具	胴部に羽状沈線文が施されてい る。	"	明茶褐色	第8群第6 類	E-22 第VII層
235	"	"	"	"	黒褐色	"	D-25 第VII層
236	口縁部	"	斜格子状沈線文が施されてい る。	"	明茶褐色	第8群第7 類	C-13 第VI層
237	"	"	"	石英粒を若干 含有	明灰色	"	B-10 第VI層
238	"	"	"	"	"	"	B-4 第VII層
239	"	"	羽状沈線文が施文されている。	"	黒褐色	第8群第8 類	ハ地点 第VI層
240	"	"	口唇直下に3本の横線文が巡ら されている。	石英粒・長石・ 砂粒をかなり 多量に含有	"	第8群第15 類	D-22 D-26
241	"	半截竹管	口唇部に押圧が加えられた隆帶 を巡らし、その直下より、粗い 縄文を地文として、肋骨文状に 沈線文が施されている。	石英粒・長石・ 雲母をかなり 含有	暗褐色	第8群第16 類	E-27 第VII層
242	"	棒状施文具	口縁部に2本の横線を巡らし、 その直下より、羽状沈線文が施 されている。緩い波状口縁を呈 する深鉢形土器である。	石英粒・長石 をかなり密 に、雲母を若 干含有	暗茶褐色	第9群第5 類	z-30 第VII層
243	"	"	口縁部に1本の横線を巡らし、 その直下より、羽状沈線文が施 されている。平縁の深鉢形土器 である。	石英粒・長石・ 雲母を多量に 含有	"	"	D-24
244	"	ヘラ状施文具 縄文原体(R L)	口縁部に帶縄文とボタン状貼付 文が施され、その直下より、羽 状沈線文が施文されている。 口縁部が「く」字状に内湾した 平縁の深鉢形土器である。	長石・石英粒 を若干含有	"	第9群第6 類	E-24 第VI層
245	"	棒状施文具	口縁部に2本の横線と、ボタン 状の貼付文が施され、その直下 より、羽状沈線文が施文されて いる。平縁の深鉢形土器である。	長石・石英粒・ 雲母を若干含 有	暗茶褐色	"	E-25
246	"	棒状施文具 縄文原体(R L)	口縁部に4本の横線と、縦長の 貼付文が施され、胴部には斜行	長石・石英粒 をかなり密	茶褐色	"	表採

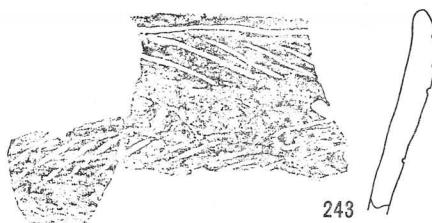


第99図 配石及びグリッド出土土器拓影図（15）

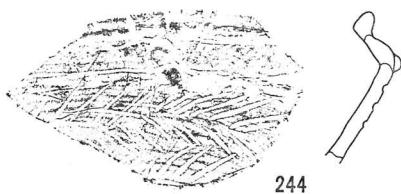
No.	部位	施文具	文様	胎土	色調	時期・分類	出土点
247	口縁部	棒状施文具	沈線文が施文されている。貼付文と、口縁部と胴部の境には縄文が施文されている。 口縁部に3本の横線と、有刻縦長の貼付文が施され、胴部には羽状沈線文が施文されている。	に、雲母をわずかに含有 長石・石英粒をかなり密に、雲母をわずかに含有	茶褐色	第9群第7類	B-18 第VI層
248	胴部	"	羽状沈線文が施文されている。	石英粒・長石・雲母を若干含有	明褐色	"	A-33 第VI層
249	"	"	"	石英粒・長石・雲母を多量に含有	灰褐色	"	B-18 第VI層
250	口縁部	"	波状口縁に沿って、口縁部に2本の沈線文が巡らされ、波頂部の直下には、稻妻状沈線文が施されている。	石英粒を若干含有したよく精選されたもの。	黒褐色	第9群第2類	ハ地区 第VI層
251	"	"	波状口縁に沿って、口縁部に有刻隆帯によって精円形状の区画文が施されている。	石英粒・長石を多量に含有	"	"	C-25
252	"	"	対弧状の沈線文と刻目が施された「横帶文」が施文されている。	"	暗褐色	第9群第12類	D-15 第VI層
253	"	"	横線文とその間隙に列点状刺突文が、それぞれ施文されている。	石英粒を若干含有	黒褐色	"	表採
254	"	"	"	"	"	"	ハ地区 第VI層 (スコリア中)
255	"	"	口縁部に2本の横線と突起が施されている。	石英粒・砂粒を若干含有	"	第9群	E-25 第VI層 (スコリア中)
256	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	口唇直下より帶縄文が施文されている。	"	"	第9群第1類	C-16 第VI層
257	胴部	"	胴部にコンパス文が施文されている。	"	"	"	E-26 第VI層 (スコリア中)
258	口縁部	"	口縁部に沿って、3本の沈線文と、ボタン状の貼付文が施されている。	"	"	"	E-26 第VI層 (スコリア中)
259	"	棒状施文具 縄文原体(R L)	口縁部に帶縄文が2段と、縦長の貼付文が、それぞれ施文されている。	"	"	"	C-13 第VI層
260	"	棒状施文具	口縁部に2本の横線と、有刻縦長の貼付文が施され、胴部には斜行沈線文が施文されている。	石英粒・長石・雲母を少量含有	暗茶褐色	第9群第4類	C-17 第VI層
261	胴部	"	口縁部と胴部との境には有刻隆	"	"	第9群第3	E-25



242



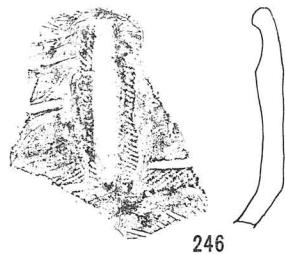
243



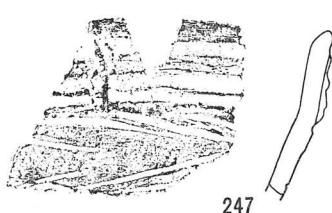
244



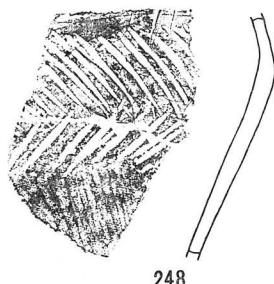
245



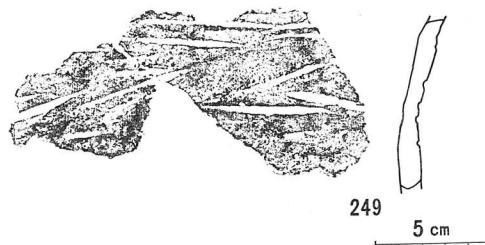
246



247



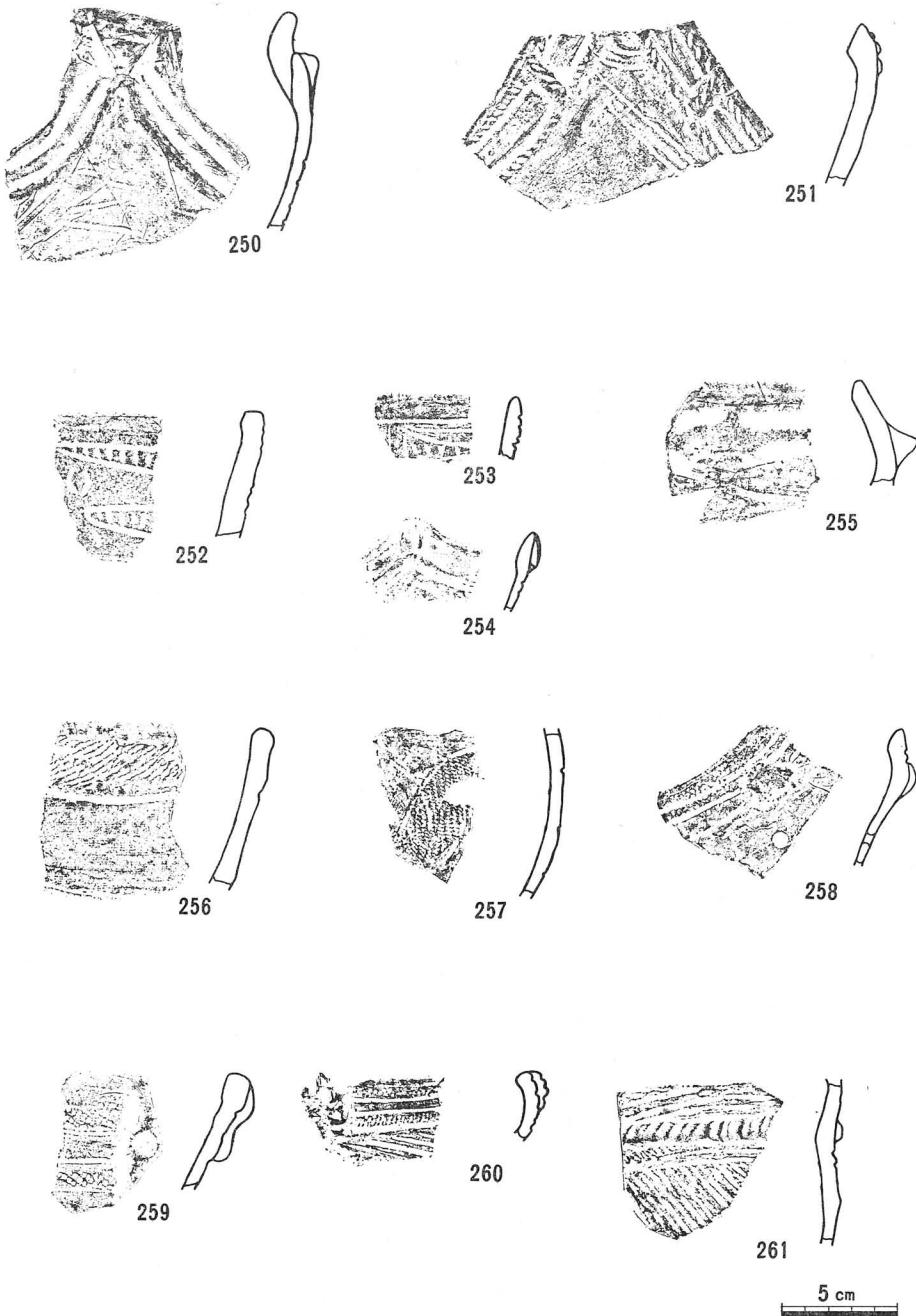
248



249

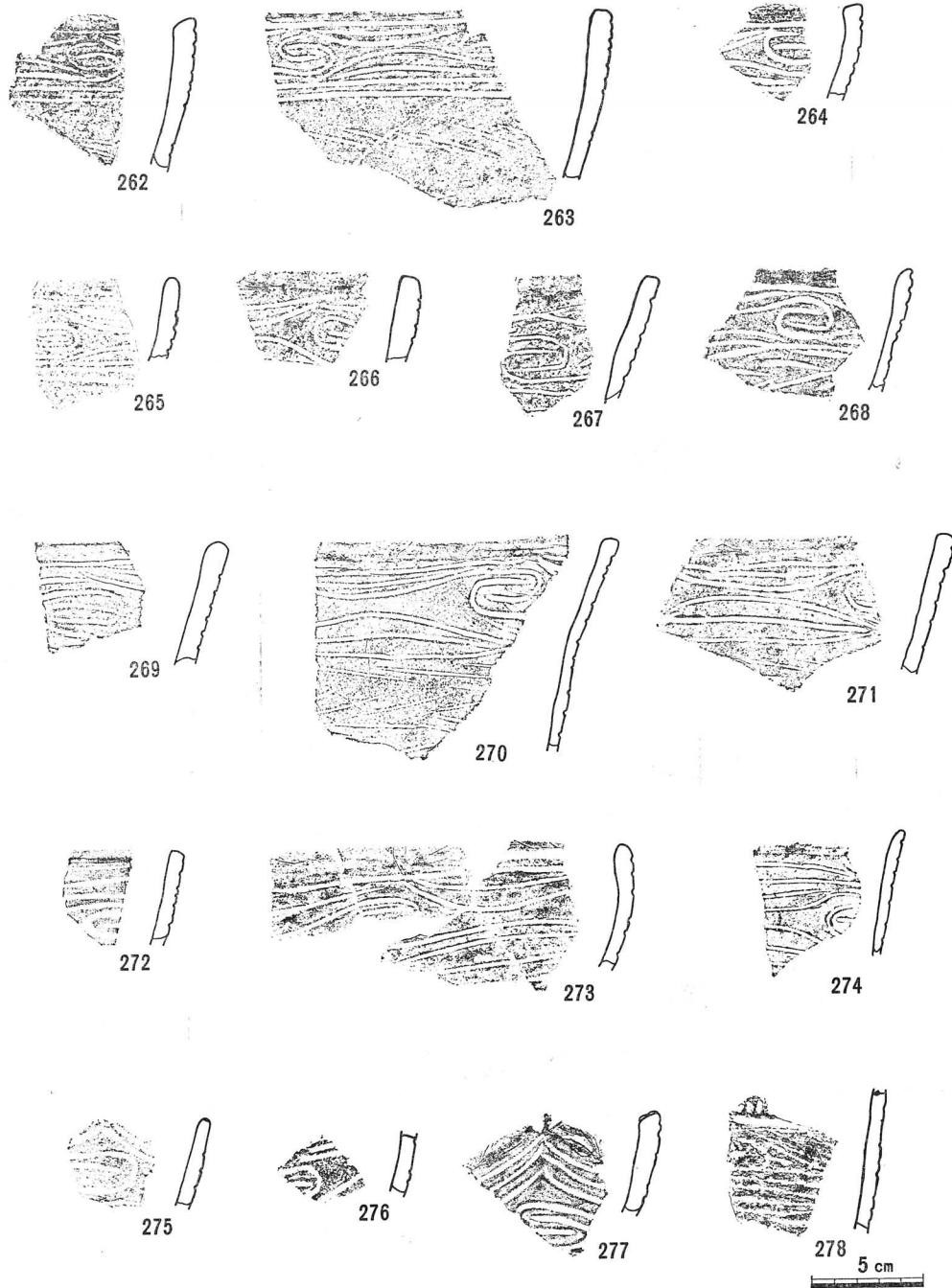
5 cm

第100図 配石及びグリッド出土土器拓影図 (16)



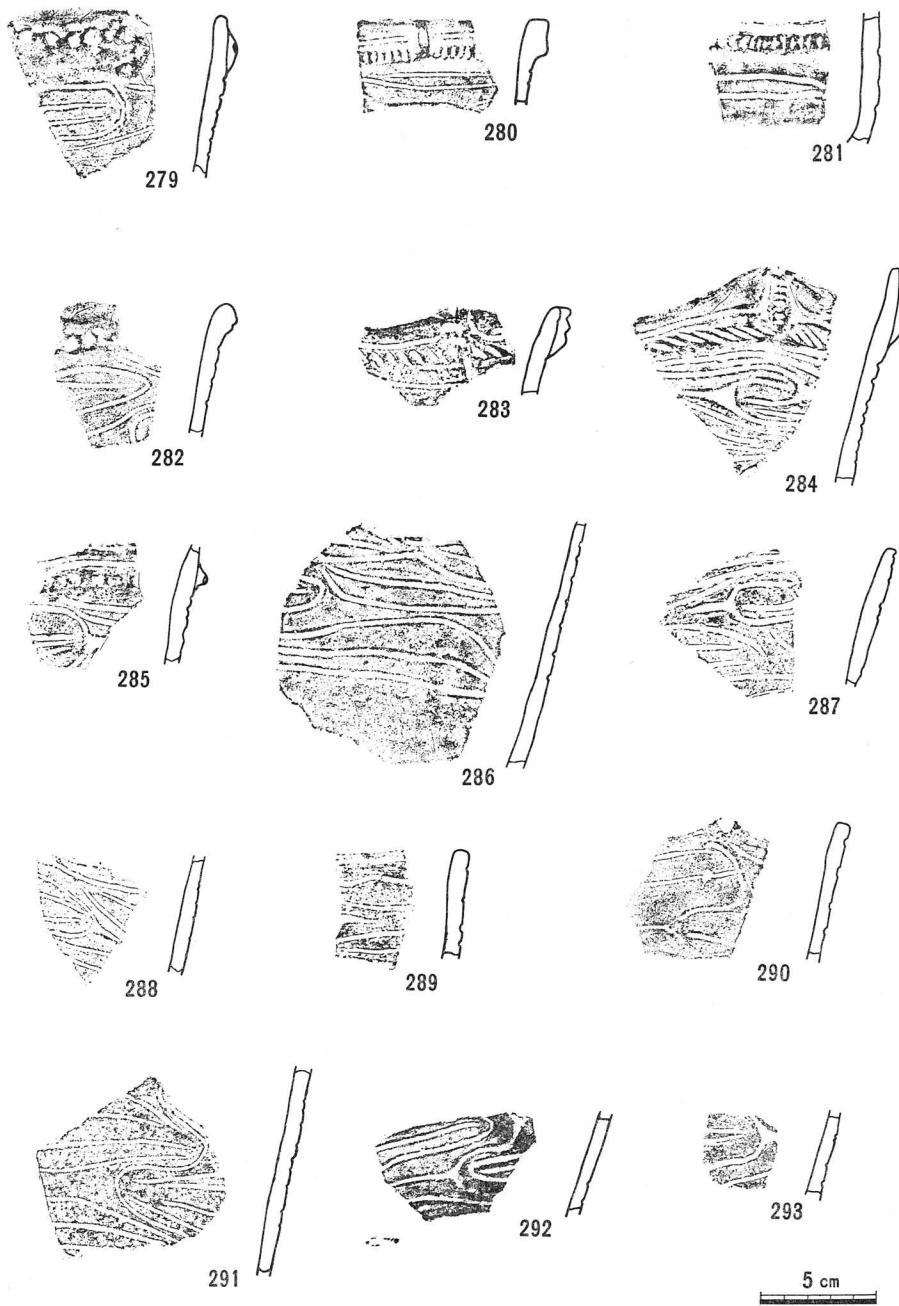
第101図 配石及びグリッド出土土器拓影図（17）

No.	部位	施文具	文様	胎土	色調	時期・分類	出土地点
262	口縁部	棒状施文具	線が巡らされ、胴部には斜行沈線文が施されている。 平縁の深鉢形土器で、口縁部には巴状入組文が、胴部には羽状沈線文が、それぞれ施文されている。	長石・石英粒・雲母を非常に密に含有	茶褐色	第10群	D-29 第V層
263	"	"	"	"	"	"	表採
264	"	"	"	"	"	"	E-28 第VI層
265	"	"	"	"	"	"	B-16 第VI層
266	"	"	"	"	"	"	D-12 第VI層
267	"	"	"	"	"	"	C-13 第VI層
268	"	"	"	"	"	"	ハ地区 第V層
269	"	"	平縁の深鉢形土器で、口縁部に巴状入組文が施されている。	長石・石英粒を密に、雲母を若干含有	暗茶褐色	"	E-28 第VI層
270	"	"	平縁の深鉢形土器で、口縁部に巴状入組文が、胴部に羽状沈線文がそれぞれ施されている。	長石・石英粒・雲母を密に含有	"	"	ハ地区 第V層
271	"	"	"	"	"	"	表採
272	"	"	"	長石・石英粒を若干含有	"	"	B-17 第VI層
273	"	"	"	"	灰茶褐色	"	B-32 第VI層
274	"	"	"	長石・石英粒・雲母をかなり含有	暗茶褐色	"	B-10 第VI層
275	"	"	波状口縁を呈する深鉢形土器で口縁部に巴状の入組文が施されている。	"	"	"	D-14 第V層
276	"	"	"	"	"	"	D-27 第VI層
277	"	"	"	"	"	"	B-17 第VI層
278	"	"	口唇直下に有刻隆帯を1本巡らし、その直下より、巴状入組文が施されている。	"	"	"	D-14 第VI層
279	"	"	"	"	黒褐色	"	ハ地区 第V層
280	"	"	"	"	"	"	イ地区 第V層
281	"	"	"	"	"	"	A-13 第VI層



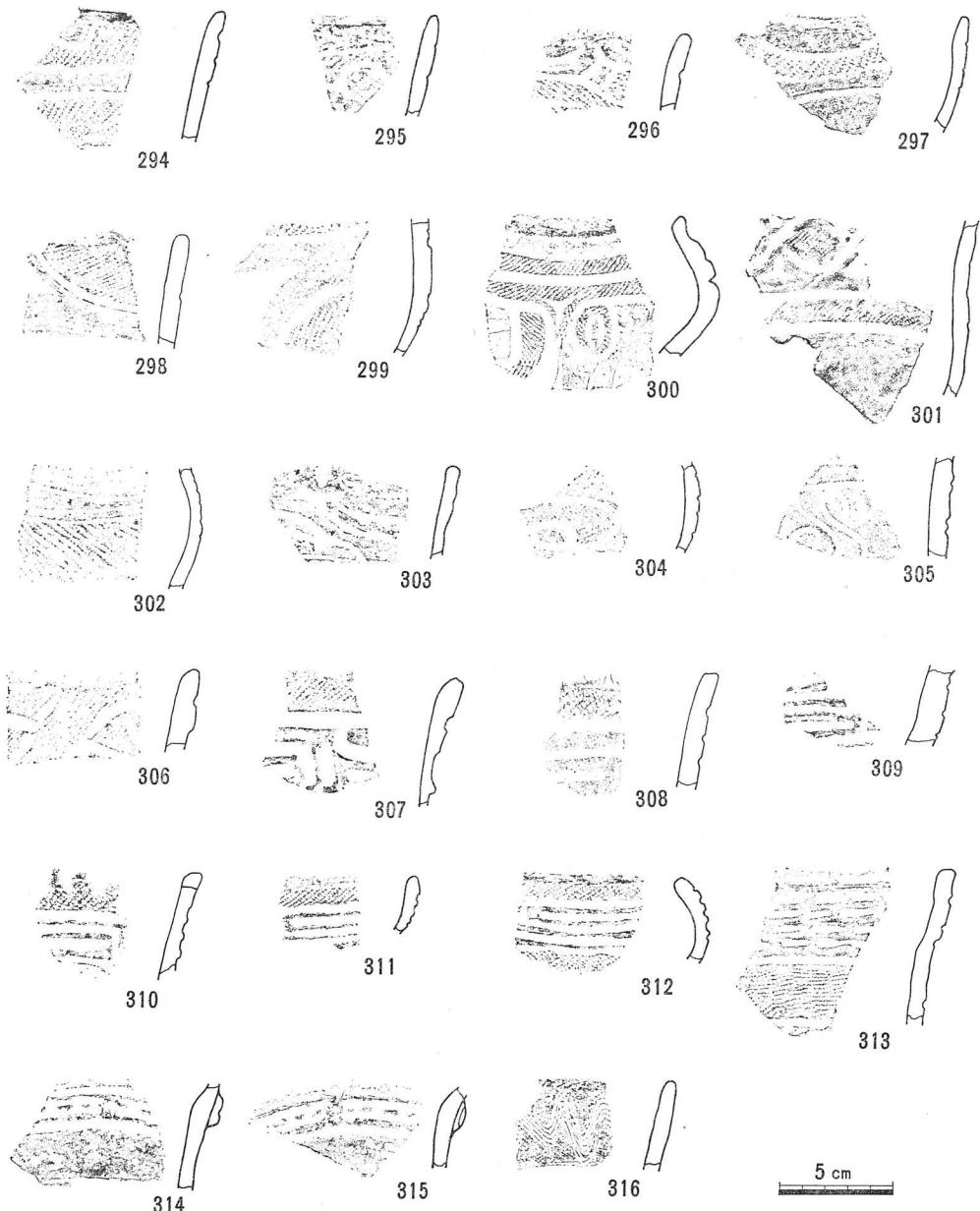
第102図 配石及びグリッド出土土器拓影図 (18)

No.	部位	施文具	文様	胎土	色調	時期・分類	出土地
282	口縁部	棒状施文具	口唇直下に有刻隆帯を1本巡らし、その直下より、巴状入組文が施されている。	長石・石英粒・雲母をかなり含有	明茶褐色	第10群	B—3 第VI層
283	"	"	"	"	黒褐色	"	A—12 第VI層
284	"	"	波状口縁を呈する深鉢形土器で、口唇直下に有刻隆帯が巡らされ、口唇部と有刻隆帯の間隙には、三叉文が、有刻隆帯の直下には三叉状入組文が、それぞれ施文されている。	石英粒・長石・砂粒・雲母をかなり多量に含有	"	"	ハ地区 第VI層
285	"	"	"	"	"	"	C—15 第VII層
286	胴部	"	胴上半部の破片で、入組文が施されている。	"	"	"	ハ地区 第V層
287	口縁部	"	口縁部文様として、三叉状入組文が施されている。	"	"	"	D—14 第VI層
288	"	"	"	"	"	"	C—16 第VI層
289	"	"	"	"	"	"	E—29 第VI層
290	"	"	口縁部文様として、流水状の三叉状入組文が施されたものである。	"	"	"	C—15 第VI層
291	"	"	"	"	"	"	A—26 第VI層
292	"	"	"	"	"	"	B—31 第VII層
293	"	"	"	"	明茶褐色	"	E—25 第V層 (スコリア上)
294	"	棒状施文具 縄文原体(R L)	帶縄文が施され、口唇直下に弧状沈線文が施文されている。	石英粒・長石を若干含有	暗茶褐色	第11群第1類	C—17 第VI層
295	"	"	帶縄文が施され、口唇直下に三叉状入組文が施文されている。	"	明褐色	"	B—16 第VI層
296	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	三叉状沈線文の組合せによって、菱形状区画文を構成している。	長石などの粒子を若干含有	暗灰色	"	B—18 第VI層
297	"	"	口縁部に1本横線が巡らされ、口唇部と横線との間に、弧状の帶縄文が施文されている。	石英粒・長石・雲母をかなり密に含有	暗褐色	第11群第2類	B—15 第VI層
298	"	"	三角形の印刻文、弧状の帶縄文が、それぞれ施文されている。	石英粒・長石・雲母を若干含有	"	第11群第1類	A—12 第VI層
299	"	棒状施文具 縄文原体(R L)	"	"	"	"	B—13 第V層
300	"	"	平縁の浅鉢形土器で、隆起帶縄文と、三叉文が施されている。	"	"	第11群第2類	表採



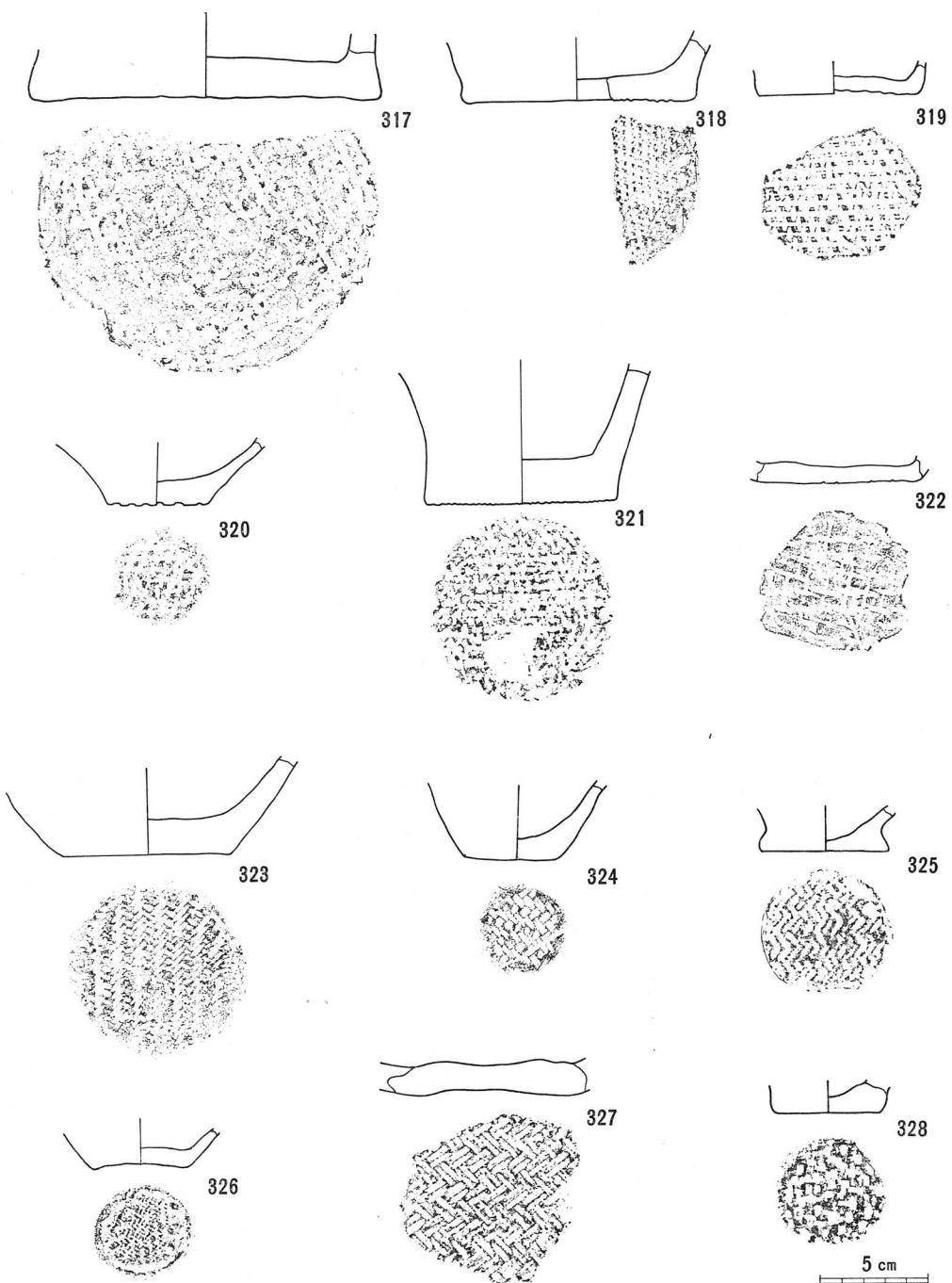
第103図 配石及びクリッド出土土器拓影図 (19)

No.	部位	施文具	文様	胎土	色調	時期・分類	出土点
301	口縁部	棒状施文具 縄文原体(L R)	平縁の浅鉢形土器で、横「S」字状沈線文と三叉文が組み合わされた文様が施文されている。	長石等の粒子を若干含有	灰褐色	第11群	B—14 第VII層
302	胴部	"	口縁部に羊齒状沈線文が、胴部には縄文が、それぞれ施されている。	長石・雲母を若干含有	暗茶褐色	"	A—4 第V層
303	口縁部	棒状施文具	羊齒状沈線文が施されている。	石英粒・長石・雲母をやや密に含有	黒褐色	"	D—14 第VII層
304	胴部	棒状施文具 縄文原体(R L)	縄文を地文として、曲線的な沈線文が施されている。	"	黒褐色	"	B—17 第VII層
305	"	棒状施文具	「S」字状沈線文が施されている。	長石等の微粒子をわずかに含有	灰褐色	"	B—12
306	口縁部	棒状施文具 縄文原体(L R)	縄文を地文として、弧状沈線文の組み合わせによって、入組文を構成している。	石英粒・長石・雲母をかなり密に含有	"	"	イ地区
307	"	"	口唇直下に幅の狭い帶縄文を巡らし、その直下には、鍵ノ手状入組文(雷文)が施されている。	"	明褐色	"	C—17 第V層
308	"	"	"	長石等微粒子をわずかに含有	灰色 やや赤みがかかる。	"	C—13 第IV層
309	"	棒状施文具	鍵ノ手状入組文(雷文)が施されている。	長石等の微粒子をまばらに含有	灰褐色	"	イ地区
310	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	刻みが施された口縁部に幅の狭い帶縄文が施され、「エ」字文化した鍵ノ手状入組文(雷文)が施されている。鍵ノ手状入組文も沈線文から浮線文化している。	"	明褐色	"	ハ地区
311	"	"	"	"	"	"	B—15 第VII層
312	"	"	"	長石粒を若干含有	灰褐色	"	A—9 第VII層
313	"	棒状施文具 撫糸文	やや肥厚した無文の口縁部には刺突文が、その直下には横位に撫糸文が施文されている。	長石・石英粒を若干含有	暗茶褐色	"	C—15 第VII層
314	胴部	棒状施文具	結節浮線文状の隆帯が巡らされている。	石英粒・長石をかなり密に、雲母を若干含有	黒褐色	"	D—14 第VII層
315	"	"	"	"	"	"	B—17 第VII層
316	口縁部	櫛齒状施文具	口唇直下より、小波状に巡らされている。	長石・雲母を若干含有	明褐色	"	D—33 第IV層



第104図 配石及びグリッド出土土器拓影図 (20)

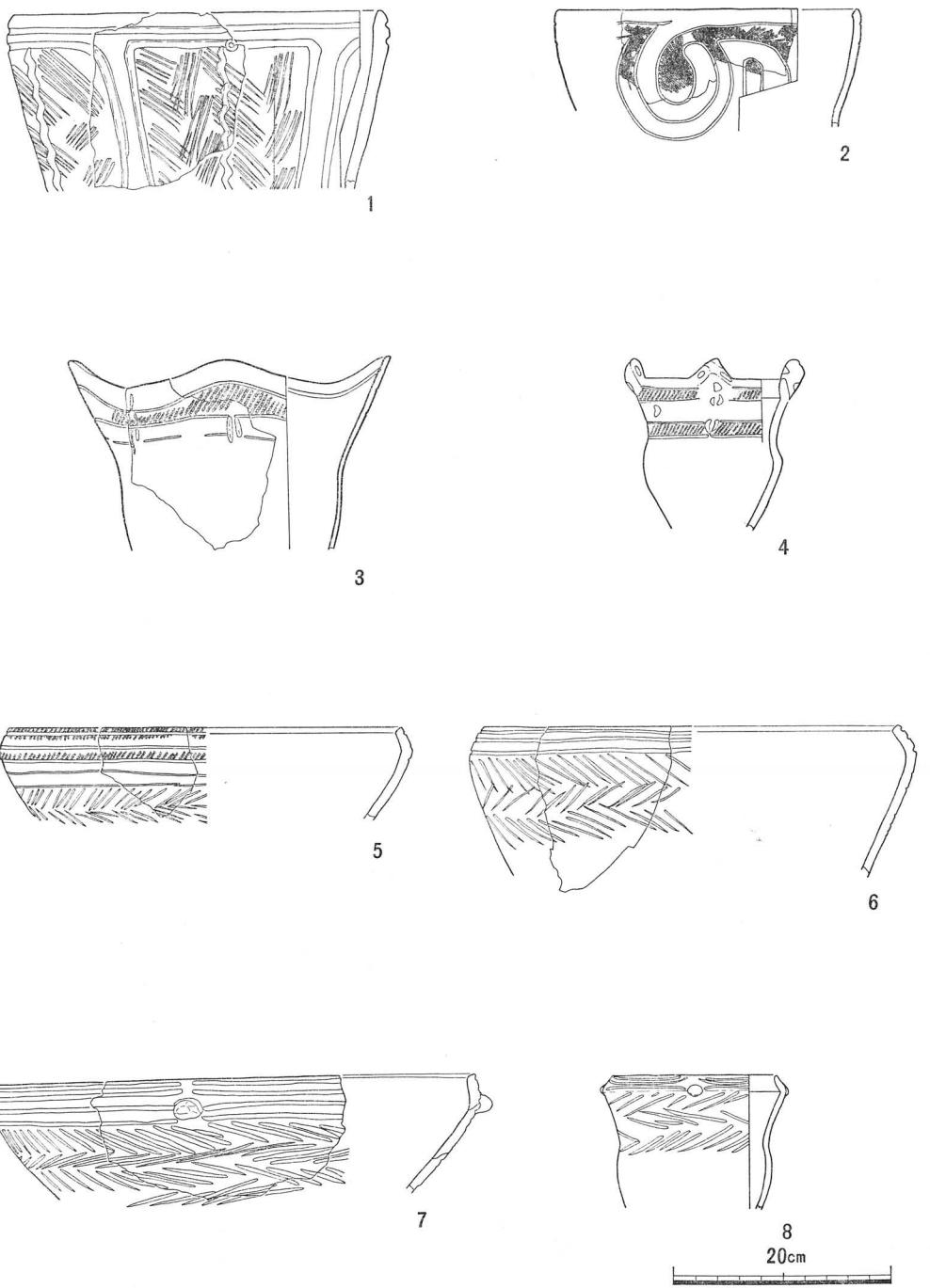
No.	部位	施文具	文様	胎土	色調	時期・分類	出土点
317	底部			石英・長石・砂粒をかなり含有	明茶褐色		C—3 第VII層
318	"			"	暗茶褐色		C—10 第VII層
319	"			"	"		D—2 第VII層
320	"			石英・長石・砂粒・金雲母をかなり多量に含有	明茶褐色		ハ地区 第VI層
321	"			石英・長石・砂粒をかなり多量に含有	暗茶褐色		D—22 第VI層
322	"			石英・金雲母を含むきめ細かい土	黒褐色		C—10 第VI層
323	"			石英・長石・砂粒・金雲母をかなり多量に含有	暗茶褐色		C—15 第VI層
324	"			"	"		C—32 第IV層
325	"			石英・赤褐色粒子含有	黒褐色		A—33 第VII層
326	"			きめの細かい土	明褐色		A—11 第VI層
327	"			3~4mm大の石英・長石・砂粒・金雲母をかなり多量に含有	暗茶褐色		C—16 第VII層
328	"			石英・長石・砂粒をかなり多量に含有	明茶褐色		Z—32 第VI層



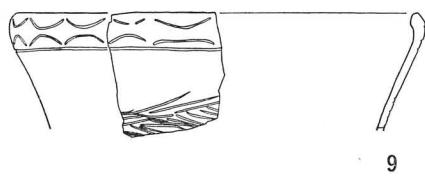
第105図 配石及びグリッド出土土器拓影図（21）

第24表 中谷遺跡第2次調査出土土器一覧表

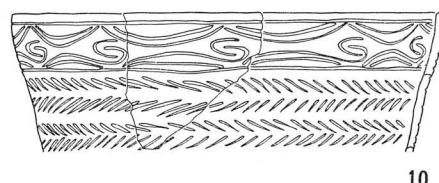
No.	器 形	施 文 具	文 樣	胎 土	色 調	時期・分類	出 地 点
1	深鉢形 土器	棒状施文具 櫛齒状施文具	口縁部に一条沈線が巡らされ、 その直下より、「匚」状の区画文が施されている。区内には 櫛齒状施文具による綾杉状条線文・棒状施文具による蛇行懸垂文が施されている。	石英粒・長石・ 雲母を含有	茶褐色	第5群	
2	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	口唇直下に無文帯が形成され、 その直下に、棒状施文具による 曲線的な区画文が施され、区内には充填縄文が施文されてい る。	石英粒・長石 を含有	"	第6群	
3	"	"	波状口縁に沿って、波状に横帶文が2段施され、上段には縄文、 下段には「区切り対弧文」が、 それぞれ施文されている。	石英粒・長石・ 雲母を含有	黒褐色	第8群	
4	"	棒状施文具 縄文原体(R L)	口縁部と頸部に2段の「横帯文」 が施され、その始点と終点の間 には、「対弧文」が施文されて いる。	"	"	"	
5	浅鉢形 土器	棒状施文具 縄文原体(L R)	口縁部には縄文施文後、横線が 5本巡らされ、胴部には羽状沈 線文が施文されている。	石英粒・長石 を含有	灰褐色	"	
6	"	棒状施文具 ヘラ状施文具	口縁部に3本の横線が巡らされ、 胴部にはヘラ状施文具による羽 状沈線文が施文されている。	"	黒褐色	"	
7	"	棒状施文具	口縁部に4本の横線と瘤状貼付 文が施され、胴部には羽状沈線 文が施文されている。	石英粒・長石・ 雲母を含有	"	第9群	
8	深鉢形 土器	"	口縁部に間伸びした対弧状沈線 対と瘤状貼付文が施され、胴部 には羽状沈線文が施文されてい る。	"	"	"	
9	"	ヘラ状施文具	口縁部には対弧状沈線文が施さ れ、胴部には羽状沈線文が施文 されている。	雲母・白色粒 子を含有	"	"	
10	"	棒状施文具	口縁部には巴状入組文と対弧状 沈線文とが連結した文様が施さ れ、胴部に羽状沈線文が施文さ れている。	雲母・砂粒・ 石英粒を含有	茶褐色	第10群	
11	"	"	口縁部に三叉状入組文が施され 胴部には羽状沈線文が施文され ている。	"	"	"	
12	"	"	口唇直下に有刻隆帯が巡らされ 口唇部との間(I a文様帯)に は沈線文が、その直下(I文様 帯)には巴状入組文が、それぞ れ施文されている。	砂粒を多量に 石英粒・雲母 を若干それぞ れ含有	黒褐色	"	



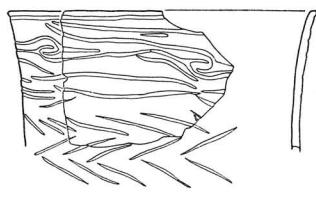
第106図 中谷遺跡第2次調査土器実測図(1)



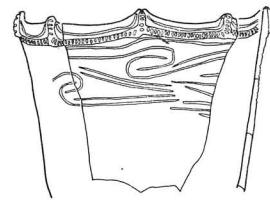
9



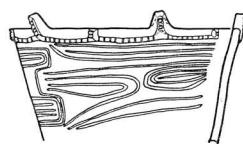
10



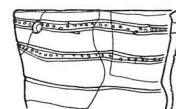
11



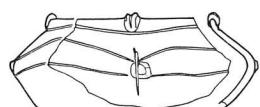
12



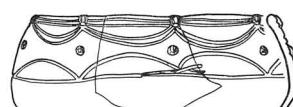
13



14



15

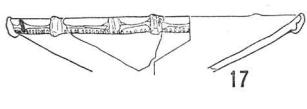


16

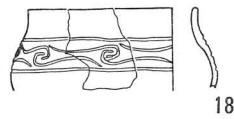
20cm

第107図 中谷遺跡第2次調査土器実測図(2)

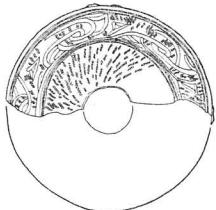
No.	器 形	施 文 具	文 様	胎 土	色 調	時期・分類	出 土 点
13	深鉢形土器	棒状施文具	口唇部に小突起が、口唇直下に有刻隆帯が巡らされ、その直下に流水状の沈線文が施文されている。	砂粒を多量に、石英粒、雲母を若干それぞれ含有	茶褐色	第10群	
14	"	"	2段の「横帯文」が巡らされ、その間隙に列点状刺突文が施文されている。	雲母・長石を少量含有	暗黄褐色	第9群	
15	浅鉢形土器	"	口唇部に4単位の小突起を有し、その直下にも口唇の小突起に呼応して、瘤状貼付文が施されている。瘤状貼付文間は2本の沈線で連結されている。	白色粒子・雲母を少量含有	灰褐色	"	
16	"	"	口縁部に弧状沈線文とボタン状貼付文が施されている。	雲母・小砂粒を多量に含有	暗黄褐色	"	
17	"	"	口唇直下に有刻隆帯が巡らされ口唇部とその間には三叉文が施文されている。口唇部に8単位の小突起を有する。	雲母・石英粒・長石を含有	茶褐色	第11群	
18	"	"	胴上半部に凹状入組文が施されている。	雲母・その他微粒子を多量に含有	明茶褐色	"	
19	"	棒状施文具 縄文原体(L R)	口縁部に玉抱き三叉文が施文されている。	"	黒褐色	"	
20	"	棒状施文具 縄文原体(R L)	口縁部に羊歯状文が施され、体部に縄文が施文されている。	石英粒・長石・雲母の粒子をまばらに含有	明茶褐色	"	
21	深鉢形土器 (粗製土器)	棒状施文具	口唇直下に有刻隆帯が巡らされている。口唇部に小突起を有する。	砂粒を含有	黒褐色	"	
22	深鉢形土器		口唇直下に指頭圧痕が施された隆帯文が施されている。口唇部に小突起を有する。	"	黄茶褐色	第10群	
23	浅鉢形土器		無文の浅鉢形土器	石英粒・長石を含有	暗褐色	第8群	
24	"		"	"	"	"	
25	壺形土器		無文の壺形土器	"	"	"	
26	深鉢形土器	棒状施文具	口縁内面に3本の横線文が巡らされている。	"	黒褐色	"	
27	"	"	口縁部に2本の横線と縦長の有刻貼付文が施されている。	"	茶褐色	第10群	
28	浅鉢形土器		無文の浅鉢形土器	"	"	"	



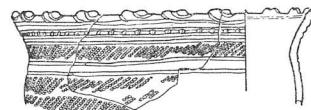
17



18



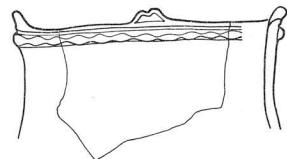
19



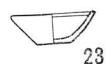
20



21



22



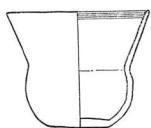
23



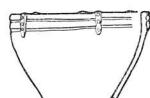
24



25



26



27



28

第108図 中谷遺跡第2次調査土器実測図(3)

## 第2節 土製品

前節で取扱った土器以外の土製品をここにまとめておく。出土しているものは、把手・注口土器の注口部・小型土器・台付土器の脚台部・蓋・耳飾などである。

### 1 把手（第109図）

1～3は第7群土器に、4～14は第8群土器に、それぞれ伴うものと思われる。

第25表 配石及びグリッド出土の把手一覧表

図版 No.	地 区	グ リ ッ ド	層位	色 調	焼成	胎 土	そ の 他
1	イ地区	C—3	VII層	赤褐色	良好	白色粒子少量含有	
2	イ地区	D—3	VII層	茶褐色	良好	緻密、白色粒子少量含有	
3	イ地区	A—32	VII層	表面：茶褐色 内面：黑色	良好	緻密、砂粒を含有	
4	イ地区	B—3	VII層	黑色	良好	白色粒子含有	把手は立体的で、中央に円孔が穿たれている。両肩に2対の凹みが施されている。外面文様は縄文帯を対弧状の棒状施文具による沈線で区切っている。
5	ハ地区	Z—29	VII層	黒褐色	良好	長石含有	
6	ロ地区	C—9	VII層	暗黒褐色			
7	イ地区	B—4	VII層	黒褐色	良好	金雲母・白色粒子含有	
8	ハ地区	A—25	VII層	灰茶褐色	良好	金雲母含有	
9	ハ地区	Z—29	VII層	表面：黒褐色 内面：黄褐色	良好	長石等1mm～3mm大砂粒を含有	器面はヘラで研磨されている。
10	ロ地区	A—13	VI層	褐色	良好	緻密	表面はよく研磨されている。
11	イ地区	A—4	VI層	茶褐色	良好	緻密、白色粒子含有	突起形態は、集合沈線を施した突起があり、その両側上小さな瘤状突起が配されていたものと思われる。2つの穴が穿たれている内面には、渦巻文が施されている。
12	ロ地区	B—13	VI層				
13	イ地区	C—2	VII層	黑色	良好	白色粒子を若干含有、緻密	よく研磨されている。
14	ロ地区	C—9	VI層	暗褐色	良好	長石小粒子含有	ヘラによる研磨

### 2 注口部（第110図）

すべて第8群土器の注口土器に伴うものと思われる。

### 3 小型土器（第111図—1）

1は壺形の無文の小型土器である。内面に棒状施文具によって沈線文が1条巡らされている。

### 4 台付土器（第111図—2～7）

1・2は、脚台部に棒状施文具によって沈線文が施され、4・5は、指頭圧痕が施された隆



第109図 配石及びグリッド出土の把手

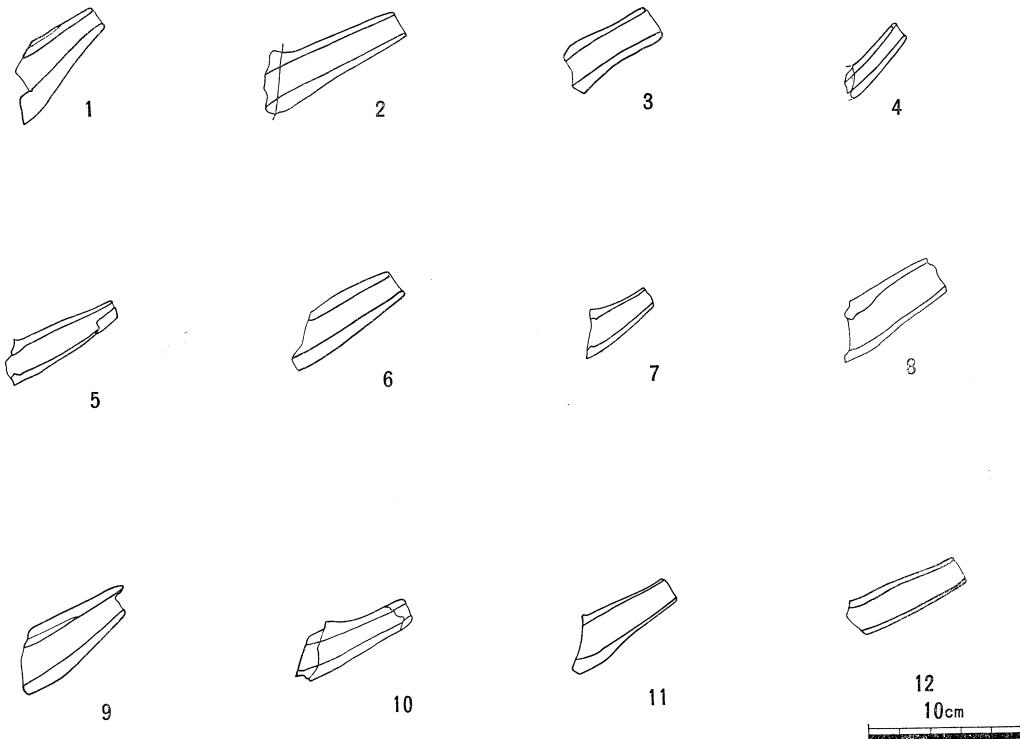
帶が巡らされている。6・7は、小型土器の脚台部である。

### 5 蓋形土製品（第111図—9）

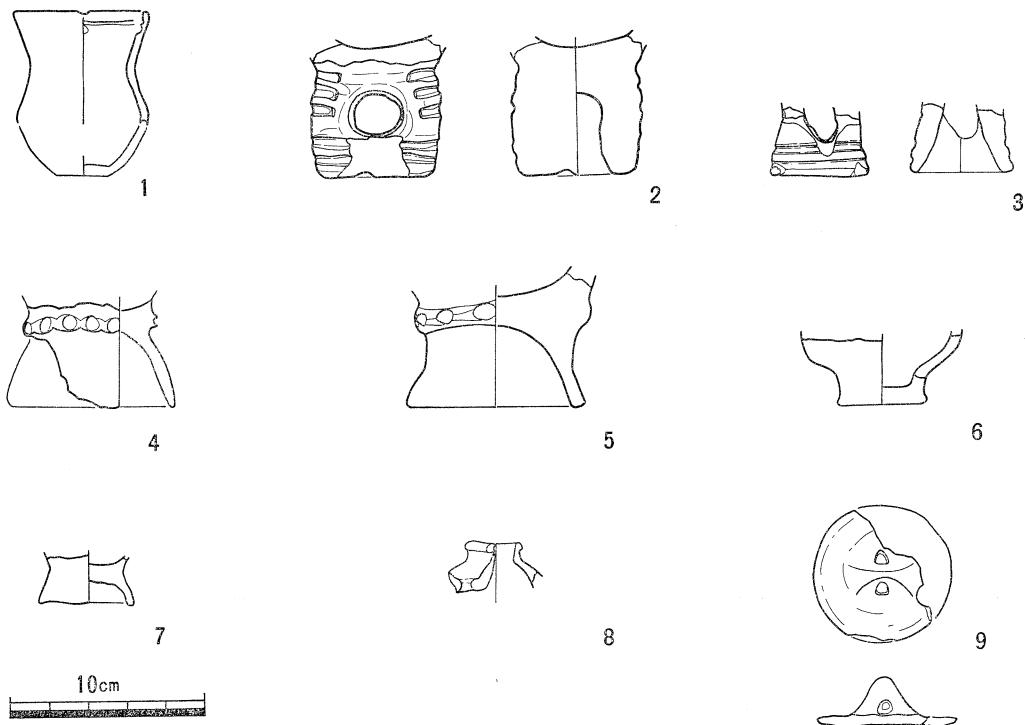
9は蓋部を同心円状にヘラなでが施され、縁の下部には横ナデが施されている。つまみ部は後から接合され、横方向から孔があけられている。

第26表 配石及びグリッド出土の土製品一覧表

図版No. 第111図	地 区	グ リ ド	層 位	色 調	胎 土	文 様・そ の 他
1	イ地区	B-1	VII層	黒色	白色粒子・金雲母の微 粒子を含有	外面は無文、内面に棒状施文 具による沈線が1条めぐる。 棒状施文具で沈線文が施文さ れている。
2	ハ地区	E-24	VII層 スコリア中	赤茶褐色	白色粒子・石英・黒色 粒子を若干含有	棒状施文具で沈線文が施文さ れている。
3	ハ地区	E-24	VII層 スコリア中	黒褐色	金雲母と0.5mm~1mm大 の白色粒子含有	棒状施文具で沈線文が施文さ れている。
4	イ地区	C-5	VII層	茶褐色	多量の雲母・長石を含 有	指頭圧痕が施された隆帶が施 されている。
5	イ地区	C-5	VII層	黒色	雲母・長石を若干含有	"
6	イ地区	D-0	VII層	暗黒褐色	1.0mm~1.5mm大の白色 粒子・雲母を含有する	"



第110図 配石及びグリッド出土の注口



第111図 配石及びグリッド出土の土製品（1）

図版No. 第111図	地 区	グ リ ッ ド	層 位	色 調	胎 土	文 様・そ の 他
7	ハ地区	一号址	77覆 土	暗茶褐色	雲母・長石等の微粒子をかなり含有する。	
8	ハ地区	E—27	VI層 スコリア中	茶褐色	白色粒子・雲母を若干含有する。	
9	ロ地区	A—13	VII層	茶褐色	2mm～3mm大の粒子及び微量の雲母含有	

#### 6 耳飾（第112・113図—1～17・20）

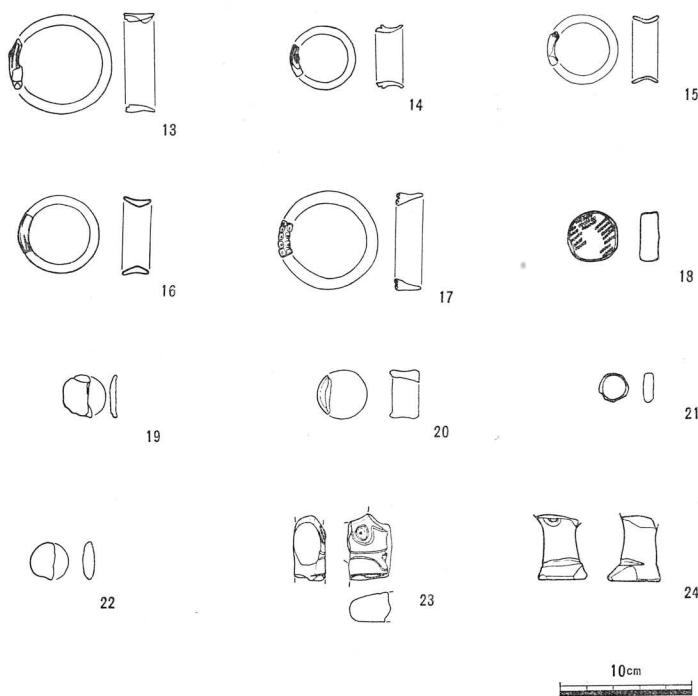
本遺跡では、半欠品を含めて合計18点の耳飾が出土している。これらは、円板状のもの、滑車形状のもの、環状のものなどが認められる。

##### 第1類 円板状耳飾（1～5）

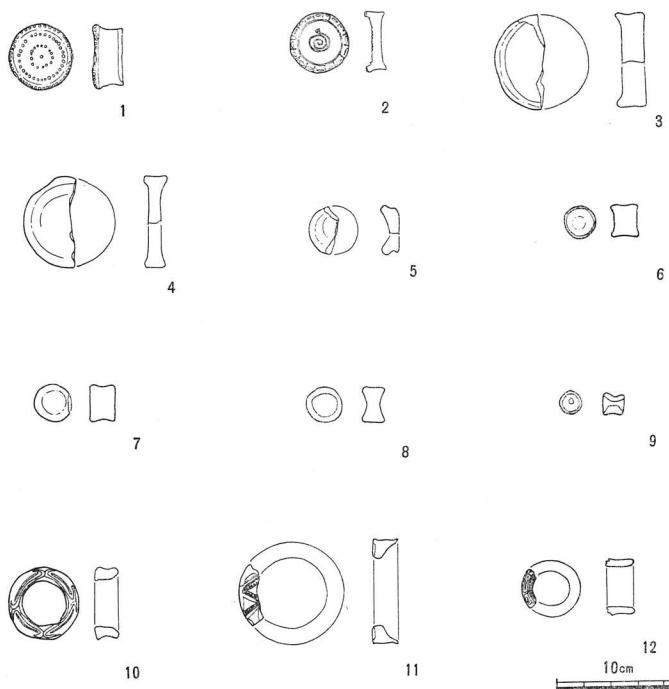
1～2は、棒状施文具で刺突文、沈線文が施され、2は蛇をモチーフにしたかのような渦巻状の沈線文が施されている。

3～5は無文のものである。

##### 第2類 滑車形耳飾（6～9）



第112図 配石及びグリッド出土の土製品（2）



第113図 配石及びグリッド出土の土製品（3）

滑車形の耳飾で9には、中心に孔があけられている。6～8は無文のものである。

### 第3類 環状耳飾 (10～17・20)

環状の耳飾で沈線文・刺突文・三叉文などが施されている。

#### 7 土製円盤 (第113図—18・19・21・22)

18は縄文が施され、19・21・22は無文のものである。

#### 8 土 偶 (第113図—23・24)

23・24は土偶の破片で、23は胴部、24は足である。

第27表 配石及びグリッド出土の耳飾・土製円盤・土偶一覧表

図版 No.	地 区	グ ッ ド	層位	色 調	胎 土	文 様・そ の 他
1	ロ地区		V層	茶褐色	砂粒・石英・金雲母を含む。	表面に棒状施文具による刺突有り。
2	ハ地区	Z-30		褐 色	金雲母・長石・石英の小粒子を含有	
3	ロ地区	B-12	V層	黒褐色	金雲母・白色粒子・石英を含有する。	土器面は、ヘラ状のものによりよく研磨されている。
4	ハ地区	Z-26		茶褐色	2mm大の白色粒子を若干含有し、細かい粘土を用いている。	
5	ロ地区	B-13	VII層	赤褐色	金雲母・白色粒子を含有する。	
6	表 採			茶褐色	金雲母・石英・砂粒子の小粒子を含有する。	
7	"			茶褐色	金雲母・白色黑色小粒子を含有する。	
8	ロ地区	D-14	VII層	茶褐色	白色粒子・石英・金雲母を多量に含有する。	表裏両面に朱が塗られている。
9	ハ地区	B-26	VII層	黒褐色	細かい粘土を用いている。	表裏両面に丹が塗られている。
10	ロ地区	A-18	VII層	茶褐色	白色粒子を多量に含有し、さらに金雲母を含有する。	棒状施文具による沈線で「エ」字文風の入組みをめぐらしている。
11	ハ地区	A-25	VII層	黒褐色	白色粒子を少量含有している。	ヘラ状施文具により三叉状に削り隆帯がレリーフ状になってしまっており隆帯には沈線と刻目が入っている。表裏は研磨され丹が塗られている。
12	ハ地区	C-30		灰茶褐色	金雲母・白色粒子を含有する。	ヘラ状施文具による刻み目・沈線が施文されている。
13	ニ地区	D-34	VII層	茶褐色	極く細かい粘土を用いている。径0.5mm～1.0mm大の黒褐色粒子を若干含有する。	棒状施文具による沈線をめぐらせそれをさえぎるよう指頭により肥厚させている。
14	ロ地区	C-13	V 層	灰褐色	細かい粘土を使用している。	すかし彫りで隆帯に刻目をもつ。文様構成は不明。
15	表 採			褐 色	白色粒子を多量に含有。そ	ヘラ状施文具による三叉文が

図版 No.	地 区	グ リ ッド	層位	色 調	胎 土	文 様・そ の 他
16				表面、赤褐色 内面、黒褐色	のため面が荒い。 金雲母若干と白色粒子を含有する。	装飾されている。晩期のものと思われる。
17	ロ地区	B—18	V層	茶褐色、部分的に黒褐色	金雲母・白色粒子石英の小粒子を含有する。	
18	ロ地区	D—16	VII層	褐 色	白色粒子（長石）を多量に含有し、さらに石英・金雲母を含有する。	縄文原体はLR、断面は非常によく磨かれており厚手である。
19	イ地区	A—11	IV層	茶褐色	2mm大の粒子を含有している。	
20				黄灰白色	白色粒子・石英を含有する。	
21	ロ地区	B—11	V層	茶褐色	白色の微粒子を含有する。	
22	ロ地区	D—14	VII層	茶褐色	金雲母・長石・石英を多量に含有する。そのため器面が荒い。	
23	ニ地区			灰褐色	径5mm前後の雲母、長石粒をやや密に含むキメの細かい土。	
24	ハ地区			明灰色	雲母などを含みキメが細かい。	

### 第3節 石 器

本遺跡からは石器、及びなんらかの使用の痕跡を認める円礫・角礫などを含めると385点の石器類が出土した。しかし、これも完形の石器に限ってみると数はずっと少なくなる。本遺跡から出土した石器は、石鎌・打製石斧・磨製石斧・石棒・石錐・スクレイパー・石皿・磨石などである。

#### 1 石鎌（第114図・115図—1・71、第78図—1～9、第18図—1・2）

石鎌は住居址より11点、配石及びグリッドより66点、表採で5点、計82点出土した。

石鎌は形態より、I～V類に分類される。

##### 第1類（第78図—7・8、第114図—9、第115図—33～35）

基部にまったく抉込みをもたず、三角形の形状をなすもの。

##### 第2類（第78図—1～4、第114図—1～6・10～17・19・20・22・24、第115図—25～30・36～48、第116図—49～55・57・58・64～67・69～71）

基部の抉込みは小さく、全長の $\frac{1}{4}$ に満たないもの。

##### 第3類（第78図—6、第114図—7・8・18・21、第115図—29～32、第116図—68）

基部の抉込みが大きく、全長の $\frac{1}{4}$ をこえるもの。



第114図 配石及びグリッド出土の石器（1）

第4類（第78図—5，第114図—23，第116図—63）

肩が張り、五角形の形状をなすもの。

第5類（第78図—9，第116図—59・60）

有茎のもの。

2 磨製石斧（第34図，第78図—10，第117図—72～77）

磨製石斧は9点出土している。打製石斧にくらべるとかなり少ない。乳棒状（1類）と定角式（2類）とに分類されるが、前者は1点のみである。

第1類（第117図—77） 乳棒状の磨製石斧である。77は先端部欠損している。

第2類（第34図，第78図—10，第117図—72～76） 定角式の磨製石斧である。75・76は小型の定角磨斧である。

3 打製石斧（第18図—4～9，第24図—1～6，第79図—11～18，第118図—90～104）

打製石斧は50点出土している。実測図に示したものを、その形態によって大別すると短冊形（第1類），撥形（第2類），分銅形（第3類），その他（第4類）となる。

第1類（第18図—5，第24図—3・5，第79図—14・15，第118図—95・99・100，第119図—101・103）

短冊形の打製石斧である。

第2類（第18図—6・7・8，第79図—11・12・13・17，第118図—90・92・93・94・96 第119図—102）

撥形の打製石斧である。

第3類（第24図—1，第79図—12，第118図—91，第119図—102）

分銅形の打製石斧である。

第4類 他の打製石斧である。

a種（第18図—4，第24図—6，第79図—18）

縦長で先端が尖ったものである。

b種（第24図—2・4，第79図—16，第118図—92）

方形又は円形に近い形状のものである。

c種（第119図—104）

自然面をかなり残した分厚い打製石器で、刃部も荒い調整が行われただけのものである。

4 石棒（第24図—9，第30図—1，第117図—79）

石棒は住居址より2点、配石より2点、計4点出土した。実測図を掲載した3点はいずれも細身の石棒で、形が整えられている。

5 石錘（第117図—80・81）

80・81ともに長軸方向端に切り込みがある石錘である。

6 スクレイパー（第18図—3，第77図—15・19，第118図—92・93）

石鏃・打製石斧以外の剥片石器を一括してまとめた。

第1類（第18図—3，第79図—15）



第115図 配石及びグリッド出土の石器（2）

薄手綫長の剝片で、片側に刃部を有する。

第2類（第79図—19）

薄味綫長の剝片で、片側に刃部を有し、反対側につまみ状の張り出しを作り出している。サイドスクレイパー状のものである。

第3類（第118図—92）

分厚い剝片を利用したもので、荒い調整が行われている。エンドスクレイパー状のものである。

7 石皿（第18図—10・11）

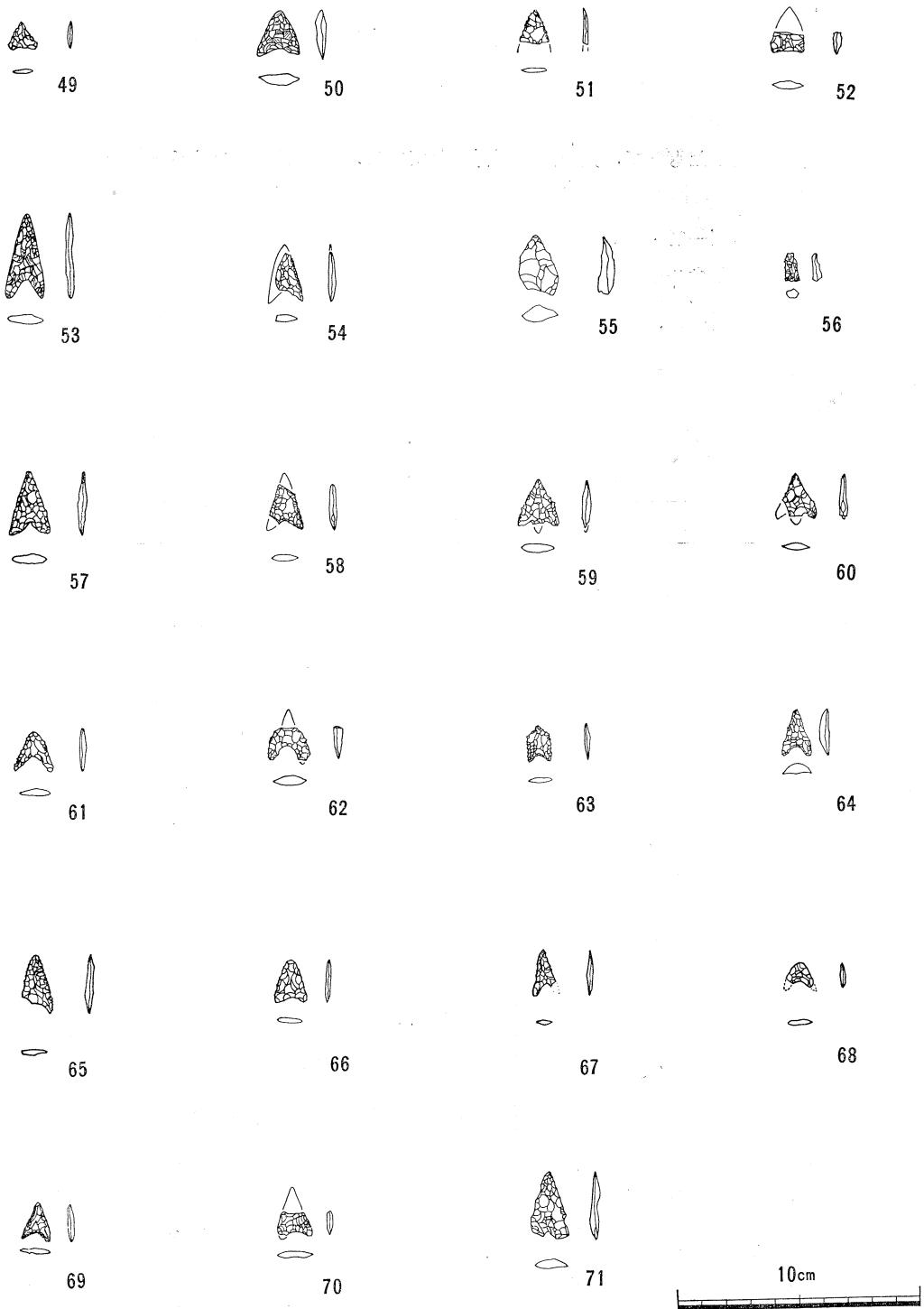
いずれも石皿の欠損破片である。

8 磨石（第24図—7，第78図—20・22，第119図—105～108）

磨石は20点出土している。これはみな円形状を呈するものである。8は縁に使用痕が認められる。

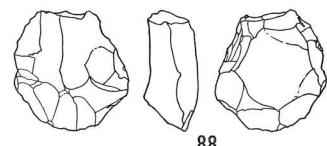
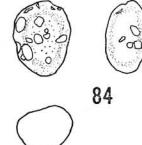
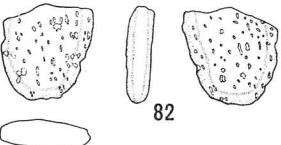
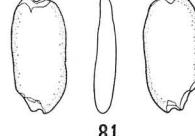
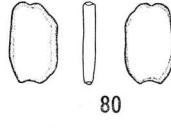
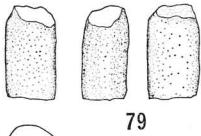
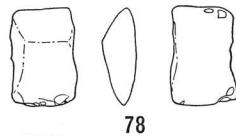
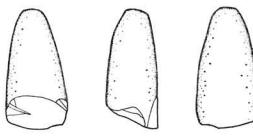
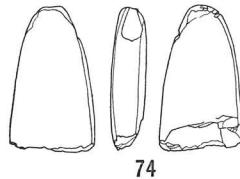
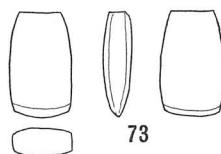
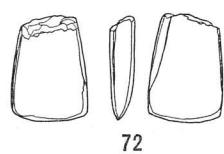
第28表 石 鏃 一 覧 表 (mm · g)

No.	分類	出土区	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	遺存状態	挿図
1	第2類	E—25	第VII層	黒耀石	12	10	2.5	0.5	完形
2	第2類	B—5	第VII層	"	(11)	12	4	1	頭部欠損
3	第2類	D—4	第IX層	"	(14)	(14)	4	1	頭部・脚部欠損
4	第2類	B—12	第VII層	"	14	12	2	0.6	完形
5	第2類	D—5	第VII層	"	17	12	3.5	1	"
6	第2類	E—22	第VII層	"	(12)	20	2	1	頭部欠損
7	第3類	B—2		"	14	(14)	2.5	0.6	脚部欠損
8	第3類	B—3	第VII層	"	(14)	17	2	0.6	頭部欠損
9	第1類	C—5	第VII層	"	10	9	2	0.5	完形
10	第2類	D—16	第VII層	"	(13)	(11)	(2.5)	0.6	頭部・脚部欠損
11	第2類	A—13	第VII層	"	15	11	2	0.8	完形
12	第2類	B—6	第VII層	"	12	10	2	0.5	"
13	第2類	A—24	第VII層	"	12	(12)	2	0.5	脚部欠損
14	第2類	B—6	第VII層	"	23	14	2	1	完形
15	第2類	C—6	第VII層		25	(15)	4	1.5	脚部欠損
16	第2類	C—5	第VII層	チャート	17	(11)	2	0.6	"
17	第2類	C—1	第VII層	黒耀石	(8.5)	(12)	3	0.5	頭部・脚部欠損
18	第3類	B—23	第VI層上	"	(12)	13	3	0.5	頭部欠損
19	第2類	B—2	第VII層	"	12	13	2	0.5	完形
20	第2類	C—3		"	(15)	(15)	3	1	頭・脚部先端欠
21	第3類	D—6	第VII層	"	(11)	15	2.5	0.5	頭部欠損
22	第2類	D—5	第VI層	"	(12)	14	2.5	0.5	頭部欠損
23	第4類	B—4	第VII層	"	13	13	3	0.6	完形
24	第2類	C—5	第VII層	頁岩	35	(23)	7	3.5	頭部欠損
25	第2類	A—1	第VI層	黒耀石	11	11	2	0.5	完形
26	第2類	D—13	第VI層	"	15	(13)	3.5	1	両脚部欠損
27	第2類	B—3	第VI層	"	14	(13)	3	0.9	脚部欠損
28	第2類	B—14	第VI層	"	11	(11)	3	0.6	両脚部欠損
29	第3類	B—23	第VI層	"	11	13	3	0.8	完形



第116図 配石及びグリッド出土の石器（3）

No.	分類	出土区	石 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	遺存状態	挿図
30	第3類	D—2 第VI層下	黒耀石	13	14.5	3	0.7	完形	第115図
31	第3類	A—3	"	13	14.5	3	0.8	"	第115図
32	第3類	D—4 第VI層	"	(18)	(12)	2.5	0.7	頭先端・脚部欠	第115図
33	第1類	A—13 第VI層	"	14	9	1.5	0.5	完形	第115図
34	第1類	C—12 第VI層	"	21	15	5	1.7	"	第115図
35	第1類	C—14 第VI層	チャート	17	12.5	4.5	1.2	"	第115図
36	第2類	B—3 第VI層	黒耀石	17	11.5	2.8	0.6	"	第115図
37	第2類	C—12 第VI層下	頁岩	17	(14)	3.2	0.8	脚部欠損	第115図
38	第2類	B—15 第VI層	黒耀石	16.5	12	3	0.6	完形	第115図
39	第2類	D—15 第VI層	"	17	(13)	3	0.8	脚部欠損	第115図
40	第2類	B—5 第VI層	"	14.5	(11)	2	0.6	"	第115図
41	第2類	B—5 第VI層	"	(14)	(10)	2	0.5	"	第115図
42	第2類	A—15 第VI層	"	(18)	(12)	2	0.8	頭部・脚部欠損	第115図
43	第2類	D—12 第VI層	"	(11)	12	2	0.5	頭部欠損	第115図
44	第2類	C—14 第VI層	"	(14)	16	4	1.3	"	第115図
45	第2類	B—17 第VI層	"	20	(15)	4	1	脚部欠損	第115図
46	第2類	B—17 第VI層	チャート	(15)	17	3.5	1.8	頭部欠損	第115図
47	第2類	D—34 第VI層	黒耀石	(14)	(14)	3	1	頭部・脚部欠損	第115図
48	第2類	B—26 第VII層	粘板岩	30.5	(20)	5	3.5	脚部欠損	第115図
49	第2類	D—2 第VI層	黒耀石	11	12	2.5	0.5	完形	第116図
50	第2類	E—23スコリア	チャート	18	16	5	1.4	"	第116図
51	第2類	D—26スコリア	黒耀石	(14)	(12)	2.5	0.6	脚部欠損	第116図
52	第2類	D—17 第VI層	"	(8)	13	3	0.4	頭部欠損	第116図
53	第2類	A—26 第VII層	チャート	34	15	3	1.5	完形	第116図
54	第2類	C—5 第VI層	黒耀石	(19)	(11)	3	1	頭部・脚部欠損	第116図
55	第2類	C—2 第VI層	"	(23)	(15)	6	2.2	下部欠損	第116図
56		A—10 第VI層	"	(11)	(6)	3.5	0.5	"	第116図
57	第2類	A—2 第V層	"	25	16.5	3.5	1.4	完形	第116図
58	第2類	ロ地区 第V層	チャート	(18)	(13)	3	0.8	頭部・脚部欠損	第116図
59	第5類	B—11 第V層	黒耀石	(19)	17	4	1.5	基部欠損	第116図
60	第5類	B—16 第IV層	"	(18)	(14)	3.5	1	基部・脚部欠損	第116図
61	第2類	C—1 第VII層	チャート	(16)	(16)	3	0.5	頭部欠損	第116図
62	第2類	B—16 第IV層	黒耀石	(14)	(17)	5	1	"	第116図
63	第4類	B—14 第IV層	"	15	10	2	0.5	完形	第116図
64	第2類	表 採	"	19	12	4	0.8	"	第116図
65	第2類	D—25スコリア	"	21	14.5	3	1	脚部欠損	第116図
66	第2類	D—2	"	17	14	2	1	完形	第116図
67	第2類	表 採	"	17.5	(11)	2	0.5	脚部欠損	第116図
68	第3類	イ地区表採	"	(9)	(12)	2.5	0.5	"	第116図
69	第2類	C—2	"	15	11	3	0.5	完形	第116図
70	第2類	表 採	"	(10)	(15)	3	0.8	頭部・脚部欠損	第116図
71	第2類	表 採	"	(27)	(15)	4	1.5	"	第116図
1住1	第2類	1号址 覆土中	"	14	11	3		完形	第78図
" 2	第2類	" "	チャート	25	(17)	3.5		脚部欠損	第78図
" 3	第2類	" "	黒耀石	(21)	(15)	3		頭端部欠損	第78図
" 4	第2類	" "	"	(9)	12	2		頭部欠損	第78図
" 5	第4類	" "	"	16.5	10	3		脚部欠損	第78図
" 6	第3類	" "	"	11	13	3		頭部・脚部欠損	第78図



10 cm

第117図 配石及びグリッド出土の石器（4）

No.	分類	出土区	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	遺存状態	挿図
1住7	第1類	1号址 覆土中	黒耀石	14	13	5		完形	第78図
" 8	第1類	" "	"	(11)	16	4		頭部・脚部欠損	第78図
" 9	第5類	" "	"	(19)	14	4		頭部欠損	第78図
8住1	第2類	8号址 覆土中	"	20	15	3		完形	第18図
" 2	第2類	" "	"	(19)	(13)	3		頭部・脚部欠損	第18図

第29表 磨製石斧一覧表

No.	分類	出土区	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	遺存状態	挿図
72	第2類	C—6 第VII層	緑泥片岩	(63)	43	15	(75)	基部欠損	第117図
73	第2類	E—27 スコリア上	硬砂岩	63	37	16	60	完形	第117図
74	第2類	C—6 第VII層	緑泥片岩	(87)	(45)	22	(155)	刃部欠損	第117図
75	第2類	C—5 第VII層	"	(19)	(18)	7	5	基部・刃部欠損	第117図
76	第2類	B—6 第VII層	"	(18)	(15)	5.5	3	基部欠損	第117図
77	第1類	C—31 第VII層	硬砂岩	(72)	(38)	33	115	刃部欠損	第117図
1住10	第2類	1号址 覆土中	緑泥片岩	(40)	33	10	20	基部欠損	第78図

第30表 石棒一覧表

No.	分類	出土区	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	遺存状態	挿図
79		D—25 第VIII層	緑泥片岩	(56)	32	28	70	上下両端部欠損	第117図
12住9		12号址	凝灰岩	(373)	45	43	1095	頭部基部欠損	第24図

第31表 石錘一覧表

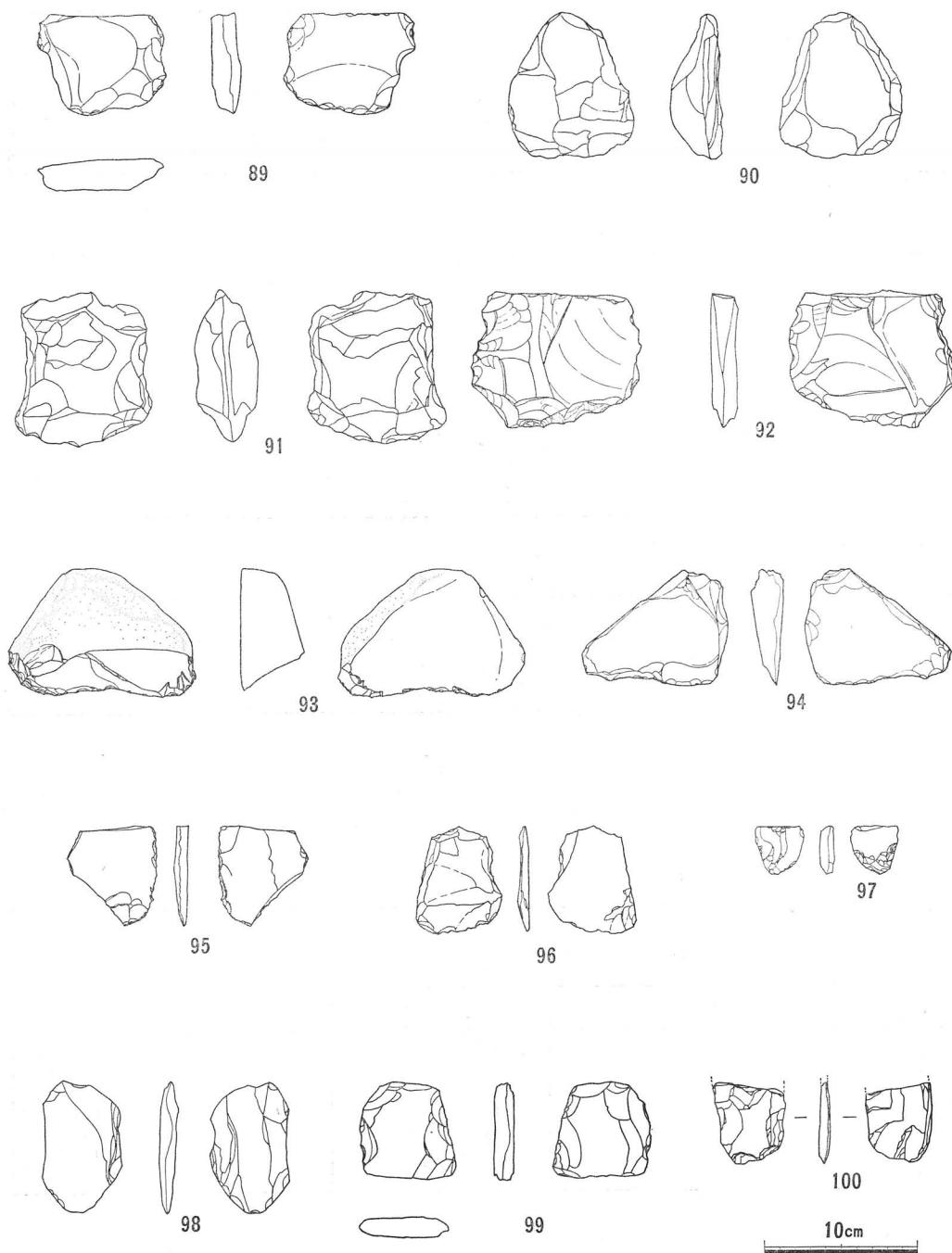
No.	分類	出土区	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	遺存状態	挿図
80		D—1 第VIII層	砂岩	49	28	7	15	完形	第117図
81		B—0 第VI層	粘板岩	71	38	15	45	"	第117図

第32表 スクレイパー一覧表

No.	分類	出土区	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	遺存状態	挿図
92		ロ地区 第VI層	硬砂岩	80	110	43	510	完形	第118図
93		C—31 第VI層	"	75	98	21	130	"	第118図
1住15		1号址 覆土中	砂岩	92	43	13	55	"	第79図
" 19		" "	硬砂岩	118	59	15	95	"	第79図
8住3		8号址 覆土中	砂岩	(60)	27	9	10	柄部欠損	第18図

第33表 石皿一覧表

No.	分類	出土区	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	遺存状態	挿図
8住10		8号址 覆土中	花崗岩	(67)	(47)	(39)	175	全体の1/4程遺存	第18図
" 11		" "	多孔質安山岩	(62)	(112)	72	625	全体の1/8程遺存	第18図



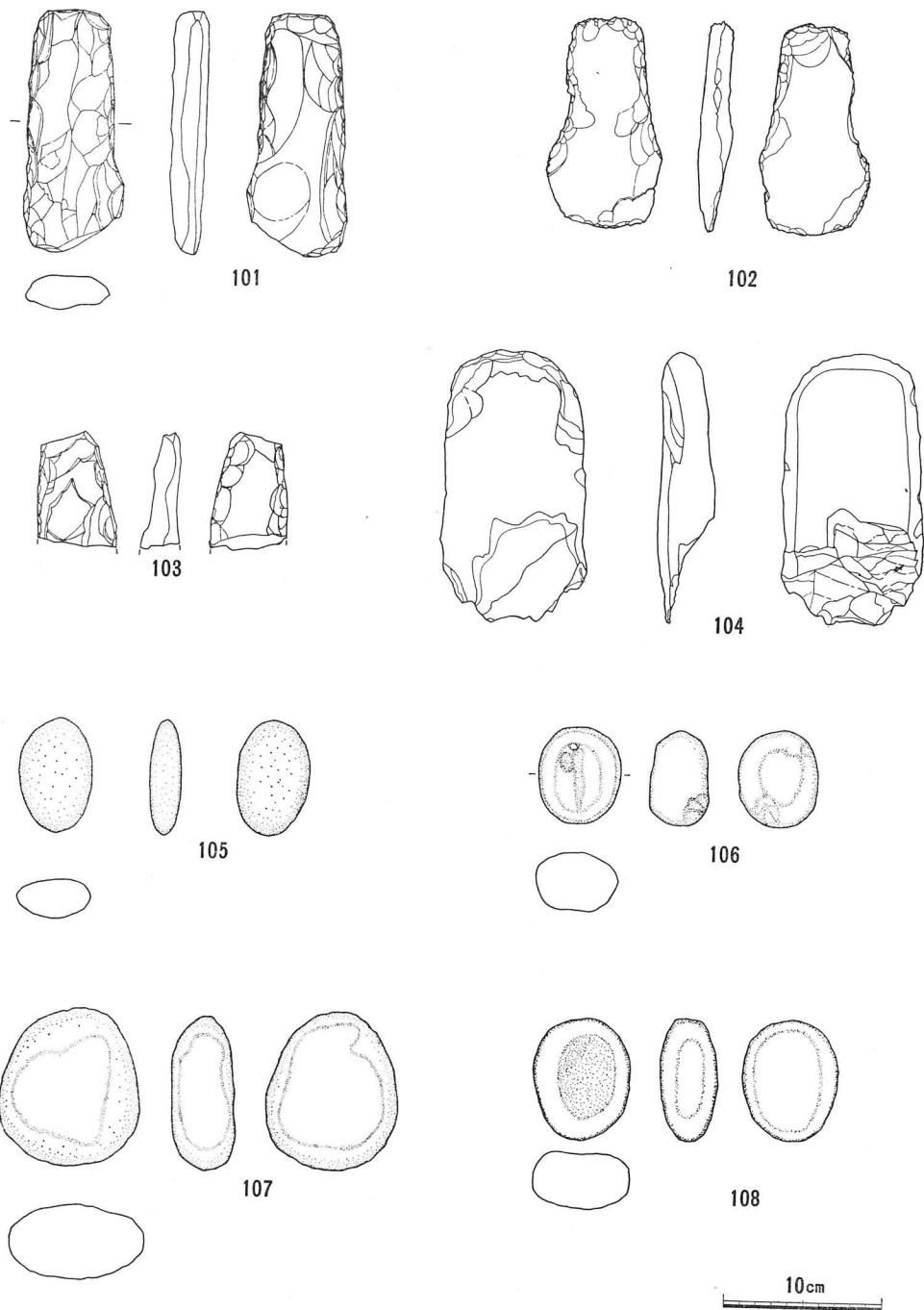
第118図 配石及びグリッド出土の石器（5）

第34表 磨石一覧表

No.	分類	出土区	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	遺存状態	挿図
105		A-11 第VII層	安山岩	71	48	25	125	完形	第119図
106		E-35 第VII層	軽石	76	69	35	120	"	第119図
107		Z-32	安山岩	99	86	41	570	"	第119図
108		B-3 第VIII層	凝灰岩	61	51	37	165	"	第119図
1住20		1号址 覆土中	安山岩	68	(29)	43	115	半欠損	第78図
" 21		" "	"	112	105	60	1040	完形	第78図
" 22		" "	"	47	42	29	90	"	第78図
12住7		12号址	"	78	73	66	455	"	第24図

第35表 打製石斧一覧表 (mm · g)

No.	分類	出土区	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	遺存状態	挿図
90	第2類	D-33 第VII層	安山岩	95	79	29	215	完形	第118図
91	第3類	B-33 第VII層	"	100	90	38	375	"	第118図
94	第2類	D-14 第VII層	硬砂岩	(90)	109	25	280	基部欠損	第118図
95	第1類	C-14 第VII層	"	64	57	8	32	剝片	第118図
96	第2類	C-6 第VII層	"	71	59	10	40	"	第118図
97	第4類	A-26 第VII層	チャート	(30)	(30)	8	7	上部欠損	第118図
99	第1類	D-17 第VII層	砂岩	60	58	11	70	完形	第118図
100	第1類	C-1 第VII層	粘板岩	53	47	9	30	剝片	第118図
101	第1類	B-34 第VII層	硬砂岩	153	61	21	260	完形	第119図
102	第2類	B-32 第VII層	"	133	66	20	180	"	第119図
103	第1類	D-12 第VII層	"	(72)	53	24	100	刃部欠損	第119図
104	第4類	A-25	粘板岩	172	86	25	640	完形	第119図
1住11	第2類	1号址 覆土中	硬砂岩	(81)	72	21	130	基部欠損	第79図
" 12	第3類	" "	"	115	(75)	(15)	140	侧面・裏面欠損	第79図
" 13	第2類	" "	凝灰岩	80	67	18	100	完形	第79図
" 14	第1類	" "	泥岩	108	47	20	115	"	第79図
" 16	第4類	" "	安山岩	(52)	(43)	(16)	35	基部・刃部欠損	第79図
" 17	第2類	" "	砂岩	(64)	(38)	(13)	40	"	第79図
" 18	第4類	" "	硬砂岩	(77)	52	14	60	刃部欠損	第79図
8住4	第4類	8号址 覆土中	"	100	40	25	95	完形	第18図
" 5	第1類	" "	"	127	47	18	110	"	第18図
" 6	第2類	" 燒土中	"	(125)	94	(24)	240	基部・刃部欠損	第18図
" 7	第2類	" 覆土中	"	(100)	78	20	135	基部欠損	第18図
" 8	第2類	" "	"	(55)	55	12	45	刃部欠損	第18図
" 9	第4類	" "	"	(57)	(71)	(13)	40	基部・刃部欠損	第18図
12住1	第3類	12号址 覆土中	凝灰岩	98	65	17	135	完形	第24図
" 2	第4類	" "	硬砂岩	(70)	78	15	155	基部欠損	第24図
" 3	第1類	" "	砂岩	(91)	(61)	18	120	基部・侧面欠損	第24図
" 4	第4類	" 床面直上	硬砂岩	(80)	(73)	15	115	基部欠損	第24図
" 6	第4類	" "	凝灰岩	115	52	23	140	完形	第24図



第119図 配石及びグリッド出土の石器（6）

## 第VII章 発掘調査のまとめと若干の考察

### 第1節 縄文時代の遺構

#### 1 概 要

今回の中谷遺跡の調査は、調査対象範囲が限定されていたために、遺跡の全貌を明らかにすることはできなかったが、ちょうど調査地区が遺跡に南北のトレントを入れたようなかっこになつたために、遺構の配置など遺跡の概要を想定することが可能となった。

イ・ロ・ハ地区などの緩やかなスロープを描く斜面には配石が構築され、特に、調査地区内で最も高い地点に位置するイ地区では、配石の集中が著しく、ハ・ニ地区などの平坦部には住居址が構築されている。これより、遺跡内でも平坦面には住居群が、また仰ぎ見る小高い場所には、配石遺構がそれぞれ構築されていたことが想定される。

住居址は今回の調査で、中谷第8群土器～中谷第10群土器に渡る各期のものが検出され、かなり密集して存在していたことが窺われる。また配石も第V層～第IX層にまで渡って認められ、これらに伴う土器より縄文時代中期後葉～同時代晚期前半まで、ここで生活した人々によって、累々と構築されたことが推定される。その配石の最下層第IX層からは、縄文時代中期の人骨が検出され、配石と人骨との関係は興味深いものである。

#### 2 住居址について

住居址は、第2・8・10・11・12・13・14号址の7軒が検出されたが、この内、全掘できたのは、第8・12号址のみで、残りは調査対象地区以内の、部分的な調査しかできなかった。

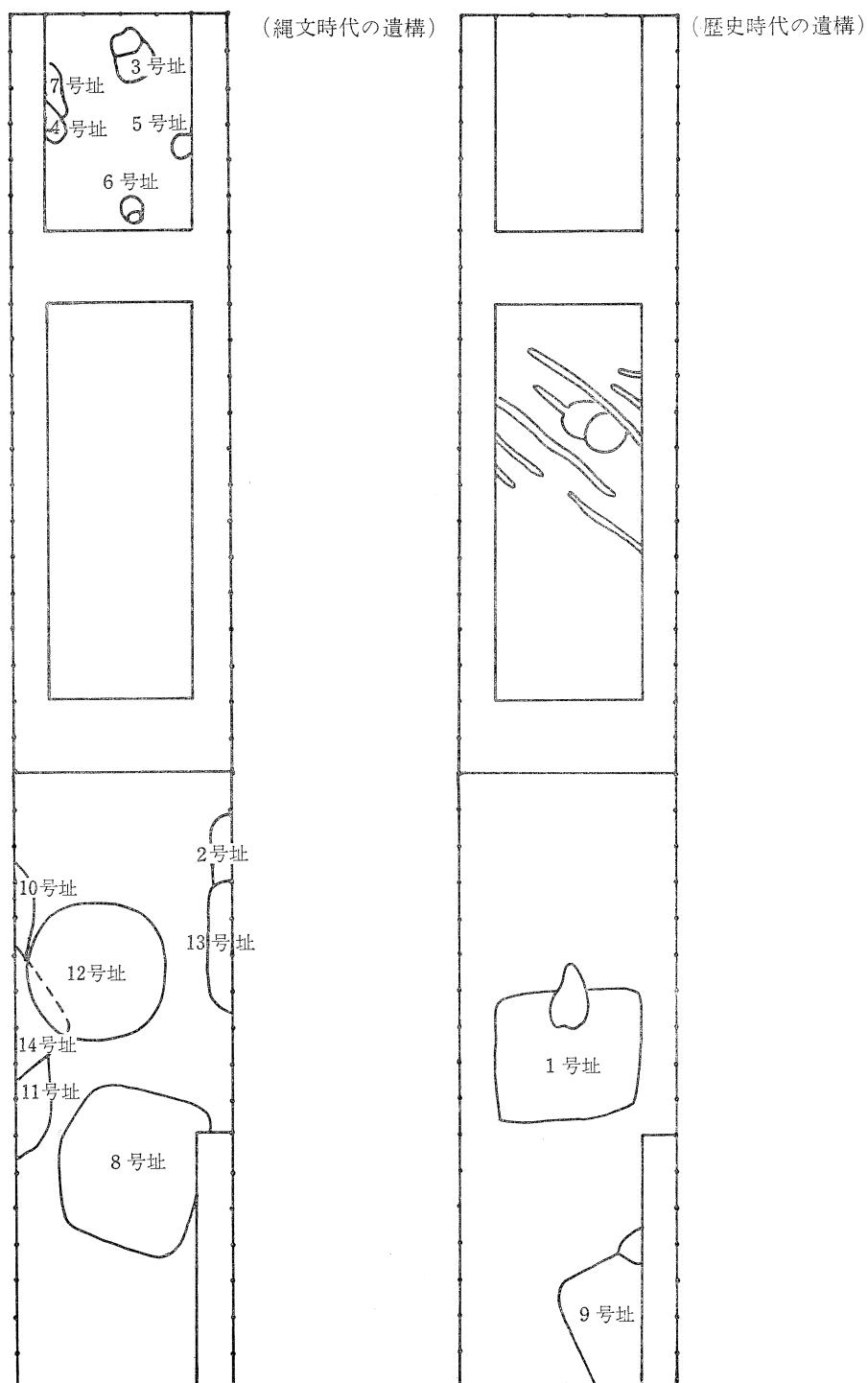
結果は第36表のように、第8群土器に伴うものは、第2・11・14号址の3軒で、いずれも方形プランの住居址である。

第9群土器に伴うものは、第13号址の1軒で、隅丸方形プランの住居址であった。

第10群土器に伴うものは、第8・12号址の2軒で、前者が方形、後者が円形のそれぞれのプランを呈する住居址であった。

第10群土器に伴う住居址は、現在までのところ静岡県清水市の天王山遺跡、山梨県北巨摩郡大泉村金生遺跡で発見されているが、いずれも配石を伴う住居址であり、前者は周壁に石を巡らした平地式住居址である。

これに対して、中谷遺跡で発見された第8・12号址の2軒の住居址は堅穴式の配石を伴わないものであり、同土器群分布圏内における地域差を感じさせるものである。



第120図 中谷遺跡遺構全体図

第36表 住居址一覧表

遺構No.	プラン	規 模	時 期	備 考
2	方 形	不 明	第 8 群	13号址に切られている。
8	方 形	約 3.2m × 約 3.6m	第 10 群	
10	円 形	直径約 4.6m	不 明	
11	方 形	不 明	第 8 群	14号址に切られている。
12	円 形	約 3.5m × 約 3.75m	第 10 群	石囲い炉
13	隅丸方形	一辺約 3.9m	第 9 群	
14	方 形	不 明	第 8 群	12号址・10号址に切られている。

### 3 土塙について

土塙は、第3・4・5・6・7号址の5基が検出された。これらの内、第3・4・7号址は人骨を伴う土塙墓であった。各人骨については別に聖マリアンナ医科大学の森本先生に原稿を頂いているので、ここでは触れないが、森本先生の原稿中のNo.2人骨は、第3号址、No.4人骨は第4号址、No.7人骨は第7号址から、それぞれ出土したものである。

第3号址は、森本先生の原稿中で、炉址として扱われているが、これは調査中より議論の分れるところであった。これを屋外の炉として捉えた場合、人骨と掘り込み及び焼土の堆積の重なりは全くの偶然と理解されるであろうし、また、石囲い及び集石を含めて、土塙墓として捉えた場合は、特異な埋葬法として理解すべきと思われる。いずれにしても、今後の類例が待たれる。

### 4 配石について

配石は、イ～ニ地区、全地区において検出され、その出土層も第V層～第IX層に渡って認められた。

これらの配石は、出土した土器の比率より、第VI層～第VII層中のものは、縄文後期以降に、第VIII層～第IX層中のものは、同時代中期～後期初頭にそれぞれ属するものと思われる。

これらの内、第VIII層～第IX層中の配石は、イ地区のみで検出され、特に、第IX層中のものは、偏平な角礫が主に用いられている。これは、第3・4・7号址などの土塙墓の覆土上面から主に集中して認められ、土塙墓との関係抜きには語れないものと思われる。

第V層～第VII層中の配石は、河原石が主に用いられ、大きいものは1mに及ぶものも認められた。イ地区においては、A～B-0～2区第VII層において、約40cm～約60cm大の河原石を主体とした石積状の配石が認められ、全地区の内で最も礫の集中が著しい地区であった。ロ地区では、第VII層中より北東から南西に走る列石状のものが認められ、なんらかの区切りの意識が看取されるものであった。ハ地区では、第VII層より小サークル状の配石とそのサークル内に石棒が認められ、石棒を主体とした祭祀信仰的な色彩を感じさせるものであった。また、ニ地区では同じく第VII層中より偏平な礫を中心とした長方形をした組石状のものが認められた。

以上、第VI層～第VII層中の配石を整理すると、第VI層中の配石はイ・ロ両地区で検出され、一定の形状を持たない散然としたものであり、第VII層中の配石は、イ～ニ、全地区で認められ、イ地区では、積石状の、ロ地区では列石状・集石状の、ニ地区では、石棒を中心とした小サークル

状の、ニ地区では、組石状のものであった。この両層の配石は、別個のものとしては理解しがたく、両者一体のものとして理解すべきものと考えられる。

この配石に伴う土器は、第VI層、第VII層共に、第8群土器を主体として、第VI層中のものは第9群～第11群土器の比率が高く、第VII層中のものは、第7群土器の比率が高くなる。これより第VI層・第VII層中の配石は、第8群土器の前後より構築が開始され、その後、第10・11群土器のころまで継続的に構築又は、存続していたものと思われる。

これらの配石に伴う遺物は、土器及び石器共に破損品が多く認められ、土器の場合、口地区第VII層中の配石付近から出土したもの（第82図—13）を除くとほとんどが小破片であり、各群の土器が混在して認められた。

石器の場合も、欠損品が大半を占め、石鏃を主体に散然と認められる。この他、配石付近からは1cm以下の獸骨と思われる骨片がかなりの数認められた。この骨片も、第VIII層、第IX層に至るとあまり認められなくなり、第VIII層、第IX層中の配石との違いを物語るものとして注目されよう。

第37表 配 石 一 覧 表

地区	層位	形 状	出 土 遺 物				時 期
			土 器	石 器	骨 片	そ の 他	
イ	第VI層	不 明	第8群を主体として、第4群～第11群	石鏃11点。石錐2点、軽石1点	多		第8群→
	第VII層	積石状	第8群を主体として、第7群がこれに続く。	石鏃23点・定角磨製石斧5点・打製石斧3点・磨石3点	多		第7群→
	第VIII層	不 明	第5群～第7群が大半を占める。	石鏃4点・磨石1点・スクレイパー1点	減少		第5群→
口	第IX層	集石状	第5群が大半を占める。	石鏃1点・磨石2点	若干		第5群
	第VI層	不 明	第8群～第11群が大半を占める。	石鏃13点・スクレイパー1点・打製石斧1点・磨石2点	多	耳栓2点・土製円盤3点	第8群→
	第VII層	列石状	第8群以降が減少し、第5群～第7群が増加する。	石鏃2点・打製石斧1点	減少	耳栓3点	第7群→
ハ	第VII層	小サークル状	第8群～第10群が大半を占める。	石鏃5点・スクレイパー1点・打製石斧1点	少		第8群→
ニ	第VII層	組石状	第8群～第10群	石鏃1点・磨石1点	少		第8群→

## 第2節 繩文式土器

### 1 各群の様相について—施文具を中心として—（第121図）

#### (1) 第1群土器

本群は、繩文時代早期前半を構成するもので、本遺跡では、山形押型文土器が2点出土したのみであった。

## (2) 第2群土器

本群は、縄文時代前期末葉を構成するもので、本遺跡では、2点出土した。これはいずれも、地文に縄文原体LRを有し、半截竹管によって結節浮線文が施されたものであった。

## (3) 第3群土器

本群は、縄文時代中期初頭を構成するもので、本遺跡では、36点出土した。これらは、半截竹管による集合沈線のみのもの（第1類）と、縄文を地文として、半截竹管や棒状施文具で沈線文が施されたもの（第2類）に分類される。施文具別比率で見ると、半截竹管が過半数を占めているが、これは、施文具の使用頻度に基づくもので、第1類と第2類が合計されているために、このような結果になっている。縄文原体は、RLがLRに比べて優位を占めている。本群では、新たに棒状施文具の使用が加わっている。

## (4) 第4群土器

本群は、縄文時代中期中葉を構成するもので、本遺跡では、72点の出土をみた。これらは、半截竹管（多截竹管）、及び、縄文原体の使用が激減し、新たに加わったヘラ状施文具が大半を占めている。

これは、本群中で、ヘラ状施文具による連続爪形状刺突文が施文された藤内式の占める割合が大きく、また、棒状施文具による押引き文が施文された洛沢式、及び、ペン先状の施文具（多截竹管）による押引き文が施された新道式の占める割合が小さいことを示している。

## (5) 第5群土器

本群は、縄文時代中期後葉を構成するもので、本遺跡では、675点の出土をみた。本群は、9類に分類され、第1類～第3類とした曾利II式に比定される土器群は、半截竹管文が多用され、地文、口縁部の重弧文、胴部の懸垂文などの施文に使用されている。また地文に縄文及び撚糸文が使用されるものが存在し、この縄文原体は、LRがやや優位である。

第4類・第5類とした曾利III式に比定される土器群は、棒状施文具が多用され、口縁部・胴部の施文に使用されている。また半截竹管も懸垂文の間隙に充填する条線文として使用されている。

第7類とした曾利IV式に比定される土器群は、「匁」状の区画文及び、懸垂文に棒状施文具が、区画内の綾杉状の条線に半截竹管が、「ハ」字状沈線文にヘラ状施文具が、それぞれ使用されている。

第7～9類とした曾利V式に比定される土器群は、口縁、胴部の区画文に棒状施文具が、区画内の「ハ」字状沈線文に、ヘラ状及び、棒状施文具が、綾杉文に、半截竹管・櫛齒状施文具が、刺突文に櫛齒状施文具が使用されている。この曾利V式には、櫛齒状施文具が新たに加わり、その使用頻度も高くなる。

## (6) 第6群土器

本群は、縄文時代中期末葉～後期初頭を構成するもので、第5群土器と時期が重なるものが含まれている。

本遺跡では、344点の出土をみた。

本群は、縄文が、地文、磨消縄文、充填縄文として多用され、他群では見られない程の使用頻度を示している。縄文原体は、L Rがやや優位を占めている。これは、中期の末葉に、関東地方の加曾利E、4式の浸透を受け、その影響が後期初頭まで続いたことを物語るものと思われる。

#### (7) 第7群土器

本群は、縄文時代後期前半を構成するもので、本遺跡では、577点の出土をみた。

本群は、4群に分類され、各類ともに棒状施文具が多用され、沈線文が施文されている。第3類は地文として、第4類は磨消縄文として縄文が使用されている。この原体はややR Lが優位を占めている。

第6群土器に比べて、縄文の使用頻度が減少し、変わって、棒状施文具の使用頻度が増加している。これは、第1類～第3類とした、堀之内1式に比定される土器群中に、地文に縄文を用いないもの（第1類・第2類）がかなり含まれていることによる。

#### (8) 第8群土器

本群は、縄文時代後期中葉を構成するもので、本遺跡では、1106点と最も出土点数の多いものである。

本群として一括した加曾利B式土器の多くは、棒状施文具による沈線文と磨消縄文とによって、文様が構成されているため、両施文具が占める割合が大きくなっている。

第7群土器に比べて、ヘラ状施文具の使用頻度が増加しているが、これは、第9群の羽状沈線文土器群の祖型となる胴部に斜行、及び、羽状の沈線文が施された土器群（第5類～第8類）の存在によるものである。

縄文の使用頻度も、第7群土器よりも増加している。この原体は、第7群土器と同様にR Lがやや優位を占めている。

#### (9) 第9群土器

本群は、縄文時代後期末葉を構成するもので、本遺跡では、271点の出土をみた。

本群は、棒状施文具、ヘラ状施文具の使用頻度が、他に比べ圧倒的に大きい。これは、第5類～第9類として分類した羽状沈線文系土器群の胴部文様の施文に使用され、この羽状沈線文系土器群が、本群の中で主体をなす存在であることを示している。

縄文は第8群土器群に比べて激減している。これは、帯縄文などを有する曾谷式、安行1・2式などの東関東地方の土器群の影響が少なくなったことを物語るものと思われる。

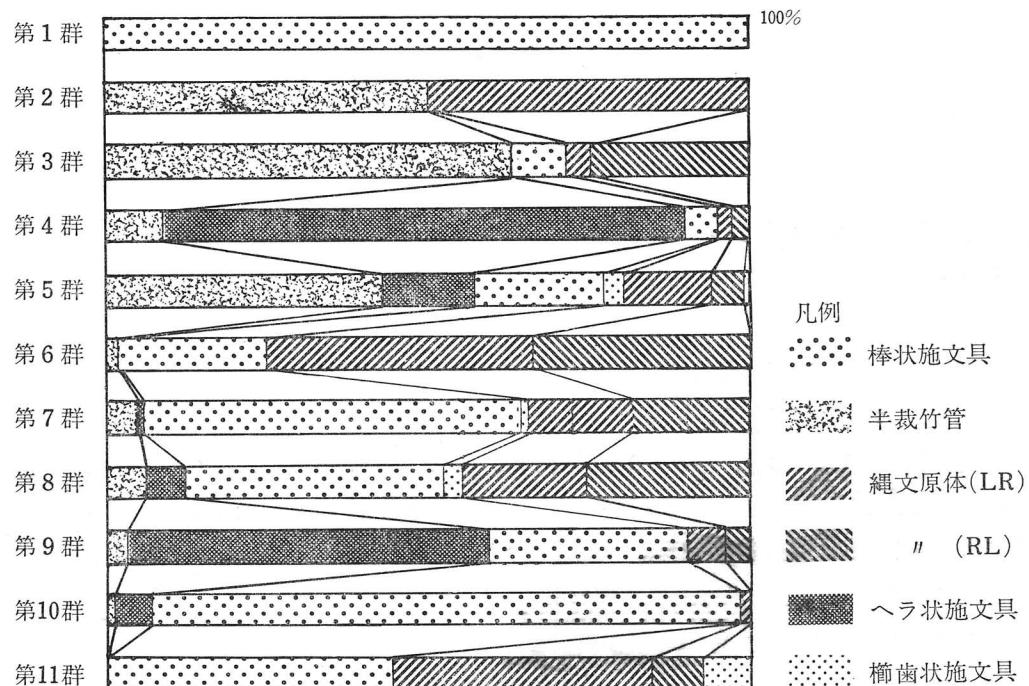
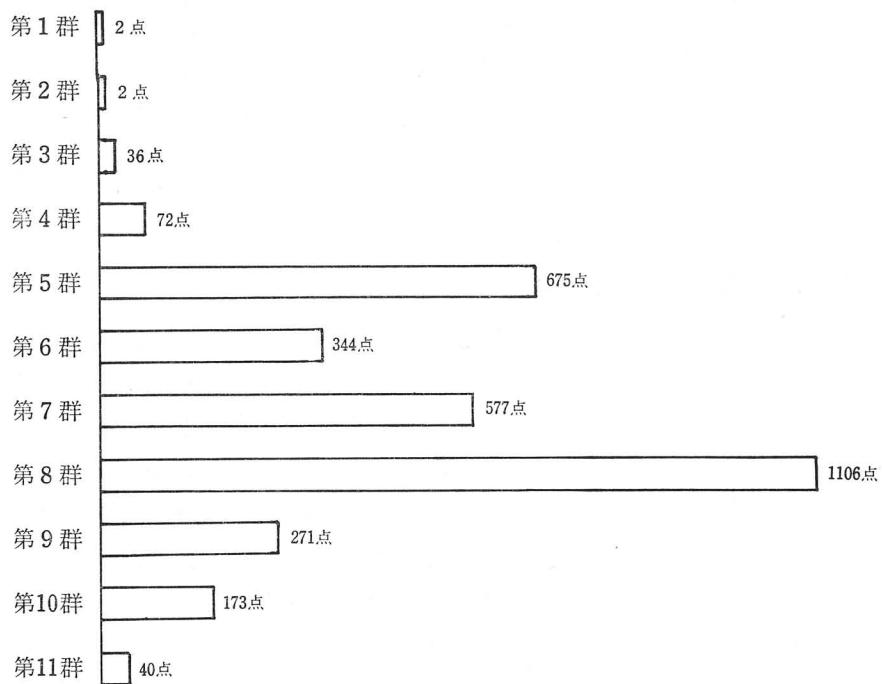
#### (10) 第10群土器

本群は、縄文時代晩期前半を構成するもので、本遺跡では173点の出土をみた。

本群の土器群は、棒状施文具が多用され、口縁部、胴部の文様施文に使用されている。第9群土器に比べて、ヘラ状施文具の使用頻度が減少しているのは、胴部文様の羽状沈線文の施文が、ヘラ状施文具から棒状施文具によって、行われるようになったからである。

#### (11) 第11群土器

本群は縄文時代晩期前半～晚期末葉を構成するもので、本遺跡では40点の出土をみた。本群は縄文と棒状施文具の使用頻度が圧倒的に大きく、これは、第1類～第4類とした安行系及び第5



第121図 群別出土点数表及び群別施工具頻度相関図

類とした大洞系など沈線文と磨消縄文とを多用する土器群の占める比率が高いことを示している。縄文原体L Rが優位を占めている。櫛歯状施文具が本群中に認められるが、これは第11類とした東海西部の大宮式が若干併出したことによるものである。

以上、第1群土器～第11群土器まで各群中の施文具の使用頻度を中心に述べてきた。これは本遺跡の出土土器の多くが小破片であり、全資料を有効に活用するためには文様帶系統論等の土器の系統論的な分析は、不可能と思われ、そのため、上記のとおり施文具の使用頻度を中心に各群の様相を概観することを試みた。

## 2 第9群土器の編年的位置付けについて

本群として一括したものの中で、第5類～第9類は、胴部に羽状沈線文が施されるという点で共通する内容を有するものであり、これはまた第5～8類は深鉢形土器、第9類は浅鉢形土器といったように器形のバリエーションも認められる。これらの胴部に羽状沈線文が施される土器群は、本遺跡第9群土器の内で最も安定しており主体を占めるものである。そこで、本書では、これらの土器群に対して「羽状沈線文系土器群」と仮称して、その編年的試論を述べることにする。

この羽状沈線文系土器群の胴部文様を構成している羽状沈線文は、関東地方西部の加曽利B2式にその祖型が認められ、加曽利B3式に続く。この加曽利B3式段階のものとして、代表的なものは、平尾遺跡N.9、縄文後期中葉の土器B<sub>6</sub>型、C<sub>1</sub>型、C<sub>2</sub>型、B<sub>5</sub>型、J<sub>3</sub>型、鶴川遺跡M<sub>(註1)</sub>地点第3類a型、大森貝塚加曽利B3大森系列<sub>(註2)</sub>（大森3式）などが挙げられる。

これらの特徴は、深鉢形土器では、器形は口縁部波状のものと平縁のものが認められ、両者共に頸部にくびれを有することである。

文様は、両者共に頸部を境に口縁部、胴部にそれぞれ羽状沈線文・斜行沈線文・斜格子目文が施され、後者には、特に口縁部に刻み目や口縁部と頸部に沈線文が巡らされる。また口縁部に帶縄文が施されるものも認められる。

浅鉢形土器では、口縁部に帶縄文や沈線文が施されている。中谷遺跡においても、第8群土器第6～9類がこれに当たる。これらをベースにして、本土器群が形成される。

本群は、大きく口縁部に帶縄文を残すもの（第1期）と、沈線文のみが施されているもの（第2期）との二つに分類される。

前者には、第6類—C種、第8・9類が属する。これらの内、第8類は、口唇に刻み目を有し、その直下より帶縄文が施されるという点では、第8群土器に近い存在と思われるが、頸部のくびれが弱くなり、頸部を境に羽状沈線文が二分されないという点で明らかに第8群土器とは異なる存在と思われる。

第6類—C種及び第9類は、帶縄文が横線によって画され、第10群土器群になって開花する口

（註1） 安孫子昭二他 1971 「平尾遺跡調査報告書」 平尾遺跡調査会

（註2） 安孫子昭二他 1961 「鶴川遺跡群」 鶴川遺跡群調査団

（註3） 鈴木正博他 1980 「大田区史（資料編）考古Ⅱ」 東京都大田区史編さん委員会

縁部文様帯の伏線を感じさせるものである。また第6類—C種は、口縁部にボタン状の貼付文を有し、関東地方の曾谷式との交渉を物語るものと思われる。

これら帶縄文を有する土器群は、関東地方で「高井東式」として、型式設定されているが、「高井東式」について具体的な型式内容が明示されていない現状においては、「羽状沈線文系土器群」の最古のものとして位置付けておきたい。

後者には、第5類・第6類—a・b・d・e種、第7類・第9類—c・d種が属する。これは、さらに、口唇部に二条～三条の横線が巡るもの（A類）と、口唇部に弧状、対弧状の沈線文が施されたもの（B類）に二分される。

この内A類には第5類、第6類—a・b・e種、第7類—a・d・e種、第9類—c・d種が属する。

これらの器形は第5類が口縁部平縁でやや外反気味の深鉢形土器、第6類が口縁部平縁で「く」の字状に内湾した深鉢形土器、第7類が口縁部平縁でやや直立気味の深鉢形土器、第9類が浅鉢形土器であり、これを第I期と比較すると、第5類・第6類とした口縁部平縁で外反及び直立する深鉢が加わり、第8類とした口縁部波状を呈する深鉢が姿を消す。

文様は加曾利B3式より続く帶縄文が衰退し、口縁部には沈線文のみが施されるようになり、第6類—b種、第7類—e種、第9類—d種などのように沈線文も太くなり、多条化する傾向が窺える。又、第7類—e種、第9類—d種などのように、沈線文を区切る貼付文が施されるものも認められる。

これらは、第6類—b種及び第7類—e種などの、東海系の吉胡下層式に脈絡を有する土器群の影響が関与したものと思われ、この第II期—A類は、東海地方の強い影響下に形成されたものと考えておきたい。

B類には、第6類—d種、第7類—b・c種が属する。

器形は、口縁部平縁で、「く」の字状に内湾及び直立する深鉢形土器で、文様は、口縁部に施される沈線文が、弧状及び対弧状を呈するようになる。

この口縁部に弧状及び対弧状の沈線文を施す意識は、施文具の違いはあれ、東海地方の寺津下層式第2類に顕著に認められるものである。A類の吉胡下層式に統いて本類においても、その形成において東海地方の強い影響が看取される。

第II期のA類は吉胡下層式の、B類は寺津下層式の影響を基にそれぞれ形成されたものと思われ、A類は安行1式に、B類は安行2式に、それぞれ対比させて考えておきたい。

なお、第9群には他に第10類～第12類に見られるように、東海地方の土器群の搬入が認められ、この時期における西からの浸透を物語っている。

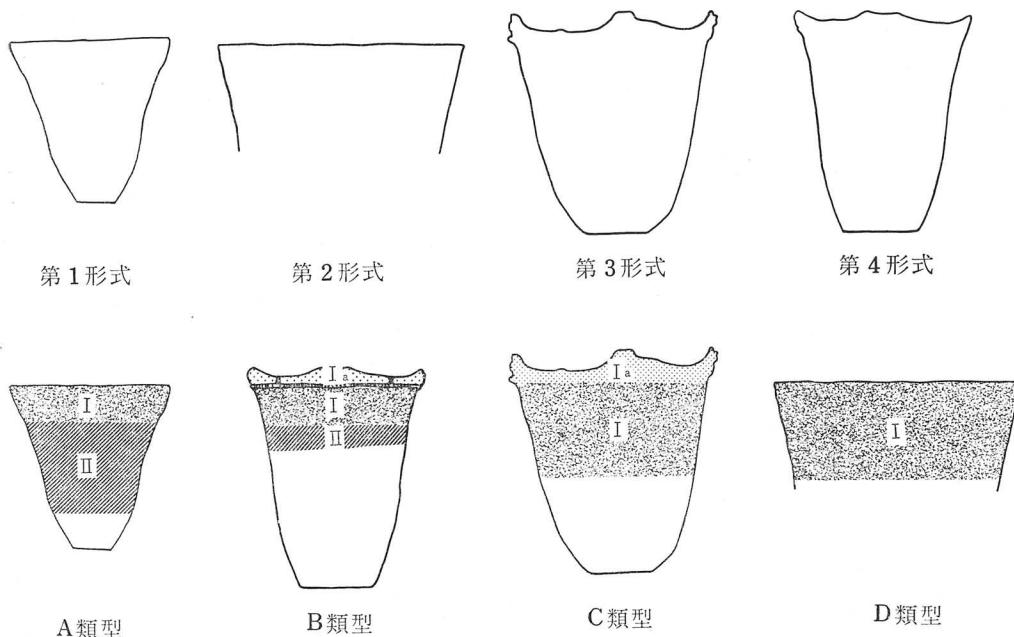
### 3 第10群土器の編年的位置付けについて

本群については、第VI章で述べたように、器形より7形式（第1形式～第7形式）に分類され口唇部〔I a〕、口縁部〔I〕、胴部〔II〕の各文様帯の組み合わせより、5類型（A類型～E類型）に分類された。これらの内、中谷遺跡で認められたものは、第38表で○印で示した組合せ

である。第122図は、有文土器の形式及び類型のモデルである。

第38表 中谷遺跡出土の清水天王山式土器

	第1形式	第2形式	第3形式	第4形式	第5形式	第6形式	第7形式
A 類型	○ (A <sub>1</sub> 類)	○ (A <sub>2</sub> 類)					
B 類型				○ (B <sub>4</sub> 類)			
C 類型			○ (C <sub>3</sub> 類)	○ (C <sub>4</sub> 類)			
D 類型		○ (D <sub>2</sub> 類)	○ (D <sub>3</sub> 類)		○ (E <sub>5</sub> 類)	○ (E <sub>6</sub> 類)	
E 類型							○ (E <sub>7</sub> 類)



第122図 中谷遺跡出土の清水天王山式土器（形式及び類型モデル）

第123図は、中谷遺跡で出土した清水天王山式土器のI文様帶を抽出したものである。これらは、13類に分類される。

- a類（1・2） 対弧状の沈線文が施されたもの。
- b類（3・4） 対弧状沈線文の間隙に、「S」字状及び巴状の沈線文が施されたもの。
- c類（5・6） 巴状沈線文の一端と対弧状沈線とが連結されているもの。
- d類（7） 巴状沈線文と対弧文とが一体化して入組文化しているもの。
- e類（8） 対弧状沈線文の間隙に、巴状沈線文及び、三角形陰刻文が施されたもの。

f類（9） 上下対になった楔状の三叉文によって画された間隙に、三叉状入組文が施されたもの。

g類（10） 三叉状入組文が流水状に施されたもの。

h類（11） 入組文が二段施されたもの。

i類（12） 流水文状の沈線文が施されたもの。

j類（13） 二段の入組文が流状に施されたもの。

k類（14） 二段の三叉状入組文が連鎖状及び、流水状に施されたもの。

l類（15） 二段の三叉状入組文が連鎖状に施されたもの。

m類（16・17） 三叉文・三叉状入組文が連鎖状に施されたもの。

以上、中谷遺跡で出土した清水天王山式土器のI文様帶に施された文様である。

第39表は、各類型におけるI文様帶に施された文様一覧表である。

第39表 I文様帶における文様一覧表

	a類	b類	c類	d類	e類	f類	g類	h類	i類	j類	k類	l類	m類
A <sub>1</sub> 類	○	○	○	○	○								
A <sub>2</sub> 類		○	○	○			○				○		
B <sub>4</sub> 類						○							
C <sub>3</sub> 類								○		○			
C <sub>4</sub> 類								○		○			
D <sub>2</sub> 類									○	○			
D <sub>3</sub> 類									○	○		○	○

清水天王山式土器については、近年、小野正文、戸田哲也両氏によって、その研究史及び、その内容について、詳細に論考が加えられているので、ここでは、重複を避け、両論文の帰結点及び、問題点を踏え、中谷遺跡出土の清水天王山式土器の編年的位置付け及び、その内容について触れてみたい。

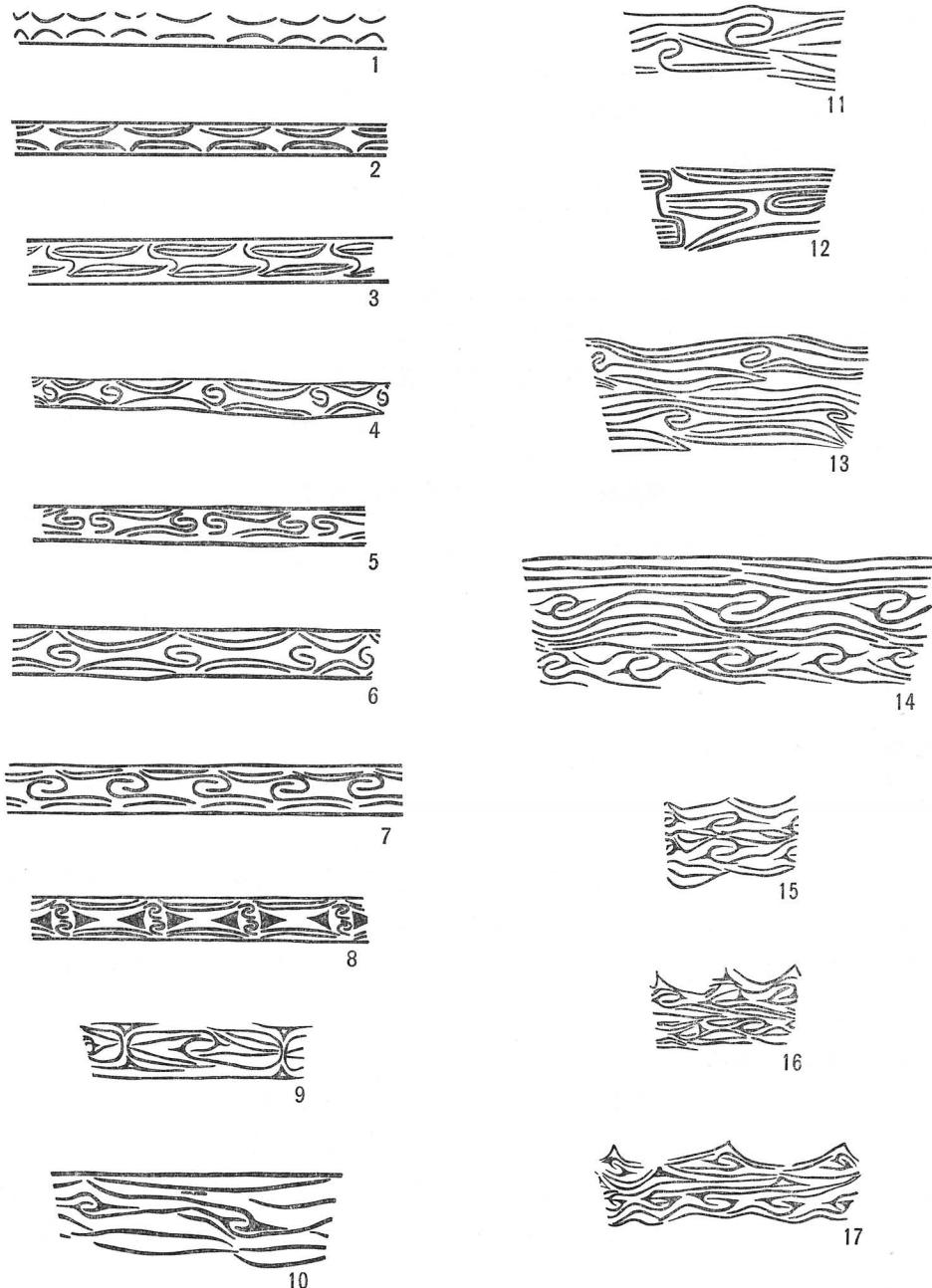
両論文の出発点及び相違点は、清水天王山遺跡の層位的なデータの評価であった。

小野は、この清水天王山遺跡の層位的データを踏え、口縁部文様帶の変遷に着目し、その変遷過程を三段階に類別した。まず、第1段階は、下層b類土器（3）類で口縁部文様帶に対弧文及び、対弧文間に縦の平行線等が配置された段階とした。第2段階は、中層a類土器（2）類で、口縁部文様帶の対弧文の一端が入組文化する段階とした。第3段階は、層位的裏付けはないが、文様の重畠化と入組文が三叉文化する段階とした。三段階としたこれらの編年的位置付けに対して、小野は、第1段階を大洞B式・第2・3段階を大洞B-C式にそれぞれ対比させた。

これに対して戸田は、小野の第2段階としたものが、第3地点D～F層で第1段階と共に伴している点を重視し、小野の第1段階と第2段階の時間的同時性を論じている。そして、この小野の第2段階とした入組文の形成については、小野が鍵ノ手状入組文にその系譜を求めたのに対して

(註1) 小野正文 1977 『清水天王山式土器について』『丘陵1-3・4号』

(註2) 戸田哲也 1980 『清水天王山式土器と晩期縄文土器の形成』『丘陵第8号』



第123図 I 文様帶における文様一覧図

東北地方の後期末～大洞B式の系統に認められる入組み帶縞文にその系譜を求めた。また、小野の第3段階とした三叉状入組文の形成については、佐野I式、安行3b式との関係を重視し、小野の三段階区分に対して、古・新の二段階細分案を提示し、前者を大洞B式に、後者を大洞B-C式にそれぞれ対比させた。

この両論文で問題となっているのは、小野の第2段階とした入組文の形成期である。この点を除けば、両論文ともに、三叉状入組文が施されるものは、大洞B-C式併行、それ以外は、大洞B式併行に対比させるという帰結点に至っている。

中谷遺跡から出土した清水天王山式土器は、層位的データを得るものではなかったが、資料的に豊富であったために、清水天王山式土器の内容を知る上でまたとないものであった。この中で特に、三叉状入組文のバリエーションには、これまでにない新たな資料を得ることができた。

これらを基に、中谷遺跡における清水天王山式土器の編年試案を述べたい。ここでの筆者の骨子となるのは、第1点として、入組文の形成は、戸田と同様に東北地方の入組み帶縞文にその系譜を求める。しかし、それはA<sub>1</sub>類・A<sub>2</sub>類などの口縁部平縁で、I文様帶に対弧状沈線文及び沈線文が巡らされ、II文様帶に羽状沈線文が施された土器群のI文様帶に影響を与えて、b・c類の文様が形成されたものと思われる。しかし、d・h・j類などの完全に入組化するものや、流水状に入組文が施されるものとは、清水天王山遺跡の層位的データが示すとおりに時間差を有するものと考える。第2点は、三叉状入組文の形成については、e類の存在を重視して、I文様帶に巴状沈線文が形成される段階には、すでに、その萌芽が認められ、佐野I式・安行3b式などとの交渉により、f・g・l類などの三叉状の入組文が形成されたものと考える。しかし、k・m類などの三叉状入組文が、重疊的・連鎖的に施されるようになるのは、安行3C式との関係を考えない訳には行かないと思われる。第3点としては、口縁部における有刻突帶の有無については、中谷遺跡におけるB・C類型の存在に関与する問題であるが、I文様帶の文様がh～j類の段階には、すでに、安定した存在であり、f・l・m類まで認められ、この有刻突帶の有無は、時間差と言うよりは、バリエーションに過ぎないものと考える。第4点としては戸田の古・新と言う二段階細分案は、現段階において、いたずらに細分を避けると言う観点から賛同し得る内容を有すると思われるが、k・m類などの存在を重視し、三段階の細分を考えたいと思う。

第40表 中谷遺跡出土の清水天王山式土器変遷一覧表

	A <sub>1</sub> 類	A <sub>2</sub> 類	B <sub>4</sub> 類	C <sub>3</sub> 類	C <sub>4</sub> 類	D <sub>2</sub> 類	D <sub>3</sub> 類
第1段階	○	○			○		
第2段階	○	○	○	○	○	○	
第3段階		○			○		○

以上、清水天王山式土器の編年試案の骨子を基に、中谷遺跡出土土器を整理すると、第1段階は、b・c・e類で、大洞B式及び安行3a式に、第2段階は、d・f・g・h・j・l類で、大洞B-C式及び安行3b式に、第3段階は、k・m類で、大洞C<sub>1</sub>式及び安行3c式に、それぞれ併行するものとして位置付けたいと思う。

	A類型	B類型	C類型	D類型	E類型
第1段階					
第2段階					
第3段階					

第124図 中谷遺跡出土の清水天王山式土器変遷図

### 第3節 歴史時代の遺構と遺物

#### 1 住居址について

歴史時代の遺構としては、第1・9号址の2軒の住居址が検出された。この内、第1号址は全掘できたが、第9号址は東側半分が調査地区以外のため部分的な調査しかできなかつた。

これら2軒の住居址は、その出土遺物より奈良時代（真間期）のものであることが判明した。

第41表 住居址一覧表

遺構No.	規模	プラン	主軸方向	時期	備考
1	4m × 3m	長方形	N-8-E	真間期	カマド一北
9	一辺8m	方形	N-33-W	真間期	カマド一北 東側半分未調査

## 2 中谷遺跡第1号址出土の土師器・須恵器について

本住居址からは第73図のように、土師器では、壺形土器・甕形土器が、須恵器では、高台付壺形土器・壺蓋などが伴出した。

これらの内、壺形土器（1～3）は、器体部下半に稜の痕跡を有するもので、器体部下半から底部にかけて箇削が施されている。

甕形土器（9～13）には、長胴甕（10・11）と球胴甕（12・13）が認められ、10は箇削整形が、11は櫛状箇ナデがそれぞれ施されている。12・13は、口縁部が「く」の字状に外反し、口唇が若干肥厚した球胴甕で、「駿東型」の甕と思われる。

須恵器には、内面に「かえり」のない壺蓋（6）と高台付壺形土器（4・5）が認められ、後者には、底部が丸味を有するもの（4）と、角ばったもの（5）とが認められる。

これら須恵器より、8世紀初頭の年代が導きだされると思われる。<sup>(註1)</sup>

第125図は、現在までの当市内の歴史時代土器の編年図である。主体となっているのは、市内小形山堀之内原遺跡出土の土器群である。<sup>(註2)</sup>これらは、第3号住居址が8世紀後半代、第5・6号住居址が9世紀初頭、第1・2号住居址が9世紀前半、第4号住居址が9世紀後半代にそれぞれ位置付けられると思われ、中谷遺跡第1号住居址が現在までのところ最古のものとなっている。

奈良時代の住居址は、当地域では他に堀之内原遺跡3号住居址、大月遺跡第3・4号住居址などがある。<sup>(註3)</sup>これらは、坂本美夫氏によって、大月遺跡第4号住居址は8世紀初頭に、第3号住居址は、8世紀の中頃前後に位置付けられている。<sup>(註4)</sup>

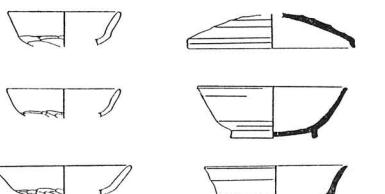
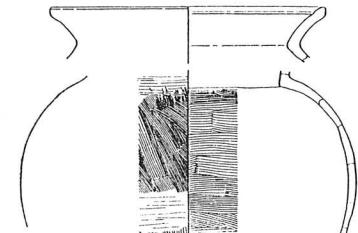
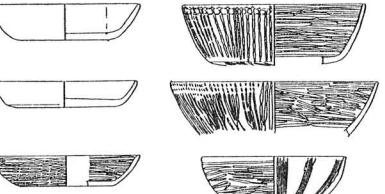
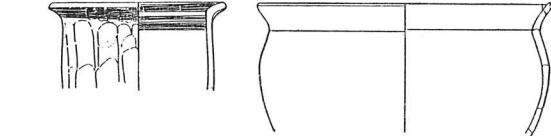
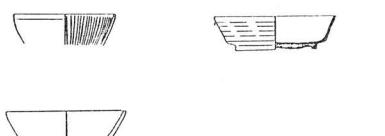
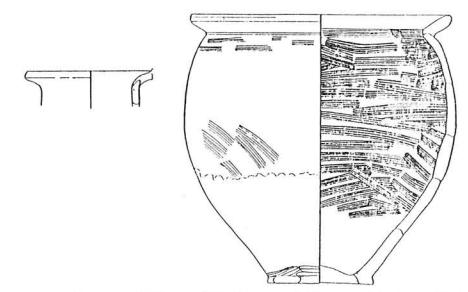
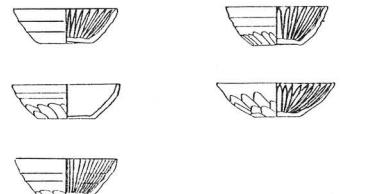
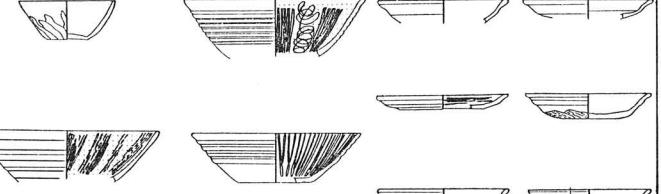
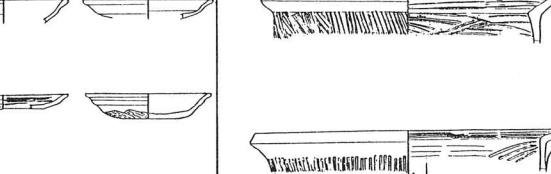
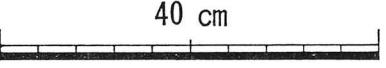
(註1) 4については、河野喜映氏より、美濃国衛官窯の岐阜市朝倉窯の製品であり、8世紀の第1四半世紀の時期に位置付けられる。との御教示を得た。

(註2) 奥隆行・奈良泰史 1980 「堀之内原遺跡発掘調査報告書」 都留市教育委員会

(註3) 平松康毅他 1976 「大月遺跡」 山梨県教育委員会

(註4) 坂本美夫 1981 『山梨県下における奈良時代土器の様相』「シンポジウム盤状壺」



	环・皿・須恵器	甕	駿東型胴張甕	堀之内原type
中1 谷住				
堀之内原3住				
堀之内原5・6住				
堀之内原1・2住				
堀之内原4住				

第125図 都留市内出土土器編年図

## 付 中谷遺跡出土の人骨について

森 本 岩太郎  
小 片 丘 彦  
吉 田 俊 爾

### 1 はじめに

この人骨は、昭和54年10月、中谷遺跡の発掘調査に際し出土したもので、縄文時代中期に属するものであるという。出土人骨については、小片が現地調査に赴き、後日、奈良泰史氏（都留市教育委員会）らが取り上げて筆者のもとへ持参された。人骨調査の機会を与えてくださった都留市教育委員会はじめ関係各位に対し深く感謝申し上げる。

### 2 人骨の出土状態

中谷遺跡から出土の人骨は全部で3個体分（№2, 4, 7）である。№2人骨は炉跡の下から、また№4, №7人骨はトレンチの南壁ぎわから、それぞれ単独に出土した。人骨の保存状態が不良なので埋葬姿勢は分からぬ。3個体のうち、№2人骨に関する出土状況は次のような。

当初、数個の大石で囲まれた約 $1.5m \times 1m$  大の縄文時代中期に属すると思われる炉跡が出土した。その炉跡には約40cmの焼土の堆積があり、焼土の下には小さな丸石が敷かれている。この丸石層の直下から人骨が発見された。発見当時、人骨の埋葬と炉跡の関係が問題となつた。すなわち、人骨が焼けていないこと、埋葬の際その上で火を焚いたにしてはあまりにも焼土が厚すぎること、またこの時代における同様の出土例に乏しいことなどから、炉跡と人骨とはおそらく無関係であろうという論議である。小片は現地調査に際し、人骨の配列などからみて、№2人骨は一次埋葬されたものであるとの印象を受けている。後日、調査関係者の話を総合すると、やはり炉と№2人骨の埋葬とは無関係であろうという見解に落ち着いたといふ。

3個体分の出土人骨はいずれも保存状態が極めて悪く、崩壊寸前の状況にある。また、土圧による変化も著しい。

### 3 出土人骨所見

出土人骨は、上述のように保存状態が極めて悪いため、復元がはなはだ困難である。したがつて、人骨の形質人類学的特徴を詳細に検討することは不可能であった。人骨の計測ができないので、ここでは観察によって知り得た若干の所見を述べるにとどめる。

#### (1) №2人骨 (Fig. 1)

壮年期の女性の頭蓋冠の破片と下顎骨の一部及び歯があり、1個体分と思われる。土圧による変形が著しいが、他の出土人骨と比べてやや保存が良く、頭頂骨の大部分、後頭鱗の大部分及び下顎骨体（右側）の一部分等が確認できる。骨質は薄い。ラムダ縫合は外板・内板とも一部に閉鎖が始まっているが、詳細は不明である。他の縫合については確認することができない。

歯については、残されたものが歯冠の微細な破片数点であり、歯種の鑑別は不可能である。こ

これらの破片についてみると、咬耗度は Martin の第 3 度程度まで進んでいると思われるが、定かではない。

#### (2) №. 4 人骨 (Fig. 2)

小児 1 個体分の頭蓋冠の破片 10 数個と歯と右肩甲骨の一部及び自由上肢骨の一部である。

頭蓋冠の破片は最大でも約  $10\text{cm} \times 5\text{cm}$  にすぎないが、頭頂骨、前頭骨、後頭骨等が確認できる。骨質は薄い。

歯は乳歯と永久歯とが混在しているが、出土状態などからみて、おそらく同一個体に属するものと思われる。したがってこの個体は歯の交換期にあったと推測される。ほとんどの歯が歯冠だけで、歯種の鑑別はやや困難であるが、鑑別の結果を歯式によって表現すると次のようになる。

欠⑦ 6 欠④ 欠③ 2 1	1 2 欠欠④⑤ 6 ⑦ 欠
欠⑦ 6 欠④ V 欠欠 1	1 2 ③ V ④⑤ 6 ⑦⑧

ただし、ローマ数字は乳歯、アラビア数字は永久歯を示す。「欠」は歯が欠落しているもの、○印は萌出途中にあると思われるものを表わしている。

切歯及び第 1 大臼歯についてみると、咬耗度は Martin の第 1 度である。ただし、右側の歯の方が、咬耗度がやや進んでいる傾向にある。咬合様式については、上、下顎とも歯槽部を欠いているので詳細は不明であるが、上下顎切歯の咬耗状態から判断すると、縄文時代人によくみられる鉗子状咬合の可能性が強い。齶蝕は認められない。

以上の所見から、この小児骨の年齢は 11 歳前後と推定される。

#### (3) №. 7 人骨 (Fig. 3)

幼児 1 個体分の頭蓋冠の一部と歯である。

頭蓋冠は、頭頂骨の一部及び後頭骨の一部と思われるが、詳細は分からぬ。骨質は極めて薄い。

歯については歯槽が残っていないため不明な点も多いが、乳歯と萌出前の永久歯とが混在している。永久歯は、歯根はもとより歯冠さえも形成途中にあるもので、歯種の鑑別は完全にはできない。しかし、この乳歯と永久歯とはおそらく同一個体に属するものと思われる。残された乳歯を歯式によって表現すると次のようになる。(記号については №. 4 人骨の場合と同じ)

V 欠 III II I	欠欠欠 IV V
V 欠欠欠欠	欠欠欠 IV V

咬耗はほとんど進んでいない。萌出前の永久歯については、上・下顎の切歯、犬歯及び第 1 大臼歯等が確認できる。

以上の所見から、この幼児骨の年齢は 3 歳前後と推定される。

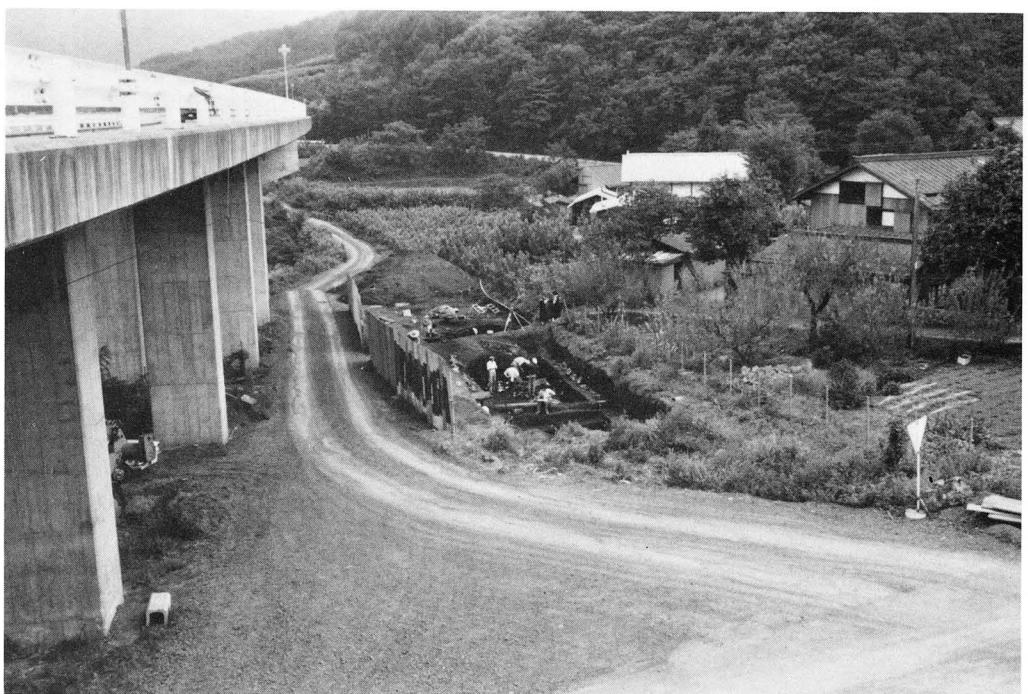
## 4 要 約

中谷遺跡から出土した縄文時代中期に属する人骨は、№. 2 (壮年期の女性)、№. 4 (11 歳前後の小児)、№. 7 (3 歳前後の幼児) の計 3 個体分である。人骨はいずれも焼けておらず、外傷や疾病等は認められない。歯に齶蝕も認められない。

図版 1



(1) 中谷遺跡遠景（南方向より）



(2) 中谷遺跡近景（北方向より）

図版 2



(1) 発掘風景（ハイ・ニ地区）



(2) 発掘風景（イ・ロ地区）

図版 3



(1) 配石調査風景



(2) 配石調査風景

図版 4

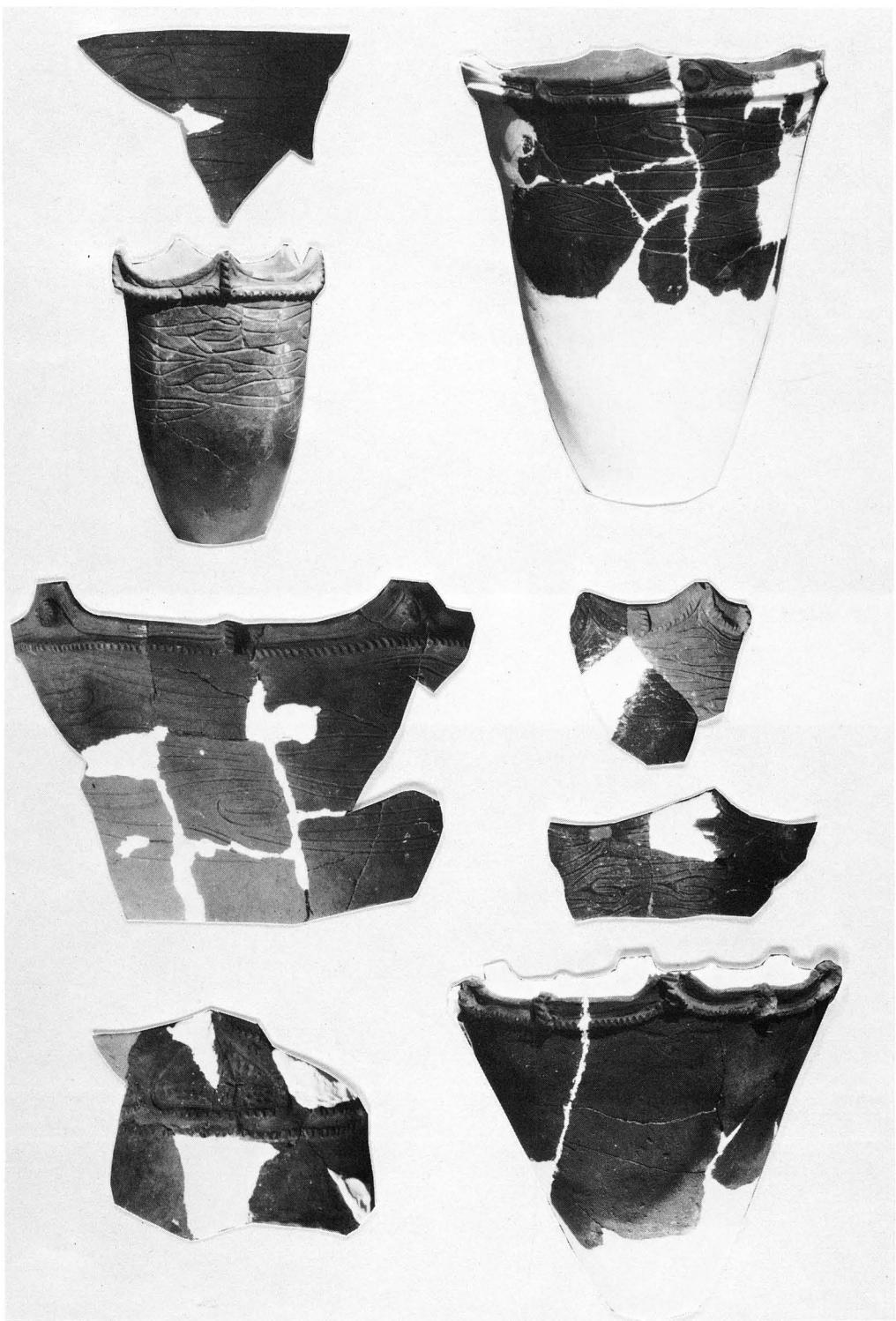


(1) 第8号址



(2) 第8号址

図版 5



第8号址出土土器

図版 6

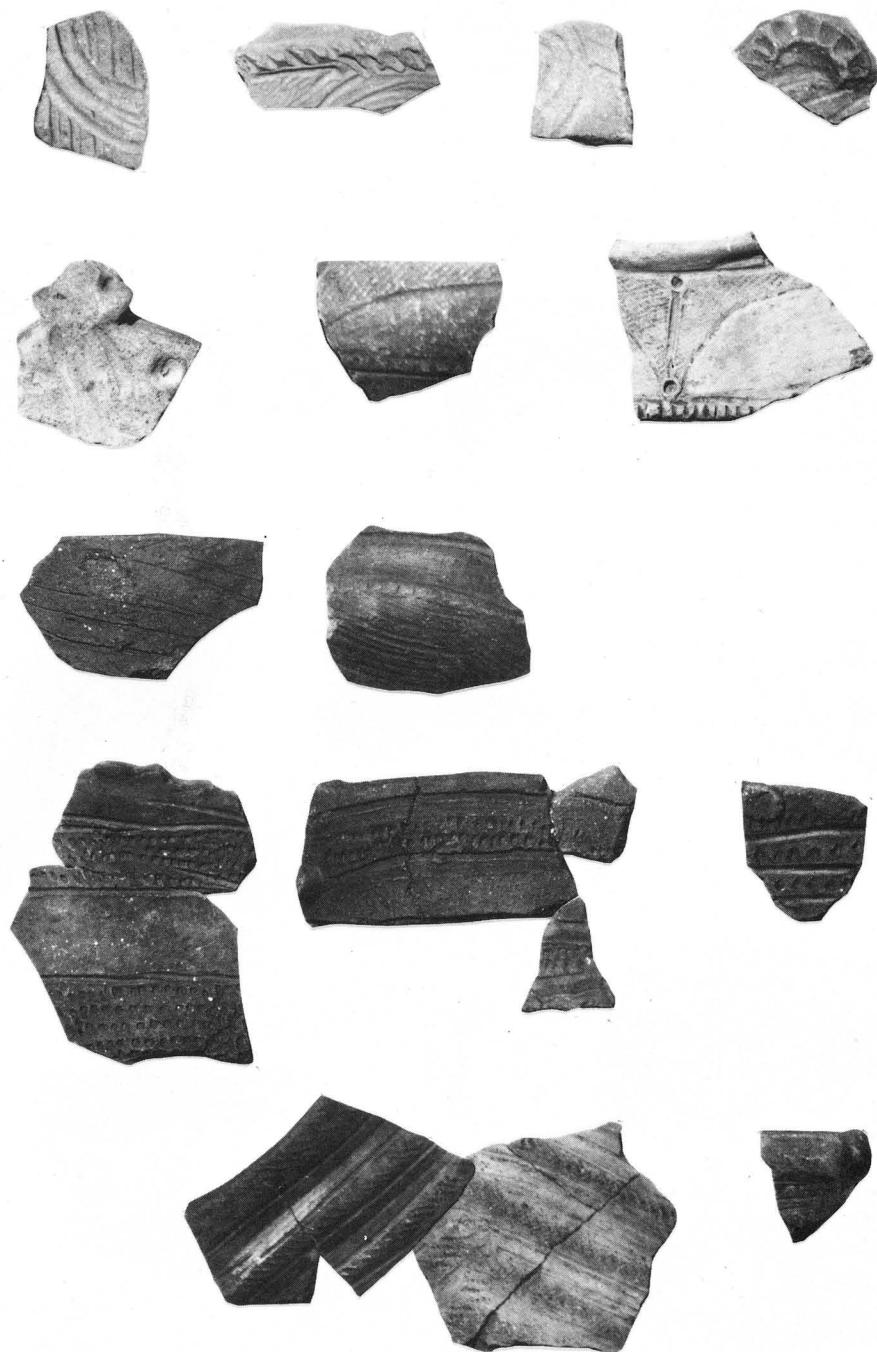


(1) 第12号址



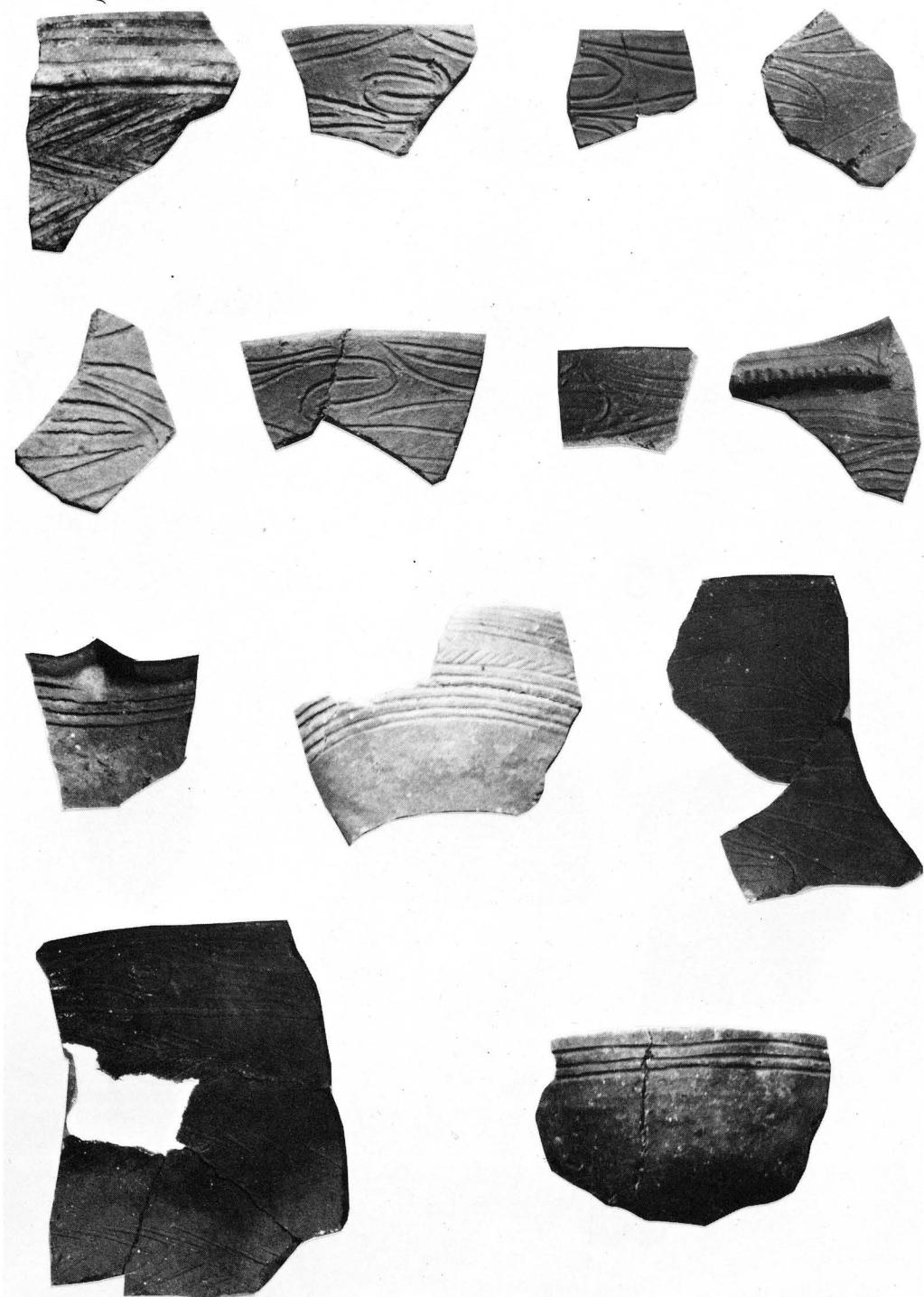
(2) 第12号址

図版 7



第12号址出土土器(1)

図版 8



第12号址出土土器(2)

図版 9



(1) 第3号址



(2) 第3号址人骨出土状態

図版 10



(1) 1地区第3・4・7号址

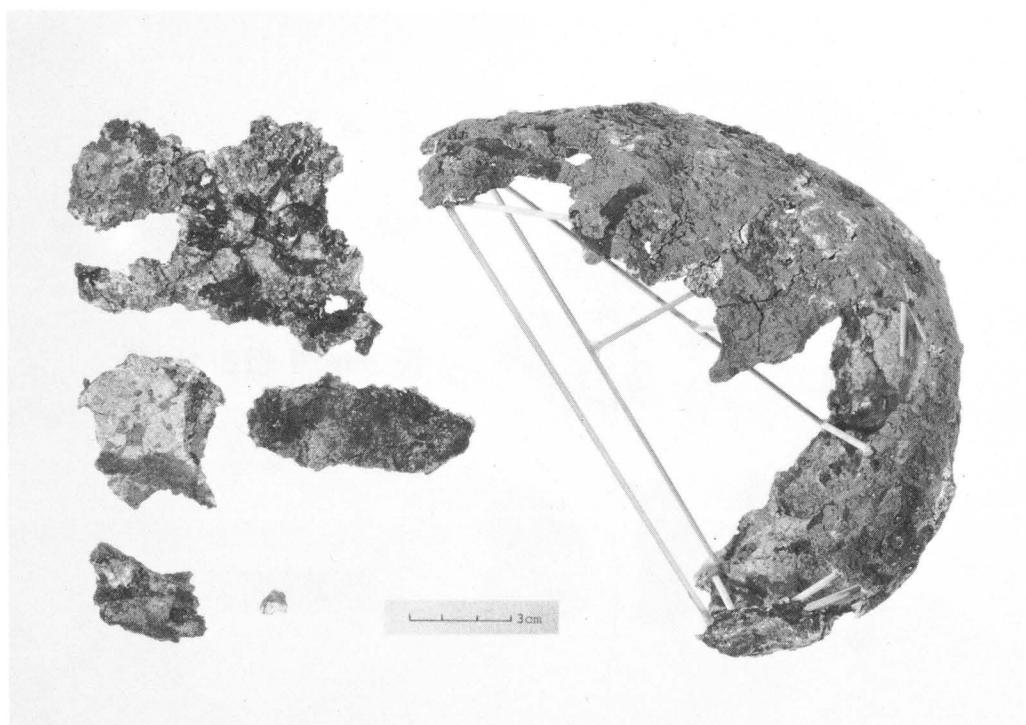


(2) 第4号址出土人骨

図版 11

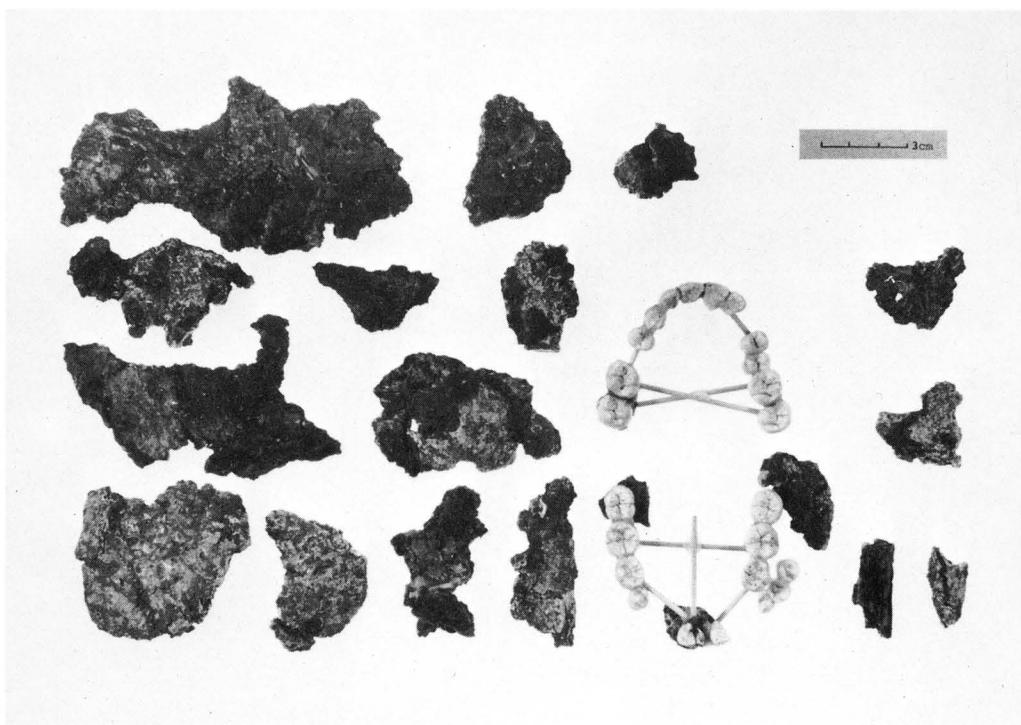


(1) 第 7 号址出土人骨

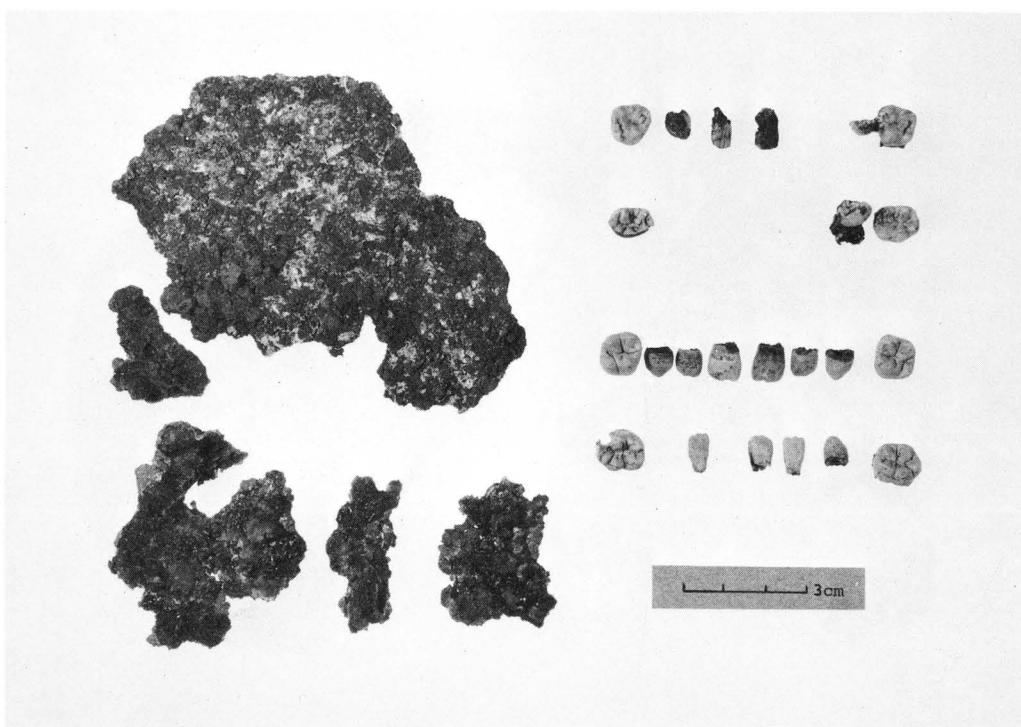


(2) 第 3 号址出土人骨

図版 12



(1) 第4号址出土人骨



(2) 第7号址出土人骨

図版 13



(1) イ地区第VI層中配石出土状態

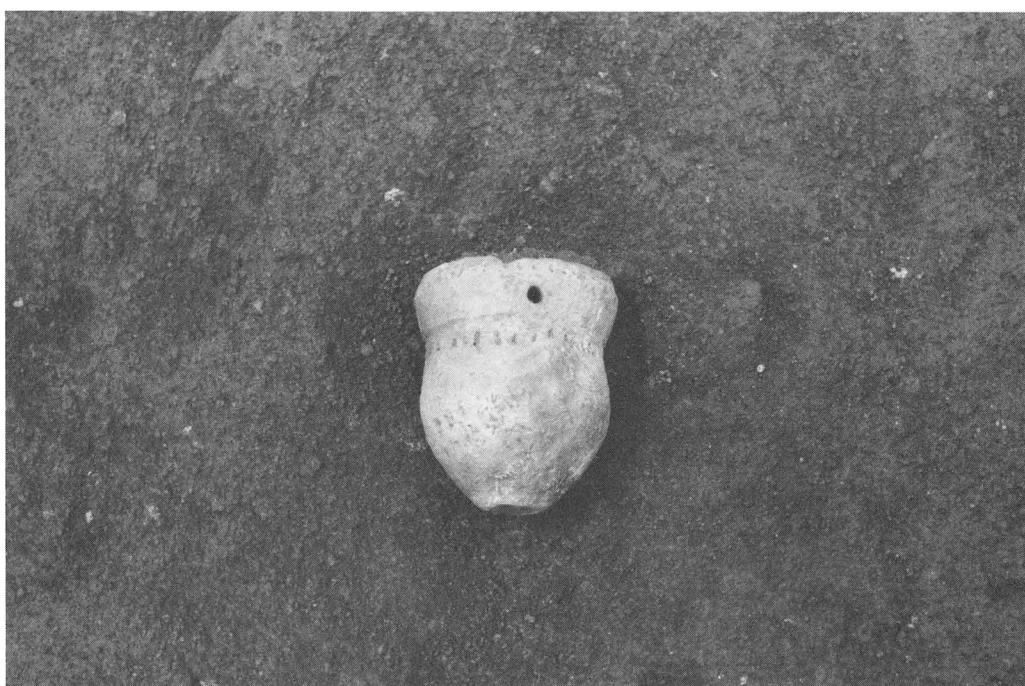


(2) イ地区第VII層中配石出土状態

図版 14

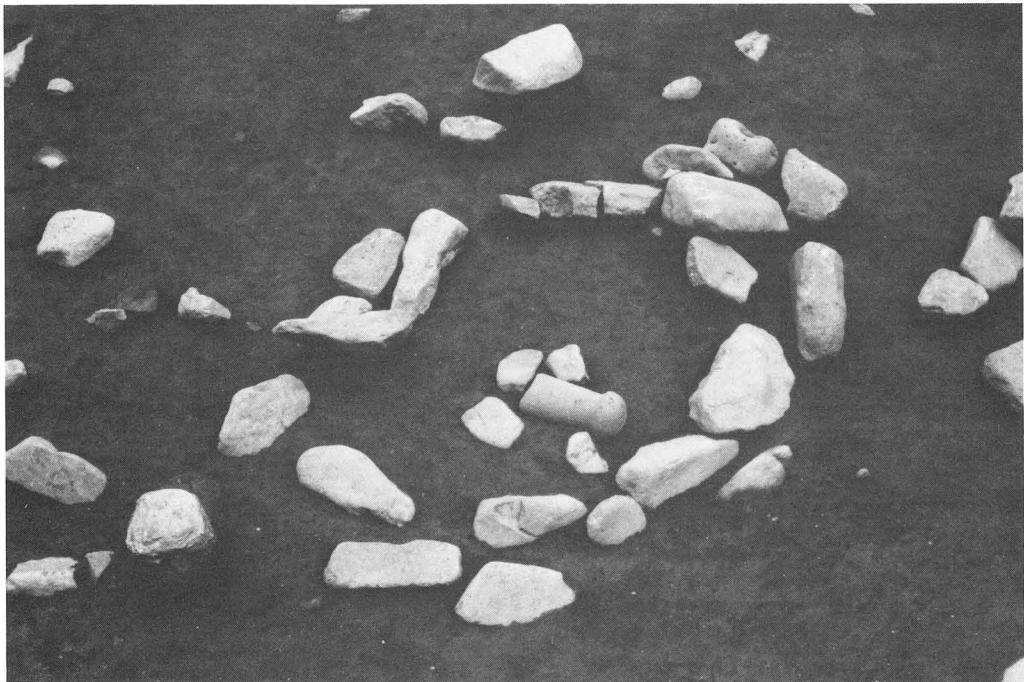


(1) 口地区第VII層中配石出土状態



(2) 口地区第VII層中配石内出土土器

図版 15

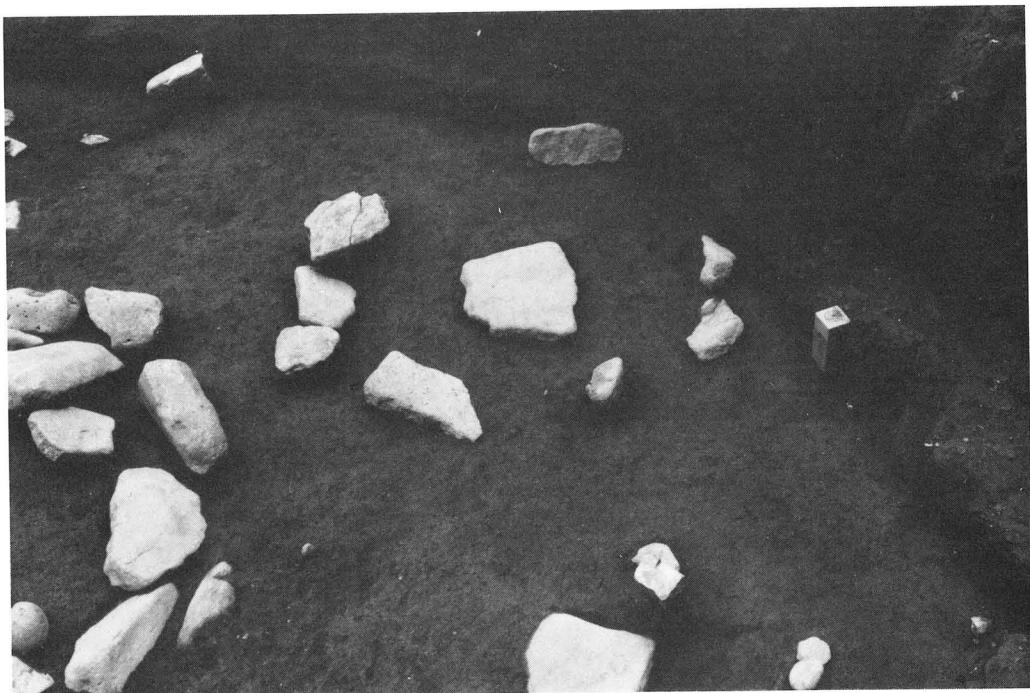


(1) 八地区第VII層中配石出土状態

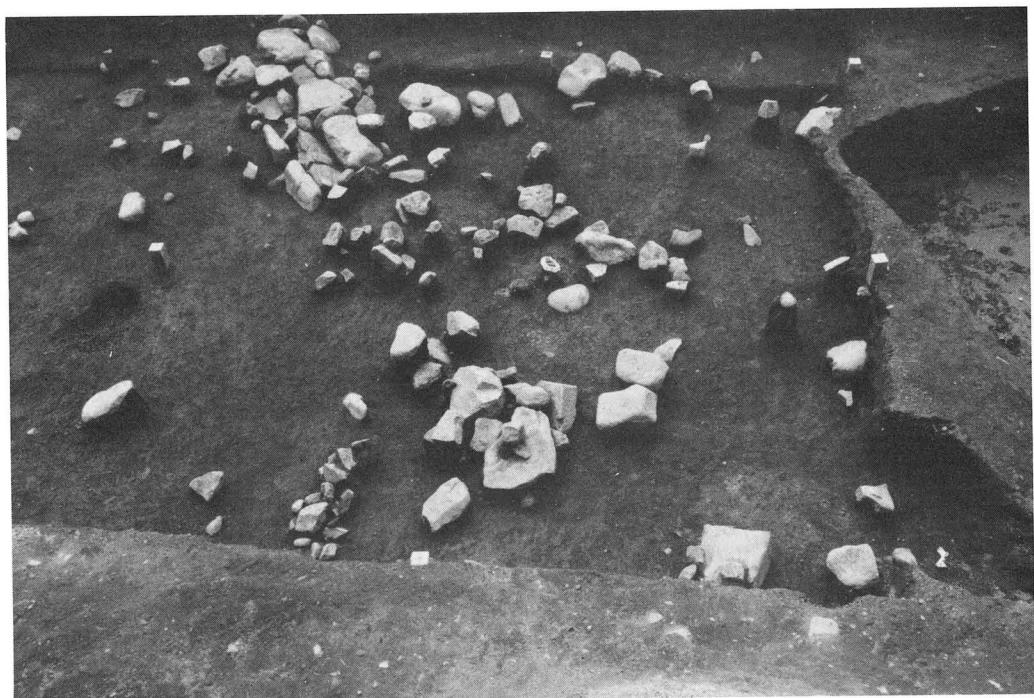


(2) 八地区第VII層中配石内出土石棒

図版 16



(1) 八地区第VII層中配石出土状態



(2) 二地区第VII層中配石出土状態

図版 17



(1) 第1号址



(2) 第1号址カマド

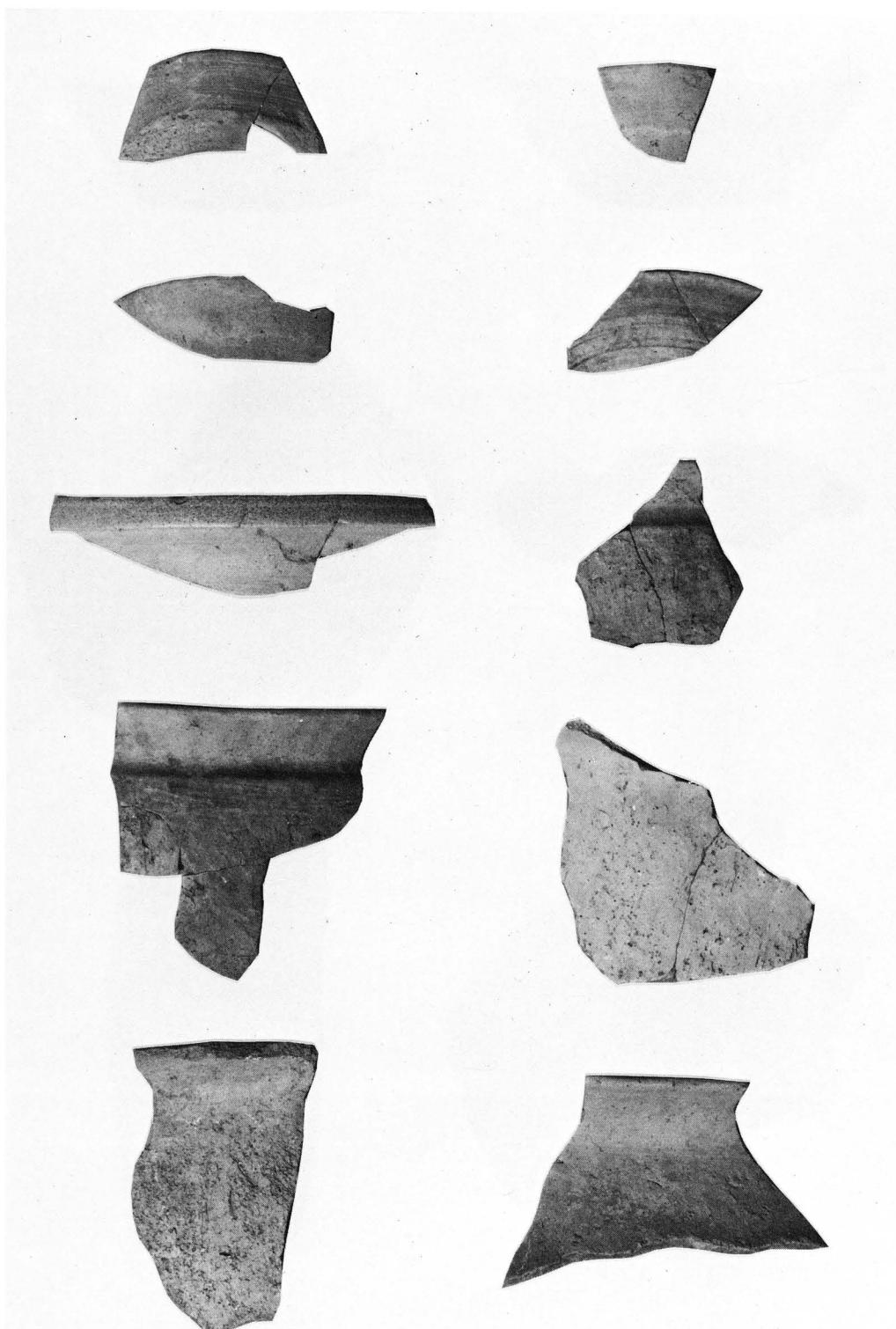
図版 18



(1) 第1号址カマド（石組み）



(2) 第1号址（掘り方）



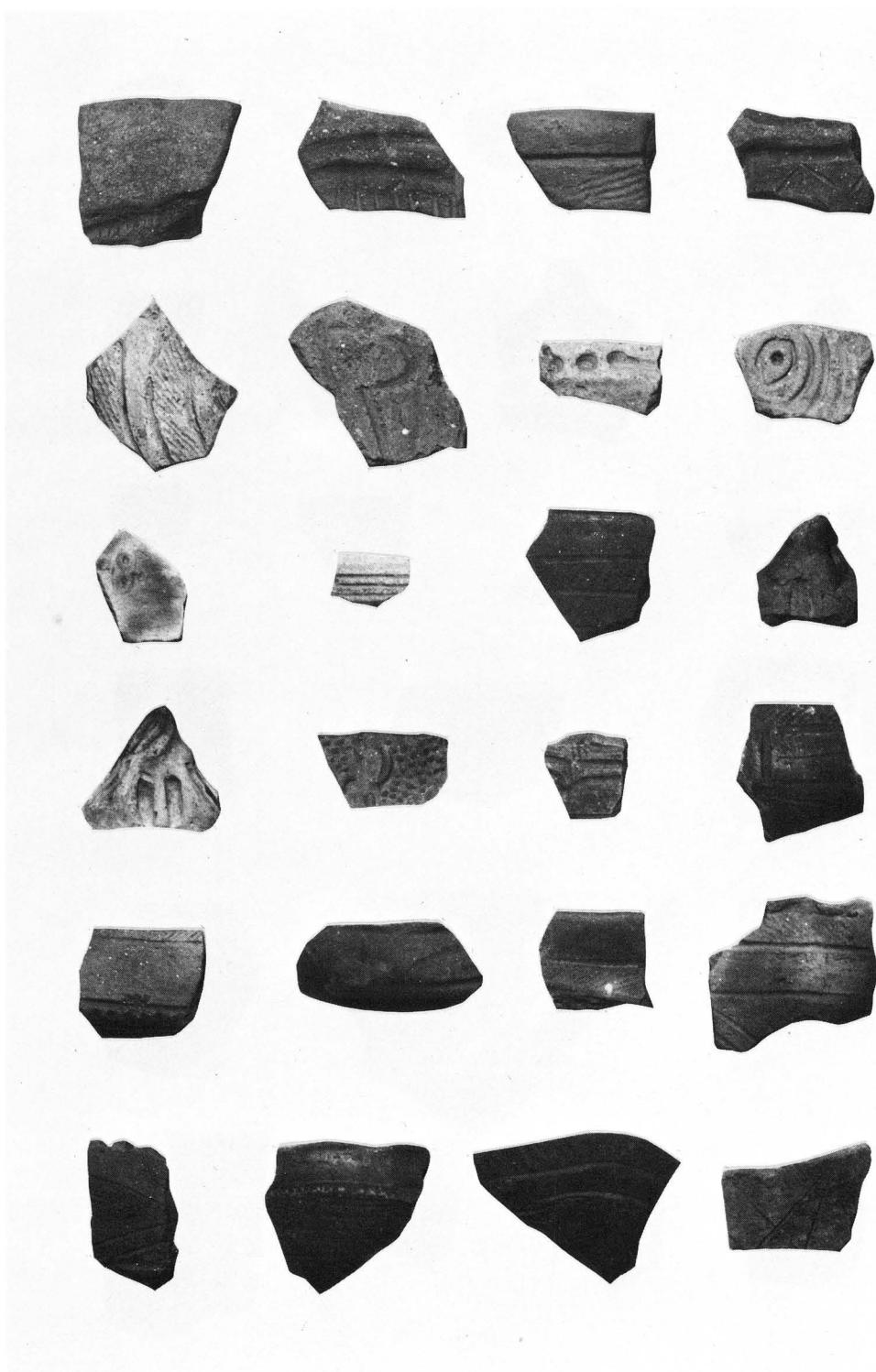
第1号址出土土器(1)

図版 20



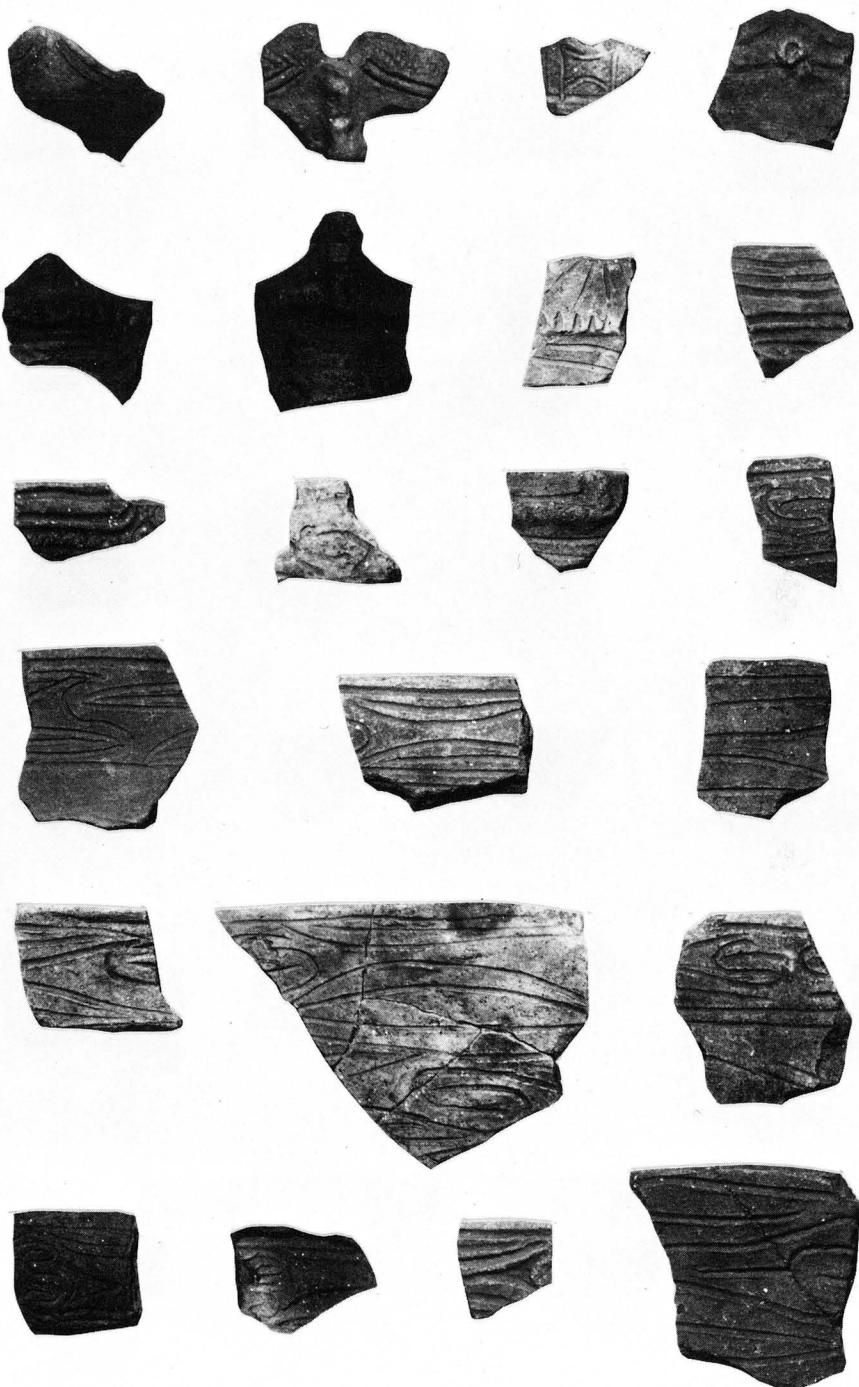
第1号址出土土器(2)及び支脚

図版 21

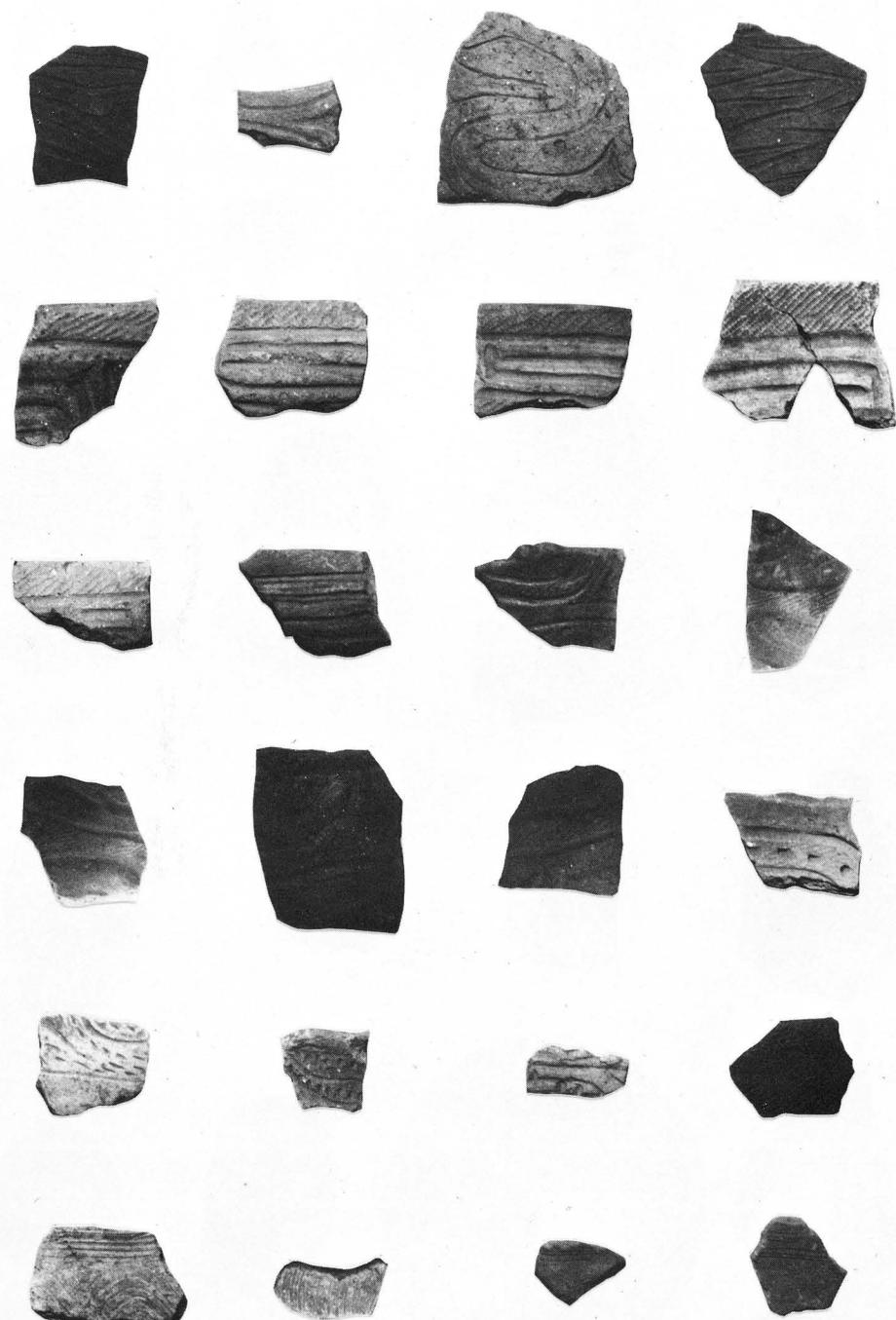


第1号址出土土器(3)

図版 22



第1号址出土土器(4)



第1号址出土土器(5)

図版 24



第1号址出土石器

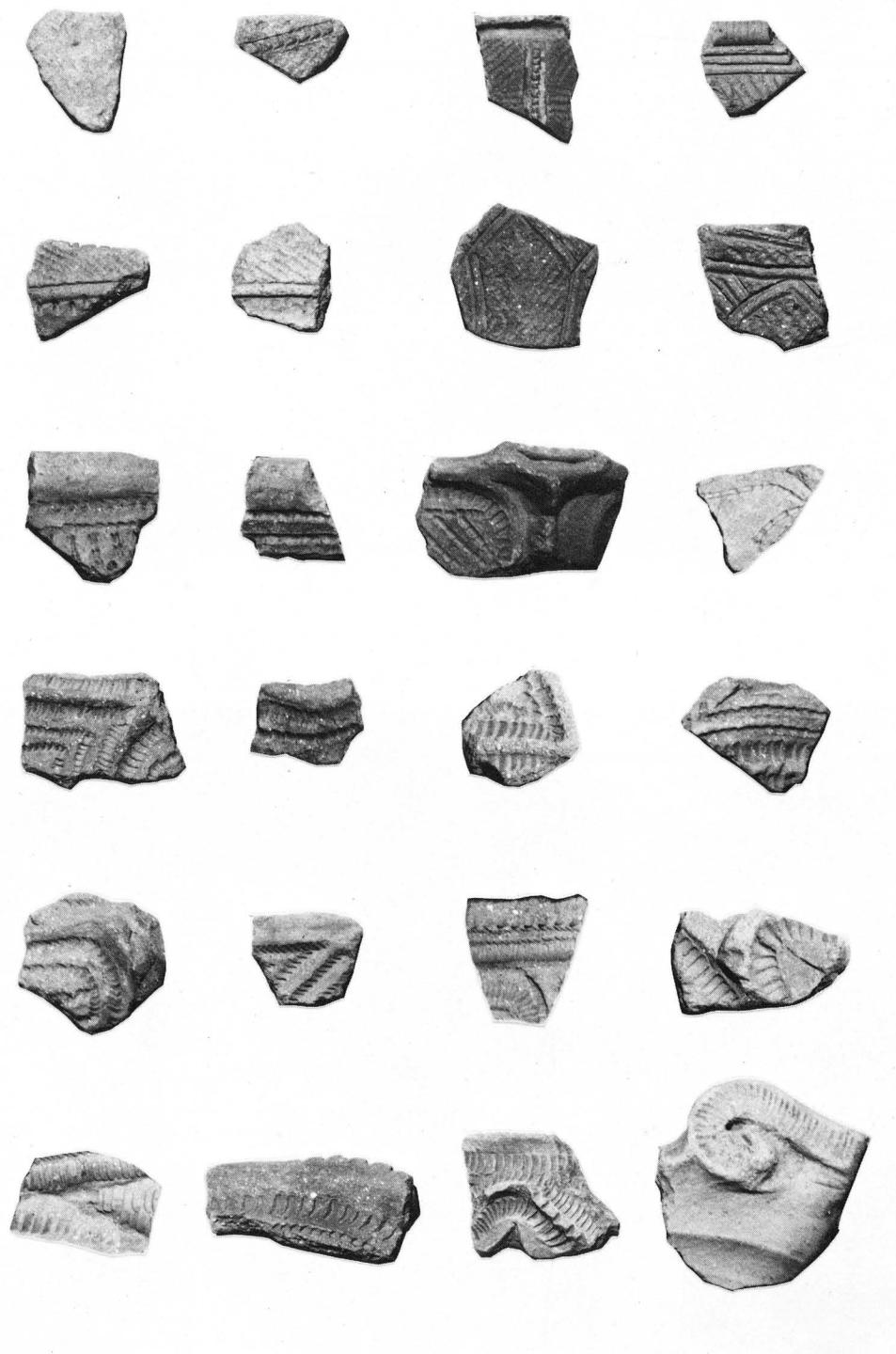
図版 25



(1) 第9号址



(2) 第9号址カマド



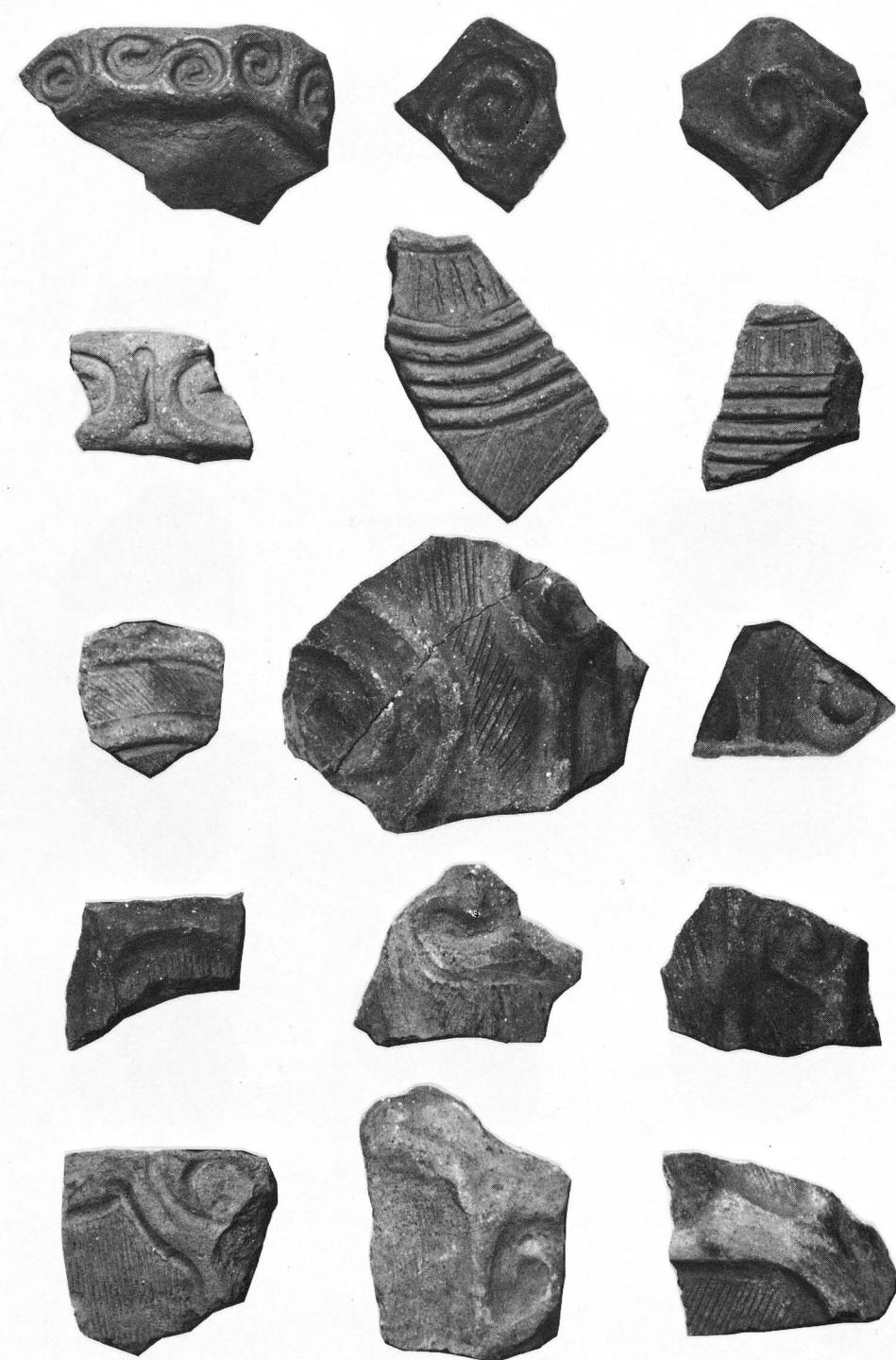
配石及びグリッド出土土器(1)

図版 27



配石及びグリッド出土土器(2)

図版 28

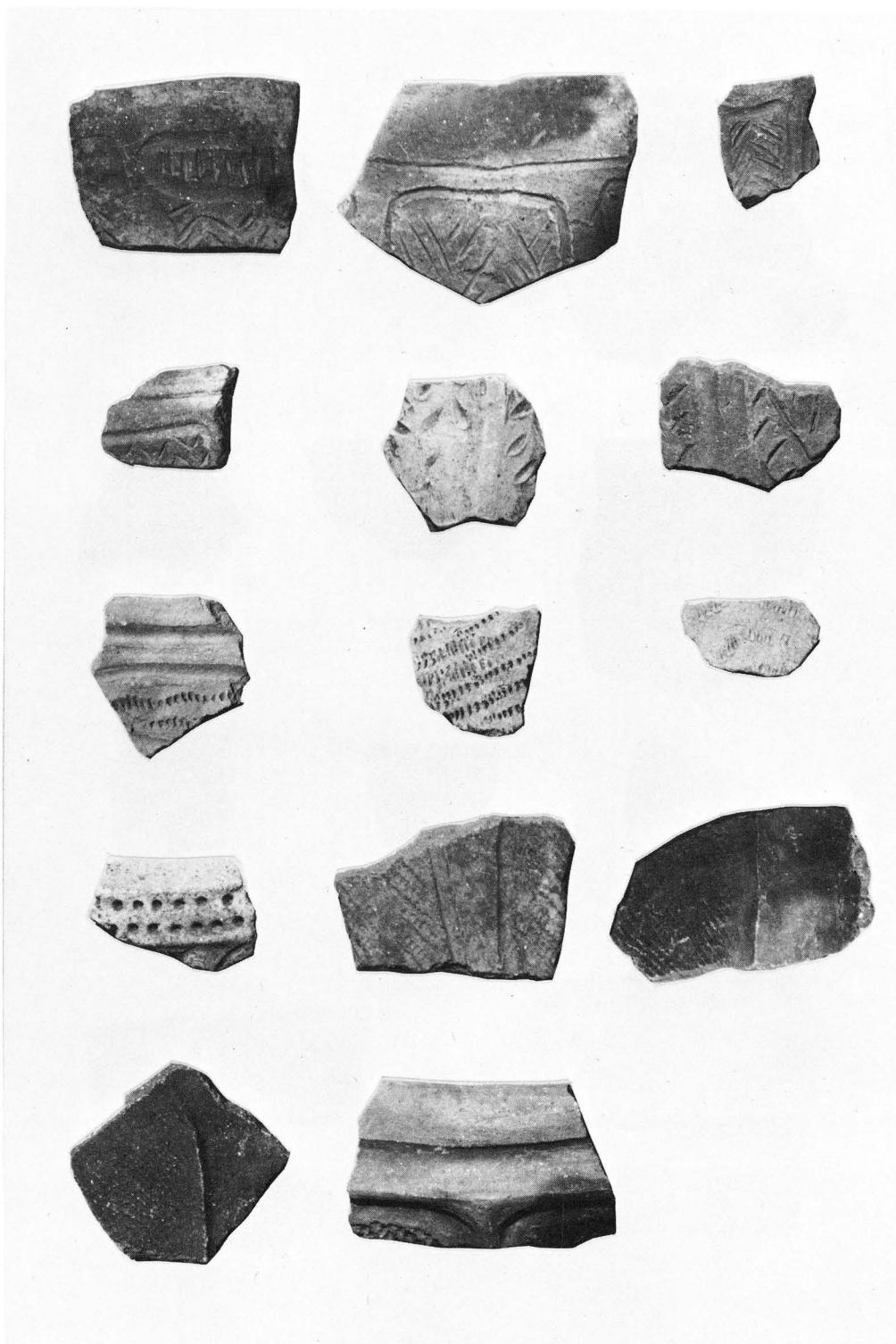


配石及びグリッド出土土器(3)

図版 29

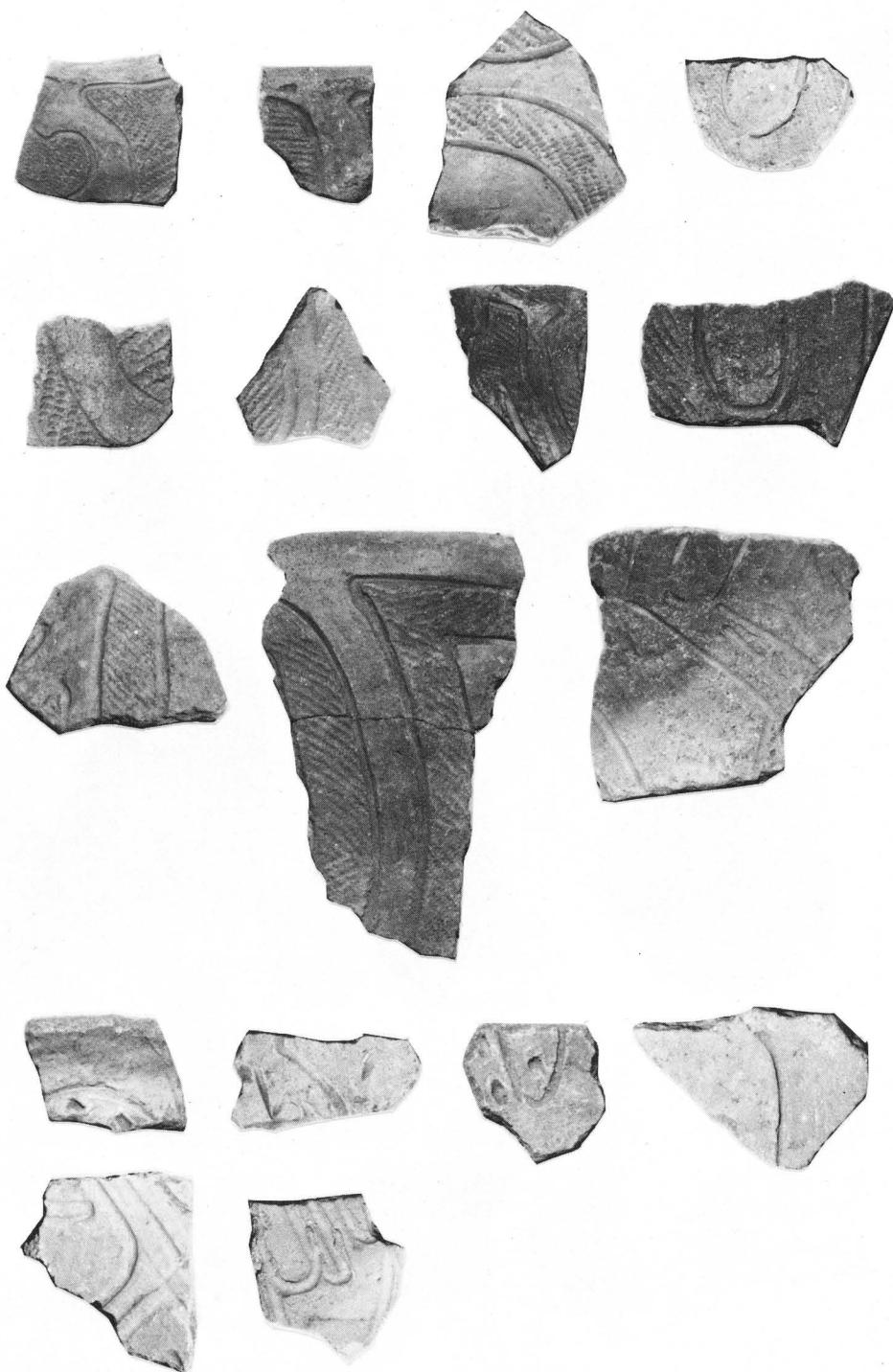


配石及びグリッド出土土器(4)



配石及びグリッド出土土器(5)

図版 31



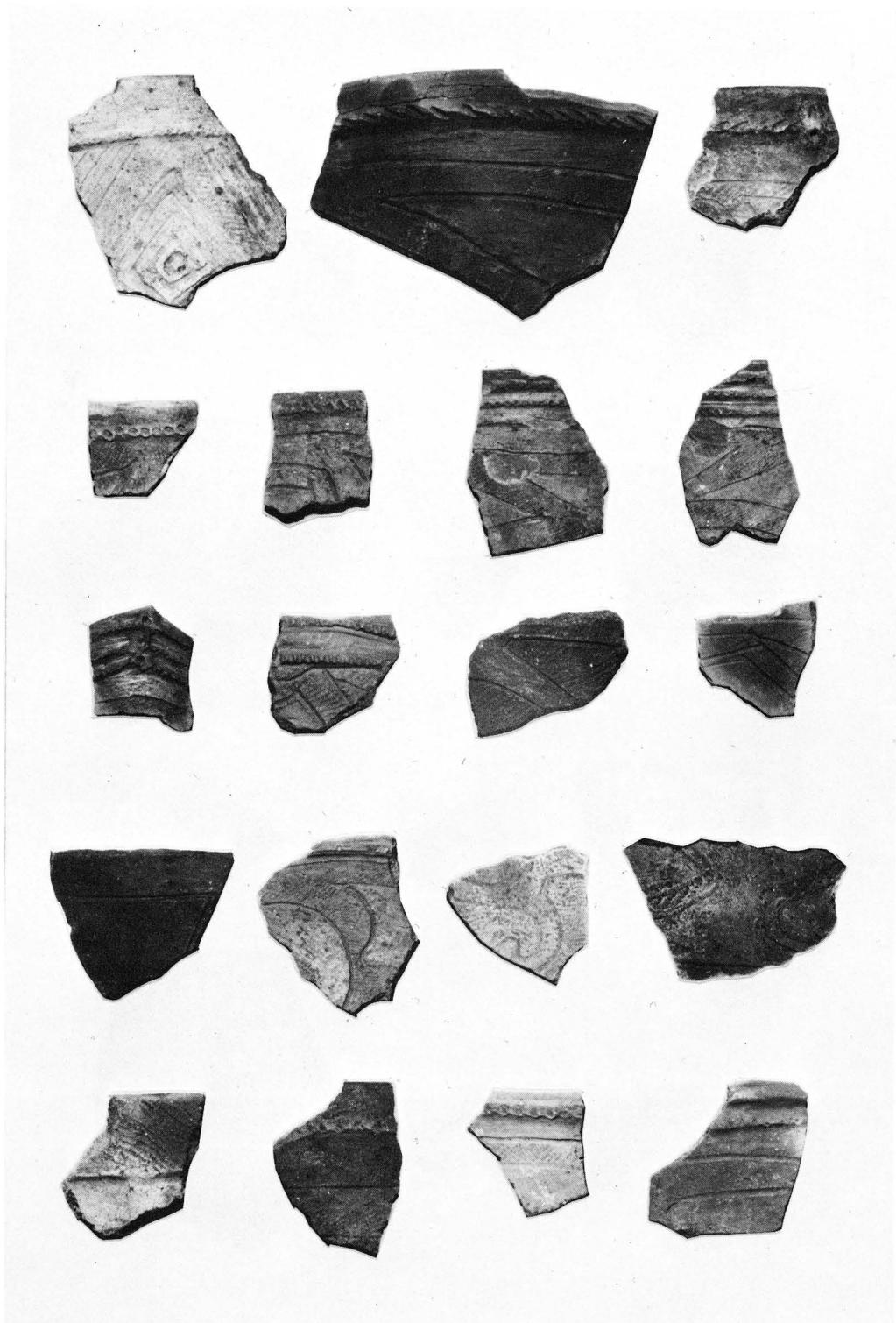
配石及びグリッド出土土器(6)

図版 32



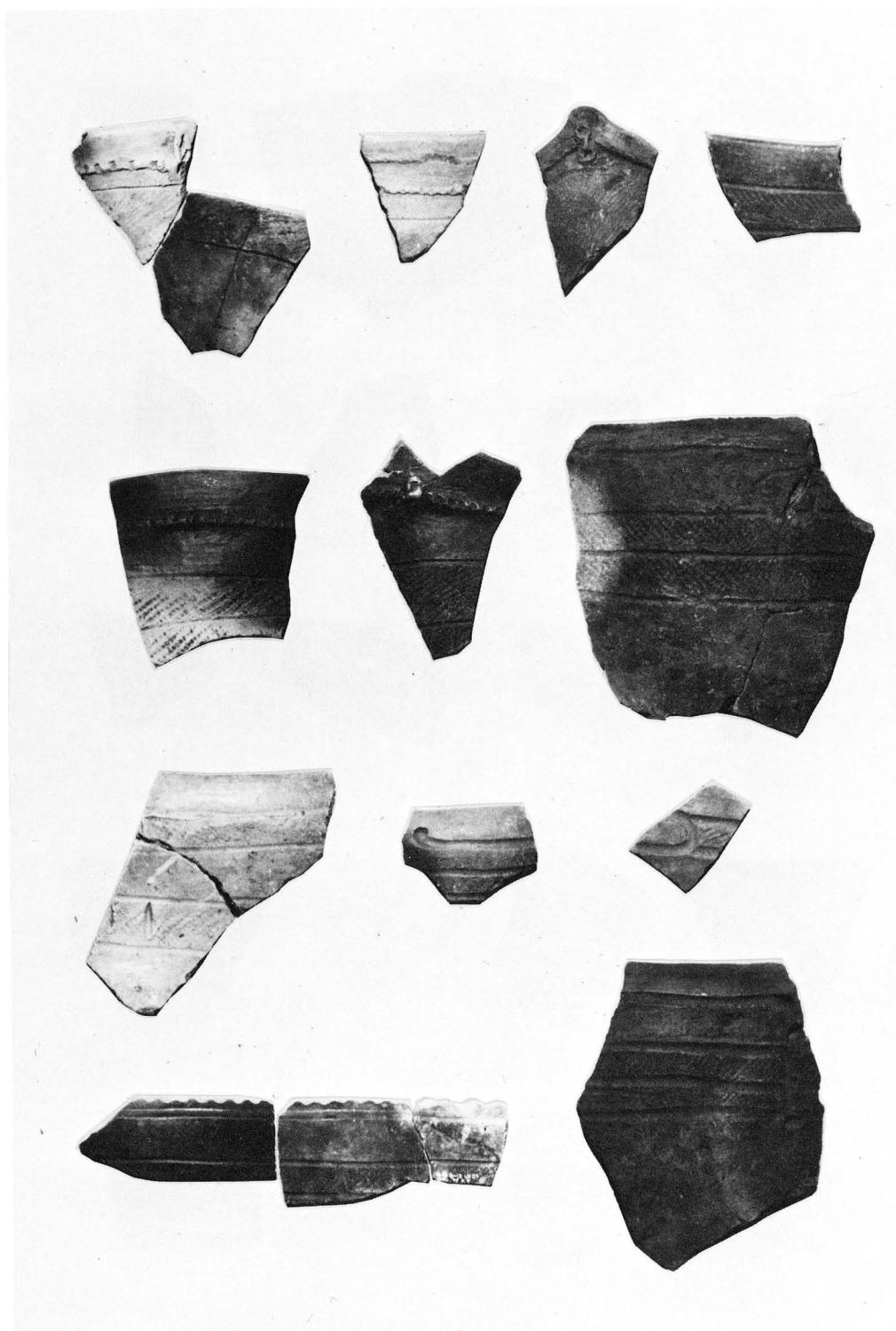
配石及びグリッド出土土器(7)

図版 33

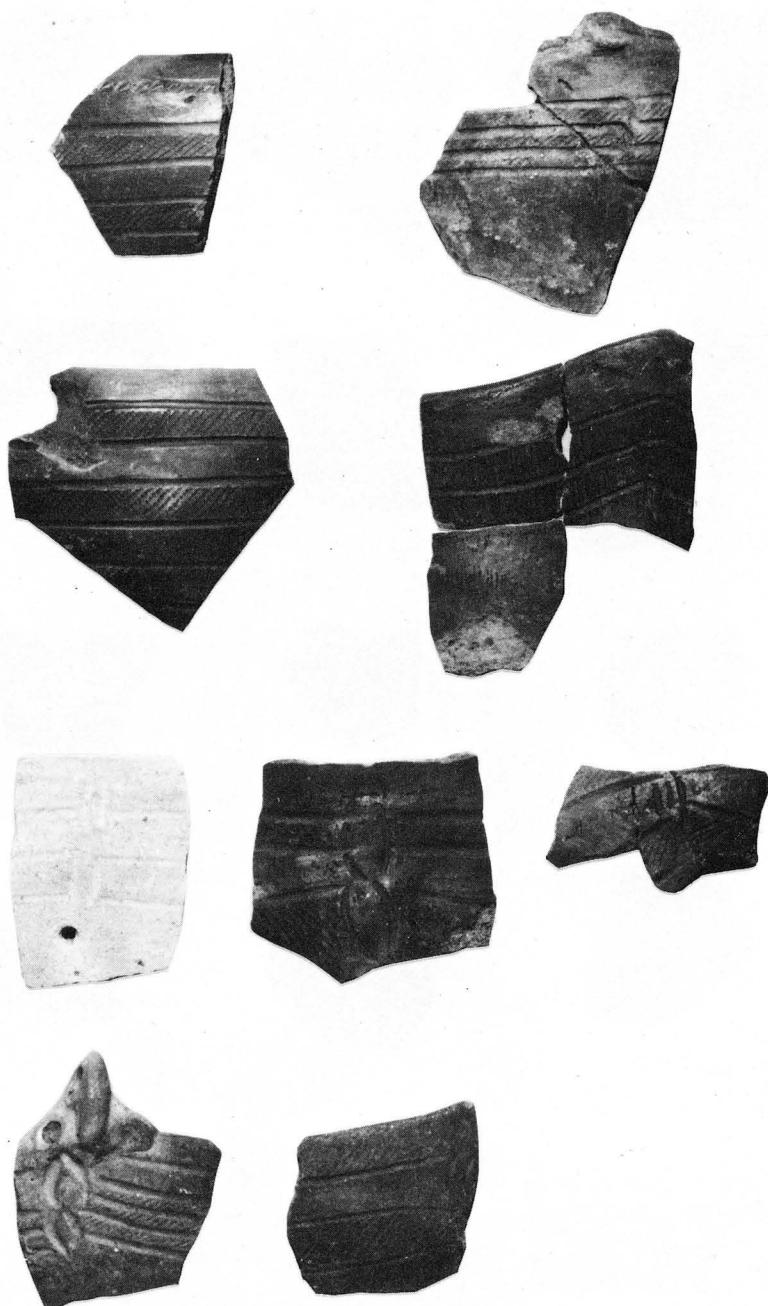


配石及びグリッド出土土器(8)

図版 34

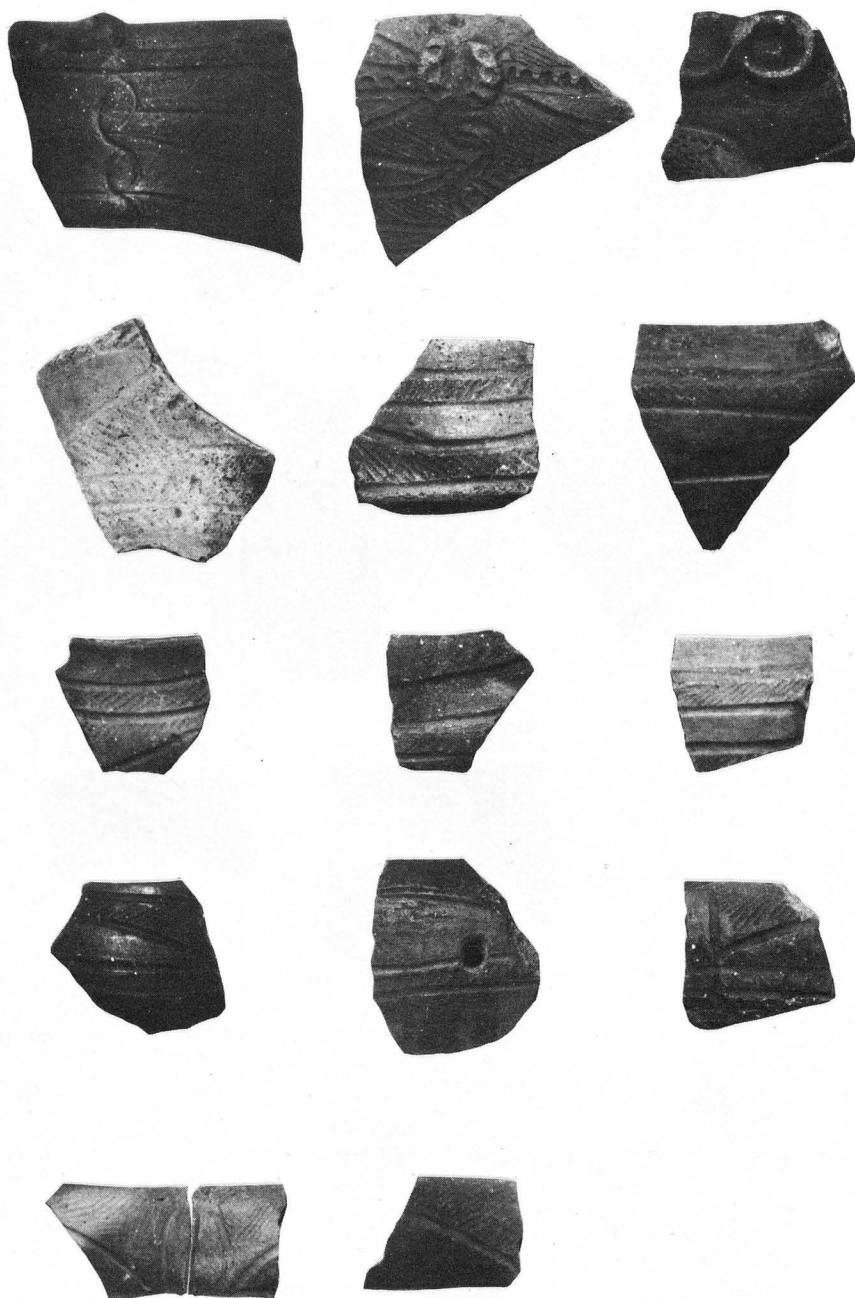


配石及びグリッド出土土器(9)



配石及びグリッド出土土器(10)

図版 36



配石及びグリッド出土土器(1)

図版 37



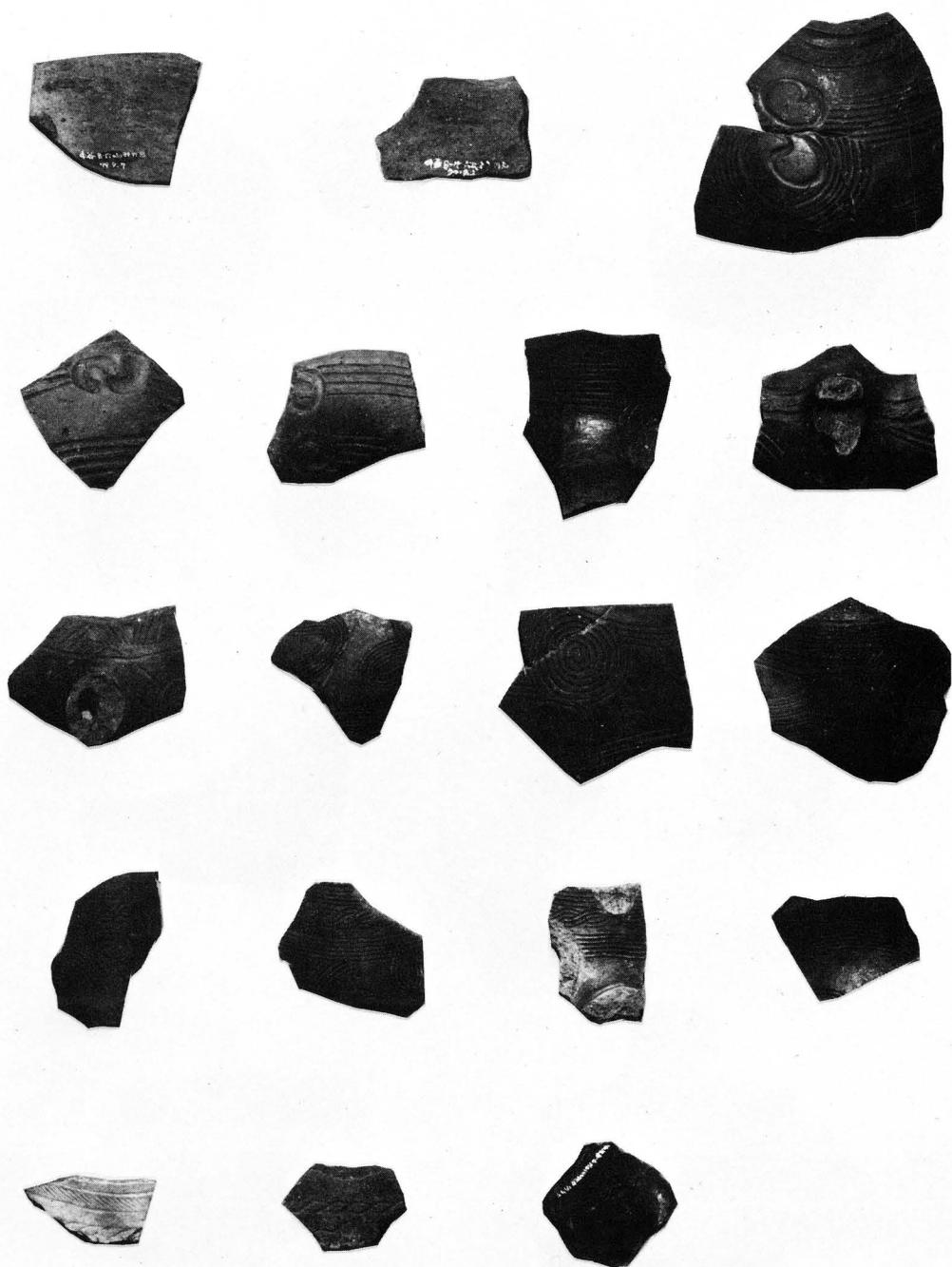
配石及びグリッド出土土器(12)

図版 38



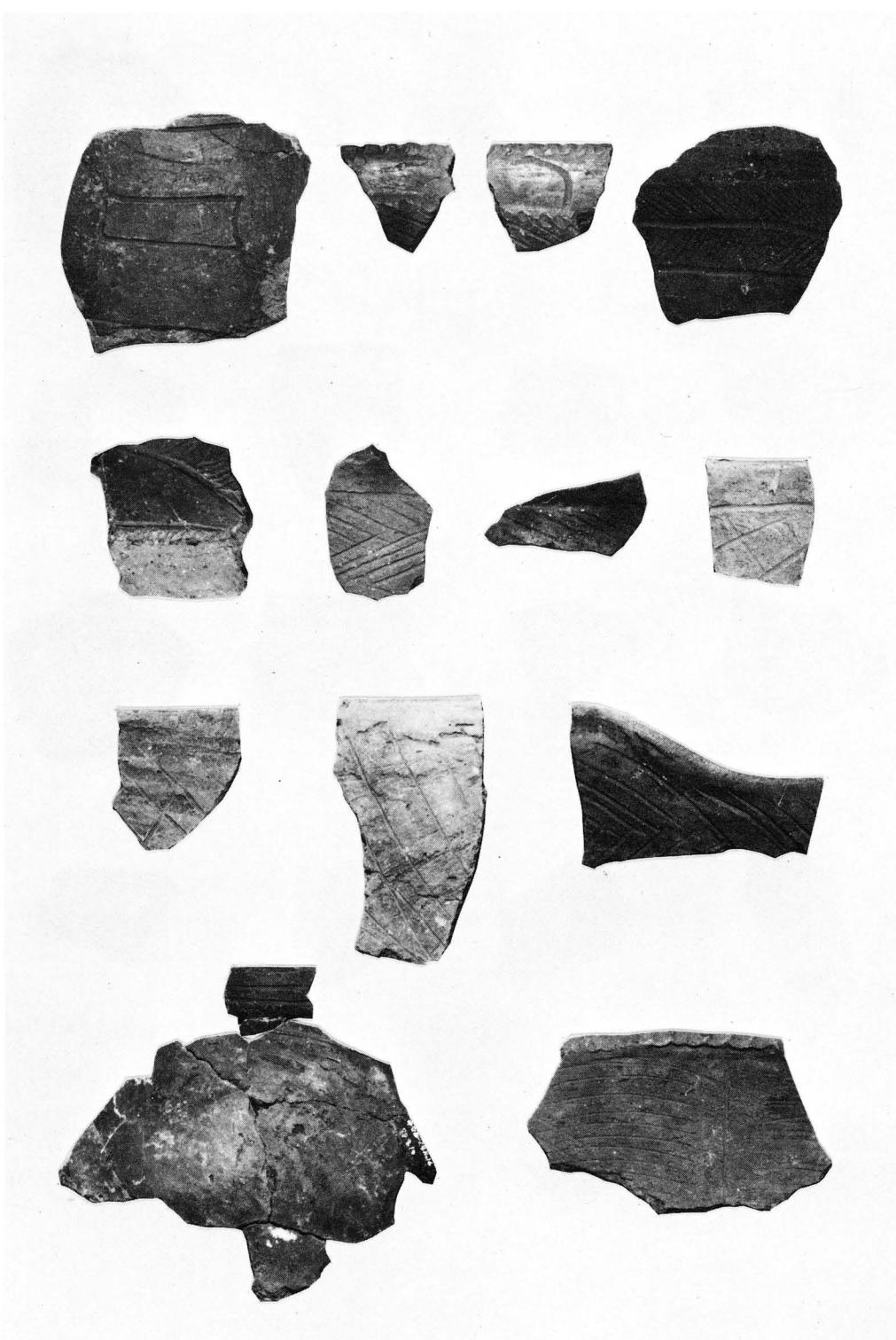
配石及びグリッド出土土器(13)

図版 39



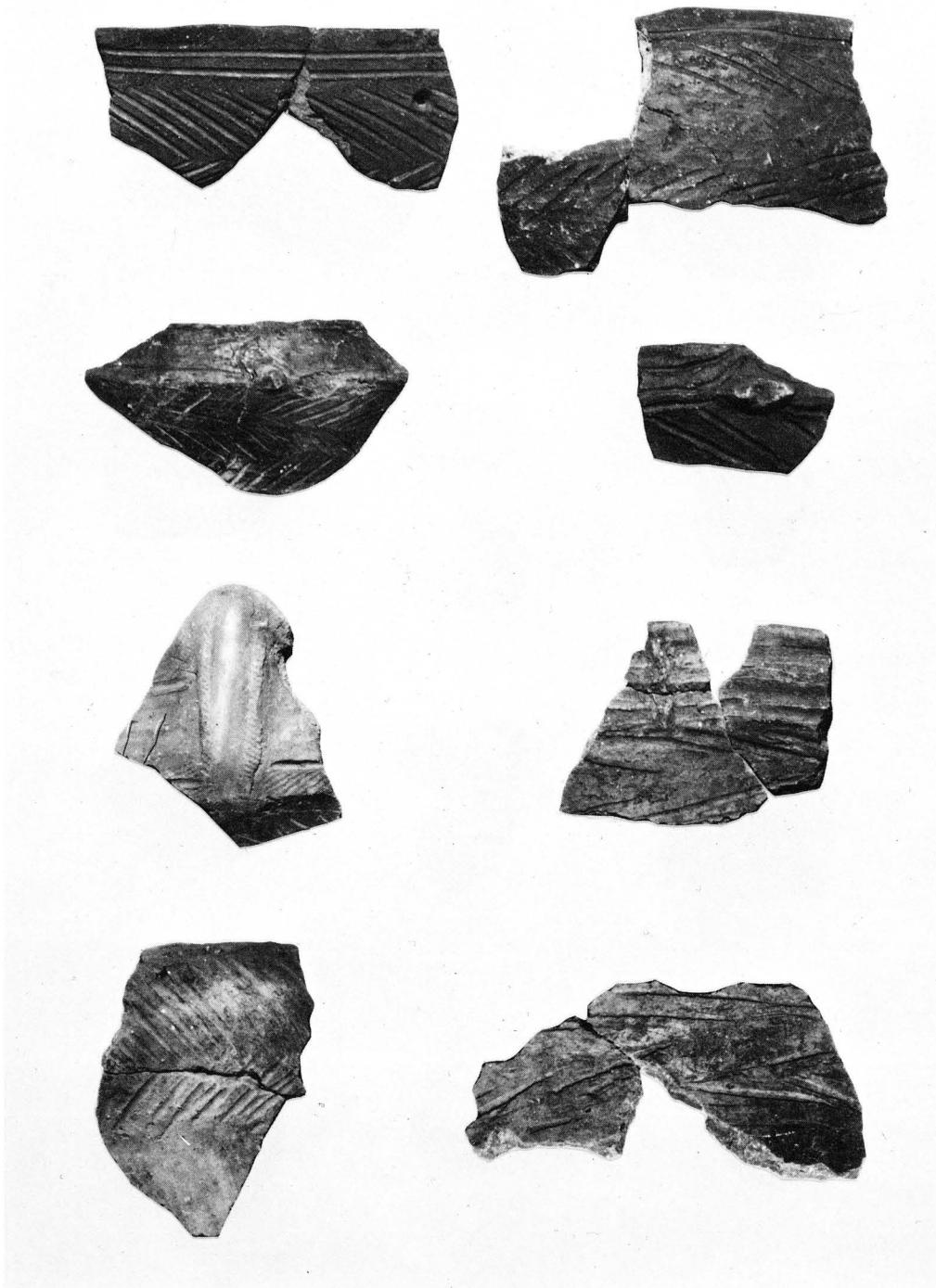
配石及びグリッド出土土器(14)

図版 40



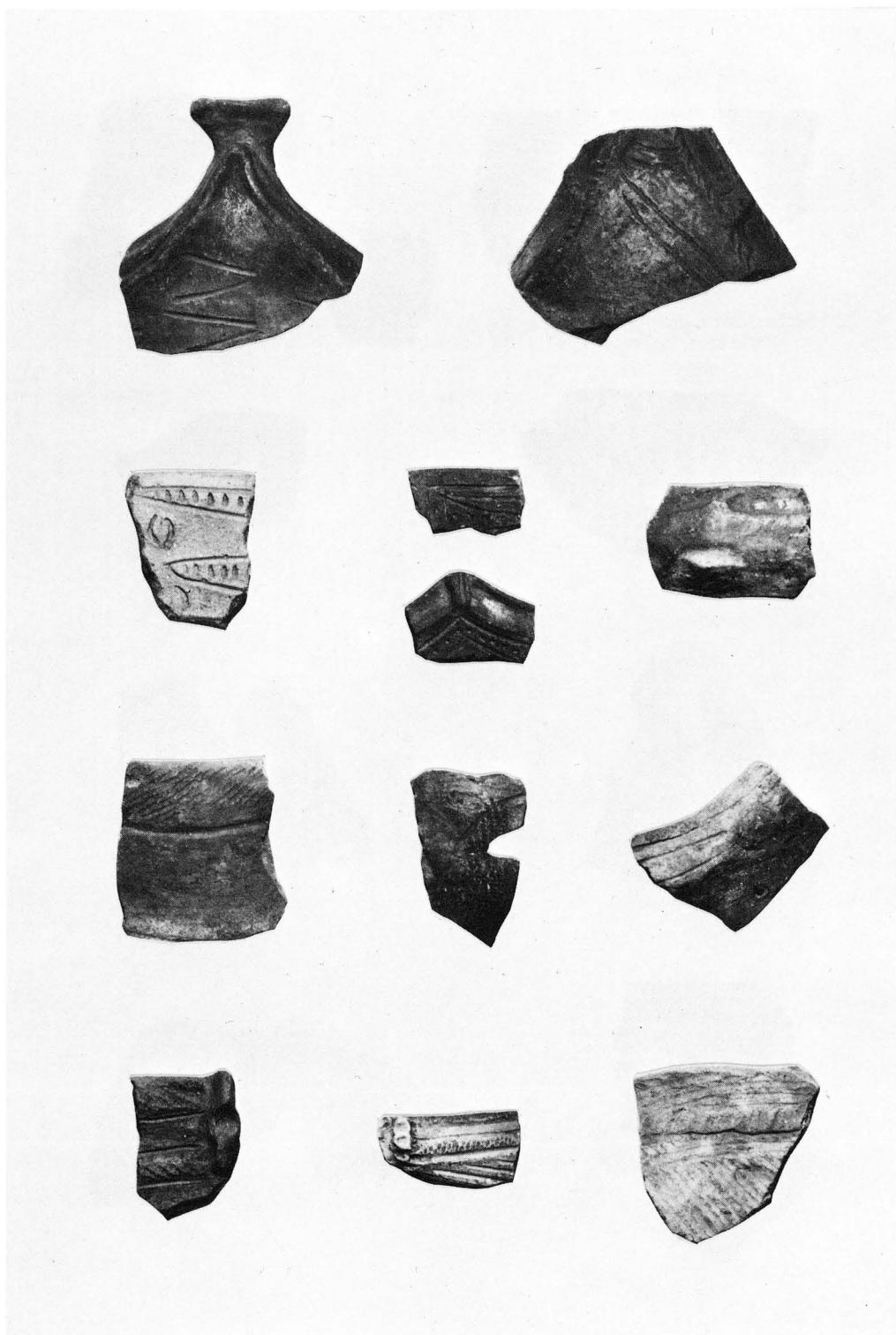
配石及びグリッド出土土器(15)

図版 41



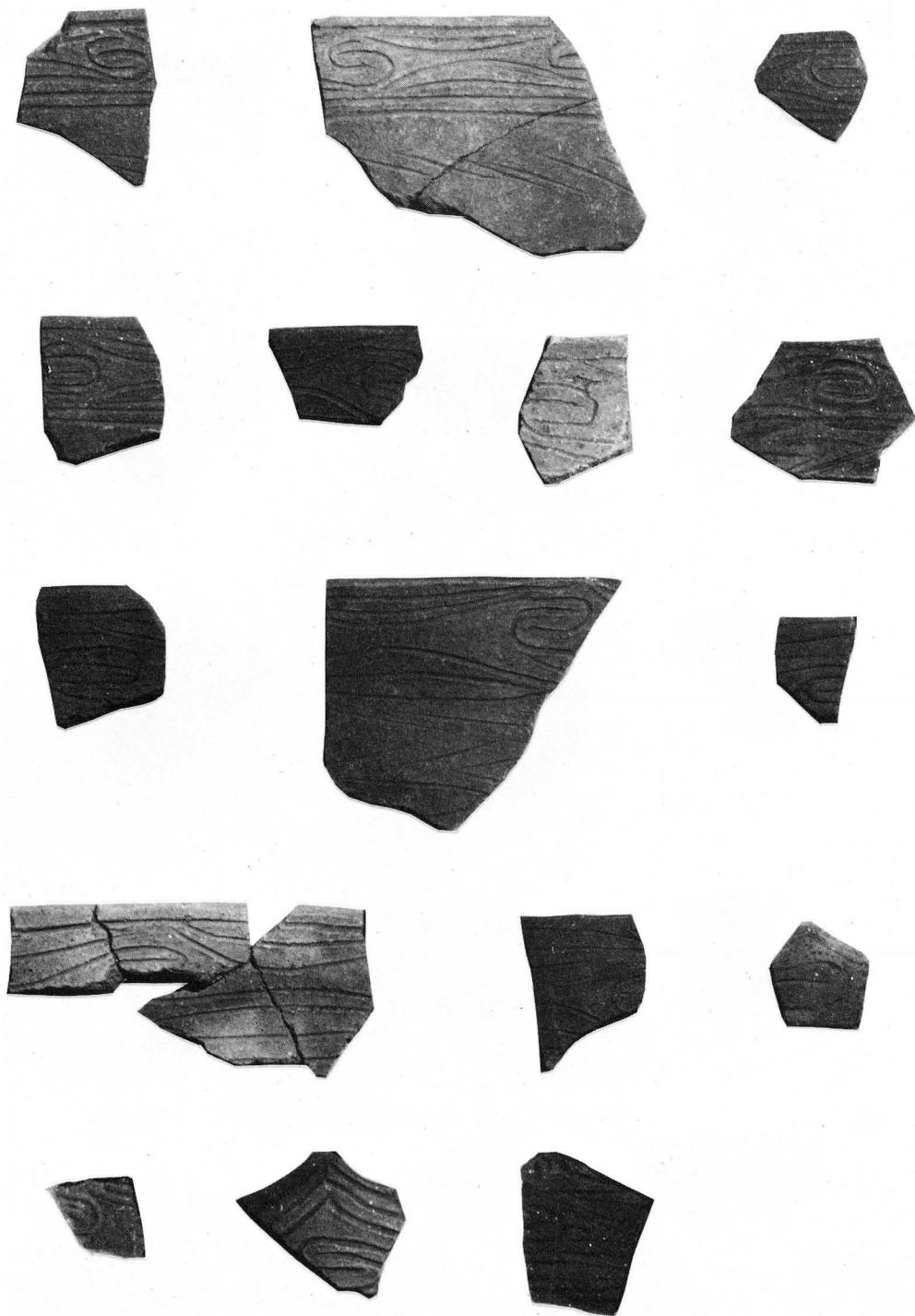
配石及びグリッド出土土器(16)

図版 42



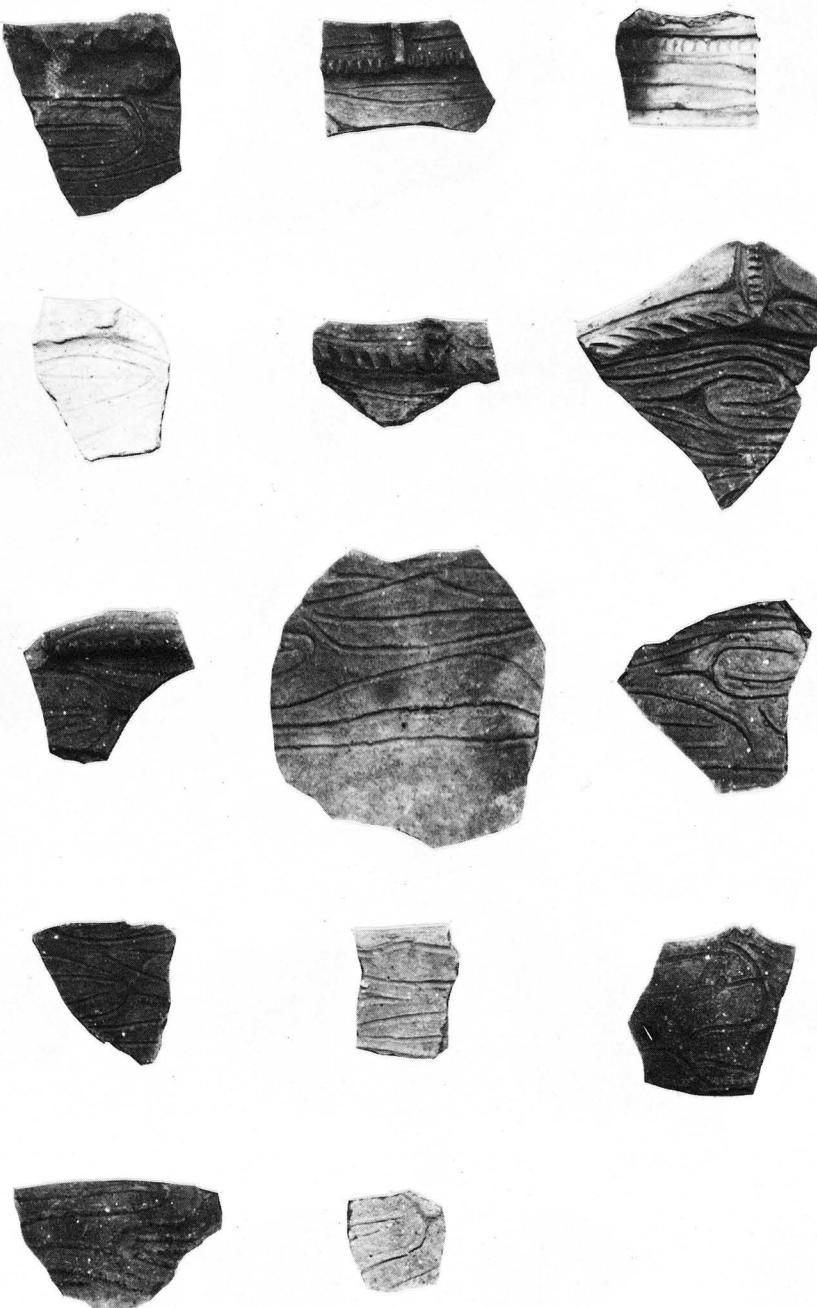
配石及びグリッド出土土器(17)

図版 43



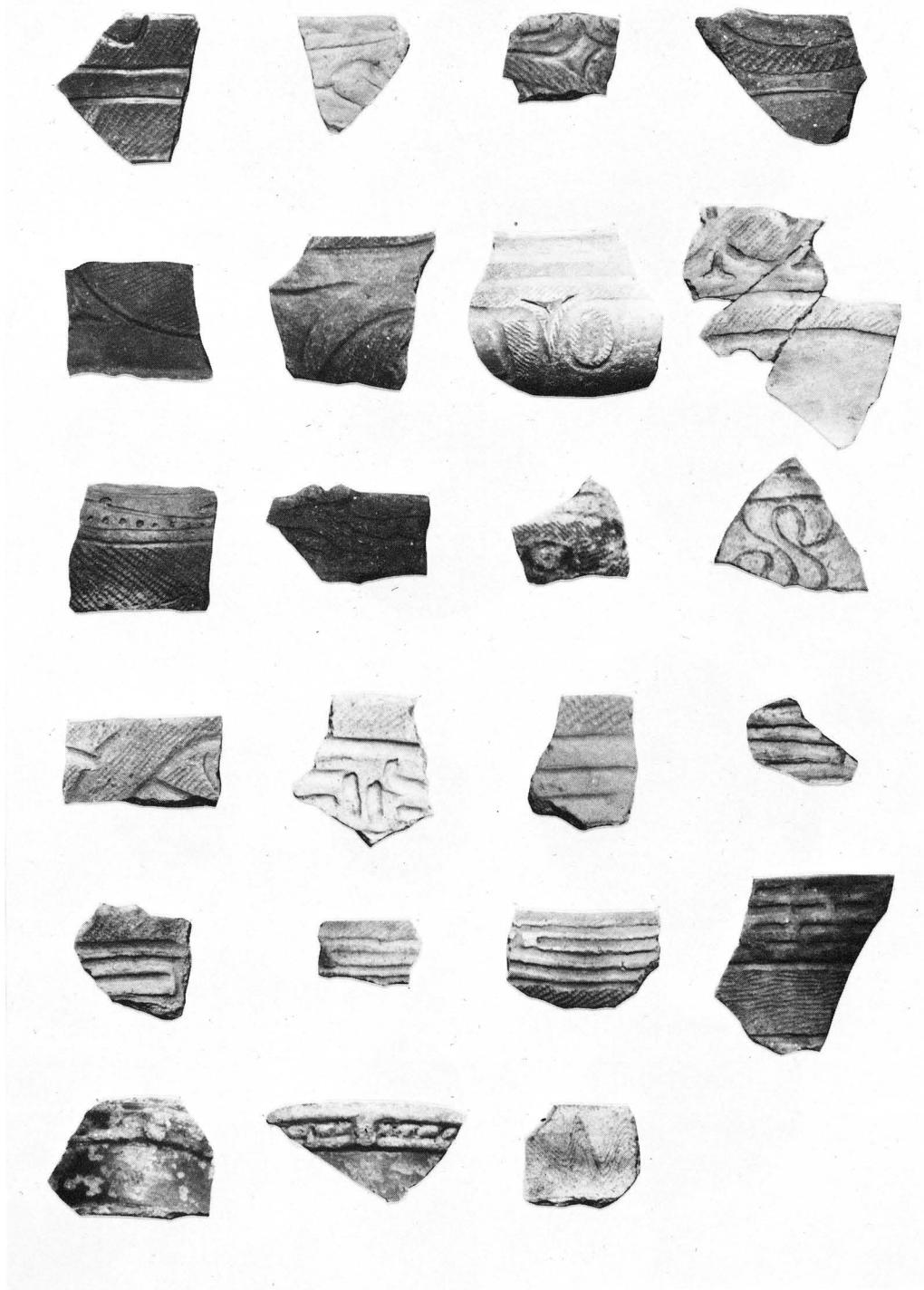
配石及びグリッド出土土器(18)

図版 44



配石及びグリッド出土土器(19)

図版 45



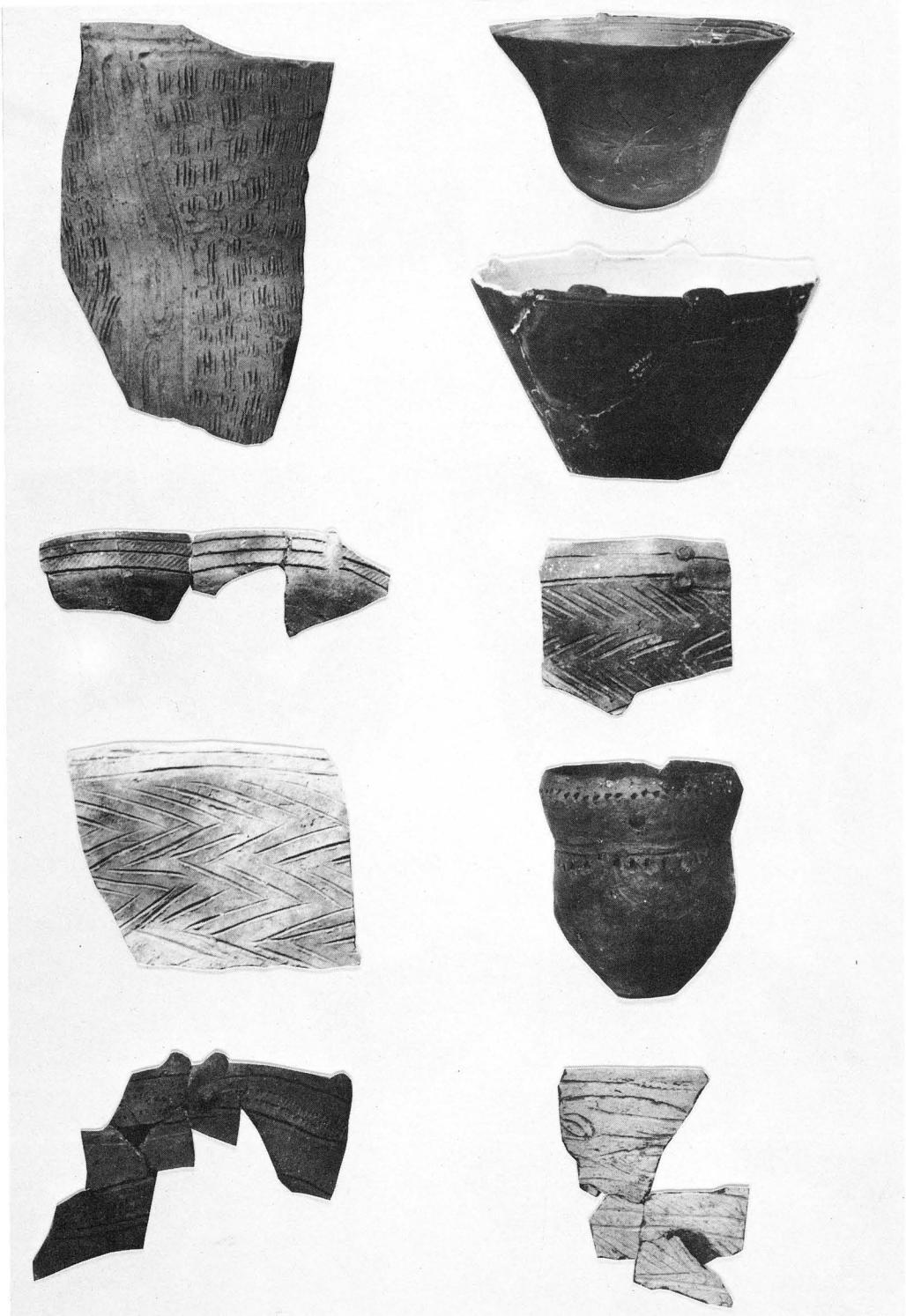
配石及びグリッド出土土器(20)

図版 46



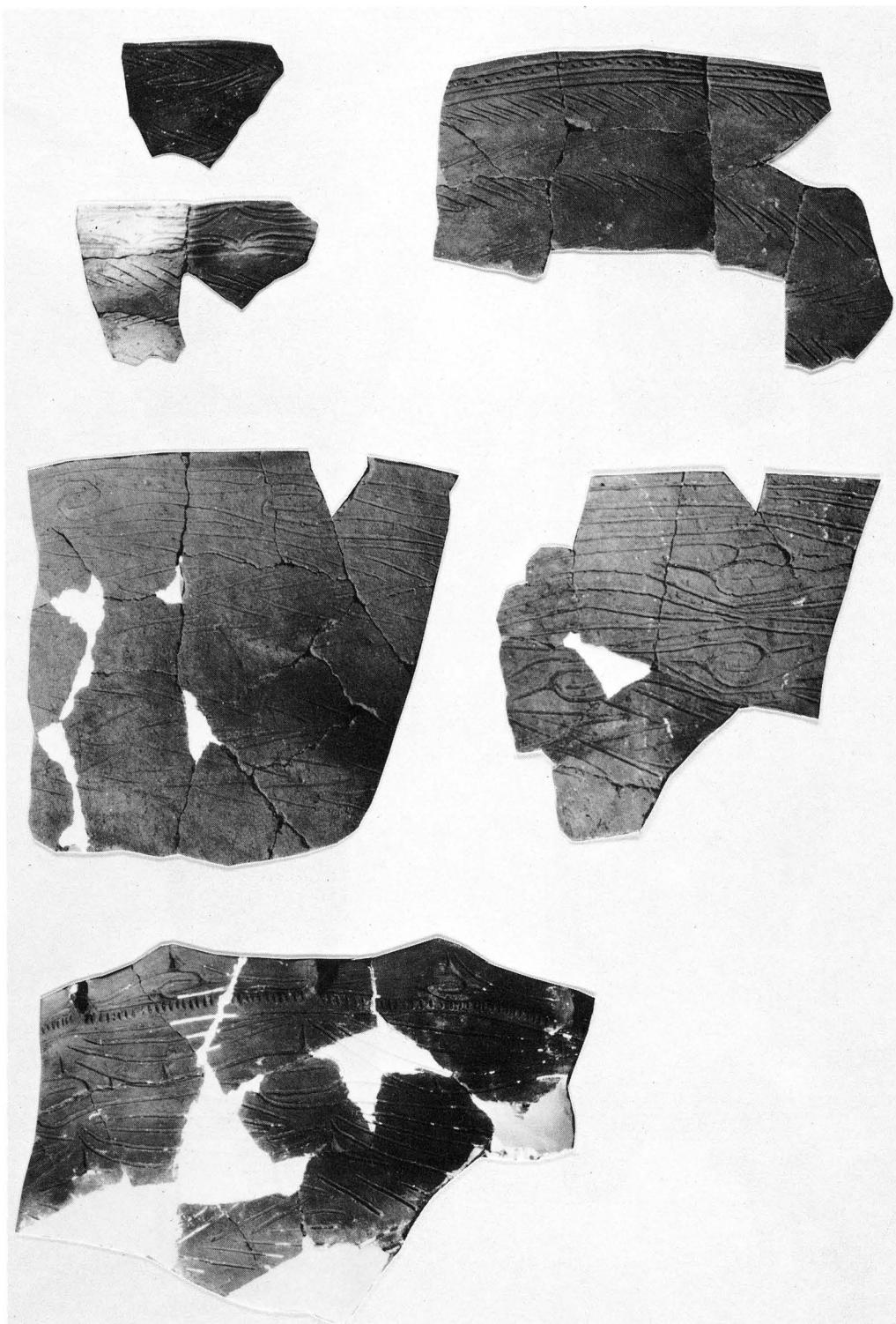
配石及びグリッド出土土器(21)

図版 47



配石及びグリッド出土土器(1)

図版 48



配石及びグリッド出土土器(2)



配石及びグリッド出土土製品(1)

図版 50



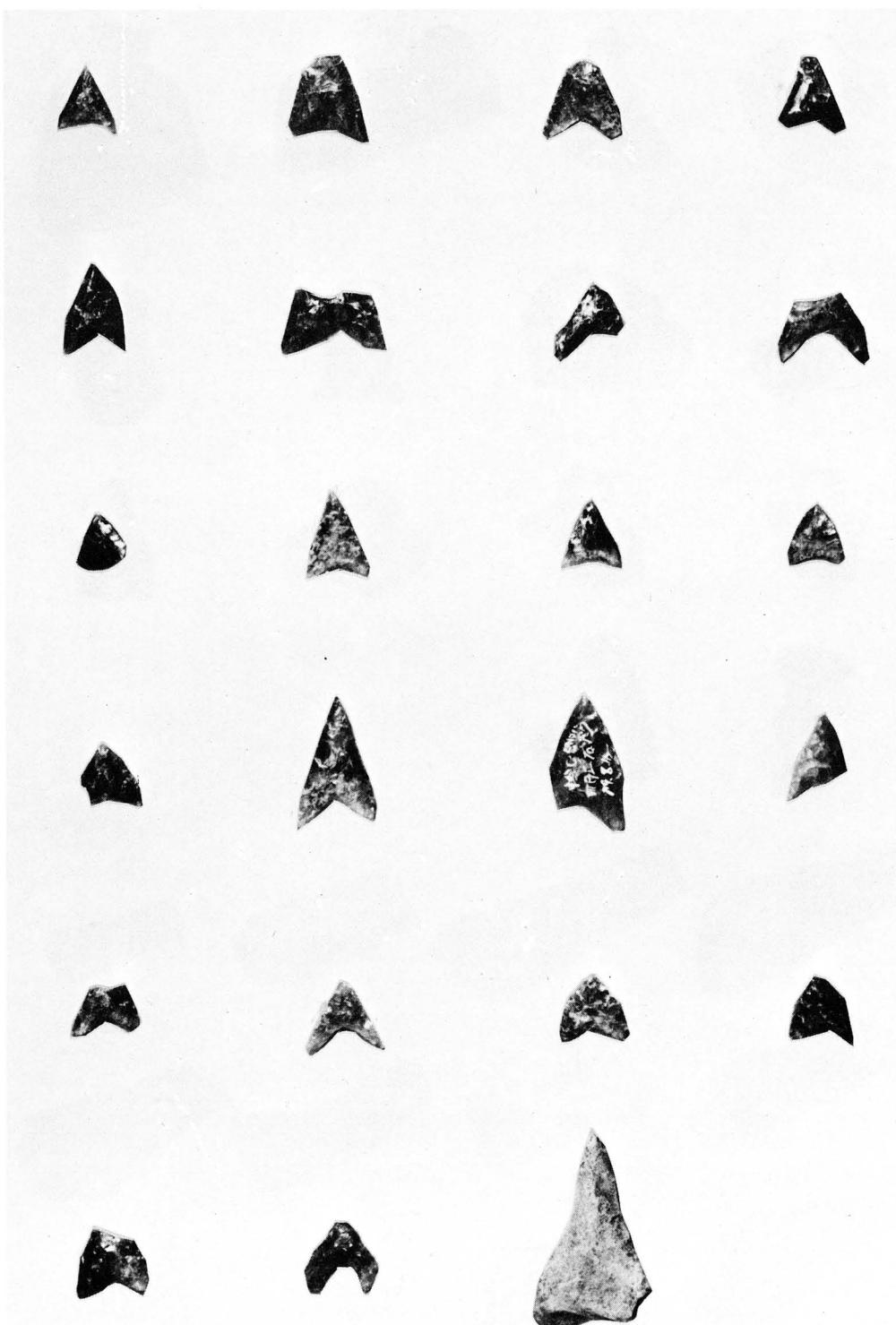
配石及びグリッド出土土製品(2)

図版 51



配石及びグリッド出土の把手・注口

図版 52



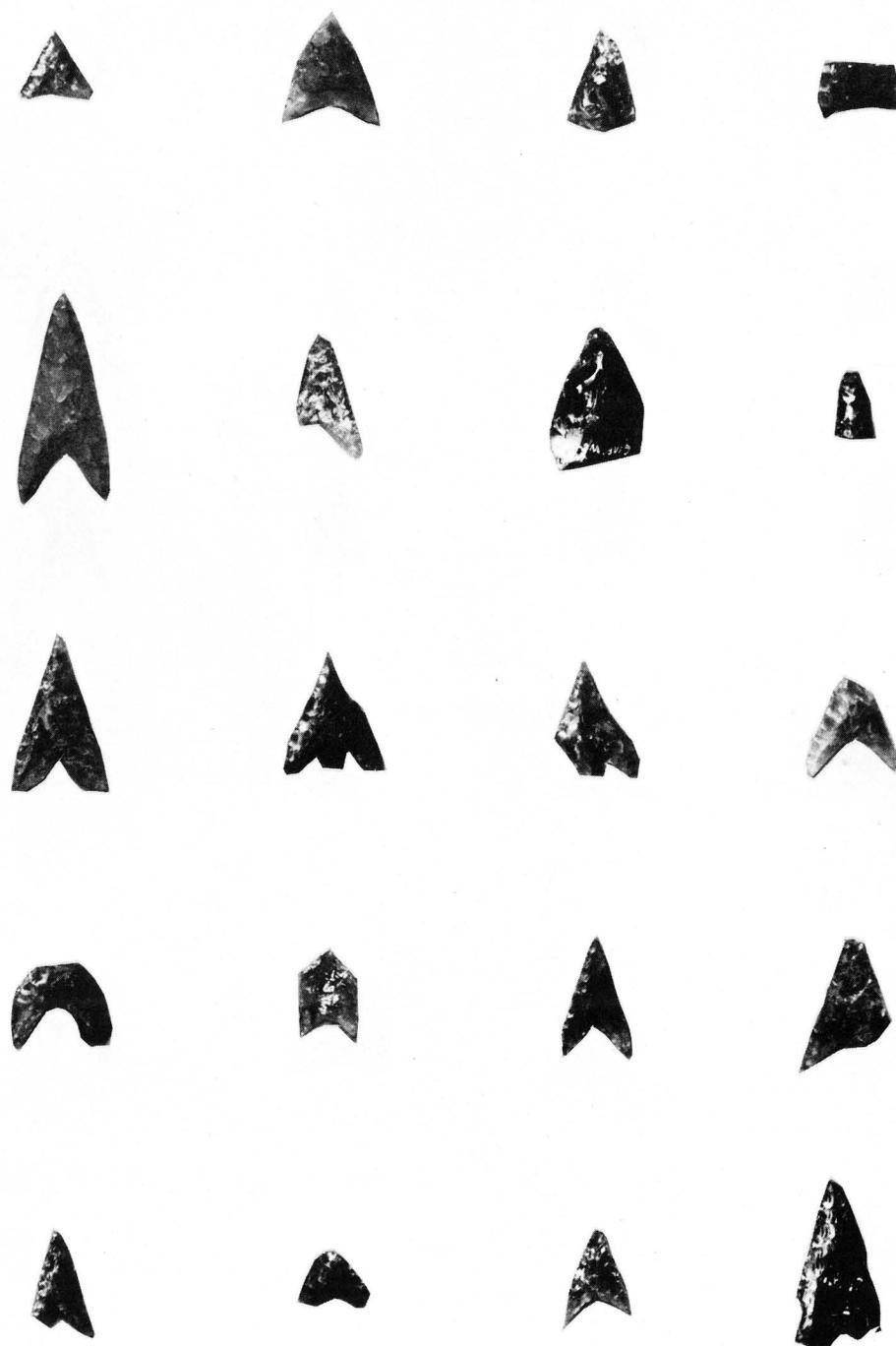
配石及びグリッド出土石器(1)

図版 53



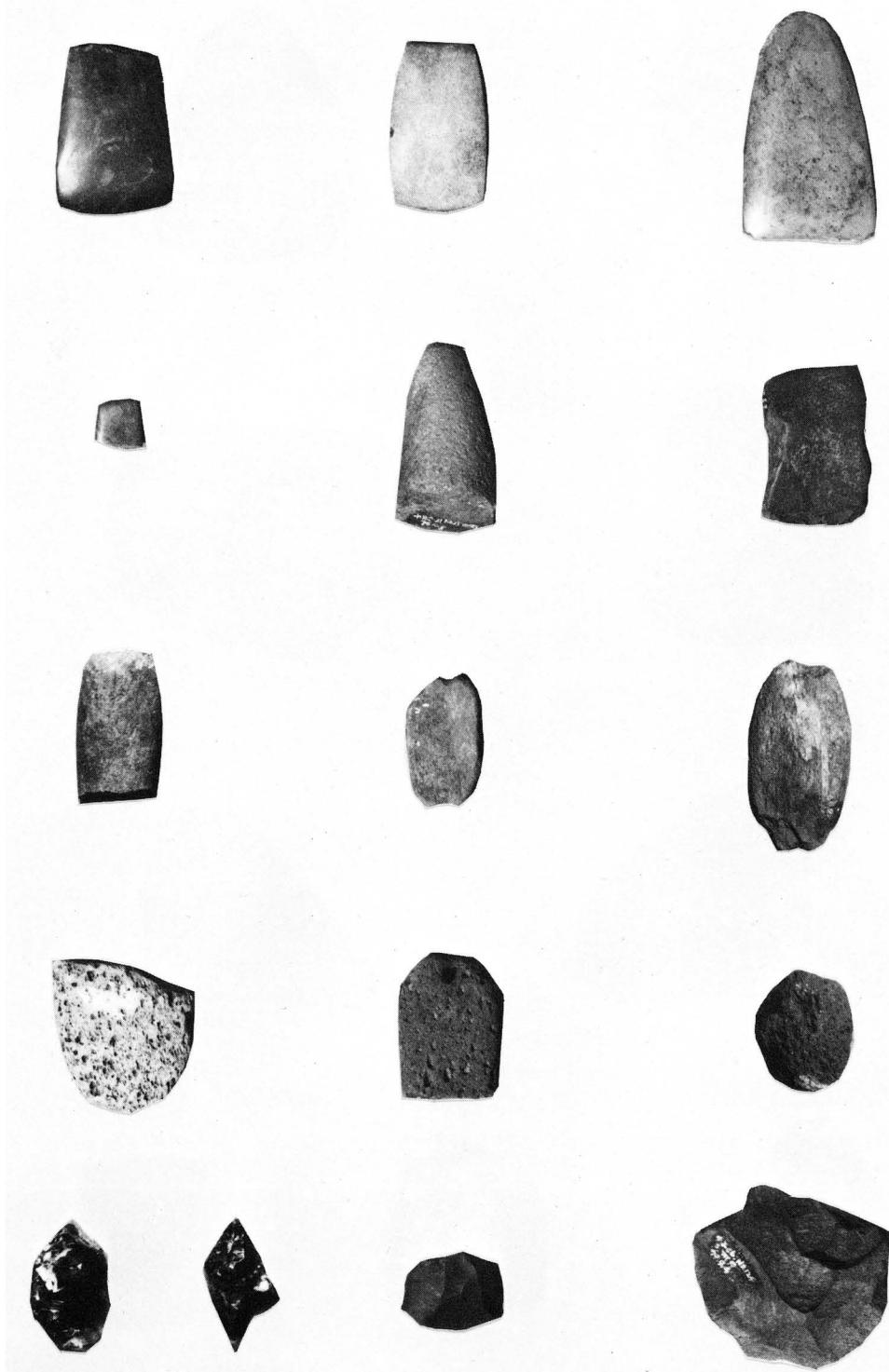
配石及びグリッド出土石器(2)

図版 54



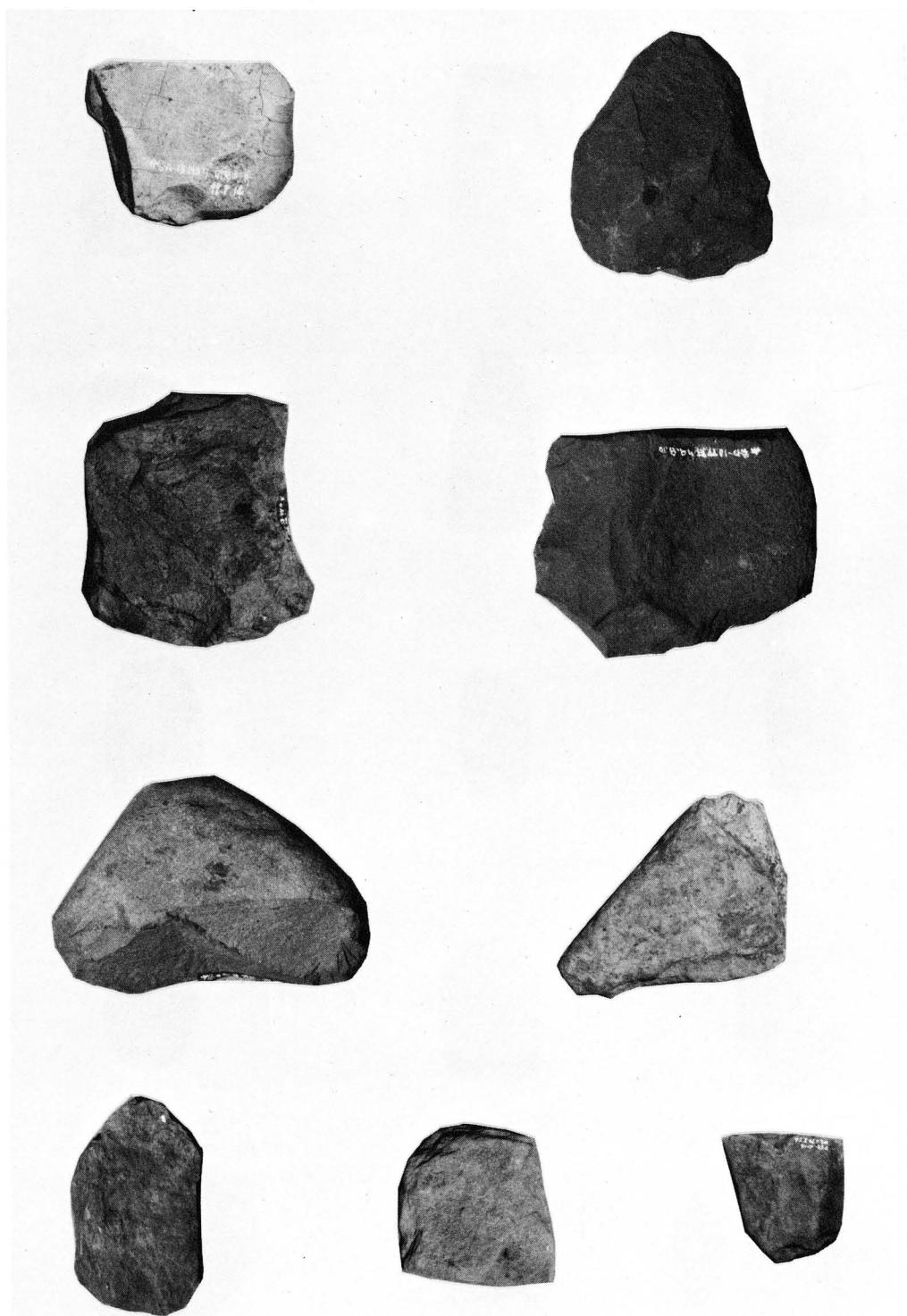
配石及びグリッド出土石器(3)

図版 55



配石及びグリッド出土石器(4)

図版 56



配石及びグリッド出土石器(5)

図版 57

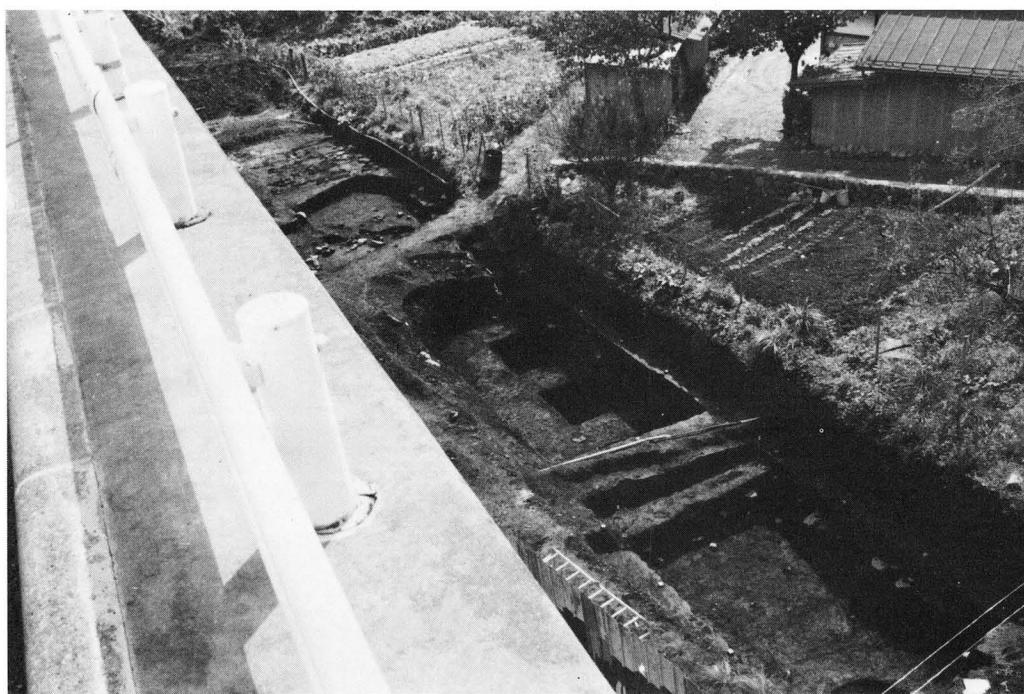


配石及びグリッド出土石器(6)

図版 58



(1) ハ・ニ地区遺構全景



(2) 調査終了後の中谷遺跡

図版 59



(1) 宮脇遺跡発掘調査参加者



(2) 中谷遺跡発掘調査参加者

# 宮 脇 遺 跡



## 目 次

1 遺跡の位置と環境	213
2 調査の概要	213
3 層 序	213
(1) 層 序	213
(2) 層序と遺構	214
(3) 層序と遺物	214
4 遺 構	214
5 遺 物	219
(1) 繩文式土器	219
(2) 石 器	221
6 ま と め	228

## 挿 図 目 次

第1図 宮脇遺跡地形図	213
第2図 宮脇遺跡全体図	214
第3図 A地区グリッドセクション図	215
第4図 A・B地区グリッドセクション図	216
第5図 宮脇遺跡A地区遺構図	217
第6図 宮脇遺跡B地区遺構図	218
第7図 宮脇遺跡A地区出土土器実測図	221
第8図 宮脇遺跡A地区土器拓影図	223
第9図 宮脇遺跡B地区土器拓影図(1)	224
第10図 宮脇遺跡B地区出土土器拓影図(2)	225
第11図 宮脇遺跡A地区出土石器	226
第12図 宮脇遺跡B地区出土石器	227

## 表 目 次

第1表	宮脇遺跡A地区遺構一覧表	219
第2表	宮脇遺跡B地区遺構一覧表	219
第3表	宮脇遺跡A地区出土土器一覧表	220
第4表	宮脇遺跡B地区出土土器一覧表	221
第5表	宮脇遺跡A地区出土石器一覧表	222
第6表	宮脇遺跡B地区出土石器一覧表	222

## 図 版 目 次

図版1	(1) 宮脇遺跡遠景 (2) 発掘風景	
図版2	(1) 発掘風景 (2) 発掘風景	
図版3	(1) A地区ピット群 (2) B地区ピット群	
図版4	(1) A地区No.1ピット (2) A地区No.2ピット (3) A地区No.3ピット	
図版5	(1) A地区No.4ピット (2) A地区No.5ピット (3) A地区No.6ピット	
図版6	(1) A地区No.8ピット (2) A地区No.9ピット (3) A地区No.10ピット	
図版7	(1) A地区No.11ピット (2) A地区No.12ピット (3) A地区No.13ピット	
図版8	(1) B地区No.1ピット (2) B地区No.2ピット (3) B地区No.3ピット	
図版9	(1) B地区No.2溝・No.4ピット (2) B地区No.6ピット (3) B地区No.7ピット	
図版10	(1) B地区No.8ピット (2) B地区No.9ピット (3) B地区No.10ピット	
図版11	(1) B地区No.3溝・No.11ピット (2) B地区No.12ピット (3) B地区No.14ピット	
図版12	宮脇遺跡A地区出土土器	
図版13	宮脇遺跡B地区出土土器	
図版14	宮脇遺跡出土石器	

## 1 遺跡の位置と環境（第1図）

宮脇遺跡は、都留市小形山字宮脇に所在し、標高は約415mである。遺跡は東側に開けた斜面に立地し、現状は桑畠である。この周辺からは、表面採集で縄文早期～平安時代の遺物が確認されている。

本遺跡の北側は、沢をはさんで、昭和53年度に調査した堀之内原遺跡が、本遺跡の東側、一段低い面には松葉遺跡が、それぞれ立地する。



第1図 宮脇遺跡地形図

## 2 調査の概要（第2図）

宮脇遺跡発掘調査は、昭和54年8月1日～8月31日まで実施した。

調査の方法は、グリッド法により、 $2\text{m} \times 2\text{m}$ のグリッドを東西にA～E区、南北に1～58区を設定した。

調査地区は、道路によって分断されているため、道路を境に北側をA地区、南側をB地区とした

## 3 層序

### (1) 層序

第I層 耕作土層

第II層 黒色土層

- 第III層 茶褐色土層  
 第IV層 暗褐色土層  
 第V層 暗褐色土層（灰白色と淡緑色の火山性レキの粒子<径5mm大>を含有する。）  
 第VI層 ローム漸移層  
 第VII—1層 ローム層（第VII層よりも暗い色調で、下部に火山性レキを多く混在する。）  
 第VII層 ローム層

### (2) 層序と遺構

本遺跡で検出されたピット及び溝の確認面は第IV層であり、覆土となっていたのは第III層を主体としたものであった。（相良雅男）

### (3) 層序と遺物

本遺跡では、出土遺物はあまり多くなく、また柔の根による攪乱も進んでいたために、あまり明確には捉えられなかつたが、プライマリーな状態のグリッドでは、第III・第IV層中から主に出土した。（相良雅男）

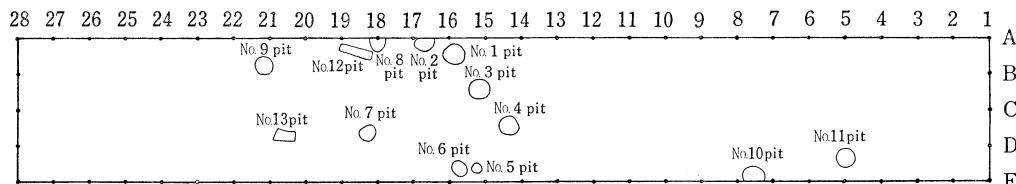
## 4 遺構

本遺跡では、A・B両地区ともに円形状・方形状のピット及び溝状の遺構が計28基検出された。これらは、ほとんど遺物を伴わず、わずかに土師器の小破片が認められるのみであった。

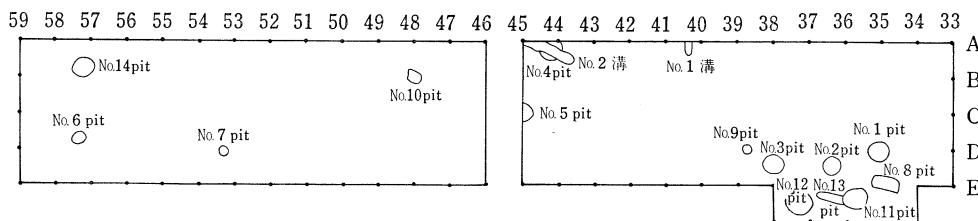
円形状（A地区—No.1・3・5・6・7・9・10, B地区—No.2・5）及び方形状（A地区—No.4）には、ピット底面に10cm前後の小ピットが検出された。この小ピットの断面は、ロート状を呈するものであった。

これらの遺構の時期は、覆土中より若干出土する土師器の坏形土器の小破片には、放射状暗文が認められることから、平安時代のものと考えておきたい。（宍戸美智子）

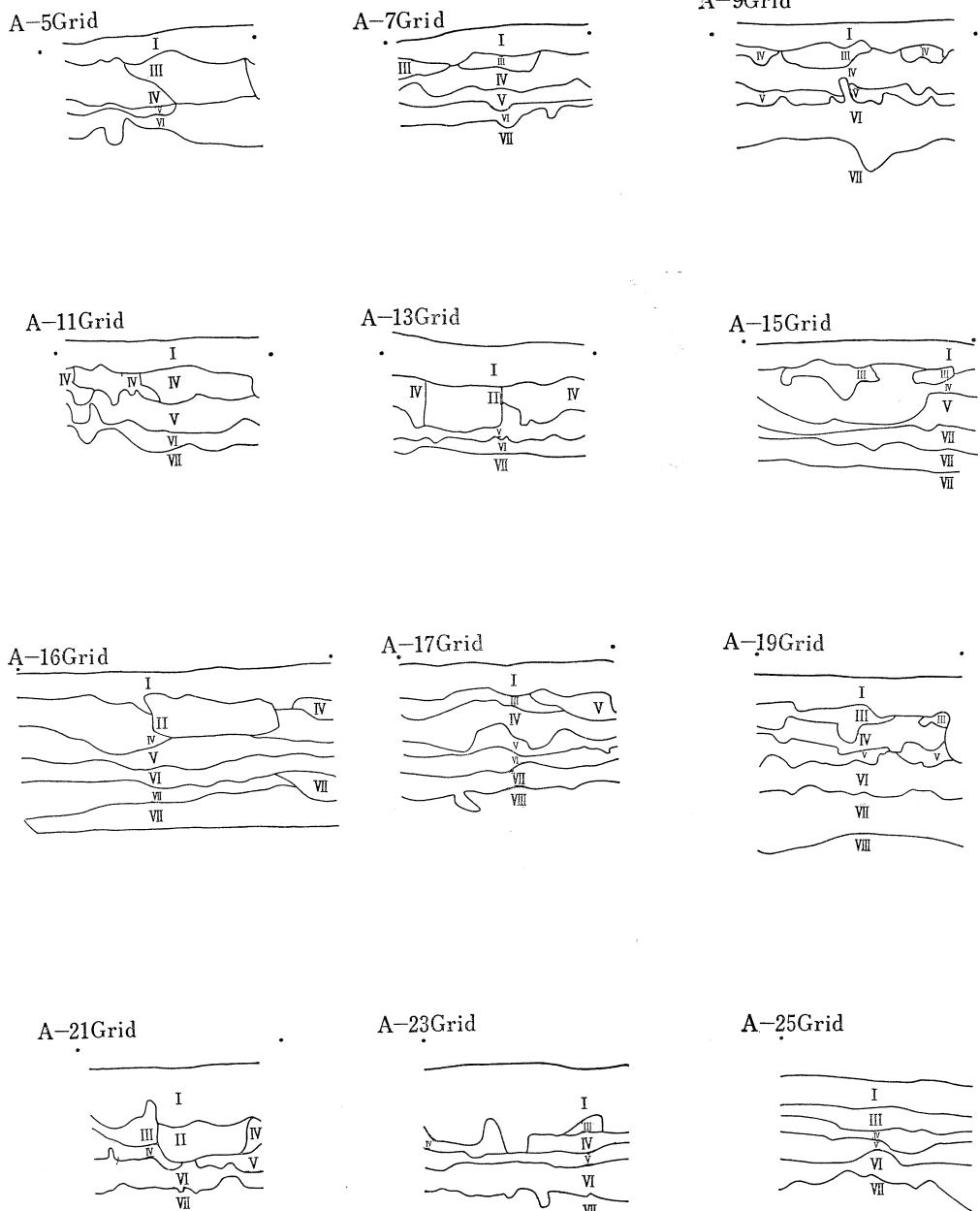
### A 地区



### B 地区

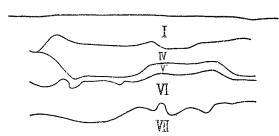


第2図 宮脇遺跡全体図

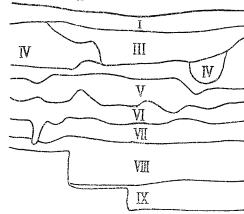


第3図 A地区グリッドセクション図

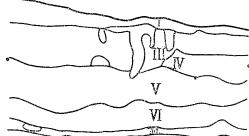
A - 27Grid



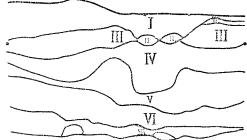
A - 35Grid



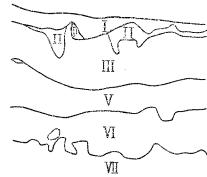
A - 37Grid



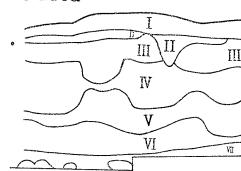
A - 39Grid



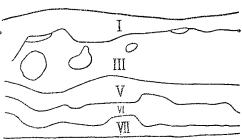
A - 41Grid



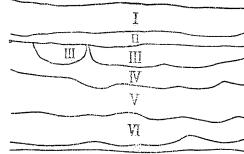
A - 43Grid



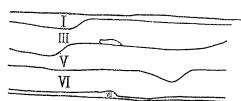
A - 45Grid



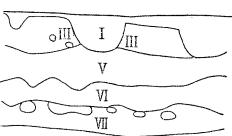
E - 45Grid



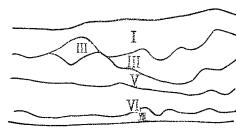
A - 47Grid



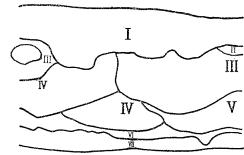
A - 49Grid



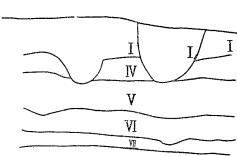
A - 51Grid



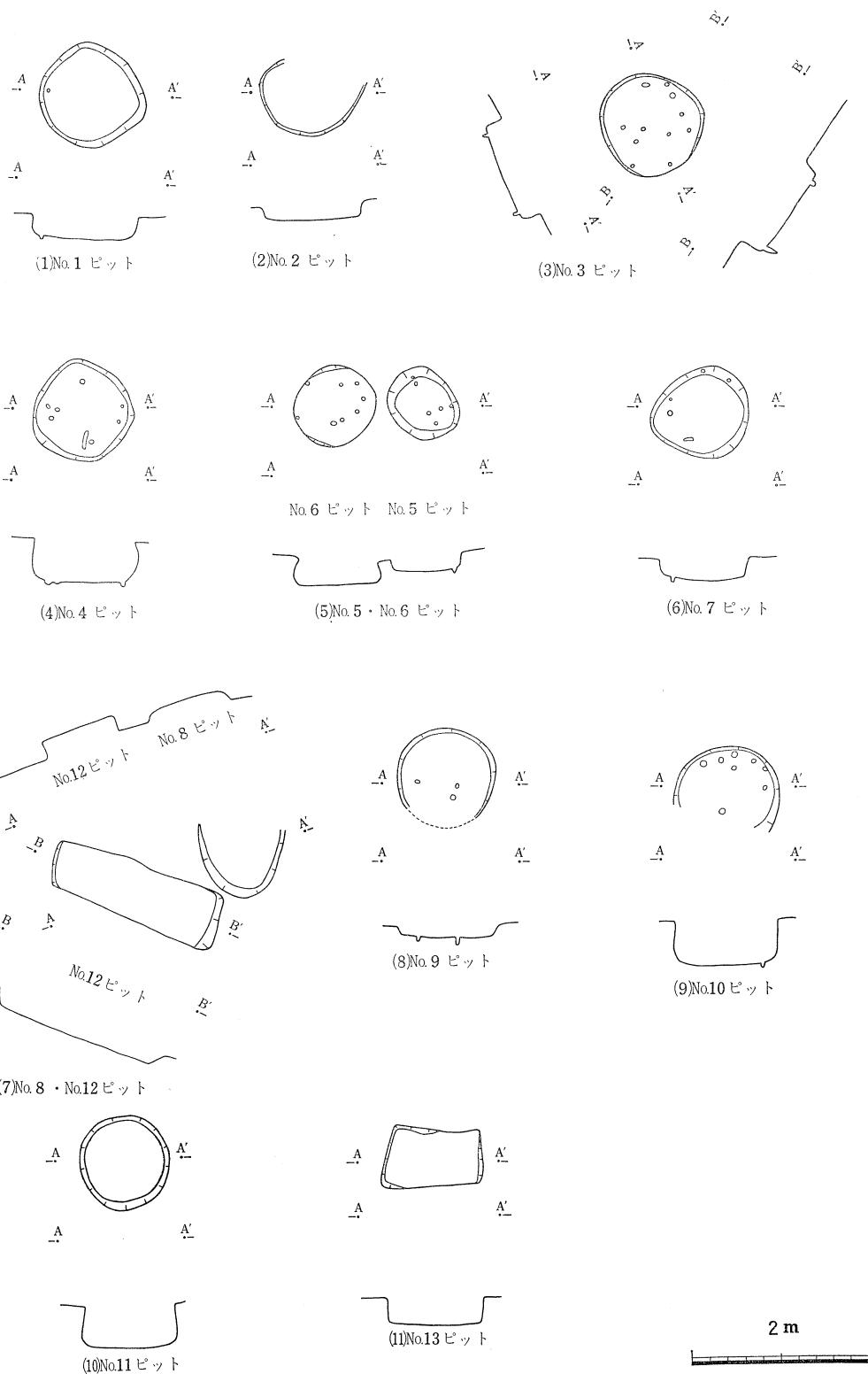
A - 53Grid



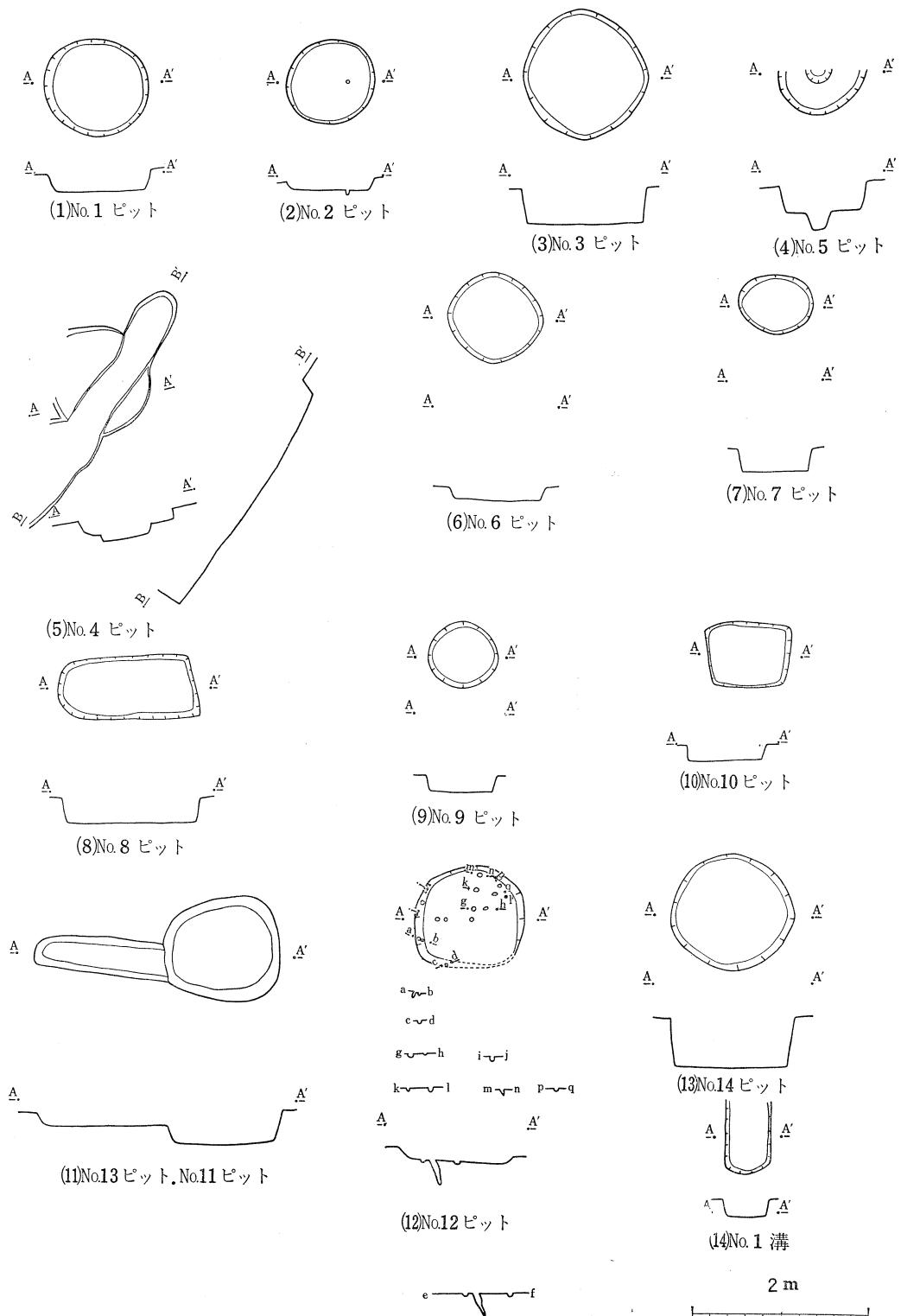
A - 55Grid



第4図 A・B地区グリッドセクション図



第5図 宮脇遺跡A地区遺構図



第6図 宮脇遺跡B地区遺構図

第1表 宮脇遺跡A地区遺構一覧表

遺構	長径	短径	壁高	プラン	小pit	その他
No. 1	115cm	110cm	26cm	不整円形	1ヶ	
No. 2	110cm	75cm	20cm	円形(推定)		Aライン以北未調査
No. 3	117cm	110cm	27cm	不整円形	11ヶ	
No. 4	112cm	110cm	48cm	隅丸方形	8ヶ	袋状
No. 5	58cm	58cm	21cm	不整円形	6ヶ	
No. 6	93cm	85cm	34cm	円形	8ヶ	袋状を呈す
No. 7	105cm	101cm	23cm	不整円形	5ヶ	
No. 8	不明	97cm	13cm	楕円形と推定される。		Aライン以西未調査
No. 9	115cm	同(推定)	16cm	円形	3ヶ	21ライン以北未調査
No. 10	117cm	同(推定)	46cm	円形	8ヶ	Eライン以東未調査
No. 11	105cm	102cm	40cm	円形		袋状を呈す
No. 12	200cm	62cm	19cm	長方形		溝状土塙
No. 13	110cm	55cm	31cm	不整方形		溝状土塙

第2表 宮脇遺跡B地区遺構一覧表

pit	長径	短径	壁高	プラン	小pit	その他
No. 1	122cm	113cm	25cm	円形		
No. 2	105cm	94cm	13cm	円形	1ヶ	
No. 3	142cm	140cm	42cm	円形		
No. 4	120cm	110cm	20cm	円形		
(推定)	(推定)					
No. 5	120cm	94cm	32cm	楕円形	径28cm程のpit 1	
No. 6	110cm	105cm	15cm	円形		
No. 7	83cm	69cm	25cm	楕円形		
No. 8	160cm	74cm	28cm	長方形		溝状
No. 9	81cm	78cm	18cm	円形		
No. 10	96cm	76cm	17cm	方形		
No. 11	130cm	115cm	38cm	不整円形		
No. 12	130cm	120cm	15cm	不整円形		
No. 13	不明	45cm	15cm	溝状		
No. 14	140cm	135cm	57cm	不整円形		溝状→No. 3 溝
No. 1 溝	不明	50cm	20cm	溝状		Aライン以北未調査

## 5 遺物

### (1) 縄文式土器

縄文時代の遺物は、ほとんどが、第III・IV層中より出土した。この内、土器はすべて破片であり、B-49・C-49グリットを中心とした諸磯の同一個体がまとまって出土した以外は、散然と出土した。土器は縄文時代前期から同時代晚期までのものが認められた。

以下本遺跡での時間的経過に重点をおくことによって、第1群～第7群までの大別を行った。

第1群 半截竹管文系土器群で前期末葉の諸磯b・c式に比定される。

第1類（第8図-1） 地文に縄文を持つものである。施文順序は「縄文→沈線」で諸磯b式に比定される。一片確認された。

第2類（第8・9図-2～16） 地文に半截竹管による条線をもつグループで文様に基づき3つに分類した。諸磯c式に比定されるものである。

a種 条線のみを有し、浅く施されているもの（6）。

b種 条線+ボタン状貼付文が施されているもの（2・5・7～14）。

c種 条線+ボタン状貼付文+結節浮線文が施されているものである（3・4・15）。

d種 結節浮線文のみが施されたもの（16）。

第2群（第9図-17） 中期初頭の五領ヶ台式に比定できるもので、三角陰刻によって鋸歯文を呈する。

第3群（第9図-18） 中期末葉の加曾利E式に比定されるものである。

第4群 後期初頭の堀之内式に比定されるものである。

第1類（第8図-6・7、第10図-19・21） 沈線文及び、刺突文が施されるものである。

第2類（第10図-20） 地文に縄文を有するものである。

第5群 加曾利B式に比定されるものである。

第1類（第8図-8、第10図-23） 内面装飾を有する無文の浅鉢形土器である。

第2類（第10図-22） 口縁直下に羽状沈線文が施されたものである。

第3類（第8図-9） 地文に縄文を有し、沈線による入組文を施したものである。

第6群（第8図-10・11） 後期末葉に属するものである。

第7図は復元実測したもので、口唇直下及び口縁と胴部の境に、列点状の刺突文が巡らされその間隙に波状口縁の波頂部から発する弧状沈線文が施されている。

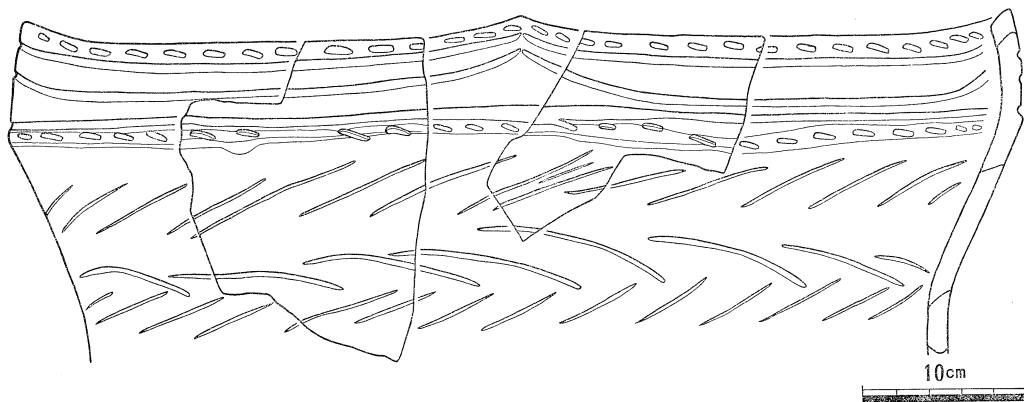
第7群（第10図-24・25） 晩期に属するもので、24は、曲線的な磨消し縄文が施される。

25は、陰刻による太い沈線文が施された浅鉢形土器である。

（谷口 栄）

第3表 宮脇遺跡A地区出土土器一覧表

No.	部 位	施 文 具	文 様	焼成	時 期	出 土 地 点
1	底部付近	半截竹管	条 線		第1群	C-14・第Ⅲ層
2	胴 部	"	"		"	D-12・第Ⅲ層
3	"	"	条線+ボタン状貼付	不良	"	A-21・第Ⅳ層
4	"	棒状施文具	沈 線 文		第2群	表 採
5	"	R L R	斜 行 繩 文		"	A-21
6	"	棒状施文具	沈 線 文		第4群	
7	"	"	"		"	A-6
8	"	"	"		第5群	B-20・第Ⅰ層
9	"	L R・棒状施文具	繩 文+沈 線 文		"	表 採
10	口 縁 部	棒状・ヘラ状施文具	口縁部に沈線+刺突 胴部に綾杉状沈線		第7群	A-13・第Ⅳ層
11	"	"	"		"	"
12	底 部			不良	第3群	A-19・第Ⅱ層



第7図 宮脇遺跡A地区出土土器実測図

第4表 宮脇遺跡B地区出土土器一覧表

No.	部 位	施 文 具	文 樣	焼成	時 期	出 土 地 点
1	胴 部	半截竹管・繩文	平行沈線文	不良	第1群	A-39・第Ⅲ層
2	口縁部	半截竹管	条線+結節浮線文	"	"	B-49・第Ⅳ層
3	胴 部	"	"	"	"	B-41・第Ⅴ層
4	"	"	"	"	"	C-49・第Ⅲ層
5	"	"	条線+ボタン状貼付	"	"	B-41・第Ⅲ層
6	"	"	"	"	"	C-49・第Ⅳ層
7	"	"	"	"	"	"
8	"	"	"	"	"	B-49・第Ⅳ層
9	"	"	"	"	"	B-49・第Ⅴ層
10	"	"	"	"	"	"
11	"	"	"	"	"	A-46・第Ⅶ層
12	"	"	"	"	"	C-49・第Ⅰ層
13	"	"	"	"	"	表 採
14	"	"	"	"	"	B-49
15	"	"	条線+結節浮線文・ボタン状貼付	"	"	C-49・第Ⅳ層
16	"	"	"	"	"	A-47・第Ⅲ層
17	口縁部	棒状施文具	沈線+三角陰刻		第2群	C-49・第Ⅱ層
18	胴 部	R L・棒状施文具	繩文+沈線		第3群	A-35
19	"	棒状施文具	沈線+刺突		第4群	C-41・第Ⅲ層
20	"	R L・棒状施文具	磨消し繩文	"		表 採
21	"	棒状施文具	沈線+刺突	"		D-52・第Ⅲ層
22	"	"	羽状沈線		第5群	D-47・第Ⅰ層
23	"	へら状施文具	内面に二条の隆帶+キザミ	"		表 採
24	"				第7群	B-46・第Ⅲ層
25	底 部				第7群	C-48・第Ⅲ層
26	口縁部	へら状施文具	口唇部にキザミ	不良	不 明	B-47・第Ⅲ層

## (2) 石 器

石器は、A・B両地区で完形品・欠損品合わせて15点が出土した。内訳は、打製石斧7点・ス

クレイパー 1 点・磨石 2 点・石鎌 5 点である。出土地点及びその概要は、第 4・5 表参照

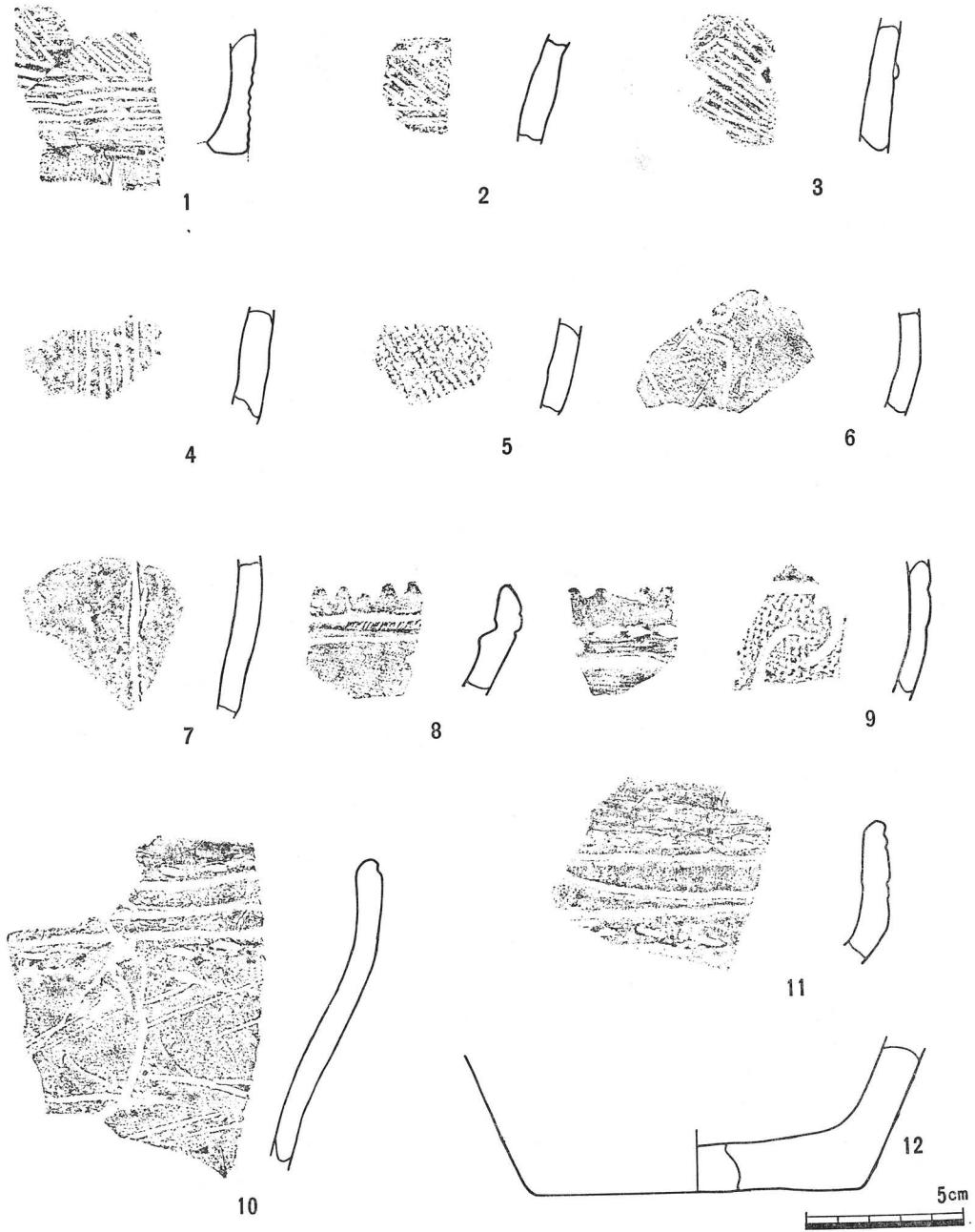
(谷口 栄)

第 5 表 宮脇遺跡 A 地区出土石器一覧表

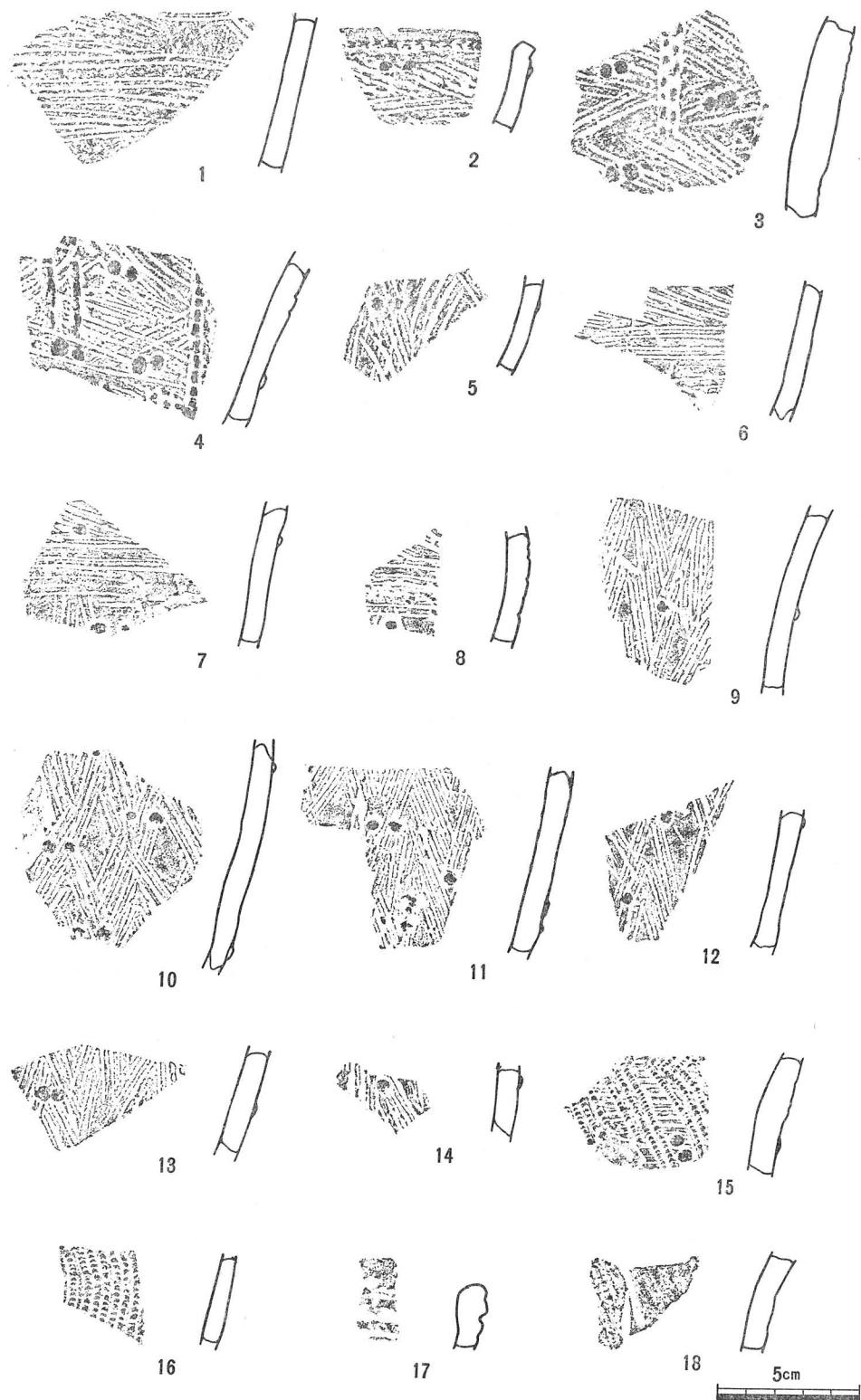
No.	種別	大きさ(長さ×巾)	厚さ	石質	形態	備考	出土地点
1	打製石斧	12.0 × 8.5	1.5	粘板岩	撥形	刃部欠存	C-14・
2	"	8.1 × 6.2	2.5	頁岩	短冊形	基部欠存	A-13・第Ⅳ層
3	スクレイパー	6.9 × 4.5	1.5	"		完形	C-23・第Ⅲ層
4	すり石	13.3 × 5.4	3.1	安山岩		"	D-21
5	"	9.2 × 6.7	6.6	"		欠損	A-13・第Ⅳ層
6	石鎌	1.4 × 2.2	0.3	黒耀石	有茎	茎部欠存	D-4・第Ⅲ層
7	"	1.1 × 1.7	0.2	"	無茎	完形	C-20・第Ⅲ層
8	"	1.0 × 1.0	"	"	"	"	A-23・第Ⅶ層

第 6 表 宮脇遺跡 B 地区出土石器一覧表

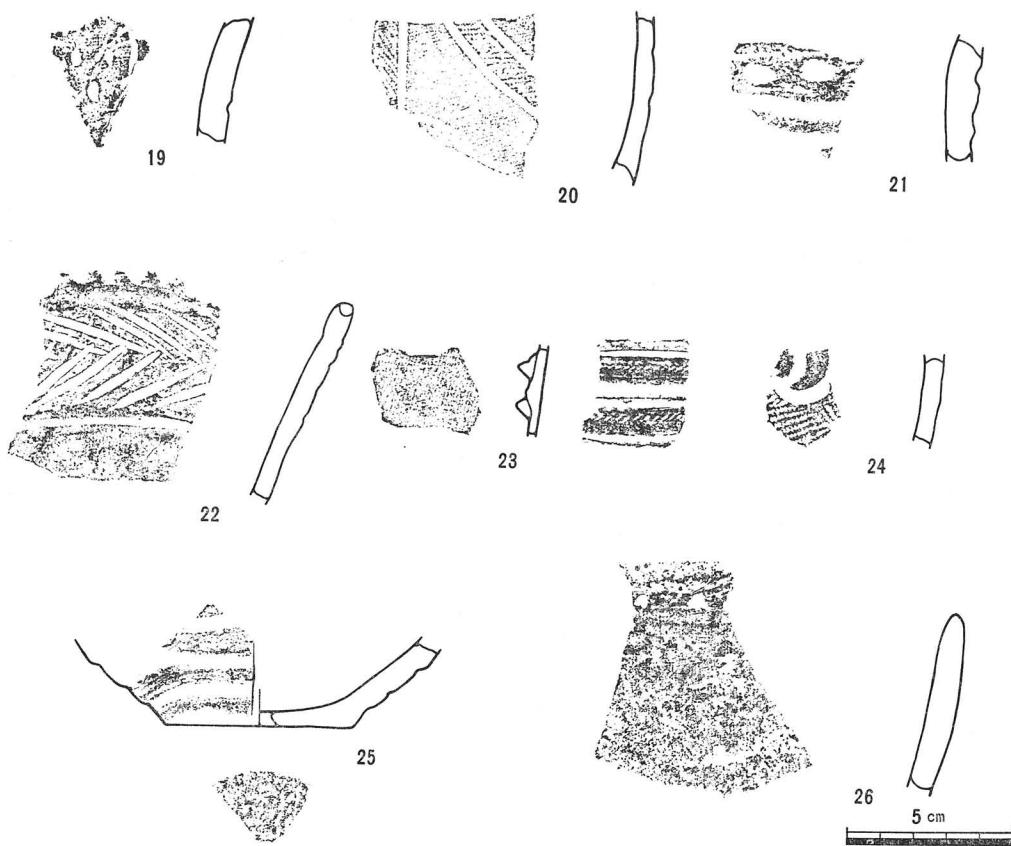
No.	種別	大きさ(長さ×巾)	厚さ	石質	形態	備考	出土地点
1	打製石斧	11.6 × 5.9	1.3	粘板岩	短冊形	完形	D-50・第Ⅲ層
2	"	10.0 × 4.5	8.0	"	"	"	C-47・第Ⅳ層
3	"	8.6 × 8.9	1.7	"	"	半欠(基部欠存)	B-56・第Ⅰ層
4	"	9.6 × 4.4	0.9	硬砂岩	不明	半欠(片面の基部・刃部欠存)	D-45・第Ⅵ層
5	"	6.9 × 3.5	1.0	"	撥形	全残存	A-51・
6	石鎌	1.7 × 1.2	0.3	黒耀石		完形	D-39・第Ⅲ層
7	"	1.4 × 1.1	0.2	"		先端部と脚を欠存	D-42・第Ⅱ層



第8図 宮脇遺跡A地区土器拓影図



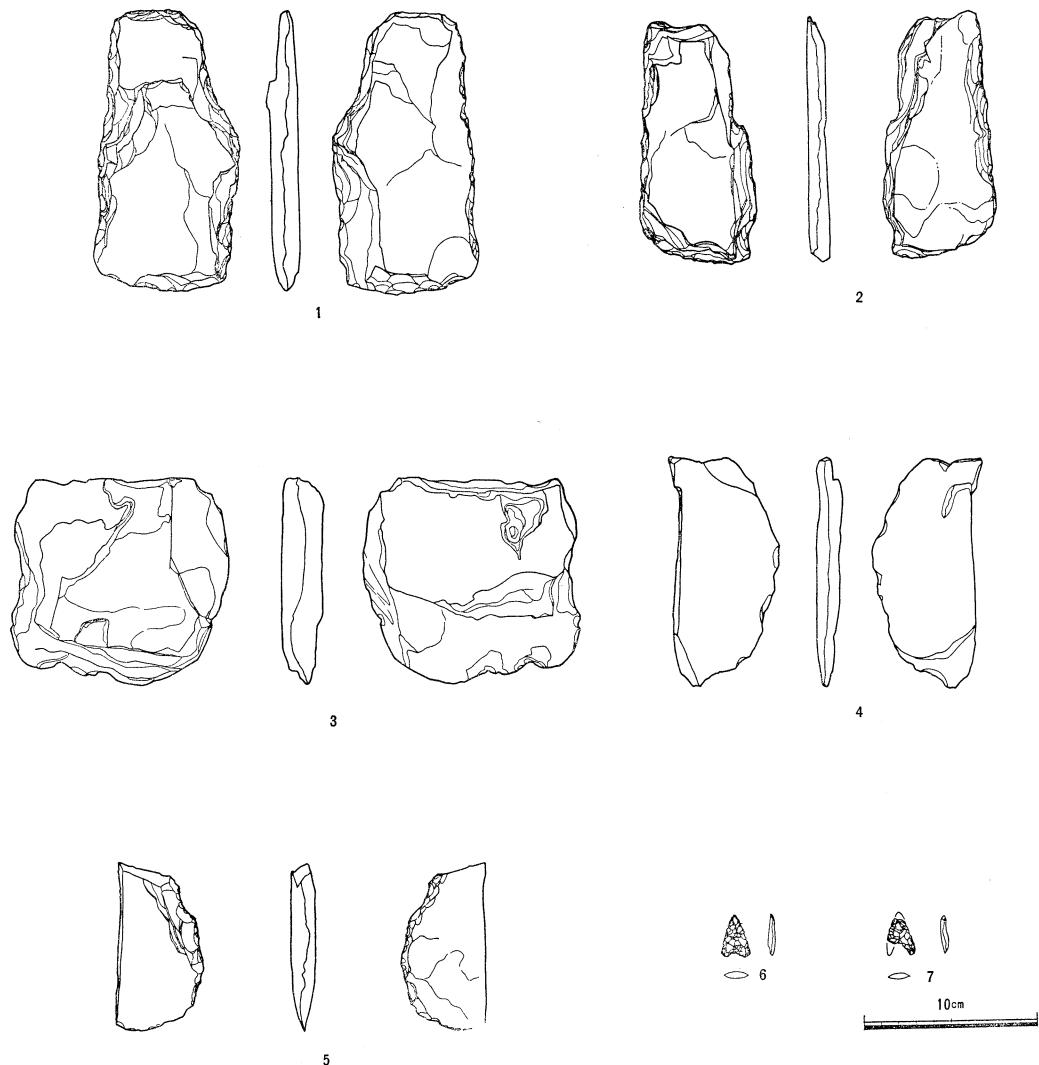
第9図 宮脇遺跡B地区土器拓影図(1)



第10図 宮脇遺跡B地区出土土器拓影図(2)



第11図 宮脇遺跡A地区出土石器



第12図 宮脇遺跡B地区出土石器

## 6 ま と め

発掘調査の結果、ピット及び溝状の遺構が28基検出され、覆土中より出土した土師器片より平安時代のものであることが推定された。

このピットには、円形及び方形のものがあり、これらの中には底面に10cm前後で、断面がロート状を呈した小ピットが認められるものが存在した。

これらピットの性格については、積極的に論議できる資料は得られなかつたが、ピットの配列が不規則であり、掘立柱遺構の柱穴群とは考えにくいものであった。なお、覆土中に炭化物（木の実）が検出されるピットが数基認められ、消極的ながら、これらピットの性格を考える際の参考になるものと思われる。

沢をはさんで本遺跡のすぐ北側には、奈良・平安時代の住居址が検出された堀之内原遺跡が存在し、本遺跡との強い関係が想起される。この場合、前者が住居址であるならば、後者は生産の場（例えは耕作地とか）といった推測をすることは、無理なことであろうか。

いずれにしても今後の類例が待たれる。

図版 1



(1) 宮脇遺跡遠景



(2) 発掘風景

図版 2



(1) 発掘風景



(2) 発掘風景

図版 3



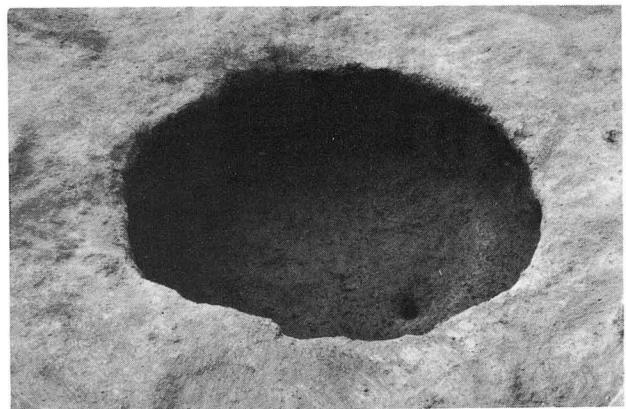
(1) A 地区ピット群



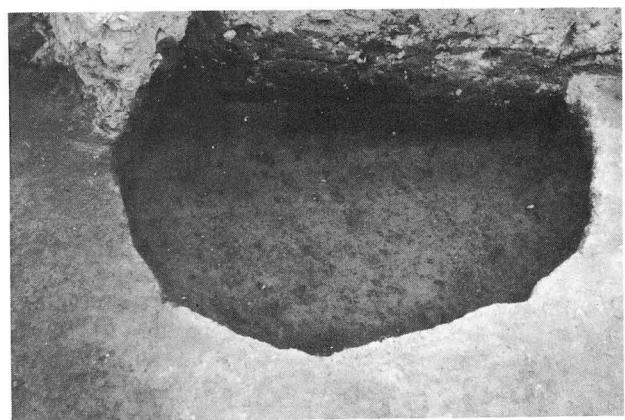
(2) B 地区ピット群

図版 4

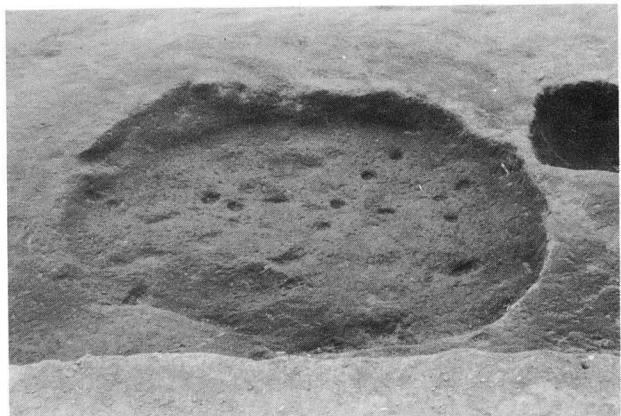
(1) A 地区 No.1 ピット



(2) A 地区 No.2 ピット

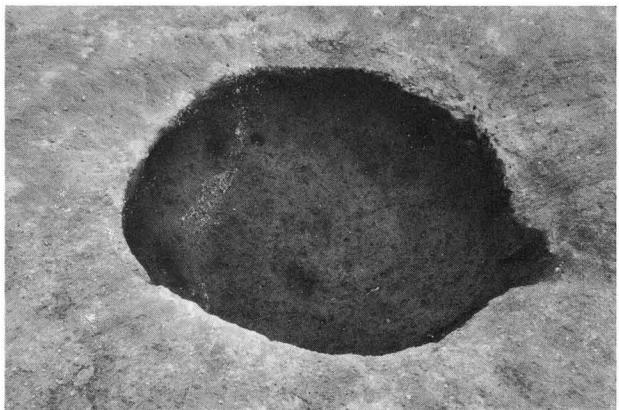


(3) A 地区 No.3 ピット



図版 5

(1) A 地区 No.4 ピット



(2) A 地区 No.5 ピット



(3) A 地区 No.6 ピット



図版 6

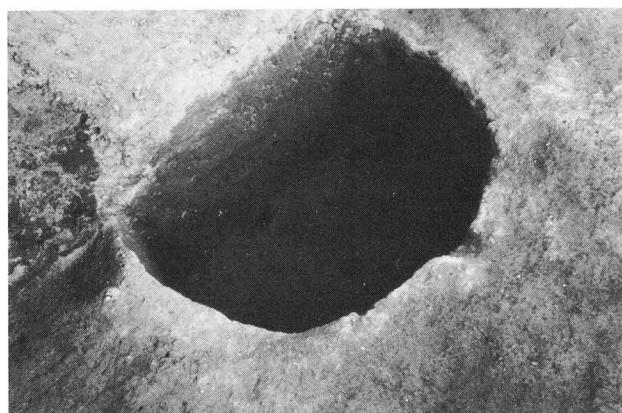
(1) A 地区 No.8 ピット



(2) A 地区 No.9 ピット

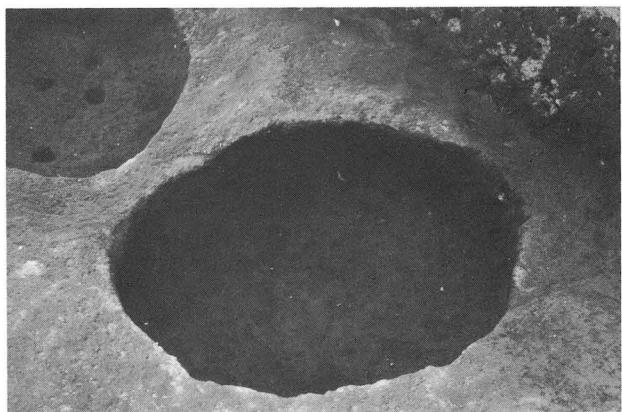


(3) A 地区 No.10 ピット

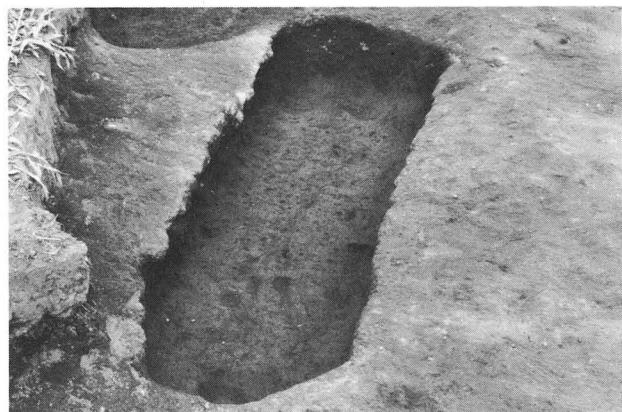


図版 7

(1) A 地区 No.11 ピット



(2) A 地区 No.12 ピット



(3) A 地区 No.13 ピット

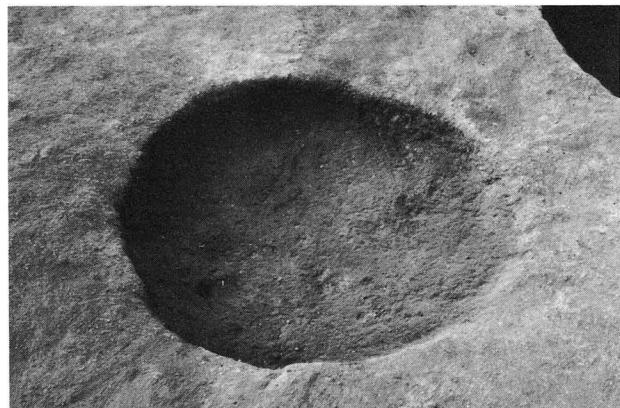


図版 8

(1) B 地区 No.1 ピット



(2) B 地区 No.2 ピット



(3) B 地区 No.3 ピット

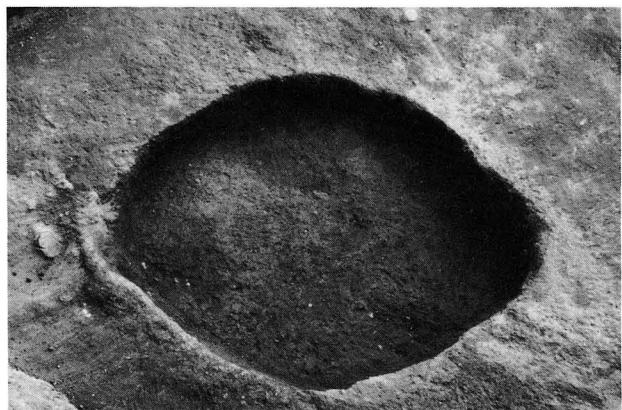


図版 9

(1) B 地区 No.2 溝・No.4 ピット



(2) B 地区 No.6 ピット

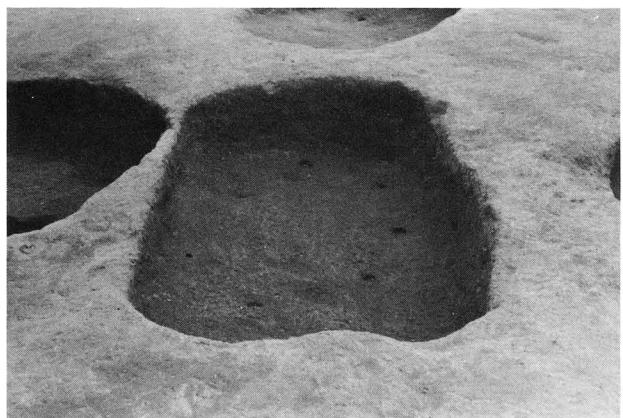


(3) B 地区 No.7 ピット

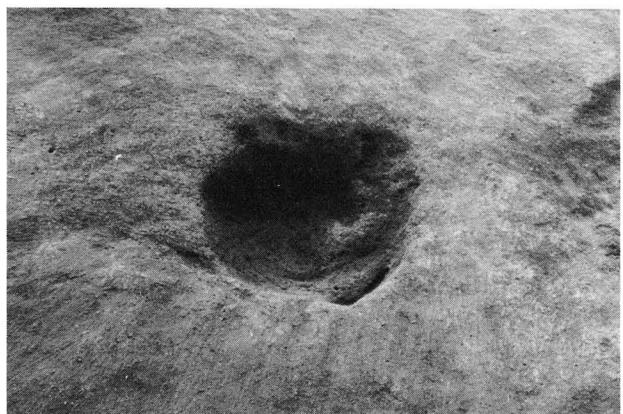


図版 10

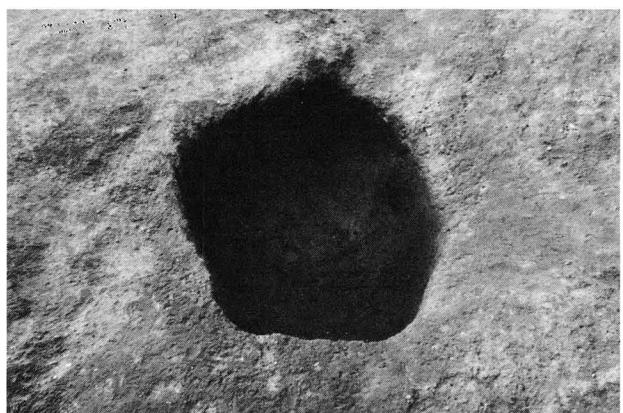
(1) B 地区 No.8 ピット



(2) B 地区 No.9 ピット



(3) B 地区 No.10 ピット

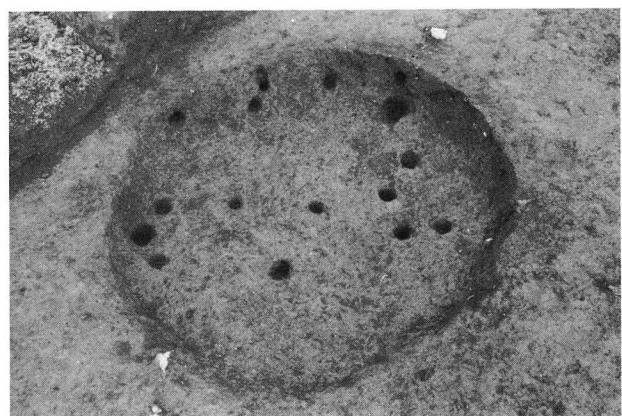


図版 11

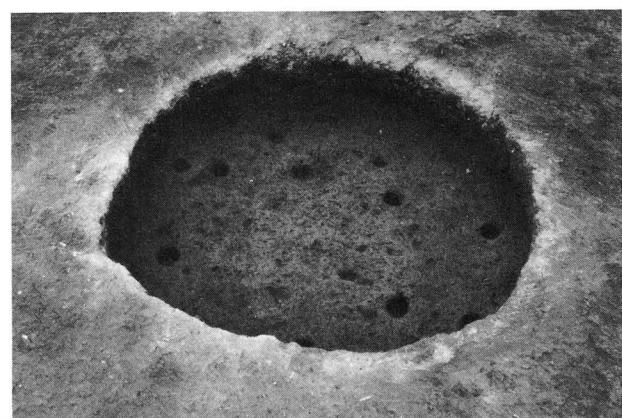
(1) B 地区 No.3 溝・No.11 ピット



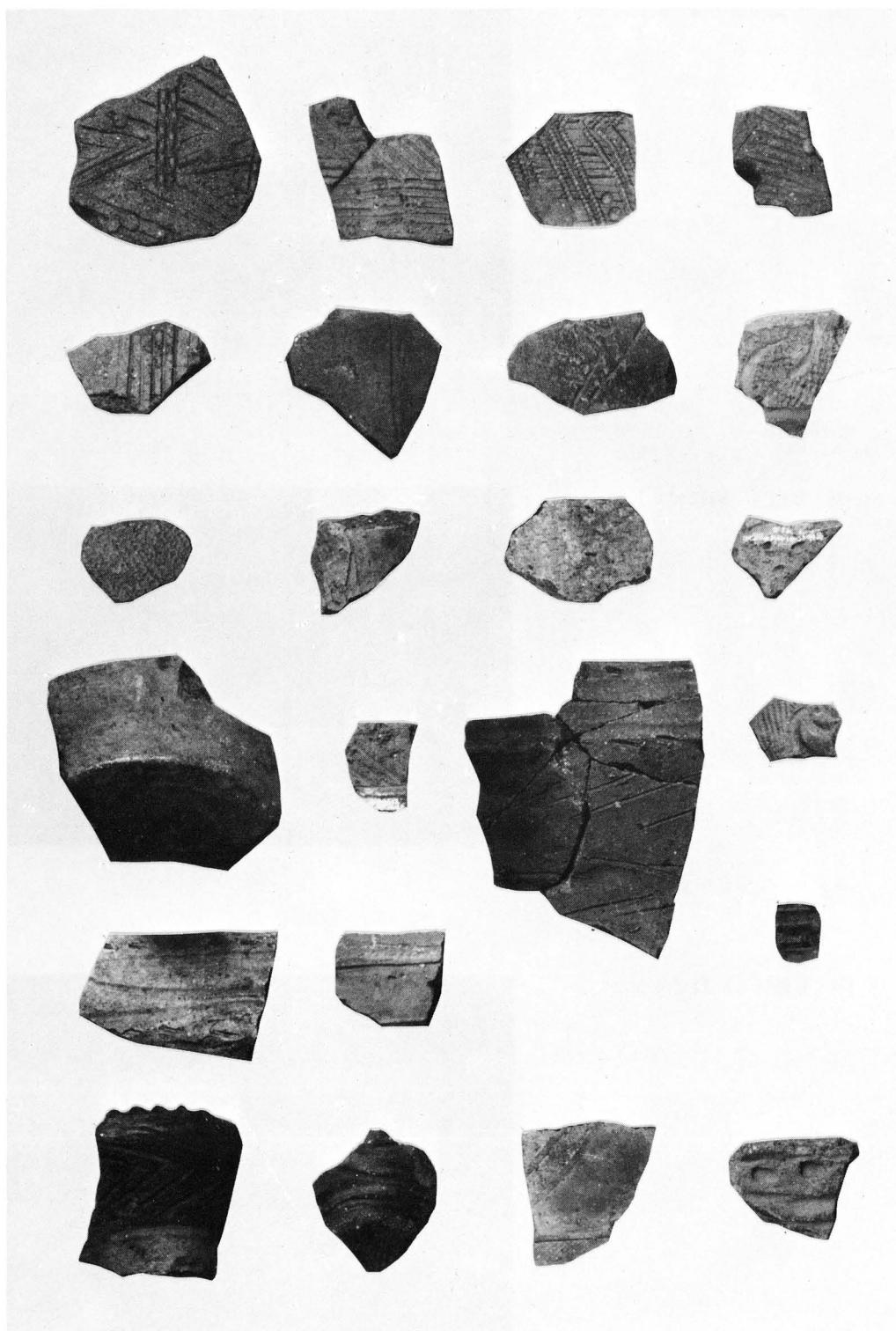
(2) B 地区 No.12 ピット



(3) B 地区 No.14 ピット

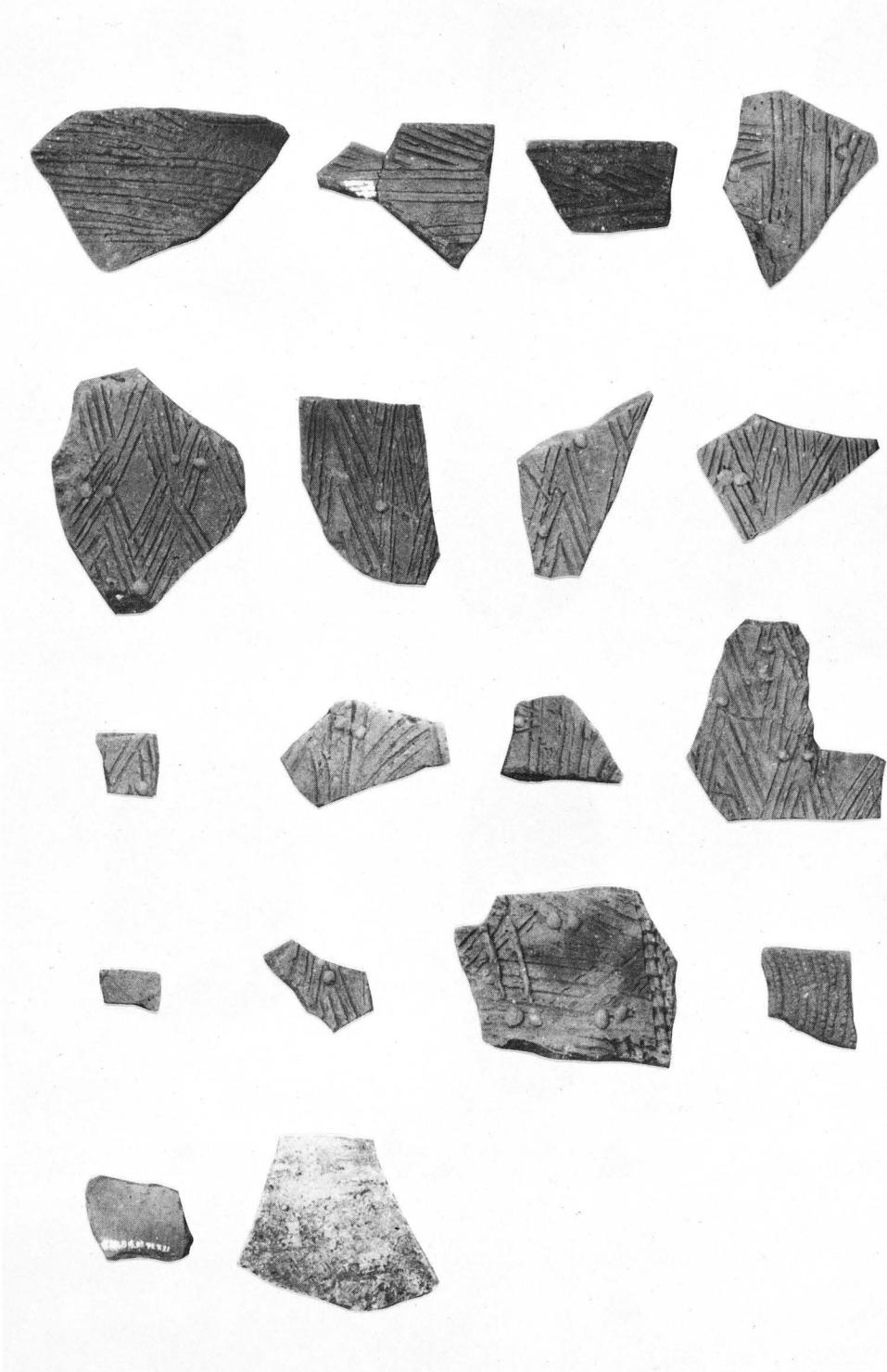


図版 12



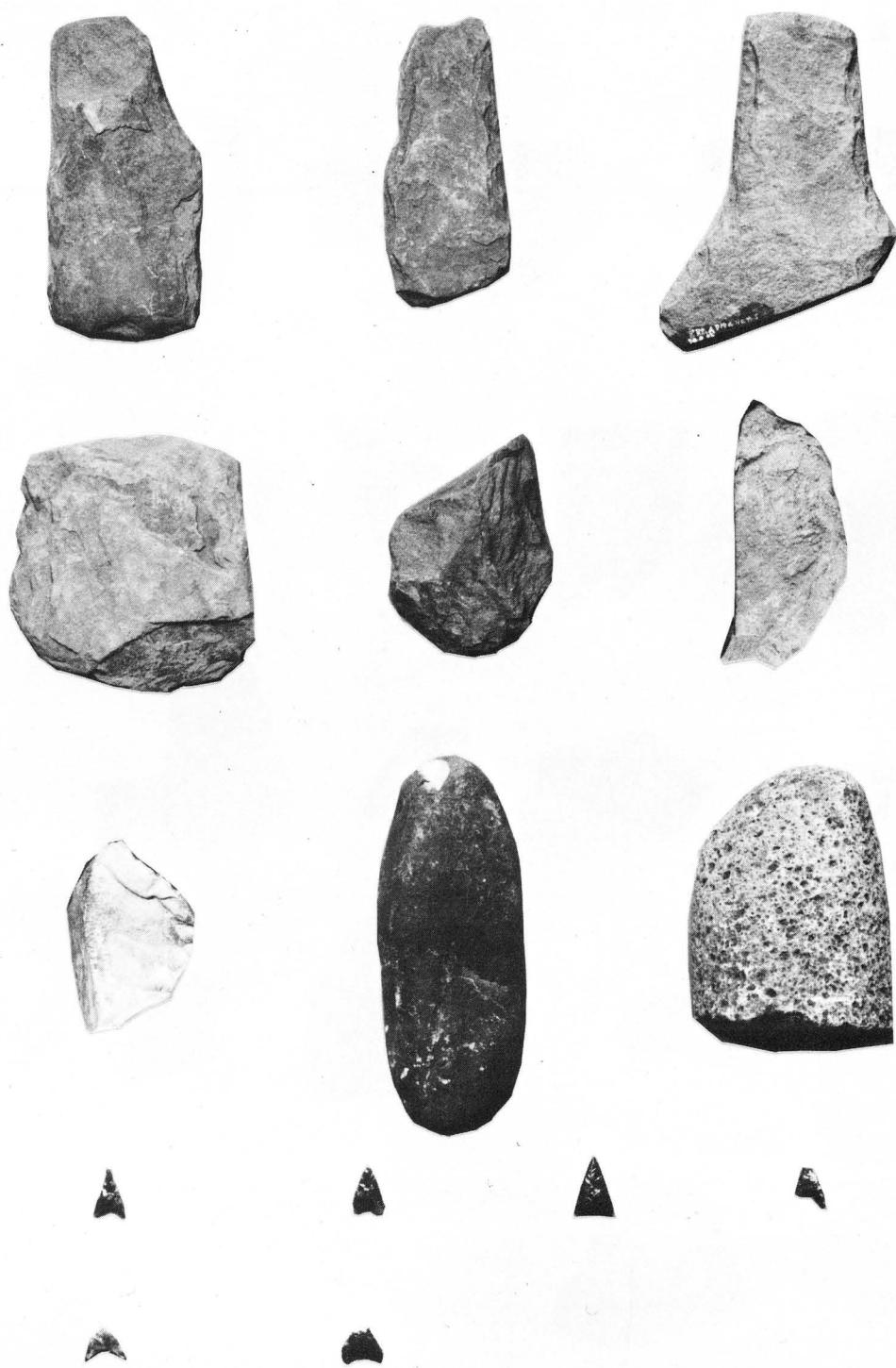
宮脇遺跡 A 地区出土土器

図版 13



宮脇遺跡 B 地区出土土器

図版 14



宮脇遺跡 出土石器

中谷・宮脇遺跡  
中央自動車道富士吉田線四車線化  
工事に伴う発掘調査報告書

---

発行日 昭和 56 年 3 月 31 日

編集 都留市教育委員会

発行 都留市教育委員会  
日本道路公団東京第二建設局

印刷 第一法規出版株式会社  
東京都港区南青山 2-11-17  
TEL 03-404-2251 (大代表)

---

